

岐阜県文化財保護センター
調査報告書 第129集

荒尾南遺跡C地区

(第2分冊)

2014

岐阜県文化財保護センター

あら お みなみ
荒尾南遺跡C地区
(第2分冊)

2014

岐阜県文化財保護センター

目次（第2分冊）

第4章 調査の成果	1
第6節 09_12地点	1
第7節 08_12地点・09_17地点	19
第8節 07_2・3地点・09_11・13地点	33
第9節 09_14地点	137
第10節 07_1地点・08_13地点・09_15地点	141
第11節 08_14地点・09_16地点	191
第12節 09_10地点	210
第13節 11_9地点	241
第14節 11_8地点	248

第1分冊 目次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の方法と経過

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査の概要

第1節 基本層序

第2節 遺構概要

第3節 遺物概要

第4章 調査の成果

第1節 08_10地点・09_8地点

第2節 08_11地点

第3節 07_6～8地点

第4節 07_9地点・09_9地点

第5節 07_4・5地点・09_20地点

報告書抄録

第3分冊 目次

遺構一覧表

遺物観察表

遺構全体図分割図

第4分冊 目次

第5章 自然科学的分析

- 第1節 分析の概要
- 第2節 土器付着炭化物の放射性炭素年代測定
- 第3節 木製品と堆積物の放射性炭素年代測定
- 第4節 プラント・オパール分析
- 第5節 水田遺構の花粉化石分析
- 第6節 大溝 (SDe031) の花粉化石分析
- 第7節 出土自然木の樹種同定
- 第8節 木製品の樹種同定
- 第9節 大型植物遺体の同定
- 第10節 鉄関連遺物の分析
- 第11節 金属製品の蛍光X線分析
- 第12節 赤色顔料の蛍光X線分析
- 第13節 遺構出土粘土塊の検討

第6章 総括

- 第1節 方形周溝墓・墓について
- 第2節 C地区における石器や金属製品、木製品について
- 第3節 工具加工痕からみた木材加工
- 第4節 荒尾南遺跡C地区の土地利用の変遷

参考文献

写真図版

插图目次

图231 09_12地点东壁土层图	1	图275 SZe24	51
图232 09_12地点包含层出土遗物	2	图276 SZe22填丘下面	52
图233 09_12地点IV层上面平面图	3	图277 SZe24出土遗物	53
图234 ST-e02	4	图278 SZe25·SZe26	55
图235 SK-e0692~SK-e0700	5	图279 SZe27	57
图236 09_12地点V层上面平面图	6	图280 SZe27填丘下面	58
图237 SZe11	7	图281 SZe27出土遗物	59
图238 SZe12	8	图282 SZe28 (1)	60
图239 SZe13·SZe12出土遗物	9	图283 SZe28 (2)	61
图240 SZe14	10	图284 SZe28 (3)	62
图241 SZe15·SZe16	12	图285 SZe28填丘下面	63
图242 SDe103 (1)	14	图286 SZe28主体部	64
图243 SDe103 (2)	15	图287 SZe28出土遗物	65
图244 SDe103 (3)	16	图288 SZe29 (1)	67
图245 SDe105	17	图289 SZe29 (2)	68
图246 SDe104	18	图290 SZe29填丘下面·主体部1	69
图247 08_12地点北壁土层图·08_12地点包含层出土遗物	19	图291 SZe29出土遗物	70
图248 08_12地点·09_17地点V层上面平面图	20	图292 SZe30 (1)	71
图249 SZe17 (1)	21	图293 SZe30 (2)	72
图250 SZe17 (2)	22	图294 SZe30填丘下面	73
图251 SZe18 (1)	24	图295 SZe30主体部·出土遗物	74
图252 SZe18 (2)	25	图296 SZe31 (1)	76
图253 SZe18出土遗物 (1)	26	图297 SZe31 (2)	77
图254 SZe18出土遗物 (2)	27	图298 SZe31主体部	78
图255 SZe19	28	图299 SZe32	79
图256 SZe20	29	图300 SZe33 (1)	81
图257 SDe116	30	图301 SZe33 (2)	82
图258 溝列 (SDe109~SDe115)	31	图302 SZe33 (3)	83
图259 SDe116·溝列出土遗物	32	图303 SZe33 (4)	84
图260 09_13地点北壁土层图	33	图304 SZe33主体部	85
图261 07_2地点他包含层出土遗物 (1)	34	图305 SZe33出土遗物	86
图262 07_2地点他包含层出土遗物 (2)	35	图306 SZe34	88
图263 07_2地点他包含层出土遗物 (3)	36	图307 SZe34出土遗物	89
图264 07_2·3地点·09_11·13地点IV层上面平面图	37	图308 SZe35	90
图265 07_2·3地点·09_11·13地点V层上面平面图	38	图309 SZe36	91
图266 SZe21 (1)	40	图310 SK-e0731	92
图267 SZe21 (2)	41	图311 SK-e0732	93
图268 SZe22 (1)	43	图312 SK-e0733·SK-e0736	94
图269 SZe22 (2)	44	图313 SK-e0738	95
图270 SZe22 (3)	45	图314 SK-e0738出土遗物	96
图271 SZe22填丘下面	46	图315 SK-e0739·SK-e0745	97
图272 SZe22主体部	47	图316 SK-e0758	98
图273 SZe22出土遗物	48	图317 SK-e0759	99
图274 SZe23	49	图318 SDe126	100
		图319 SDe128	101
		图320 SDe129 (1)	102
		图321 SDe129 (2)	103

图322	SDe130	104	图369	SZc40出土遺物(2)	161
图323	溝列(SDe121~SDe125)	105	图370	SZc40出土遺物(3)	162
图324	NRe1(1)	106	图371	SZc40出土遺物(4)	163
图325	NRe1(2)	108	图372	SZc41	165
图326	NRe1(3)	109	图373	SZc41出土遺物(1)	167
图327	NRe1(4)	110	图374	SZc41出土遺物(2)	168
图328	NRe1(5)	111	图375	SZc41出土遺物(3)	169
图329	NRe1(6)	112	图376	SKc0768	170
图330	NRe1出土遺物(1)	115	图377	SKc0772	171
图331	NRe1出土遺物(2)	116	图378	SKc0772出土遺物	172
图332	NRe1出土遺物(3)	117	图379	SKc0778·SKc0779(1)	173
图333	NRe1出土遺物(4)	118	图380	SKc0779(2)	174
图334	NRe1出土遺物(5)	119	图381	SKc0780	176
图335	NRe1出土遺物(6)	120	图382	SKc0781·SKc0782	177
图336	NRe1出土遺物(7)	122	图383	SKc0786·SKc0799	178
图337	NRe1出土遺物(8)	123	图384	SKc0800·SKc0801	179
图338	NRe1出土遺物(9)	125	图385	SKc0802·SKc0803	180
图339	NRe1出土遺物(10)	126	图386	SKc0806	181
图340	NRe1出土遺物(11)	127	图387	SKc0807	182
图341	NRe1出土遺物(12)	128	图388	SKc0814·SKc0816	183
图342	NRe1出土遺物(13)	129	图389	SDe143	184
图343	NRe1出土遺物(14)	130	图390	SDe143出土遺物(1)	185
图344	NRe1出土遺物(15)	131	图391	SDe143出土遺物(2)	186
图345	NRe1出土遺物(16)	132	图392	SDe145	187
图346	NRe1出土遺物(17)	133	图393	SIc03	188
图347	NRe1出土遺物(18)	134	图394	08_14地点東壁土層因	191
图348	NRe2	135	图395	08_14·09_16地点包含層出土遺物(1)	192
图349	09_14地点西壁土層因	137	图396	08_14·09_16地点包含層出土遺物(2)	193
图350	09_14地点包含層出土遺物·V層上面平面因·SDe139	138	图397	08_14地点·09_16地点V層上面平面因·SBc03	194
图351	SDe140	139	图398	SZc42(1)	195
图352	SDe142	140	图399	SZc42(2)	196
图353	07_1地点西壁土層因	141	图400	SDe147	198
图354	07_1地点他包含層出土遺物(1)	142	图401	SDe147出土遺物(1)	199
图355	07_1地点他包含層出土遺物(2)	143	图402	SDe147出土遺物(2)	200
图356	07_1地点他包含層出土遺物(3)	144	图403	SDe147出土遺物(3)	201
图357	07_1·08_13·09_15地点V層上面平面因	145	图404	SDe148	203
图358	SPe142~SPc145	146	图405	SDe148出土遺物	204
图359	SZc37	148	图406	SDe149	205
图360	SZc37出土遺物·SZc38	149	图407	SDe150·SDe151	206
图361	SZC39	151	图408	SDe152	208
图362	SZc39出土遺物	152	图409	SDe154·SDe157	209
图363	SZc40(1)	154	图410	09_10地点北壁土層因	210
图364	SZc40(2)	155	图411	09_10地点包含層出土遺物(1)	211
图365	SZc40(3)	156	图412	09_10地点包含層出土遺物(2)	212
图366	SZc40(4)	157	图413	09_10地点包含層出土遺物(3)	213
图367	SZc40遺物出土状況因	158	图414	09_10地点V層上面平面因	214
图368	SZc40出土遺物(1)	160	图415	SPe153	215
			图416	SZc43	216

圖417	SZe43出土遺物(1)	217	圖441	NRe1(7)	245
圖418	SZe43出土遺物(2)	218	圖442	NRe1出土遺物(19)	246
圖419	SZe44	220	圖443	NRe1出土遺物(20)	247
圖420	SZe44墳丘下面・SZe44出土遺物(1)	221	圖444	11_8地点北壁土層圖・11_8地点包含層出土遺物	248
圖421	SZe44出土遺物(2)	222	圖445	11_8地点IV層上面平面圖	249
圖422	SZe45	223	圖446	SKe0988・SDe199	250
圖423	SZe46	224	圖447	11_8地点V層上面平面圖	251
圖424	SZe46遺物出土狀況	225	圖448	SBe04	252
圖425	SZe46出土遺物	226	圖449	SZe47	253
圖426	SKe0833	227	圖450	SZe48	254
圖427	SKe0834	228	圖451	SZe49	255
圖428	SKe0835	229	圖452	SZe50	256
圖429	SKe0836・SKe0845	230	圖453	SKe0992・SKe0995	257
圖430	SDe158	231	圖454	SDe200・SDe201	258
圖431	SDe158出土遺物	232	圖455	SDe202	260
圖432	SDe159	233	圖456	SDe202遺物出土狀況圖	261
圖433	SDe159出土遺物	234	圖457	SDe202出土遺物(1)	264
圖434	SDe161	235	圖458	SDe202出土遺物(2)	265
圖435	SDe162	237	圖459	SDe202出土遺物(3)	266
圖436	SDe164・SDe166	238	圖460	SDe202出土遺物(4)	267
圖437	SDe169	239	圖461	SDe202出土遺物(5)	268
圖438	11_9地点北壁土層圖	241	圖462	SDe202出土遺物(6)	269
圖439	11_9地点包含層出土遺物	242	圖463	SDe210	270
圖440	溝列(SDe194~SDe196)	243	圖464	SDe210出土遺物	271

表目次

表18	09_12地点出土遺物數量	1	表23	08_14地点・09_16地点出土遺物數量	192
表19	08_12地点・09_17地点出土遺物數量	19	表24	09_10地点出土遺物數量	211
表20	07_2・3地点・09_11・13地点出土遺物數量	34	表25	11_9地点出土遺物數量	242
表21	09_14地点出土遺物數量	138	表26	11_8地点出土遺物數量	249
表22	07_1地点・08_13地点・09_15地点出土遺物數量	142			

第6節 09_12地点

C地区東部、07_4・5地点西側に位置する調査地点で、調査面積は170㎡である。本線橋脚が位置するが、南側には市道高屋控線が走り、大垣市教委が1996年に発掘調査を行った場所に隣接する。市道を挟んで南側には08_12地点と09_17地点がある。

1 層序

09_12地点東壁土層を図示した(図231)。基本層序のI層からV層を確認し、遺構検出面はIV層上面とV層上面となる。しかし、部分的にIII層やIV層が確認できないところがあり、後世の土地利用による影響が認められる。

2 包含層出土遺物(図232)

この地点で出土した遺物は、18,661点であるが、その大半が弥生土器・土師器類である。このうちI層は1点、III層は3,735点、IV層は4,951点で、遺構出土遺物は9,974点である。包含層から出土した遺物は、加工痕が認められた木製品4点のほかは土器類で、須恵器の5点、灰軸陶器の1点を除くと、弥生土器や土師器であった(表18)。

包含層出土遺物として実測したのは、III層及びIV層から出土した弥生土器・土師器11点と木製品1点である。なお、SdC103東側では遺構の可能性があると判断し、掘り下げを行った部分があるが、最終的には07_4・5地点のようなIVb層と思われる堆積があり、ここからはVI期の土器が比較的多く出土

表18 09_12地点出土遺物数量

場所	種別	縄文土器	弥生土器・土師器	須恵器	灰軸陶器	山茶碗・陶磁器類	土製品	石器・石製品	金属製品	木製品	合計
I層		0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
III層		0	3,730	3	0	0	0	0	0	2	3,735
IV層		0	4,946	2	1	0	0	0	0	2	4,951
IV上遺構		0	621	0	0	0	0	0	0	0	621
V上遺構		0	9,347	0	0	0	0	6	0	0	9,353
合計		0	18,645	5	1	0	0	6	0	4	18,661

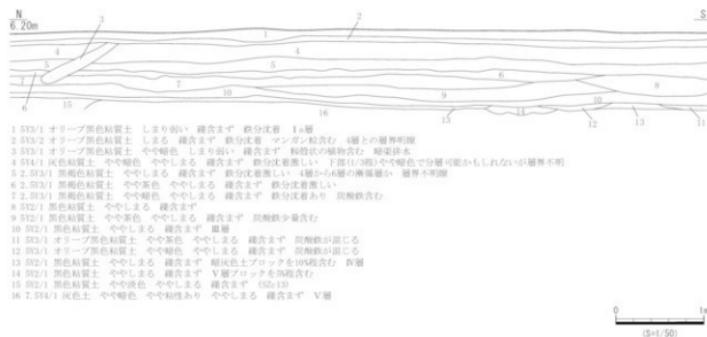


図231 09_12地点東壁土層図

2 第4章 調査の成果

した。それよりも上層のIV a層からはⅦ期以降の遺物が主体となって出土した。1590は、口縁部が直線的に開く壺で、Ⅶ期頃のものと思われる。1591は口縁端部が三角形に肥厚するいわゆる宇田型甕で、X期のものである。1592と1593はⅦ期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類である。口縁部上段が外方に伸び、内面に平坦面を持つことから、C類の中では古い段階のものか。1594と1595はⅥ期と思われる甕B3類で、口縁端部は未調整か指頭圧痕が残る。1596は高坏C2b類、1597は高坏C2c類、1598は高坏G3b類、1599は裾部が内湾する高坏脚部である。1600は器台C1類で受部が直線的に開く。いずれもⅥ期のもと思われる。なお、1594～1600の出土場所はSZe13方台部内にあたり、墳丘盛土の可能性も検討したが、その確証が得られなかったため、包含層（IV b層）として扱った。1601はⅢ層から出土した形代と思われる。

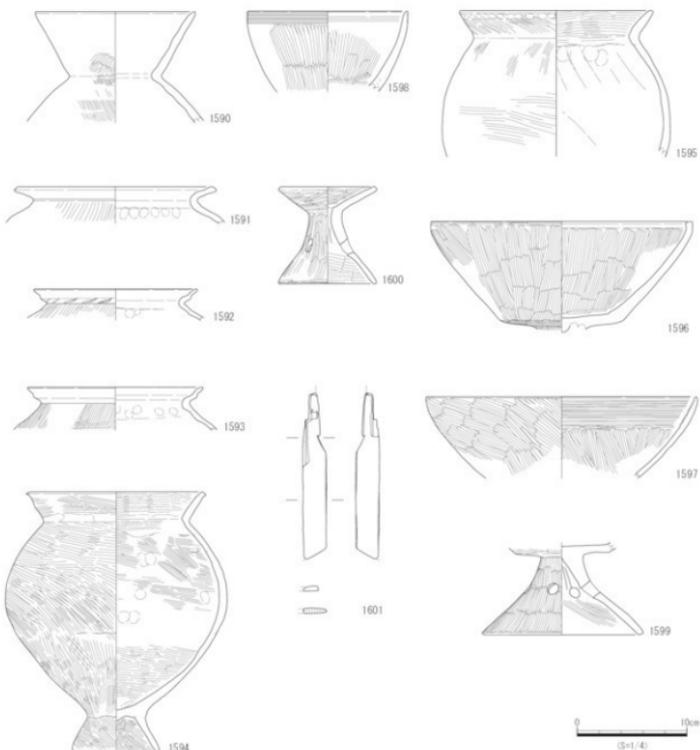


図232 09_12地点包含層出土遺物

3 IV層上面の遺構と遺物 (図233)

IV層上面では土坑11基と溝状遺構1条、水田小区画3面を検出したが、土坑の一部を除き、いずれも水田に関係する遺構と思われる。また、V層上面で検出した溝状遺構のうち、STc02底面で検出したSDe100～SDe102は、STc02に伴うものと思われる。

水田遺構 (STc01～STc03、図234・235)

検出状況 III層を掘り下げる段階で、IV層が帯状に確認できた部分があり、これが南北方向の小畦畔状の高まりとして検出できた。位置はSTc02とSTc03の間で、幅約0.5m、高さ約0.05mであった。発掘区南部のSTc01とした部分は、大半が発掘区外に広がるため、形状は不明であるが、非常に浅い窪地状のものであった。STc02は南北方向の小畦畔より東側部分にあたり、この内部では耕作土を除去したV層上面で、浅い南北方向の溝状遺構 (SDe100～SDe102) を検出しており、耕作に伴う溝状遺構と思われる。STc03は小畦畔の西側部分であるが、その範囲は不明確である。SKc0701とした浅い土坑は、STc03の一部とも考えられる。なお、SKc0692～SKc0700は、不定形の小土坑で底面に凹凸があり、2列に並んだ足跡のように見ることができるとは、明瞭な足形を確認することはできなかった。SDe099は小畦畔に沿うように検出した浅い溝状遺構であるため、水田遺構に関係するものと思われる。

1条のみであるが小畦畔が存在することや、足跡列とも思われる小土坑列の存在から、水田遺構である可能性が高いと判断し、プラント・オパール分析と花粉分析を行った (第5章第4・5節)。プラント・オパール分析では、土層図においてIV層とした耕作土の可能性が考えられた土層や、小畦畔、足跡状の小土坑埋土から多量のイネのプラント・オパールが検出された。花粉分析においても水田雑草が確認され、水田遺構としての所見を補強する結果が得られた。なお、樹木花粉の出現率をSDe031南部の花粉分析結果と比較すると、スギやヒノキ類の比率が高く、出土遺物から古墳時代前期の堆積

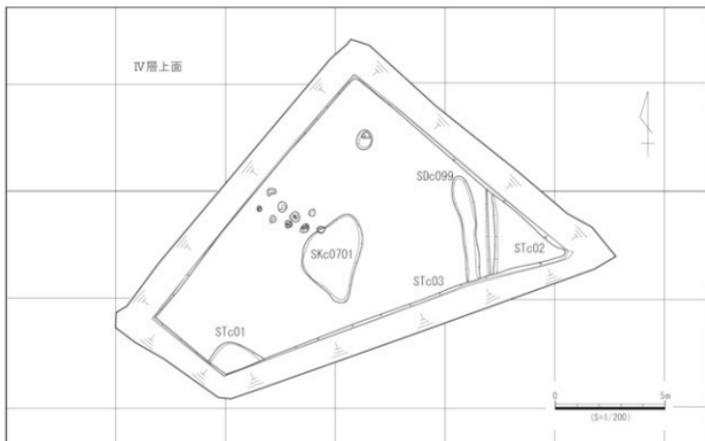


図233 09_12地点IV層上面平面図

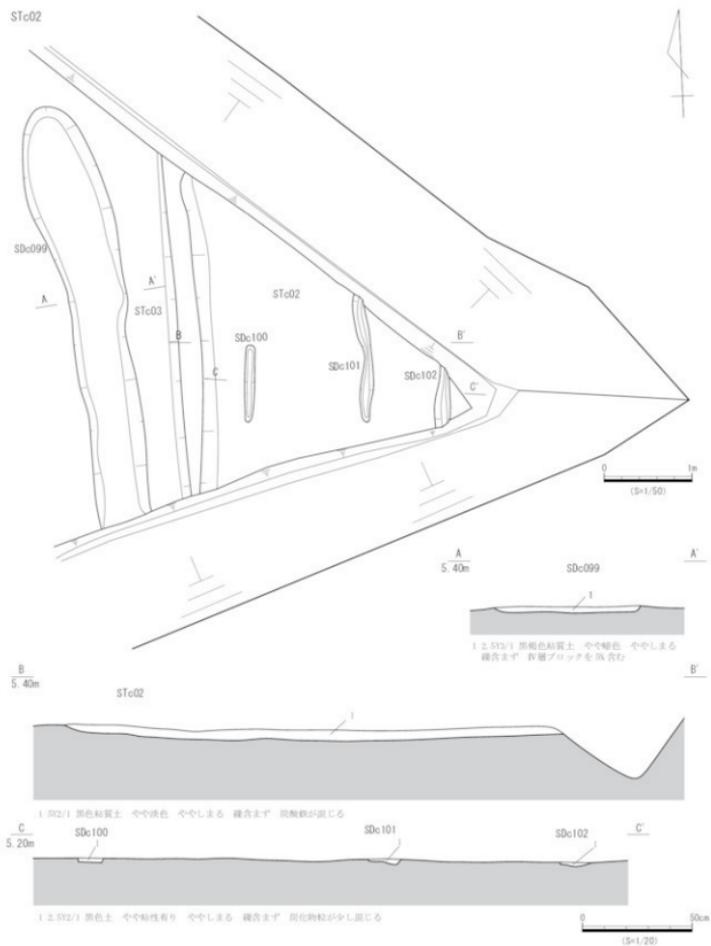


図234 STc02

と思われるSdc031上層の結果よりも、スギやヒノキ類の増加が認められる。

遺物出土状況 土器の小破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

時期 出土した遺物からは明らかにすることはできなかったが、鋤溝状のSdc100～Sdc102の存在から古代以降の可能性が高いと思われる。08_12地点や09_13地点においても、小畦畔などの遺構は確認できなかったが、IV層を除去した段階で、方形周溝墓の方台部上に鋤溝状の遺構を確認しており、さらに包含層ではあるが唐鋤が出土していることから、これらの地点にも同時期の水田遺構が広がっていたと思われる。

SKc0692～SKc0700

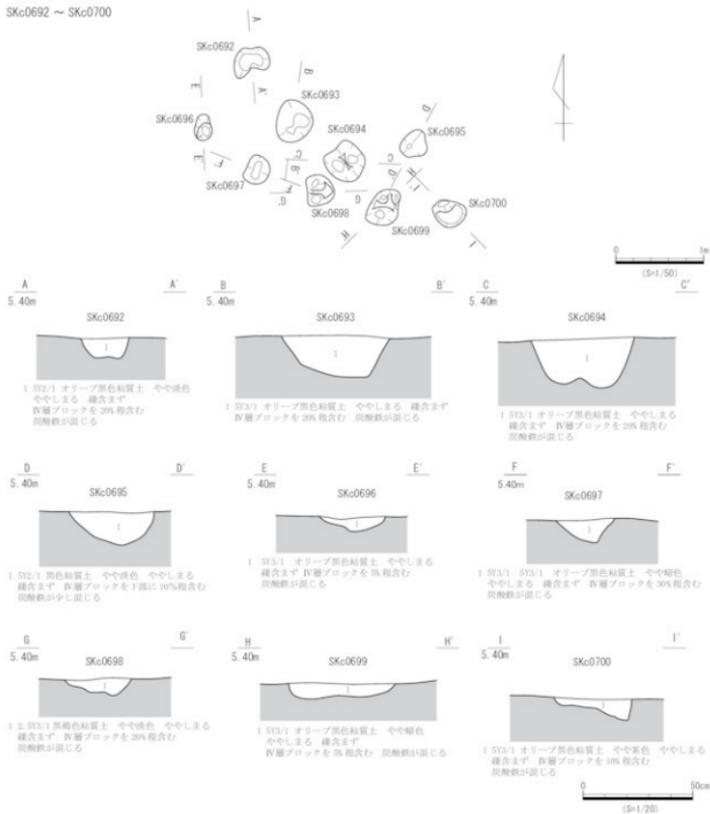


図235 SKc0692～SKc0700

4 V層上面の遺構と遺物(図236)

V層上面では、方形周溝墓6基、土坑15基、溝状遺構8条を検出した。このうち溝状遺構3条は、前述のとおりIV層上面の水田遺構に伴うものと思われる。6基の方形周溝墓は、いずれも部分的に検出できたものであり、全容は不明である。しかし、方形若しくは長方形の区画を作り出す可能性が考えられることから、方形周溝墓としたものである。遺物は、SDe103から8,679点出土したが、他の遺構から出土した遺物は少ない。土坑にはI期の可能性があるものがあるほか、弥生時代中期と思われる溝状遺構2条のほかは、V期からⅧ期のものが大半である。6基の方形周溝墓は、他の地点と異なり、出土した土器からV期からVI期のものである可能性が高い。6基の方形周溝墓と3条の溝状遺構を図示した。

SZc11 (図237)

検出状況 V層上面で検出したが、他の遺構との重複により平面形は不明瞭であった。当初は東西方向の溝状遺構として確認したが、SDe103を掘削したところ、その底面で南へL字形に屈曲して、発掘区外へ延びるように確認できたことから、方形周溝墓の可能性が高いと判断した。しかし、SDe103底面で確認した屈曲部から南側の平面形に誤認があり、他の遺構(SZc14、SDe105)を含めてしまっていたことが掘削した状況から判明した。

方台部 検出した北西辺部及び北東辺部はやや直線的で、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 西溝及び北溝を検出したが、いずれも一部で発掘区外へ続いている。確認した範囲では比較的直線的であるが、北東隅部はSDe103によって削平され不明である。周溝の断面形は、ほぼ逆台形と思われる。幅は1.4m～2.2mで、最大の深さは0.26mである。周溝底面は、幅が狭いが比較的平坦で、

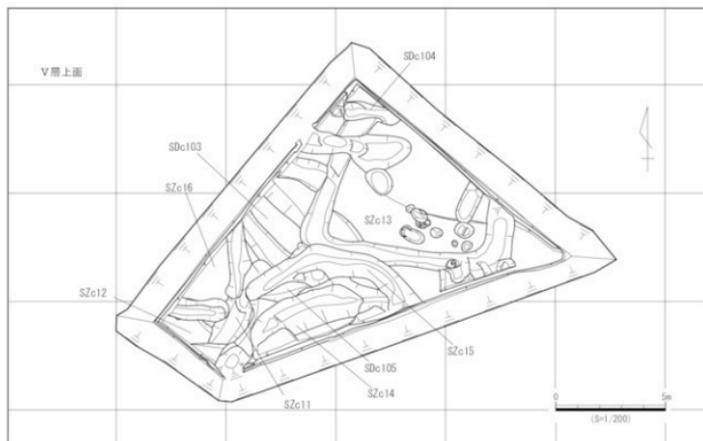


図236 09_12地点V層上面平面図

埋土下層にはV層ブロックや黒色土ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して出土したが、いずれも小片で図示可能な土器はなかった。なお、弥生時代末期から古墳時代前期の土器片が出土しているが、a層や1層からは古墳時代前期が多い傾向が認められた。

時期 出土した土器は、直接的にこの遺構の時期を判断できるものではないが、他の遺構との重複関係や小片ながら出土した土器から、弥生時代末期～古墳時代前期のものと思われる。

SZc12 (図238・239)

検出状況 V層上面で検出したが、西溝及び北溝の一部を確認しただけであり、他は発掘区外となる部分とSdC103によって削平された部分がある。平面形はやや不明瞭で、底面ではSZc14を確認するなど、他の遺構との重複が激しい。

方台部 検出した北辺部及び西辺部はやや直線的で、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 西溝及び北溝を検出したが、方台部側の肩部を確認しただけで、外側の肩部は発掘区外となる

SZc11

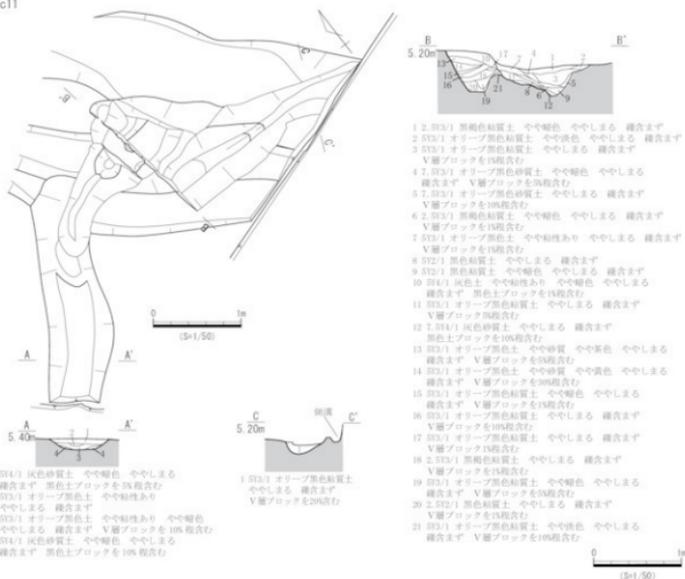


図237 SZc11

ため、幅は不明であるが、深さは0.22mと浅い。底面は比較的平坦で、隅部も深さを変えることなく屈曲している。埋土は2層に分層したが、V層ブロックや黒色土ブロックを含む。

遺物出土状況 周溝埋土から、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が散在して出土したが、小破片が多く、図示できたのは3点だけであった。石器類は叩石が1点出土した。

出土遺物 1602はVI期からVII期と思われる壺の底部で、やや突出する。1603はVI期からVII期と思われる甕B4類で、頭部の屈曲が明瞭である。1604はV期と思われる鉢A1類で、口縁部が受口状となる。1605は長楕円鏝を利用した叩石で、長軸の端部に敲打痕が認められる。

時期 出土した土器や、遺構の重複関係から、VI期からVII期頃と思われる。

SZc13 (図239)

検出状況 V層上面及びSDc103底面で検出したが、平面形はやや不明瞭で、コ字形の溝状遺構として検出した。北溝と東溝の多くが発掘区外となる。

方台部 西溝と南溝は直角よりも角度が小さく、溝に区画された方台部の形状はやや台形状となる。IV b層として掘削した部分が、墳丘盛土となる可能性が考えられるが、調査では確認を得られなかった。また、IV b層除去後に土坑を検出しているが、主体部は確認できなかった。

周溝 西溝及び南溝、東溝の一部を検出したが、幅は0.8m～1.3mで、最大0.63mの深さがある。隅部では深さが変わらずに続き、周溝の断面形はほぼ逆台形となる。周溝底面は、幅が狭いが比較的平坦で、埋土にはV層ブロックや黒褐色土ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が100点散在して出土した。石器類は打製石鏝が1点出土している。

出土遺物 1606はVI期からVII期の壺の底部で、突出する平底である。1607はチャート製の有茎石鏝である。

SZc12

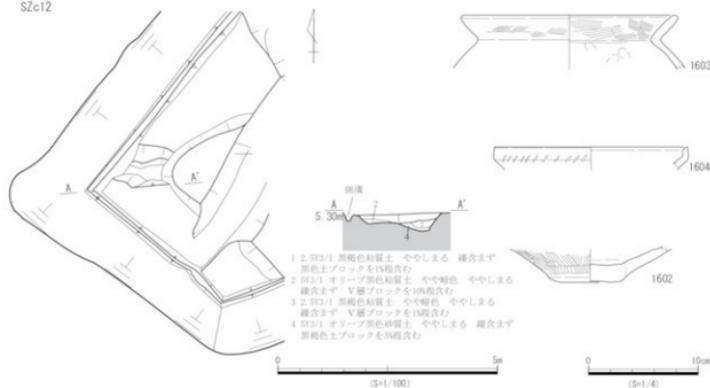
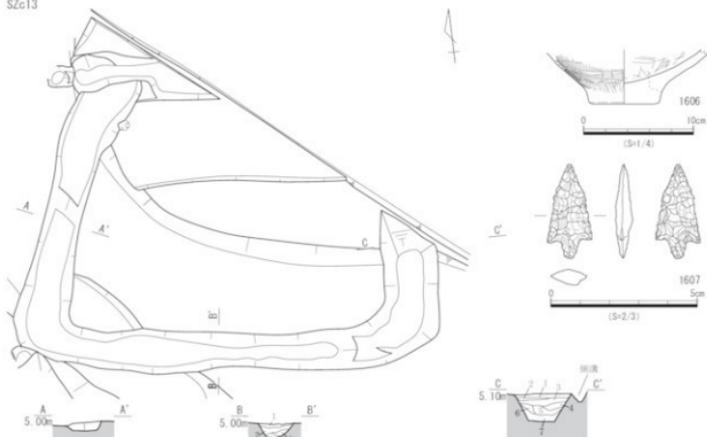


図238 SZc12

SZc13



- | | | |
|---|--|--|
| <p>1 2.013/1 黒褐色粘質土、ややしまる
縄倉まず V 堀ブロックを 20% 程含む</p> | <p>1 2.013/1 黒褐色粘質土、ややしまる
縄倉まず V 堀ブロックを 15% 程含む</p> <p>2 013/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる
縄倉まず V 堀ブロックを 20% 程含む</p> <p>3 014/1 灰色粘質土、やや暗色、ややしまる
縄倉まず V 堀ブロックを 20% 程含む</p> <p>4 014/1 灰色粘質土、ややしまる、縄倉まず
黒褐色土ブロックを 10% 程含む</p> | <p>1 2.012/1 黒色土、やや暗色、やや粘性あり、ややしまる、縄倉まず</p> <p>2 2.013/1 黒褐色粘質土、ややしまる、縄倉まず V 堀ブロックを 15% 程含む</p> <p>3 013/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、縄倉まず
V 堀ブロックを 15% 程含む</p> <p>4 2.013/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、縄倉まず
V 堀ブロックを 15% 程含む</p> <p>5 012/1 黒色粘質土、ややしまる、縄倉まず V 堀ブロック 15% 程含む</p> <p>6 013/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、縄倉まず
V 堀ブロックを 10% 程含む</p> <p>7 0104/1 灰色粘質土、やや暗色、ややしまる、縄倉まず
黒褐色土ブロックを 30% 程含む</p> |
|---|--|--|

SZc12 出土遺物



図239 SZc13・SZc12出土遺物

時期 出土した土器や、遺構の重複関係から、VI期からVII期と思われる。

SZc14 (図240)

検出状況 V層上面及びSZc11・SZc12・SDc105掘削後に検出したが、他の遺構との重複が激しく平面形は不明瞭であった。当初SZc11の掘り下げにより土坑として検出していたが全容はつかめていなかった。これは埋土とした上部の土がSZc15の埴丘盛土であり、そのため平面形が確認できなかった可能性がある。最終的に出土遺物からSZc12やSDc105よりも新しい時期の遺構と考えた。北溝と西溝のL字形の溝状遺構として検出した。西溝の多くが発掘区外となる。

方台部 検出した北辺部は直線的事から、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。埴丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 北溝及び西溝の一部を検出したが、幅は1.0m～1.8mで、最大0.68mの深さがある。北溝の両端部はやや南に曲がり、取東するように幅を狭くする。北西隅部は途切れている。周溝の断面形はほ

SZc14

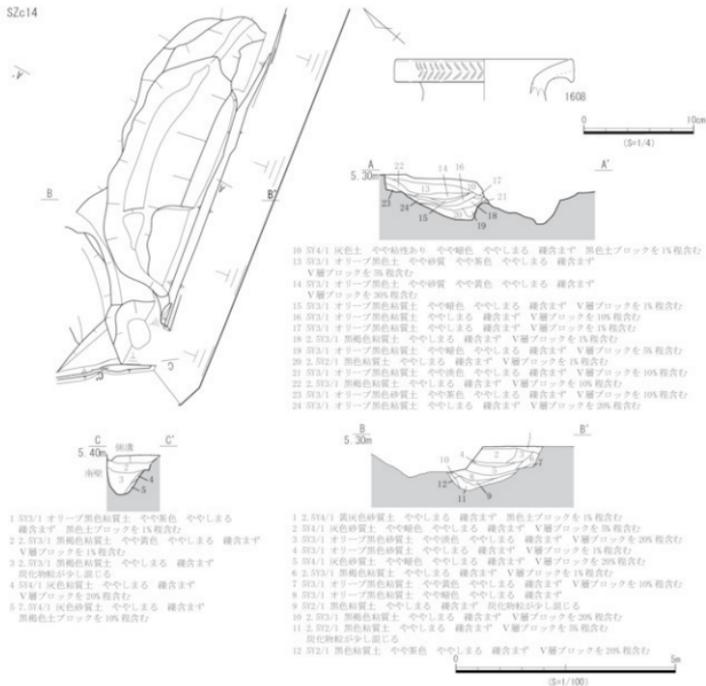


図240 SZc14

ほぼ逆台形となる。周溝底面は、幅が狭いが比較的平坦で、埋土にはV層ブロックや黒褐色土ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が31点散在して出土したが、西溝に多く、北溝には少ない。西溝出土土器片1点を図示した。

出土遺物 1608はⅥ期からⅦ期と思われる壺A1b類の口縁部で、口縁端部を下方に拡張し、羽状刺突文を施す。

時期 図示した土器の他、S字状口縁台付甕の台部の破片が出土しており、SZc12やSDe15よりも後出するものと考えられ、Ⅵ期と思われる。

SZc15 (図241)

検出状況 V層上面及びSZc11掘削後に検出した。SDe105との関係は不明瞭であり、当初一連のものとしての可能性を考えていたが、平面形状が繋がらず、底面のレベルの比高差もあることから、掘削後に別遺構であると判断した。北溝と東溝のL字形の溝状遺構として検出した。東溝の南端部は発掘区外となる。

方台部 北溝と東溝はほぼ直角となり、溝に区画された方台部の形状は方形若しくは長方形と思われるが西溝が検出されていないためはっきりしない。SZc14の上部埋土として掘削した部分が、墳丘盛土となる可能性が考えられるが、調査時には確認作業を行わなかった。主体部は確認できなかった。

周溝 北溝及び東溝の一部を検出したが、幅は1.0m～1.6mで、最大0.66mの深さがある。北溝の西端部は幅を狭く収束する。周溝の断面形はほぼ逆台形となる。周溝底面は、若干の起伏があるがほぼ平坦である。埋土にはV層ブロックや黒褐色土ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が埋土上層を中心に71点散在して出土したが、小破片が多く、図示できたのは3点だけであった。

出土遺物 1609はⅥ期の甕D1a類の口縁部で、いわゆるS字状口縁台付甕A類である。1610はⅥ期からⅦ期の甕E3類で、口縁部がくの字に屈曲する小型の甕である。1611はⅥ期からⅦ期の高坏脚部部の破片で、内湾する。

時期 出土した土器や、遺構の重複関係から、Ⅵ期と思われる。

SZc16 (図241)

検出状況 SZc12の底面で南東の一部を検出したが、他の部分は発掘区外となる。平面形は2条の溝状遺構がL字形の配置になるため、方形周溝墓の一部と判断した。

方台部 検出した東辺部及び南辺部は直線的で、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝及び南溝を検出したが、いずれも一部で発掘区外へ続いている。確認した範囲では直線的で、南東隅部は接続せず途切れている。幅は0.8m～1.1mで、最大0.28mの深さがある。溝底面は、ほぼ平坦である。埋土は最大4層に分層したが、ほぼ水平堆積であった。埋土にはV層ブロックや黒褐色土ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 SZc12に先行することから、Ⅵ期以前のものと思われる。

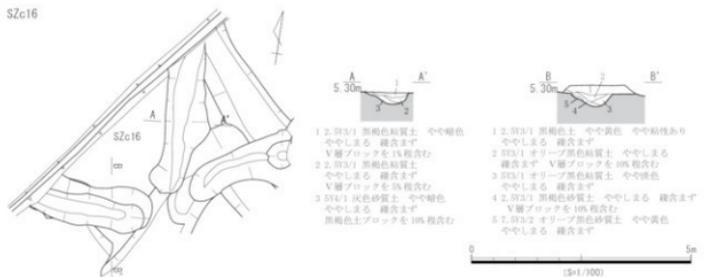
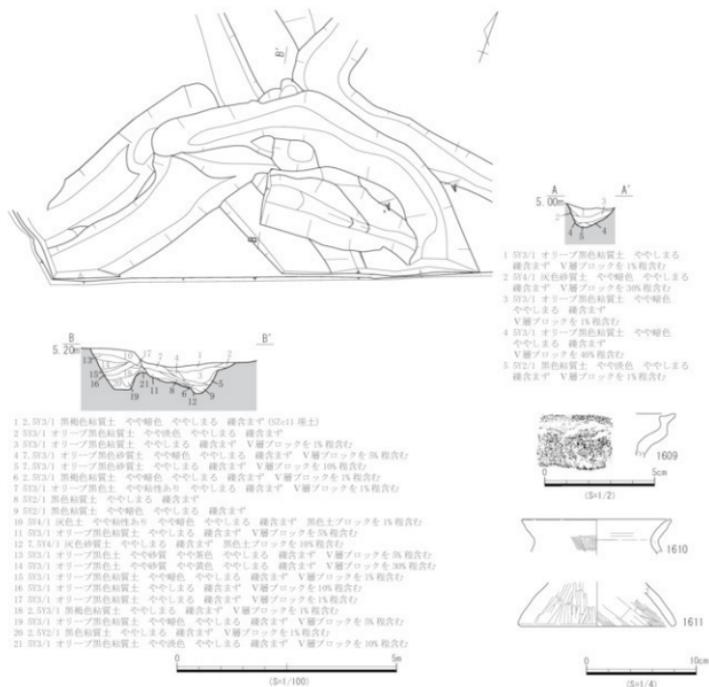


図241 SZc15・SZc16

SDc103 (図242～図244)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南北方向から南東へ屈曲する幅広の溝状である。発掘区東には07_4地点で検出したSDc031が南流しており、そこにつながる可能性が高い。埋土は18層に分層したが、ほぼ水平堆積で自然に流入したものと思われる。しかし埋土の一部にはブロック状の土が混入している部分があり、廃棄行為に伴う埋土もあると考えられる。深さは0.44mほどあるものの、壁面は緩くなだらかで、底面も多少の起伏があるもののほぼ平坦である。遺構下部には方形周溝墓の溝が重複して検出されていることから、これらの溝が埋没した後、溝状に窪地ができたものである可能性も考えられる。

遺物出土状況 埋土中の各層から多数の土器片が散在して出土した。また6箇所ほど土器のまとまるどころがあり、このうち数個体のS字状口縁台付甕が西岸に近いところで並べられていた可能性がある。また壺の体部片が折り重ねられたように出土しているところもあった。これらは何らかの行為に伴うものであると思われる。石器類は磨製石斧が1点、叩石が2点出土した。

出土遺物 1612・1613はⅥ期の壺B2c類で口縁部が外反する。1613は外面に煤が付着する。1614はⅥ期からⅦ期の壺C類で頸部が屈曲し、口縁部はやや内湾して開く。胴部は下部で膨らみ、底部は突出する。1615～1617はⅦ期の壺である。1615は口縁部が内湾し、外面に沈線を施す。1616はやや下ぶくれの胴部で、底部が突出する。上胴部外面には横線文や波状文を施す。1617は口縁部がやや外反して開き、口縁端部外面が肥厚する。1618はⅦ期の甕B3類で頸部が屈曲して口縁部が開く。1619はⅦ期の甕D2a類で、いわゆるS字状口縁台付甕B類である。1620～1622はⅦ期の甕で口縁部がく字に屈曲する。1620は口縁部がやや内湾する。1621は口縁部の調整が粗雑で、外面には粘土接合痕が明瞭に残る。1622は頸部の屈曲はやや弱い。1623～1629はⅦ期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類である。1625は口縁端部がやや肥厚することから新しい段階のものと思われる。1627は台部は欠損するが、打ちかかれた可能性がある。1629は外側からの敲打によると思われる穿孔がある。1630・1631はⅦ期と思われる小型のS字状口縁台付甕である。1630は口縁部上段が外方にやや延びる。1631の口縁部の作りは粗雑である。1632は小型の台付甕で、口縁部は外反して開く。1633・1634はⅦ期の鉢である。1633は丸底となる鉢で、胴部が大きく開き、口縁部はやや外反する。底部は摩耗が激しい。1634は形状はⅦ期までの鉢A3類に近いが、口縁部外面にも胴部にも施文はない。1635・1636はⅦ期の高坏である。1635は脚部で、基部から円錐形に開く。1636は坏部で、大きく開き皿状の器形となる。1637はⅦ期の器台で、受部は小さく内湾して開き、脚部は基部から円錐形に開く。

時期 S字状口縁台付甕C類がまとまって出土していることから、Ⅶ期と思われる。

SDc104 (図246)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。発掘区外に延びるため全長は不明であるが、幅1.33m、深さ0.28mで、壁面は開き、南肩部には平坦なテラス状の段をもつ。3層に分層したがほぼ水平堆積で、V層ブロックが含まれることから、人為堆積の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中に土器が散在して出土したが、図示した土器も含め、意図的な状況はなかった。

出土遺物 1638はⅦ期の甕D2b類で、いわゆるS字状口縁台付甕B類である。

時期 重複関係でSZc13よりも新しいことや、図示した遺物が底面近くで出土していることから、Ⅶ期と思われる。

SDc103

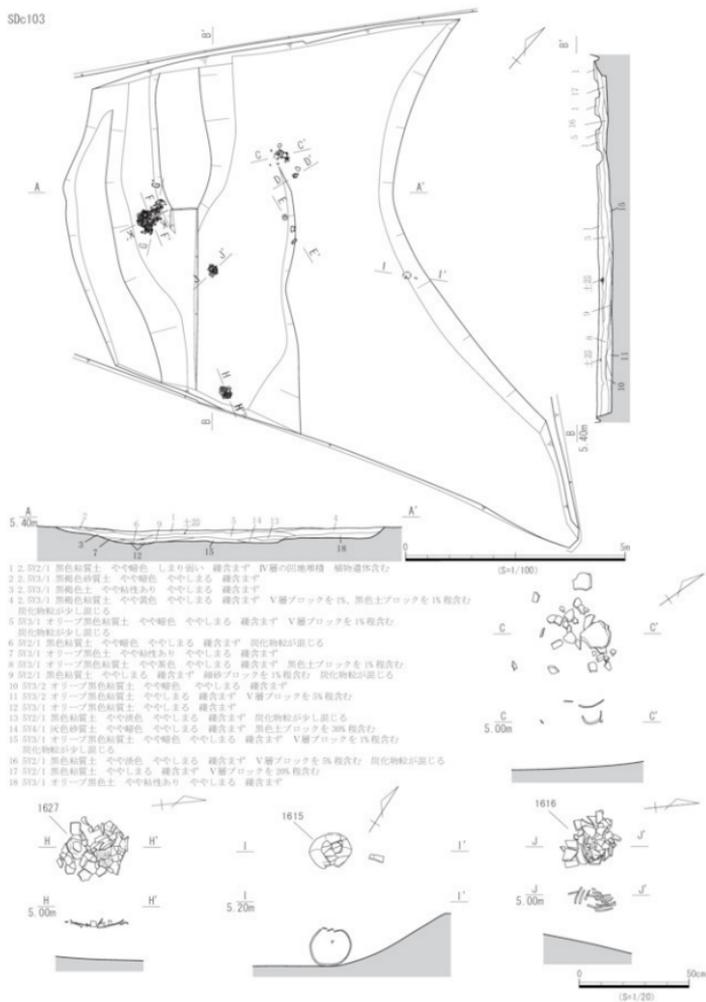


図242 SDc103 (1)

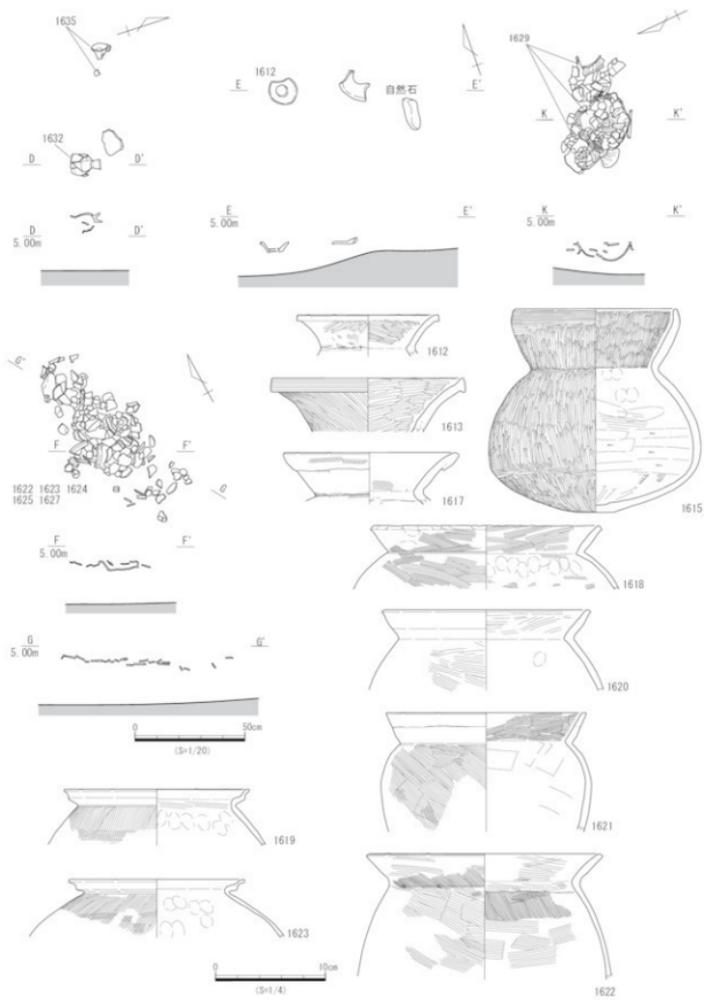


图243 SDc103 (2)

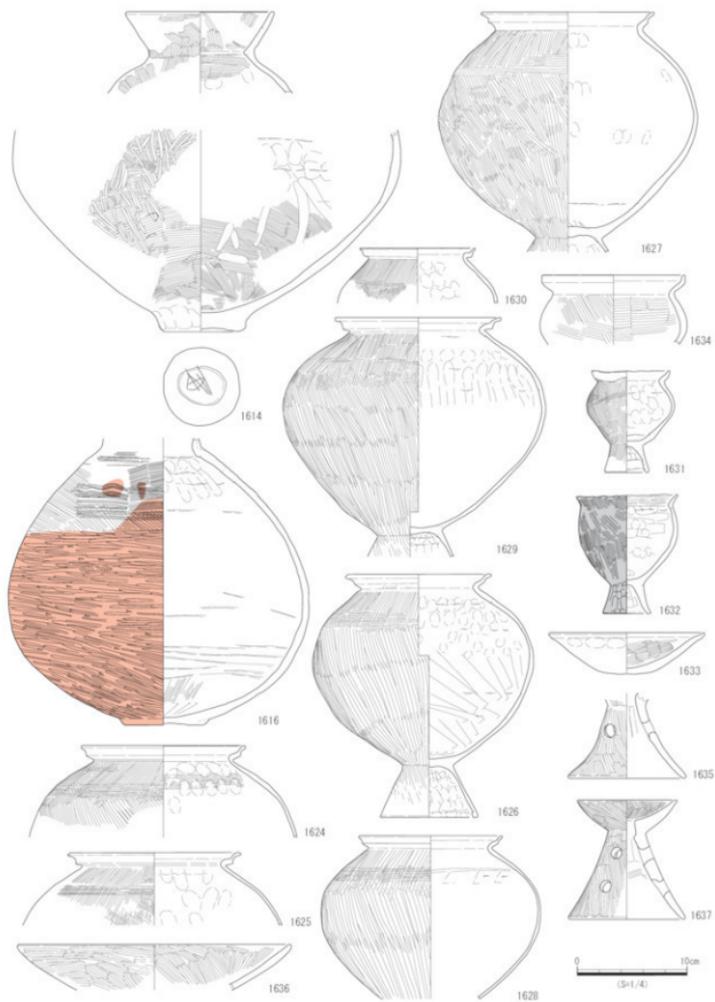


図244 SDc103 (3)

SDc105 (図245)

検出状況 SZc11の掘り下げにより検出したが、SZc15との関係は不明瞭であり、当初一連のものとしての可能性を考えていたが、平面形状が繋がらず、底面のレベルの比高差もあることから、掘削後に別遺構であると判断した。発掘区外に延びるため全長は不明であるが、幅1.33m、深さ0.28mで、壁面は開き、南肩部には平坦なテラス状の段をもつ。4層に分層したがほぼ水平堆積で、黒色土やV層ブロックが含まれることから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中に土器片が上層を中心に散在して出土した。

出土遺物 1639はV期の壺B3類で、口縁が外反する小型の壺である。

時期 図示した遺物を含め、V期の土器片が中心になるため、V期と思われる。

SDc105

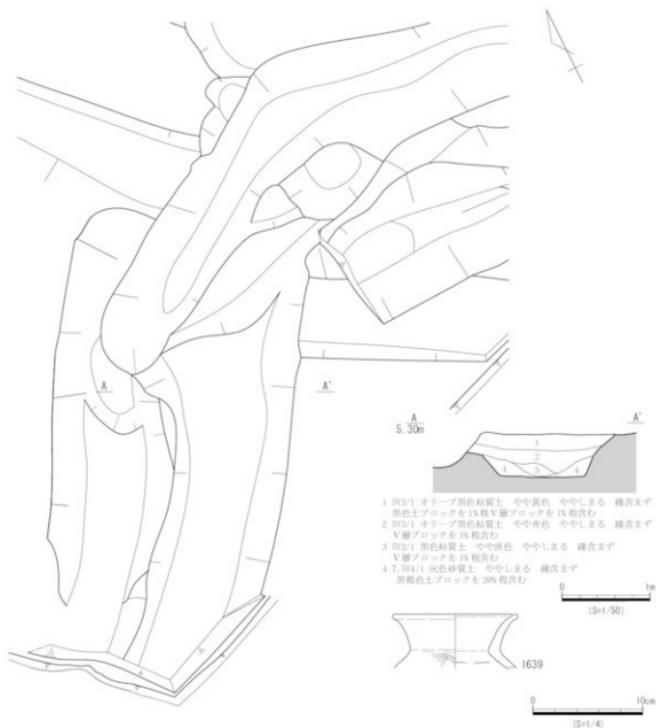


図245 SDc105

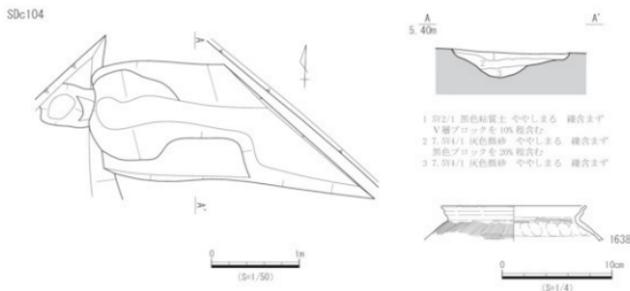


図246 SDc104

5 まとめ

この地点は、平成8年に大垣市教委が調査した場所の北側に位置し、南側には市道高屋松線を挟んで08_12地点が位置する。IV層上面では水田区画とそれに伴う小畦畔や土坑、溝状遺構を検出した。耕作土を取り除いた後に検出した耕作に伴う溝状遺構と思われるものは08_12地点や09_13地点においても検出されており、この周辺において古代以降に水田耕作が行われていたことが明らかになった。V層上面の遺構では方形周溝墓、土坑、溝を検出したが、多くは弥生時代後期から古墳時代初頭のものである。特に方形周溝墓については時期が明確にできないSZe16をのぞいて、C地区で多数確認した弥生時代中期のものではなく、VI期からVII期にかけてのものであり、この周辺においては弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓のまとまりが確認できた。09_12地点のすぐ南の大垣市発掘区では、大溝西側は遺構が未確認であり、さらに南の08_12地点では弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されている。このことから大垣市発掘区の遺構未検出部分については、弥生時代中期の方形周溝墓群と弥生時代後期以降の方形周溝墓群とを区切る空間になっている可能性がある。

VII期の遺構としたSDc103は、SDc031（大溝）に流れ込んでいると考えられ、大溝が埋没する最終段階に同時に機能していたと思われる。S字状口縁台付甕がまとめて出土しており、そのうち台部を意図的に打ち欠いたものがあることから、この時期に祭祀的な行為がこの辺りで執り行われていた可能性が考えられる。また、やや齧れるがSDc103の北東部07_4・5地点においては非常に遺構密度が高く、SDc103の西側の状況とは異なっている。そのためSDc103が何らかの範囲を区画していることも考えられる。

第7節 08_12地点・09_17地点

C地区東部、07_3地点・09_13地点東側に位置する調査地点で、調査面積は248㎡である。本線橋脚が位置するが、北側には市道高層検線が走り、道を挟んで09_12地点がある。

1 層序

08_12地点北壁土層を図示した(図247)。基本層序のI層からV層を確認し、遺構検出面はIV層上面とV層上面となる。遺構埋土を除き、ほぼ水平に堆積しているが、4層～6層は耕地整理に伴う盛土層と思われる。なお、19層は地割痕であるが、噴砂と思われる砂が確認できたため、地震痕と考えられる。時期はIV層堆積以前であるが、詳細は不明である。

2 包含層出土遺物(図247)

この地点で出土した遺物は、1,398点で、このうちI～II層は4点、III層は67点、IV層は116点で、遺構出土遺物は1,211点である。包含層から出土した遺物は、石製品2点、木製品3点のほかは土器類で、須恵器の5点、灰軸陶器の2点、陶磁器1点を除くと、弥生土器や土師器であった(表19)。

包含層出土遺物として実測したのは、III層から出土した灰軸陶器1点のみである。1640は口縁端部が屈曲して立ち上がる灰軸陶器の壺で、古代のものである。

表19 08_12地点・09_17地点出土遺物数量

場所	種別	縄文土器	弥生土器・土師器	須恵器	灰軸陶器	山茶碗・陶磁器類	土製品	石器・石製品	金属製品	木製品	合計
I～II層	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	4
III層	0	59	4	2	1	0	0	0	0	1	67
IV層	0	112	1	0	0	0	0	1	0	2	116
IV上遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V上遺構	0	1,175	0	0	0	0	0	27	0	9	1,211
合計	0	1,349	5	2	1	0	0	29	0	12	1,398

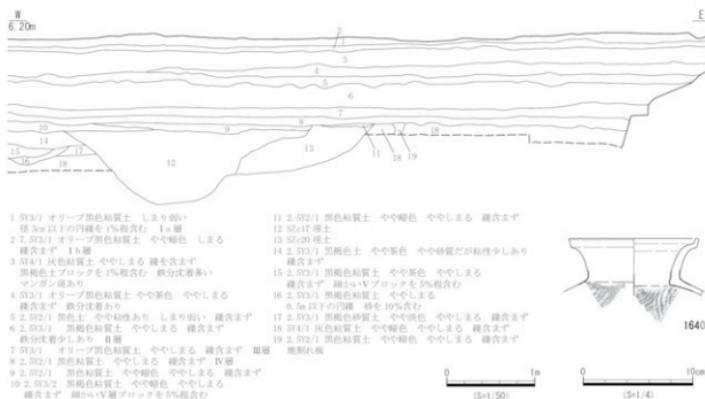


図247 08_12地点北壁土層図・08_12地点包含層出土遺物

3 IV層上面の遺構と遺物

IV層上面では遺構は検出されなかったが、V層上面で検出した溝状遺構や土坑のうち、SDc108～SDc115、SKc0719、SKc0721は古代以降の耕作に伴う痕跡と思われる。

4 V層上面の遺構と遺物 (図248)

V層上面では、方形周溝墓4基、土坑4基、溝状遺構10条を検出した。このうち土坑2基と溝状遺構8条は、前述のとおり古代以降の耕作に伴う痕跡と思われる。4基の方形周溝墓は、いずれも部分的に検出できたものであり、全容は不明であるが、方形若しくは長方形の区画を作り出す可能性が考えられることから、方形周溝墓としたものである。4基の方形周溝墓と1条の溝状遺構、耕作痕と考えられる溝状遺構と土坑を図示した。

SZc17 (図249・250)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。しかし、周溝の埋土最上層が長期間凹地となって残っており、この凹地に堆積したIV層と思われる黒色土によって切り合い関係を把握するのが難しかったため、この黒色土を除去した後遺構の切り合い関係を確認した。

方台部 検出した西辺部、東辺部は直線的で、南辺部はやや湾曲するが緩やかであり、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土は発掘区北壁では確認できず、方台部で検出したSDc116が墳丘の一部ではないかと考えたが、形状や土層堆積状況から、別遺構と判断した。主体部は確認できなかった。

周溝 西溝、南溝、東溝を検出したが、西溝と東溝は一部で発掘区外へ続いている。それぞれ直角に交わりコ字形の溝になる。確認した範囲では、外周は比較的直線的であるが、方台部に当たる内側はやや湾曲する。周溝の断面形は、他の方形周溝墓の溝と比較して壁面の立ち上がりが緩やかで、幅が広い。幅は1.3m～2.4mで、最大の深さは0.88mである。周溝底面は、コーナー部がやや浅くなり、

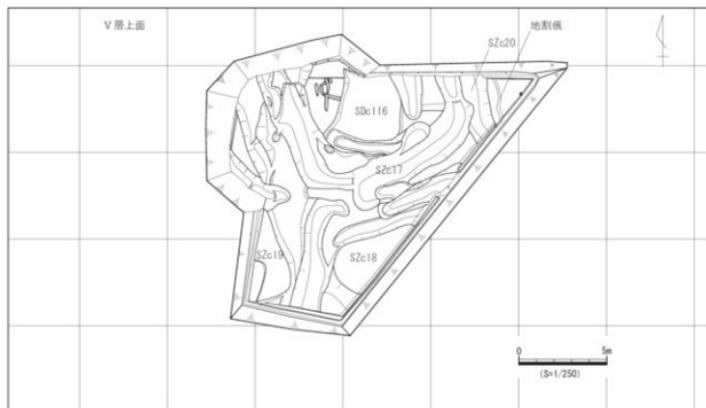
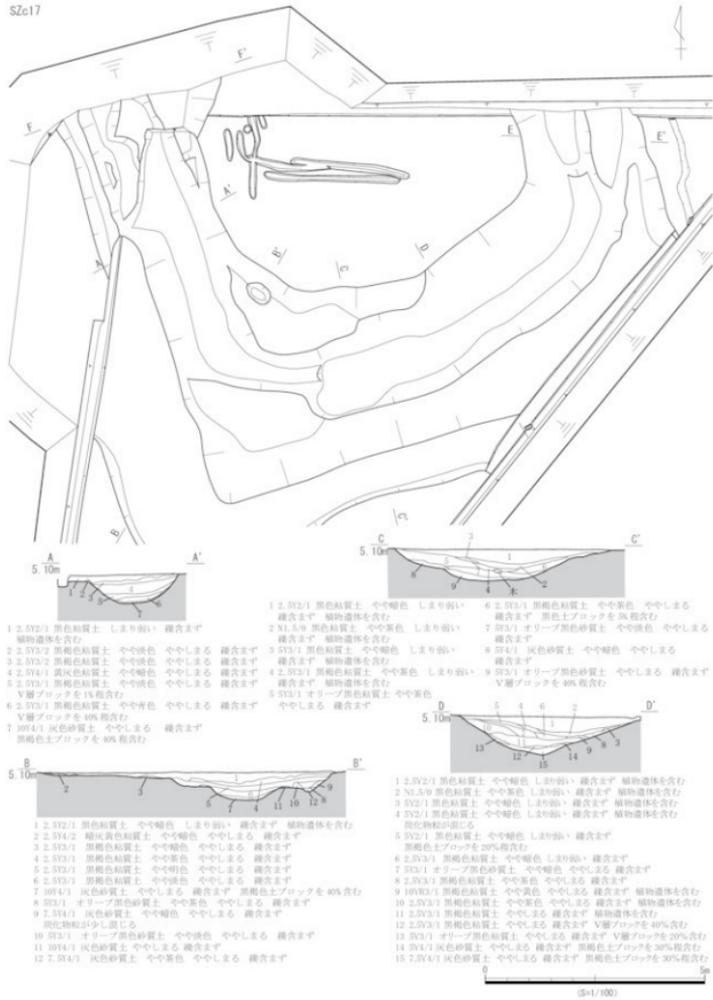


図248 08_12地点・09_17地点V層上面平面図

SZc17





- 1 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗茶色 しまり強い 雑草のみ
- 2 2. 5122 黒褐色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 3 2. 5123 黒褐色粘質土 やや灰色 ややしまる 雑草のみ
- 4 5124 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 5 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 6 2. 5123 黒褐色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 7 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 8 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 9 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 10 5121 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 11 1014 灰色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 12 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 13 1014 灰色粘質土 ややしまる 雑草のみ



- 1 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 径 10cm 以下の円礫を 1% 程度含む 白色粘が混じる 雑草
- 2 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗茶色 ややしまる 雑草のみ IV層
- 3 10121 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 4 5121 オリーブ黒色粘質土 やや茶色 ややしまる 雑草のみ 黒色土ブロックを 1% 程度含む 炭化物粒が少し混じる
- 5 5121 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 6 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ 黒色土ブロックを 10% 程度含む
- 7 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 8 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 9 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 10 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 11 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 12 2. 5121 黒褐色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 13 2. 5123 黒褐色粘質土 やや黄褐色 ややしまる 雑草のみ
- 14 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 15 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 16 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 17 5121 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 18 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 19 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 20 2. 5121 黒褐色粘質土 やや黄褐色 ややしまる 雑草のみ
- 21 5121 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 22 2. 5121 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草のみ
- 23 2. 5121 黒褐色粘質土 やや暗褐色 ややしまる 径 5cm 以下の円礫を 1% 程度含む
- 24 5121 黒褐色粘質土 ややしまる 雑草のみ
- 25 2. 5121 灰色粘質土 V層

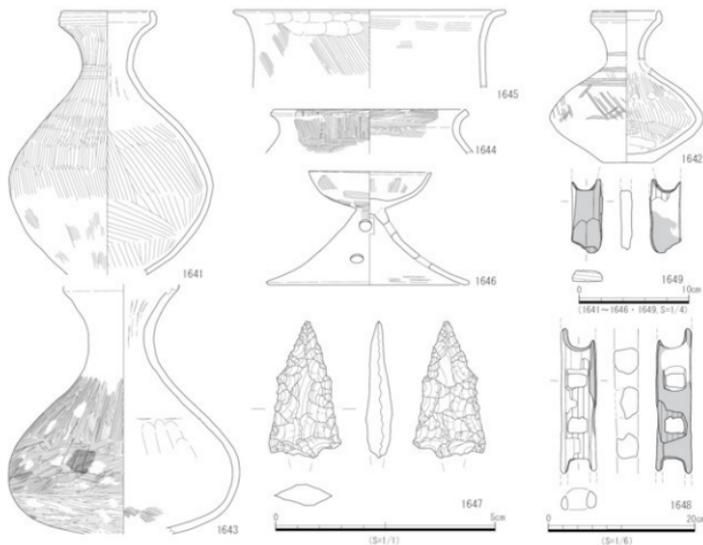


図250 S2c17 (2)

部分的に段を持って深くなることもある。埋土下層にはV層ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から、土器片が514点散在して出土したが、埋土上部からは古墳時代前期、埋土下部からは弥生時代中期の遺物が出土した。石器類は14点の出土があり、打製石鏃、砥石、叩石が各1点ずつ、剥片が11点出土した。木製品は5点出土しており、そのうち2点は同一のものとなる大足である。

出土遺物 1641・1642はIV-1期の壺A1類である。1641は口縁部が屈曲して立ち上がり、胴部は中で張り、算盤玉状となる。1642は小型の細頸壺で、口縁部が屈曲して立ち上がり、外面に凹線文を施す。1643はⅢ-3期の壺で口縁部及び底部を欠く。SZc18からの混入の可能性がある。1644はIV-1期の甕で、口縁部が外反し、口縁端部外縁に刻みを施す。1645はⅢ期の甕で、口縁部が強く外反するが、胴部はあまり張らない。1646はⅧ期の高坏で、坏部は小型の碗状であるが、脚部は基部から大きく外反する。1647はチャート製の有茎石鏃で基部は欠損している。1648・1649は同一の大足である。1648は大足の横木で上下両端部は欠損している。表裏両面からあけられた4つの穿孔がある。1649は大足の側木で、上端部に穿孔の加工がみられる。

時期 周溝内埋土下層から出土した1641や1642が、残存状態から供献土器と考えられ、時期的なまとまりもあるため、IV-1期と思われる。

SZc18 (図251～図254)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。埋土の最上層が、凹地に堆積したIV層と思われる黒色土になっており、SZc17との切り合い関係は、この黒色土を除去した後に確認したため、最上層の黒色土はSZc17として掘り下げた部分がある。

方台部 検出した西辺部及び北辺部は直線的であるが、隅部はやや鈍角となるため、方台部の形状は台形又は不整形になると思われる。方台部には、ほぼ水平堆積でV層ブロックを含む人為的と思われる堆積があり、遺物も出土したことから、墳丘盛土であると考えられる。盛土2層からはほぼ完形の壺が一個体出土した。この壺が出土した部分に主体部の可能性を考えたが、平面形や掘り込みは確認できなかった。

周溝 西溝及び北溝を検出したが、いずれも一部で発掘区外へ続いている。確認した範囲では比較的直線的である。幅は2.5m～2.7mで、最大の深さは1.08mである。特に北溝東部は特に深くなっている。周溝の断面形は、西溝は壁面の立ち上がりは比較的緩やかであり、北溝は逆台形となる。埋土はほぼ水平堆積でV層ブロックを含むことから、墳丘盛土若しくは壁面の崩落のものである可能性が考えられるが、SZc17と構築時期にあまり差のないことを考えると、SZc17を構築の際に一部埋め戻している可能性もある。

遺物出土状況 周溝埋土から、土器片が238点散在して出土したが、弥生時代中期の土器が西溝及び北溝の底面近くから出土した。特に北溝の深くなる部分の底面近くからは、残存状態のよい壺が板材と共にまとまって出土した。また、墳丘盛土と考えた堆積土中からも、弥生時代中期の壺1654が出土した。1657は口頸部と胴部がやや離れた位置から出土しており、意図的に頸部を打ち欠いた可能性がある。石器類は9点の出土があり、打製石鏃が1点、叩石が3点、剥片が5点である。木製品4点は、いずれも北溝の深くなる部分から、土器と共伴して出土した。

出土遺物 1650はIV-1期と思われる壺A1類で、口縁部が屈曲して立ち上がる。III-3期のものかもしれない。1651はIV-1期の壺A2類で口縁部が袋状となり、凹線文を施す。胴部は中位で強く張り、算段玉状となる。口縁部から頸部にかけて羽状刺突文、横線文を施し、胴部は横線文と波状文を交互に配し、5箇所に3単位の縦位沈線を施す。1652～1654はIV期の壺で、平底で胴部は中位で張り、算盤玉状となる。1654の器面は摩滅するが無文である。1655はIII-3期の壺A2類で、小型の細頸壺である。1656はIII-3期の壺A3類で、口縁部が短く立ち上がる細頸壺である。1657はIII-3期の壺B類で、頸部外面に沈

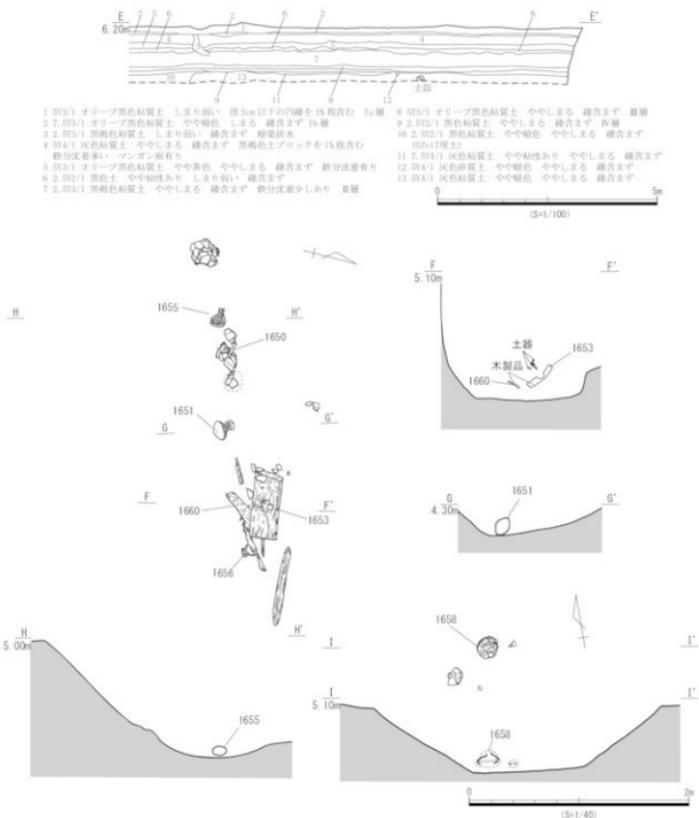


図252 SzC18 (2)

線を施す。1658はⅢ-3期の壺で、胴部は中位よりやや下で張り、丸みがある。器面は摩滅しているが、一部文様が確認できるところでは横線文と縦位沈線が認められる。1659はチャート製の有基石鏃で基部は欠損している。1660は板材で表裏面に加工痕がある。1661は建築部材の床板を上下左右端部を切断して転用したものである。中央に方形の仕口がある。

時期 図示した周溝内埋土下層から出土している壺は出土状況や残存状態から、いずれも供献土器と考えられる。同一の周溝墓から、時期の異なる供献土器が出土したことになるが、Ⅲ期終末段階、Ⅳ期初段階の土器資料は共存することが確認されている。この場合Ⅳ期初段階に入っていると判断して、Ⅳ-1期と思われる。

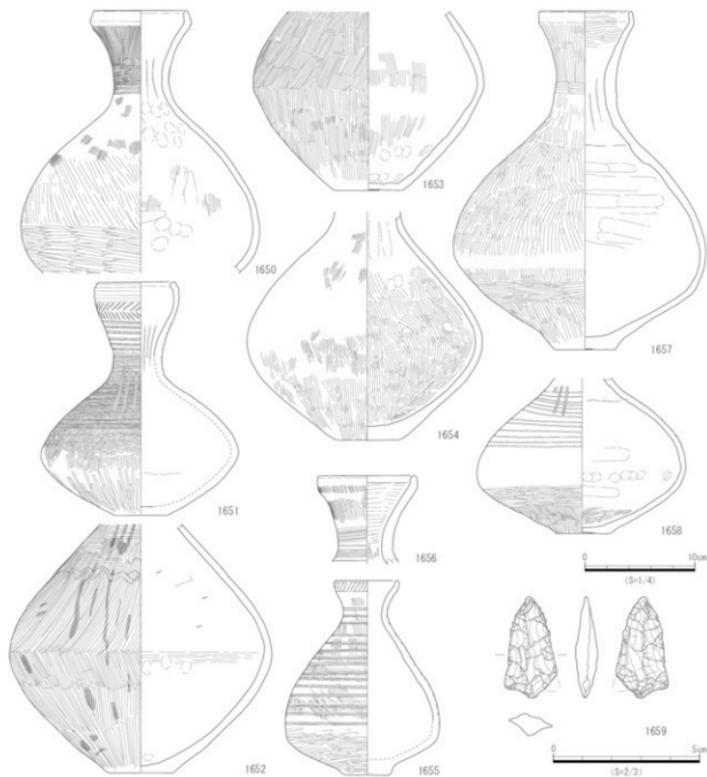


図253 SZc18出土遺物(1)

SZc19 (図255)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。大半が発掘区外となり、他の遺構の削平も受けているため、全形は不明であるが、南端でL字形に屈曲すると考えられることから、方形周溝墓の溝であると判断した。

方台部 検出したのは東辺部及び南辺部の一部である。東辺部が直線的であり、隅部もほぼ直角になることから、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われる。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 東溝及び南溝を検出したが、東溝はSZc17とSZc18の西溝に切れ、南溝はわずか一部の検出にとどまるため、全体の形状ははっきりしない。東溝は確認した範囲では比較的直線的である。幅は2.5m以上であるが、他の遺構に切られているため、正確なところは不明である。最大の深さは0.41mを計るが、東溝底面の大部分は平坦に広がっており、壁面の傾斜も比較的緩やかなことから、溝のようには見えない。埋土はほぼ水平堆積でV層ブロックを含むことから、墳丘盛土若しくは壁面の崩落のものである可能性が考えられるが、SZc17と構築時期にあまり差のない場合を考えると、SZc17を構築の際に一部埋め戻している可能性もある。

遺物出土状況 周溝埋土中から散在して土器が出土したが、小片のみで最も量も15点と少ない。

出土遺物 出土した土器は小破片ばかりで、図示可能なものはなかった。

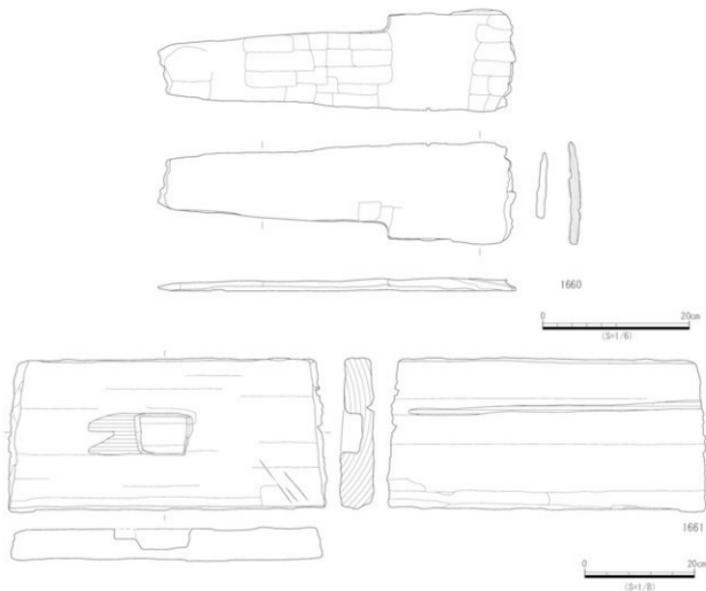


図254 SZc18出土遺物(2)

SzC19

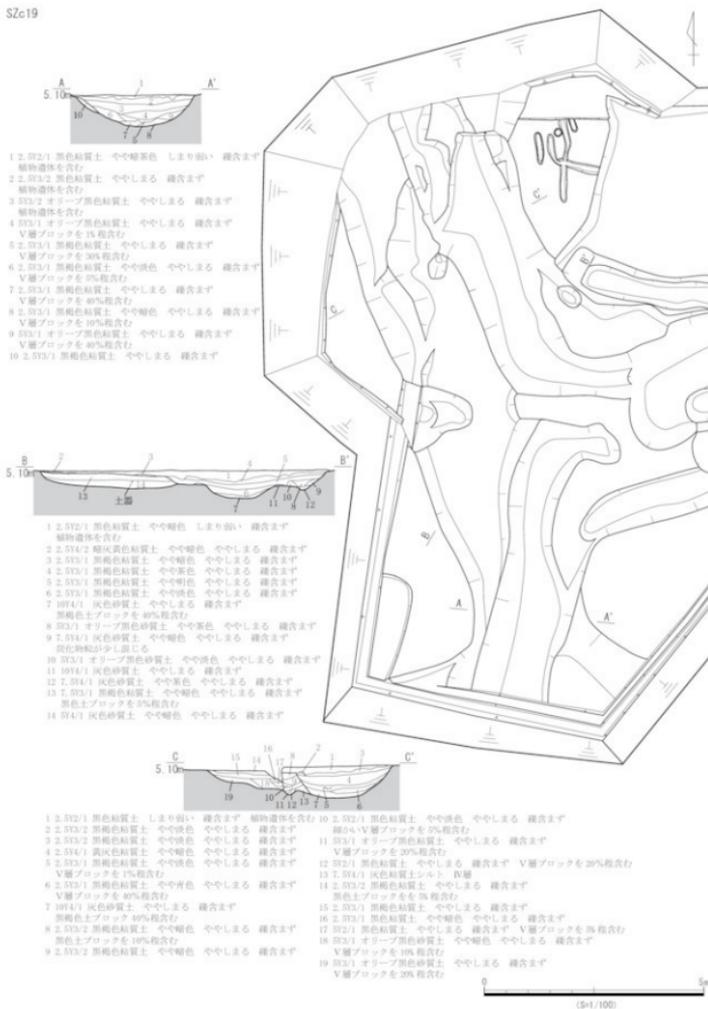


図255 SzC19

時期 時期が判明する遺物はないが、土器は小破片ながら弥生時代中期と思われるものが多いことや、SZc17やSZc18に先行することから、IV-1期以前と思われる。

SZc20 (図256)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。大半が発掘区外となり、他の遺構の削平も受けているため、全形は不明であるが、SZc17の東溝と方向を同じくして重複することから方形周溝墓の溝であると判断した。

方台部 検出したのは西辺部の一部である。直線的になるため、方台部の形状は方形若しくは長方形と思われるが、正確なところは不明である。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

周溝 西溝を検出したが一部であり、発掘区外へ続いている。幅は1.5m以上で、最大幅はSZc17の東溝に含められているため、不明である。最大の深さは0.53mである。埋土はほぼ水平堆積でV層ブロックを含むことから、墳丘盛土若しくは壁面の崩落による可能性が考えられるが、SZc17と構築時期にあまり差のない場合を考えると、SZc17を構築の際に一部埋め戻している可能性もある。

遺物出土状況 周溝埋土上部から1点土器片が出土したのみである。

出土遺物 出土した土器は小破片で、図示可能なものはなかった。

時期 時期が判明する遺物はないが、SZc17に先行することから、IV-1期以前と思われる。

SDc116 (図257・259)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は不明瞭であった。大半が発掘区外に延びるため全長は不明であるが、底面に溝状の凹みがL字形に並び、やや深くなる。12層に分層したがほぼ水平堆積で、V層ブロックが含まれることから、人為堆積の可能性もある。SZc17の墳丘盛土の可能性も考えたが、西側に掘り込みがあることから、その可能性は否定した。また溝がL字形になることから方形周溝墓

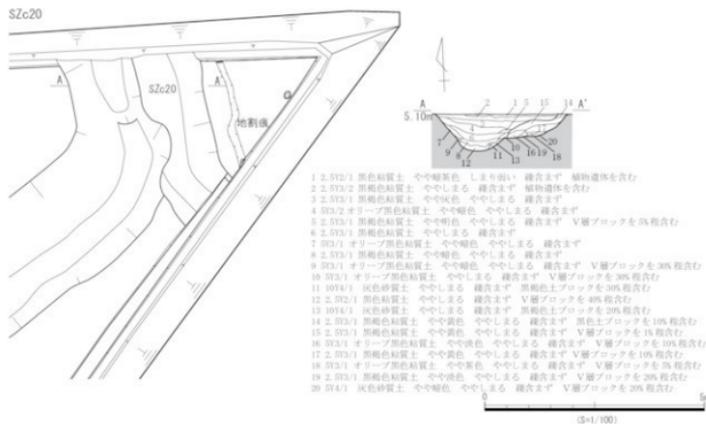


図256 SZc20

のように見えるが、堆積状況から説明が困難なため、溝状遺構とした。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して41点出土した。縄文時代晩期～弥生時代中期の土器片が目立つ。石器類では叩石が1点出土した。

出土遺物 1662はⅢ期の壺B類で、口縁部が大きく外反する大頭壺と思われる。1663は縄文時代晩期の、いわゆる変容壺の口縁部で、素文の突帯が1条巡る。1664はⅠ期の甕で、やや外反する口縁部である。端部に沈線を1条施す。

時期 重複関係でSZe17よりも古いことや、縄文時代晩期～弥生時代中期の土器片が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

溝列 (図258・259)

検出状況 SDe108～SDe115、SKc0719、SKc0721が発掘区北部と南部の方形溝溝墓の方台部上に鋤溝状の遺構を確認した。まとめて溝列として報告する。SDe109～SDe115、SKc0721はSZe17の方台部上に検出した、東西方向又は南北方向の細長く非常に浅い鋤溝状である。SDe108とSKc0719はSZe18の方台部上に検出したもので、北部のまとまりからはやや離れるが、北部で検出したものと埋土が類似するこ

SDe116

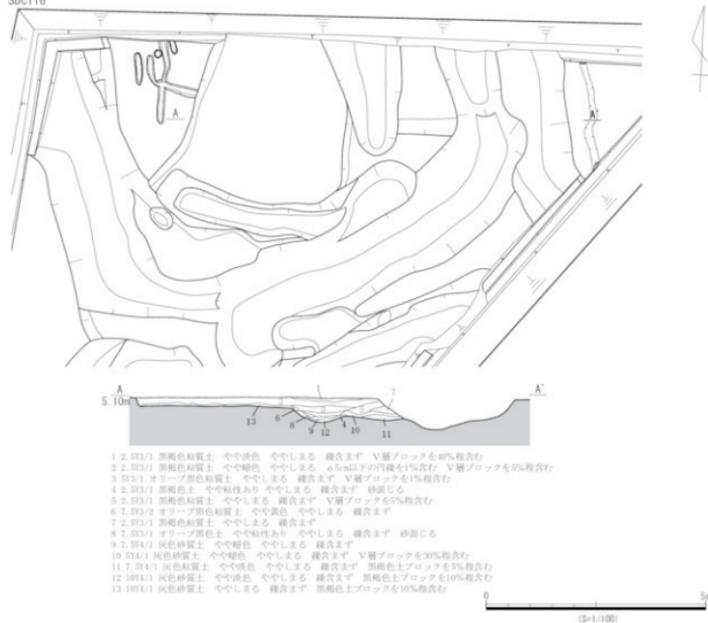


図257 SDe116

溝列

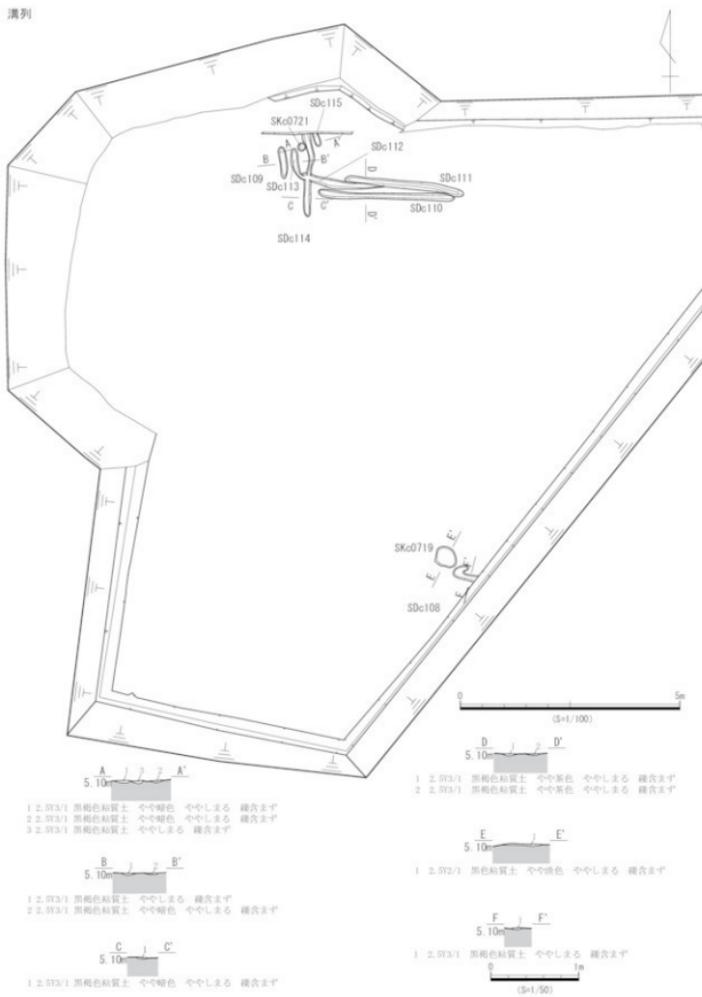


図258 溝列 (SDc109~SDc115)

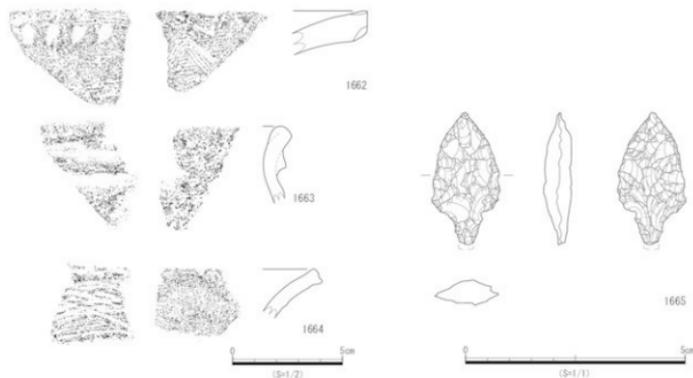


図259 SDc116・溝列出土遺物

とから、同種の遺構であると考えられる。鋤溝状の遺構は09_12地点のIV層上面で検出した水田の耕作土を除去したV層上面においても検出されており、この発掘区で検出した溝列も耕作に伴う溝状遺構と思われる。

遺物出土状況 SDc110、SDc112合わせて3点土器が出土したが、小破片である。SDc114からは剥片2点と打製土織1点が出土した。

出土遺物 1665はチャート製の有茎石織で、基部を欠く。

時期 出土した遺物からは明らかにすることはできなかったが、鋤溝状の溝状遺構であることから、古代以降の可能性が高いと思われる。

5 まとめ

この地点は、平成8年に大垣市教委が調査した場所の南側に位置し、北側には市道高屋松線を含んで09_12地点が位置する。IV層上面では遺構は検出されなかったが、V層上面では耕作に伴うと思われる鋤溝状の溝列を検出しており、09_12地点や09_13地点においても同様の遺構を検出していることから、この周辺において古代以降に水田耕作が行われていたと考えられる。

V層上面の遺構では方形周溝墓、土坑、溝を検出したが、主な遺構は弥生時代中期の方形周溝墓群である。方形周溝墓群は遺物からIV-1期若しくはそれよりやや古いものになると思われ、埋土の堆積状況も合わせて考えると、比較的短期間の間に、既にある方形周溝墓の溝を埋め戻しながら、新しい方形周溝墓を造営した可能性も考えられる。また、08_12地点のすぐ北の大垣市発掘区では、大溝の西側は遺構は未確認であり、さらに北の09_12地点では弥生時代後期の方形周溝墓群が検出されている。このことから大垣市発掘区の遺構がない部分については、弥生時代中期の方形周溝墓群と弥生時代後期の方形周溝墓群とを区切る空間になっている可能性がある。

第8節 07・2・3地点・09_11・13地点

C地区中央部、08_12地点・09_17地点西側に位置する調査地点で、調査面積は2,708㎡である。本線橋脚、調整池、既設用水路の付け替え予定地が位置するが、北側には市道高屋幹線が走り、南側には市道を挟んで09_14地点がある。なお、09_13地点は排土処理の都合上、北半部と南半部に分けて反転調査を行った。

1 層序

09_13地点北壁土層を図示した(図260)。基本層序のI層からV層を確認し、遺構検出面はIV層上面とV層上面となるが、弥生時代の方形周溝墓の墳丘盛土が残存していた部分については、IV層の堆積がなく、III層基底面が検出面となる。遺構埋土を除き、ほぼ水平に堆積しているが、9層～12層はII層で耕地整理に伴う盛土層と思われる。なお、09_13地点のIV層上面で検出したSDe118～120は北壁でII層上面からの掘り込みを確認している。また、09_11地点西部は、IV層を除去しても明確なV層が確認できず、IV b層の堆積があると判断しているが、SDe133～137はIV b層上面で検出したものである。

2 包含層出土遺物(図261～図263)

この地点で出土した遺物は、30,339点であるが、その大半が弥生土器・土師器類であり、自然流路からは木製品が多く出土した。このうちI～II層(発掘区壁面出土、II層上面検出遺構含む)は53点、III層は241点、IV層は1,877点で、遺構出土遺物は28,168点である。III層の遺物は、石器類が3点、木製品が5点の他は土器類で、須恵器6点、陶磁器類47点を含む。IV層の遺物は石器類8点、金属製品

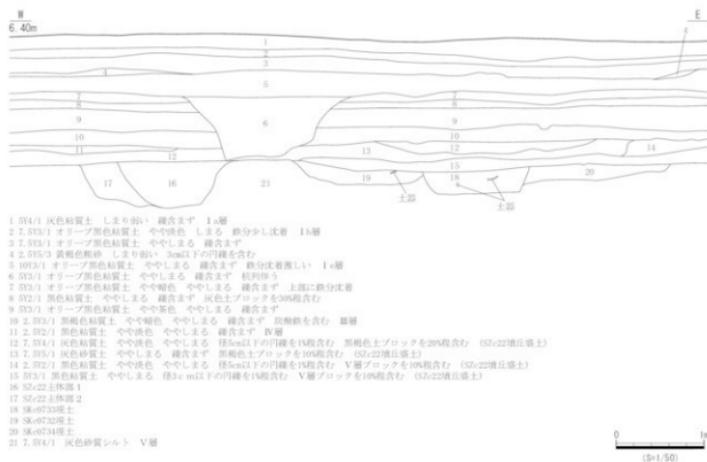


図260 09_13地点北壁土層図

表20 07.2・3地点・09.11・13地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I・II層	0	49	0	0	4	0	0	0	0	53
III層	0	180	6	0	47	0	3	0	5	241
IV層	0	1,776	71	0	0	0	8	1	21	1,877
IV上遺構	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
IVb上・V 上遺構	2	27,612	4	0	12	1	55	0	480	28,166
合計	2	29,619	81	0	63	1	66	1	506	30,339

1点、木製品21点の他は土器類で、須恵器71点を含む(表20)。包含層出土遺物として実測したのは、III層及びIV層から出土した山皿、土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器、鉄斧、木製品である。

1666は13世紀頃のものと思われる伊勢型鍋の口縁部である。1667は中世の土師器皿である。1668は小型の山皿で、藤澤福年の6型式と思われる。1669は古代の須恵器甕の口縁部から胴部で、口縁部は外反して開き、口縁端部が肥厚する。1670は古代の須恵器の坏身で、口縁部が直線的に開く。1671はⅧ期の二重口縁壺と思われるが口縁部を欠く。破断面の状態から口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。1672はⅤ～Ⅶ期の壺で平底の底部片である。1673はⅥ期の甕A2b類で受口状口縁となり、屈曲部に刺突を施す。1674はⅦ期の甕D2b類で、いわゆるS字状口縁台甕B類である。1675はⅣ期の高環A類で湾曲して立ち上がる口縁部の外面に2条の沈線を巡らす。1676は縄文時代晩期の深鉢の口縁部で、口縁外面に突帯を貼り付け、二枚貝により突帯を押圧する。1677は下呂石製の打製石鏃で、基部に逆V字形の浅い抉りが入る。先端部は欠損する。1678は扁平片刃石斧である。1679は叩石で長軸の端部に敲打痕が認められる。1680は先端部・基部を欠くため、石槍状石器とした。1681は古墳時代のものと思われる袋状鉄斧で、袋部の合せ目は密着しないで開放となっている。1682は鎌・鋤類の身断欠品である。1683は古墳時代末から古代と思われる馬鍔で上面に模痕がある。1684は古墳時代末から古代と思われる唐鐙で、長床撃である。撃床と撃柄は一木からなり、撃先は一部欠損しているが断面が楔形でU字形刃先がつけられたものと思われる。撃へらがつく部分のほぞ形状から左反転である。1685は田下駄で、孔が2つある。1686は無節式堅杵の掲き部か。先端に摩滅痕が認められる。1687は杵である。1688は紡織具の調整具である。1689は棧材で上部に円孔がある。1690は器種不明の

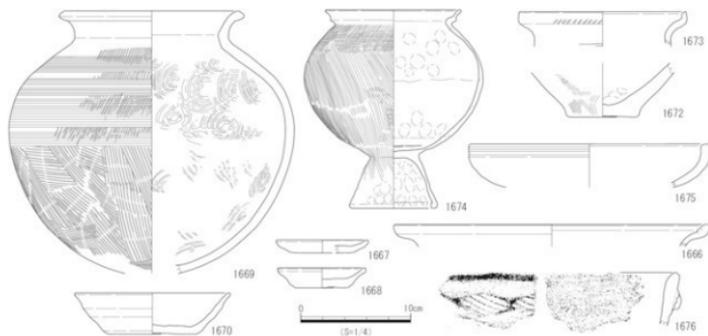


図261 07.2地点他包含層出土遺物(1)

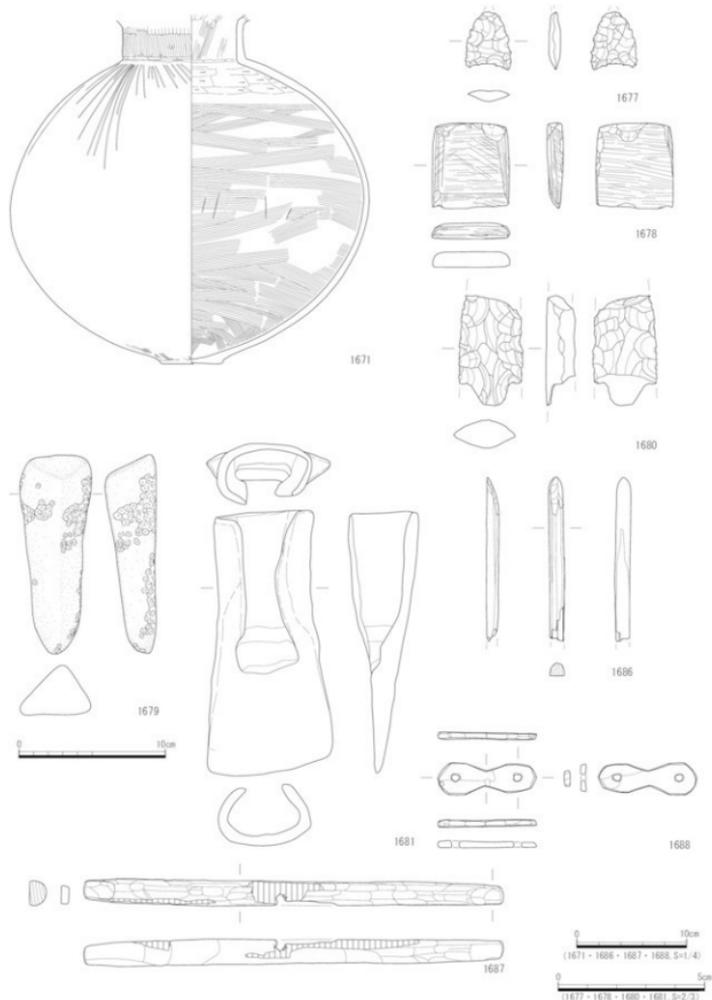


圖262 07_2地点他包含層出土遺物(2)

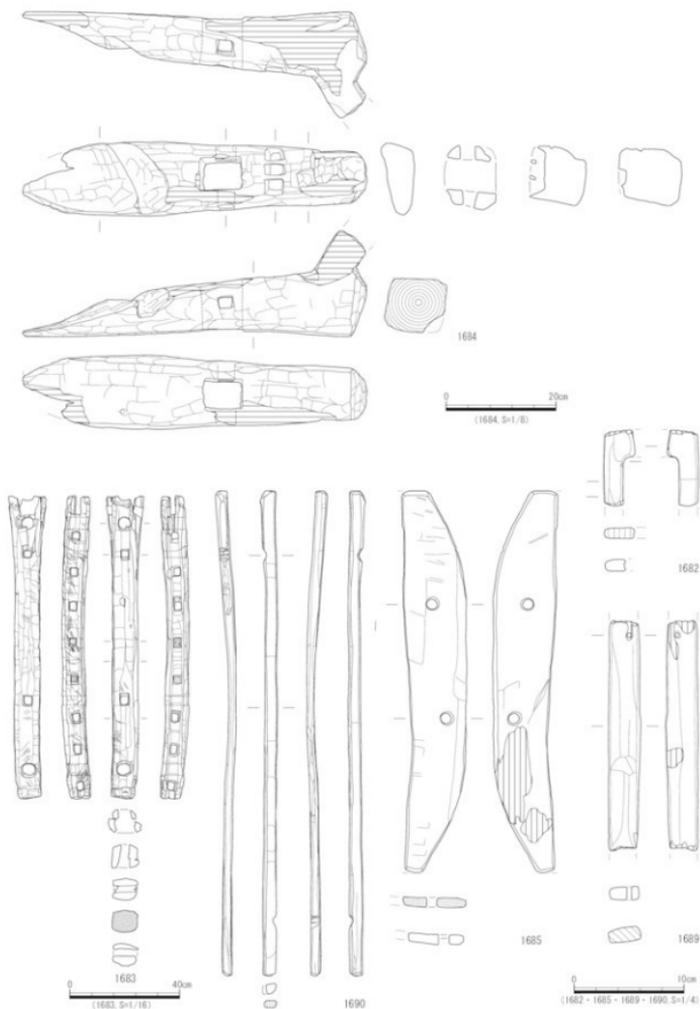


图263 07_2地点他包含層出土遺物 (3)

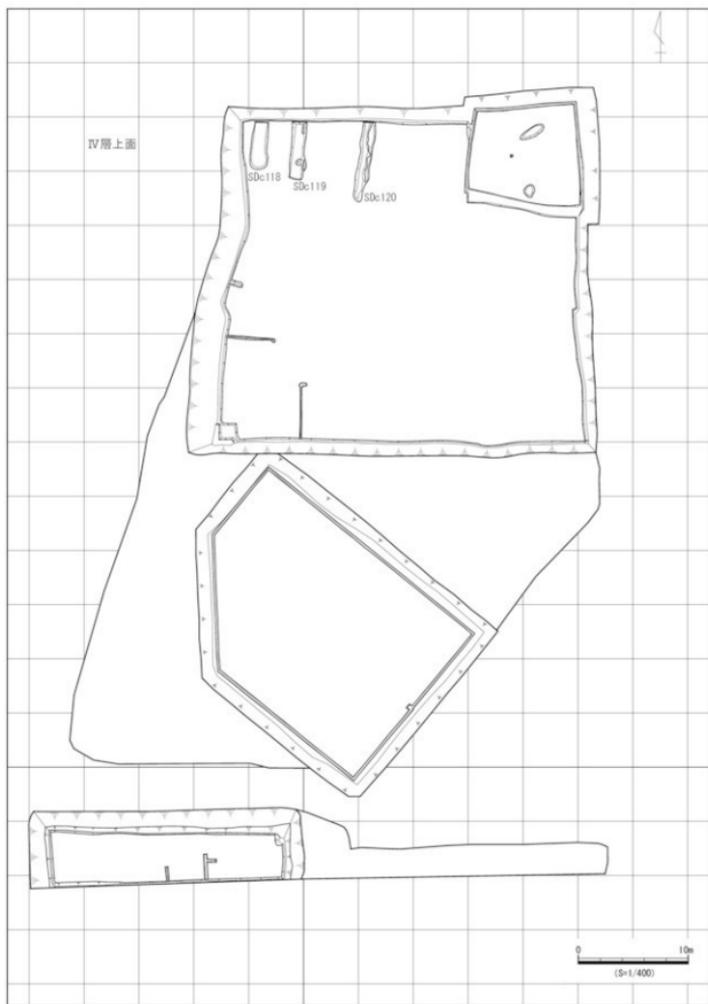


图264 07_2・3地点・09_11・13地点IV層上面平面图

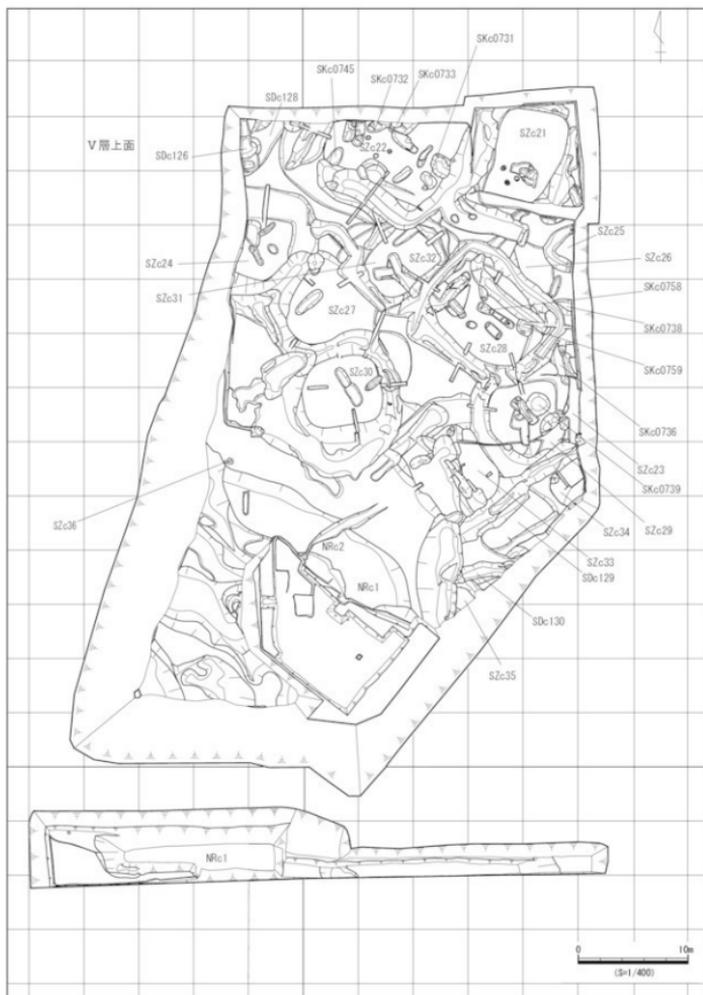


図265 07.2・3地点・09_11・13地点V層上面平面図

器具部材で、上方と下方に切れ込みがある。

3 IV層上面の遺構と遺物 (図264)

IV層上面では土坑3基を検出した。09_13地点のIV層上面で検出したSdc118～120は北壁でII層上面からの掘り込みを確認しており、現代の溝である。また、III層基底面で検出したSdc121～125は、08_12地点や09_12地点で検出した古代以降の耕作に伴う痕跡と思われ、これらの地点と同様にV層上面の遺構であると考えられる。遺物はSKc0722に小片が出土したのみである。

4 V層上面の遺構と遺物 (図265)

V層上面では、方形周溝墓16基、土器棺墓1基、土坑36基、溝状遺構17条、自然流路2条を検出した。このうち09_11地点西部で検出したSdc133～137はIV層上面で検出したものである。また、方形周溝墓の墳丘盛土が残っていた部分については、IV層の堆積がなく、III層基底面が検出面となり、この部分からはSdc121～125を検出している。09_13地点において検出した方形周溝墓の多くは墳丘盛土が残っており、IV層を除去した段階で墳丘のマウンド状の高まりが見えてくる状況であった。

16基の方形周溝墓と1基の土器棺墓、9基の土坑、3条の溝状遺構、耕作痕と考えられる溝列、自然流路を図示した。

SZc21 (図266・267)

検出状況 V層上面で検出した。平面形は07_3地点部分においては比較的明瞭であったが、09_13地点部分についてはIV層を除去したところで、色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブソレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。しかし、出土遺物からはSZc22やSZc28より古くなることが考えられるため、土層堆積による切り合い関係は認識した可能性が高い。

方台部 方台部は07年度発掘区にあたる。検出した東辺部はやや湾曲するが、他の辺はほぼ直線的である。南辺部・北辺部に比べ、東辺部・西辺部が長くなるため、方台部の形状は南北に長軸を持つ長方形となる。07年度調査時には、方台部上面の堆積は、発掘区壁面や方台部に検出した土坑の壁面からV層として判断していた。しかし、09年度調査では、SZc21に隣接する方形周溝墓の墳丘が残存することが確認できたことから、V層とした堆積が墳丘盛土であった可能性がある。主体部は方台部上で検出した土坑にその可能性を考えたが、形状や底面の状態から主体部とは判断できなかった。

周溝 東溝・西溝・南溝・北溝を検出したが、北溝と東溝は一部で発掘区外へ続いている。幅は3m～3.5mで、最大の深さは0.88mである。東溝の外周は不規則に湾曲している。南東隅と北東隅は連続しているが、隅部で残くなっている。確認した範囲では外周は比較的直線的であるが、方台部に当たる内側はやや湾曲する。周溝の断面形は、逆台形であるが、南溝は幅広となり壁面は開く。埋土はほぼ水平堆積であるが、埋土下部にはV層ブロックを含み、墳丘盛土若しくは壁面の崩落によるものと思われる。埋土上部は自然堆積によるものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から、土器片が451点散在して出土した。東溝からは壺が転落した状態で2個体出土したが、1点は埋土下層、もう1点は埋土上層の出土である。石器類は砥石1点、叩石が3点出土した。木製品は1点出土した。

出土遺物 1691はII期の壺A1a類で、口縁端部に波状文、頸部と胴部中に櫛描文を施す。1692はIII

SZc21

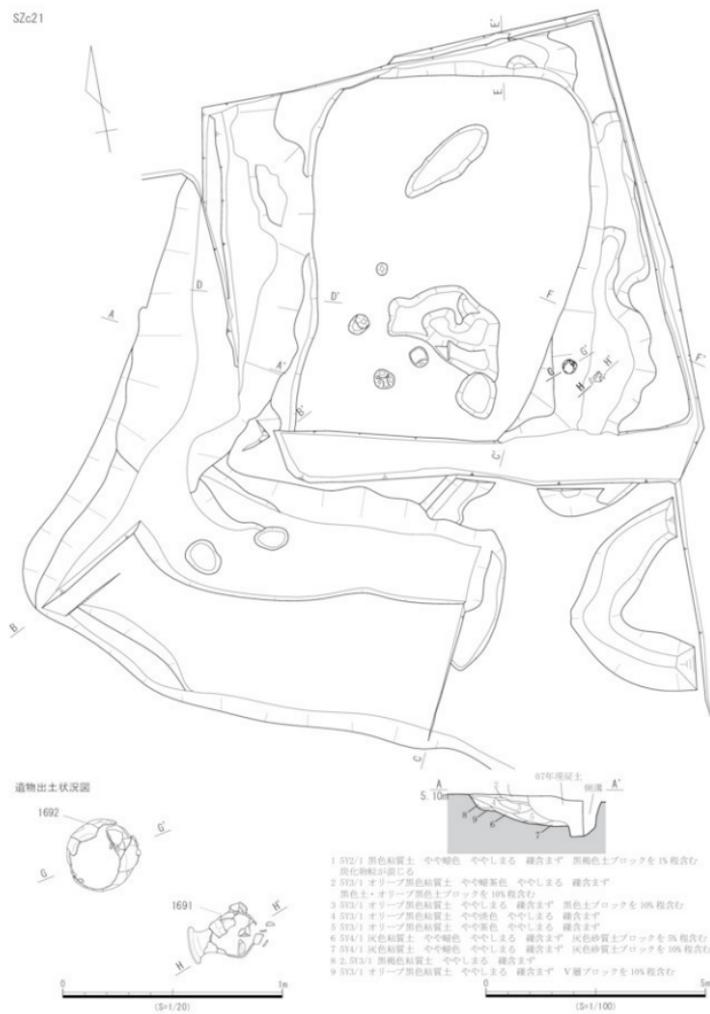
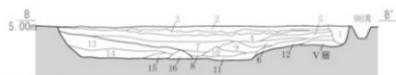


図266 SZc21 (1)



- 1 07AM 母岩土
- 2 2.072/1 黒色粘質土 中や黄色 中やしまる 礫含まず 輪郭遺体は少し混じる
- 3 2.072/2 黒色粘質土 中や暗褐色 しまりや中強い 礫含まず 輪郭遺体は混じる
- 4 074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず 灰化跡が少し混じる
- 5 074/1 灰色粘質土 中やしまる 礫含まず
- 6 074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを10%含む
- 7 074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず
- 8 7.074/1 灰色粘質土 中やしまる 礫含まず
- 9 オリーブ黒色粘質土・V層ブロックを30%含む
- 10 7.074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを20%含む
- 11 7.074/1 灰色粘質土 中やしまる 礫含まず V層ブロックを20%含む
- 12 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫10cm以下の円礫を1%含む V層ブロックを30%含む
- 13 073/1 オリーブ黒色粘質土 中やしまる 礫含まず V層ブロックを5%含む
- 14 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫3cm以下の円礫を1%含む
- 15 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを1%含む
- 16 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを20%含む



- 1 2.072/1 黒色粘質土 中やしまる 礫含まず
- 2 2.072/2 黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず 黒褐色土ブロックを下面に20%含む 下層へ漏み込まれたように落ち込む部分あり
- 3 2.072/3 黒褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず 黒色土ブロックを5%含む
- 4 2.072/3 黒褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず 黒色土ブロックを1%含む
- 5 2.072/3 黒褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを5%含む
- 6 2.072/3 黒褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず 黒褐色土ブロックを1%含む
- 7 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず
- 8 074/2 暗褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを5%含む
- 9 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを20%含む
- 10 2.073/1 黒褐色土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず 黒色土ブロックを30%含む
- 11 2.073/1 黒褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず
- 12 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず
- 13 073/1 オリーブ黒色粘質土 中やしまる 礫含まず V層ブロックを1%含む
- 14 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを20%含む
- 15 074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫5cm以下の円礫を1%含む V層ブロックを10%含む
- 16 2.073/1 黒褐色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず V層ブロックを10%含む
- 17 1074/3 灰色砂質シルト V層



- 1 073/2 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫5cm以下の円礫を少量含む
- 2 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫含まず V層ブロックを1%含む
- 3 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫5cm以下の円礫を少量含む 底砂混入
- 4 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫5cm以下の円礫を少量含む
- 5 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫含まず V層ブロックを30%含む



- 1 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫5cm以下の円礫を少量含む
- 2 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫5cm以下の円礫を少量含む
- 3 074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 礫含まず V層ブロックを30%含む



- 1 2.073/1 黒褐色粘質土 中や暗褐色 礫5cm以下の円礫を少量含む
- 2 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫5cm以下の円礫を少量含む V層ブロックを1%含む
- 3 073/1 黒褐色粘質土 中や暗褐色 礫5cm以下の円礫を少量含む V層ブロックを10%含む
- 4 1074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 礫含まず 黒色土ブロックを30%含む
- 5 073/1 オリーブ黒色粘質土 中や暗褐色 礫含まず
- 6 074/1 灰色粘質土 中や暗褐色 中やしまる 礫含まず

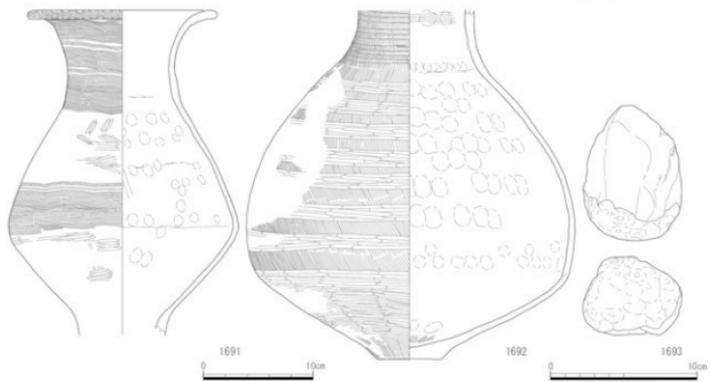


図267 SzC21 (2)

-1期の壺で口縁部を欠く。頸部外面は沈線で埋め、上胴部は幅2cm前後の研磨帯を7帯施す。1693は叩石で長軸の端部に敲打痕が認められる。

時期 周溝内埋土から出土した1691や1692が、出土状況や残存状態から供献土器と考えられるが、1691が埋土下層から出土しⅡ期の新しい段階のものであること、1692が埋土上層から出土しⅢ-1期のものであることから、この方形周溝墓はⅡ期終末に造営され、のちに再度供献が行われたものであることが考えられる。

SZc22 (図268～図273)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。全体の半分以上が発掘区外となるため全容は不明であるが、コ字形に溝があり、方形の区画を作り出していることから、方形周溝墓と判断した。

方台部 西辺部、南辺部、東辺部は比較的直線的であることから、方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は厚さ約30cmほどを確認したが、最下部に黒色土が15～20cmほど盛られ、その上に色や土質がV層によく類似した土を盛るという順で墳丘が構築されていた。盛土最下部の黒色土は西部にある主体部1・2の上部には堆積しておらず、中央から東部に位置する主体部3～5の上部に堆積しているが、いずれの主体部も盛土下で確認しており、盛土を掘り込むようなものはなかった。特に主体部5上部にあたる盛土は主体部5の埋土に落ち込むような堆積を確認することができ、主体部を構築した後に盛土したことが明瞭である。このような状況から、主体部3～5を作って黒色土の盛土を行い、その後主体部1・2を作ってさらに盛土を行うといったように、主体部を作るたびに盛土を重ねていったものと考えられる。主体部は前述のとおり盛土下で検出した土坑のうち、形状や埋土堆積状況から5基を主体部と考えた。主体部1は一部発掘区外となるが、不整長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が南北方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。埋土はほぼ水平堆積で、黒色土とV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。埋土1層は墳丘盛土の沈み込みの可能性がある。底面は凸凹がある。主体部2は一部発掘区外となるが、不整長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が南北方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。埋土はほぼ水平堆積である。底面には凸凹がある。主体部3は細長い溝状の土坑でやや深く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が南北方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。埋土はほぼ水平堆積で、黒色土とV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。埋土1層は墳丘盛土の沈み込みの可能性がある。底面は南側に段があり中央から北側が一段深くなる。主体部4は不整長方形でやや浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が南北方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。埋土はほぼ水平堆積で、黒色土とV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。棺痕等は確認できなかった。底面はほぼ平坦である。主体部5は不整楕円形でやや浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が東西方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。埋土は7層に分層したが、このうち5層が棺痕跡の可能性が考えられる。この場合埋土6層が裏込めの土になる。埋土1層は墳丘盛土の沈み込みである。底面はほぼ平坦であるが、下端の形状は不定形となる。

周溝 西溝と東溝の一部及び南溝を検出した。墳丘側は比較的直線であるが、南溝から西溝にかけて

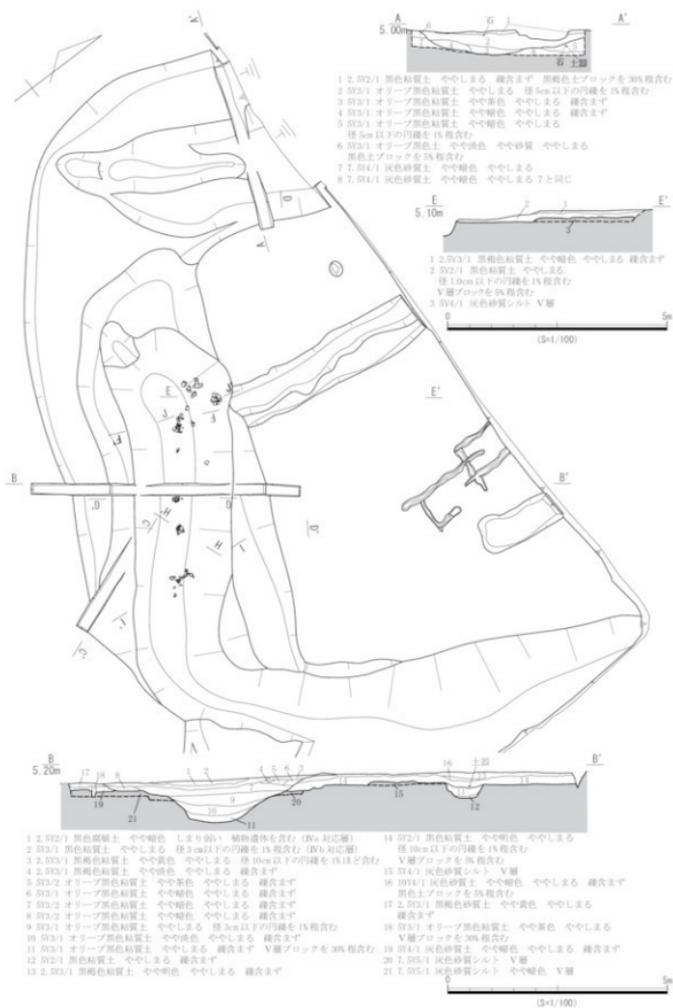


図268 Sz22 (1)

の外周は緩やかに湾曲する。南西部の隅は連続しているが、浅くなっている。幅は3.2m～4.3mで、最大の深さは0.98mである。周溝の断面形は、西溝と南溝では、中央部が一段深くなり、壁面はテラス状の平坦面を持ち、緩やかに開く。東溝はSz21との土層堆積による切り合い関係を認識した可能性が高く、先にSz21の西溝を掘削してしまったため、正確なところは不明であるが、方台側の壁面は開く。埋土はほぼ水平堆積で、埋土下部はV層ブロックを含むことから、墳丘盛土若しくは壁面の崩落のものである可能性が考えられるが、埋土上部は自然堆積であると思われる。

埋土はほぼ水平堆積で、黒色土とV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高い。埋土1層は墳丘盛土の沈み込みの可能性が高い。底面は凸凹がある。主体部2は一部発掘区外となるが、不整形な形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が南北方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。

遺物出土状況 周溝埋土から、土器片が1738点散在して出土したが、南溝の方台側側の肩面から底面にかけてはまとまった土器の出土があった。このうち、残存状況から1696、1703、1706が供献土器と考えられるが、その他の土器についても時期は共通するため、供献土器であった可能性が高い。石器類は打製石鏃、磨製石鏃、叩石、砥石、剥片が各1点ずつ出土した。墳丘盛土からは土器片が617点出土したが、Ⅲ～Ⅳ期のものである。石器類は打製石鏃が1点出土した。主体部1から甕が2個体破片で出土したが、その他の主体部からは土器片の出土はあるものの小破片ばかりであった。

出土遺物 1694～1706は周溝埋土からの出土である。1694はⅦ期の壺で、埋土上部から出土しており、包含層扱いにすべきものかもしれない。1695はⅦ期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類である。

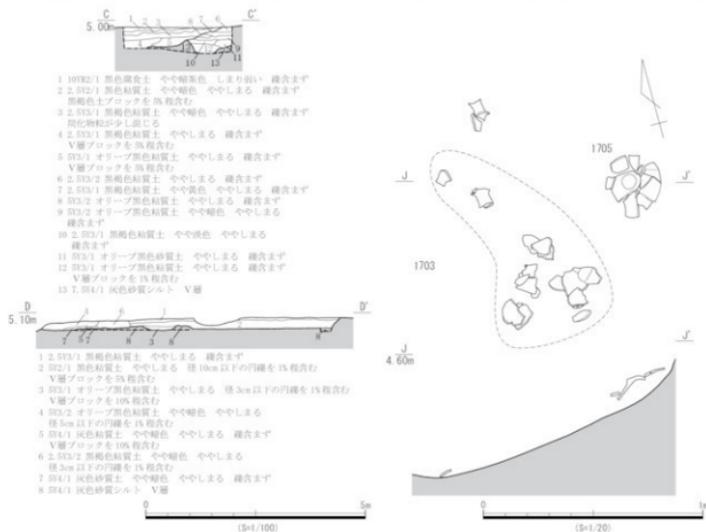


図269 Sz22 (2)

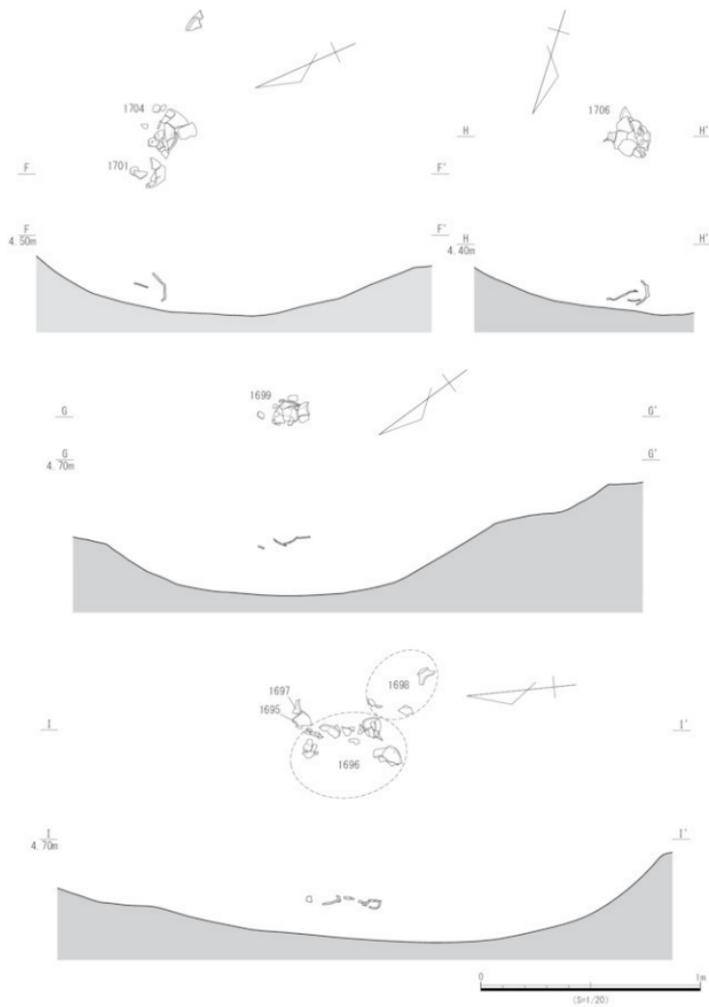


図270 Sz22 (3)

1696はIV-1期の壺A2類で、胴部に簾状文、斜格子目文を施す。1697はIV期の平底の壺の底部片である。1698～1700はIV期の甕で、1698はやや突出した底部で、凹み底となる。1699は口縁部から頸部にかけての破片、1700は底部片で、底部を意図的に穿孔した可能性がある。1701はIV-2期と思われる鉢A類で、口縁部が内湾して立ち上がり、外面に凹線文を巡らせ、刻みを施す。1702～1705はIII期の壺である。1702は壺A類の口縁部である。1703は細頸壺の頸部から胴部片で、頸部には6条以上の沈線を巡らせ、上胴部には沈線を付加した研磨帯を施す。1704は頸部片で、櫛描文と円形の刺突文を施す。1705は底部片であるが、胴部下位で稜を持つ器形となる。1706はIII～IV期の受口状口縁の壺である。1707は墳

SZc22 墳丘下面

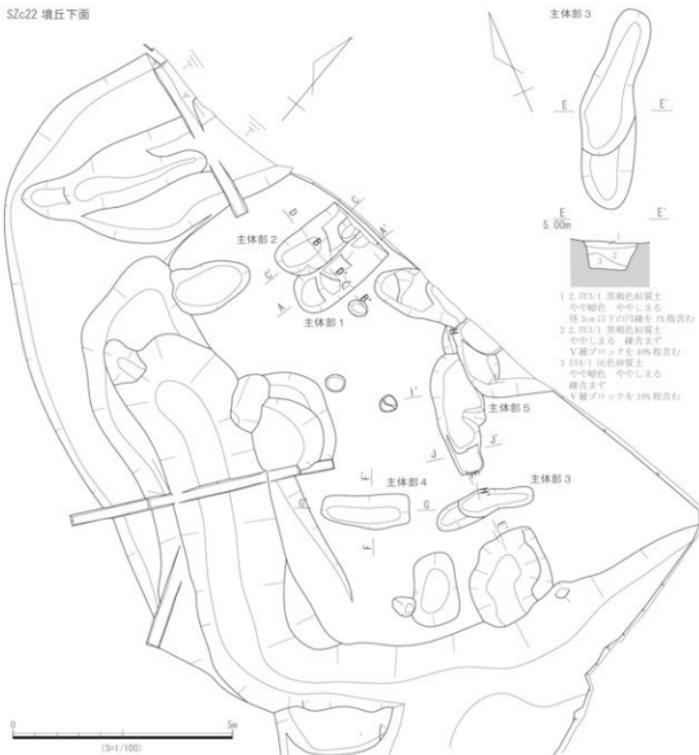
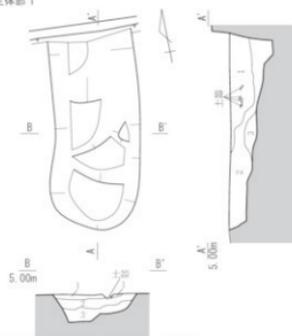


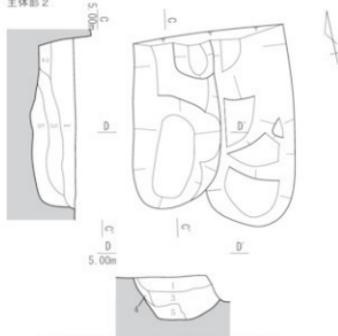
図271 SZc22墳丘下面

主体部1



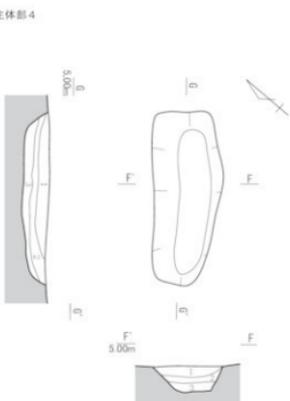
1. 2. 513/1 黒褐色粘質土 ややしまる 礎石まで
2. 513/1 黒褐色粘質土 やや灰色 ややしまる
厚 30cm以下の円縁を再構築
V層ブロックを再構築
3. 514/1 灰色砂質土 やや暗色 ややしまる
黒色土ブロックを30%再構築

主体部2



1. 514/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 礎石まで
2. 513/1 オリーブ黒色砂質土 やや灰色 ややしまる 礎石まで
3. 513/1 オリーブ黒色粘質土 やや黄色 ややしまる 礎石まで
4. 513/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 礎石まで
5. 514/1 灰色砂質土 やや暗色 ややしまる 礎石まで

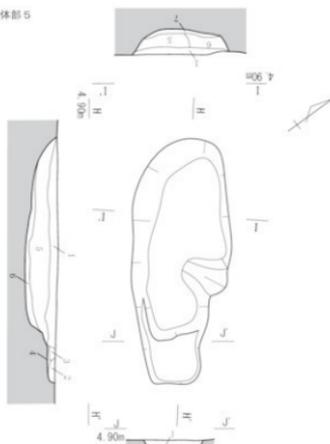
主体部4



1. 513/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる
厚 3cm以下の円縁を再構築
2. 513/1 黒褐色粘質土 ややしまる 礎石まで
V層ブロックを30%再構築
3. 514/1 灰色砂質土 やや暗色 ややしまる
礎石まで 黒褐色土ブロックを10%再構築



主体部5



1. 2. 513/1 黒褐色粘質土 ややしまる 礎石まで 黒化部跡が少し混じる
2. 513/1 黒褐色粘質土 ややしまる 礎石まで V層ブロックを再構築
3. 514/2 灰オリーブ粘質土 ややしまる 礎石まで ブロック状
4. 513/2 オリーブ黒色砂質土 やや暗色 ややしまる 礎石まで
5. 513/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる
厚 5cm以下の円縁を再構築
6. 513/1 オリーブ黒色砂質土 やや暗色 ややしまる 礎石まで
7. 514/1 灰色砂質土 やや暗色 ややしまる 礎石まで

図272 SZc22主体部

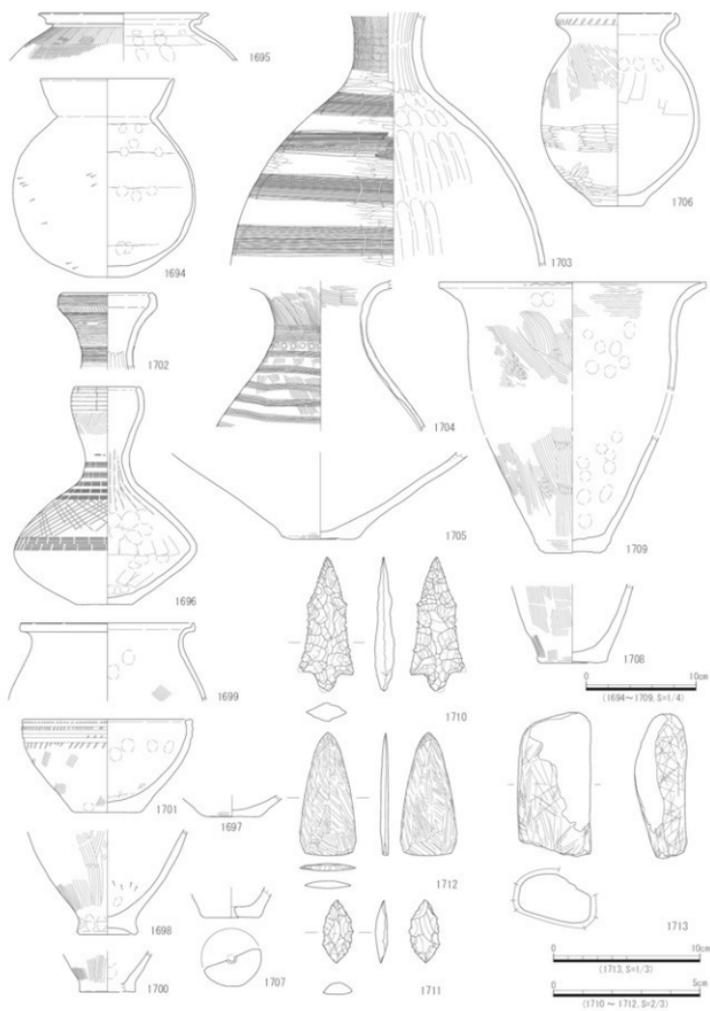


図273 SZc22出土遺物

丘盛土からの出土で、Ⅲ～Ⅳ期の甕の底部と思われるが、底に焼成後径5mmほどの孔を開けている。1708・1709は主体部1から出土した甕である。1708はⅠ期の平底の甕の底部である。1709はⅡ期の甕B類で口縁部が外反して開き、口縁端部に刺突文を施す。口縁部内面に波状文がある。底部は平底である。いずれも時期が古いため混入の可能性がある。1710・1711は打製石織で、1710はチャート製、1711は下呂石製で墳丘部からの出土である。1712は磨製石織で、側縁は直線的である。1713は砥石で、側面と端部平坦面を砥面として使用しており、敲打痕も認められる。

時期 周溝内埋土から出土した供献土器と考えられるものはⅢ～Ⅳ期になり、同一の周溝墓から時期の異なる供献土器が出土したことになる。墳丘盛土からもⅢ～Ⅳ期の土器片が出土したことから、Ⅳ期に入って構築されたと考えられるため、Ⅳ-1期と思われる。

SZc23 (図274)

検出状況 V層上面で検出したが、Ⅳ層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。当初確認した平面形は、サブトレンチの掘削や再検出により変化してしまい、最終的に調査した南北

SZc23

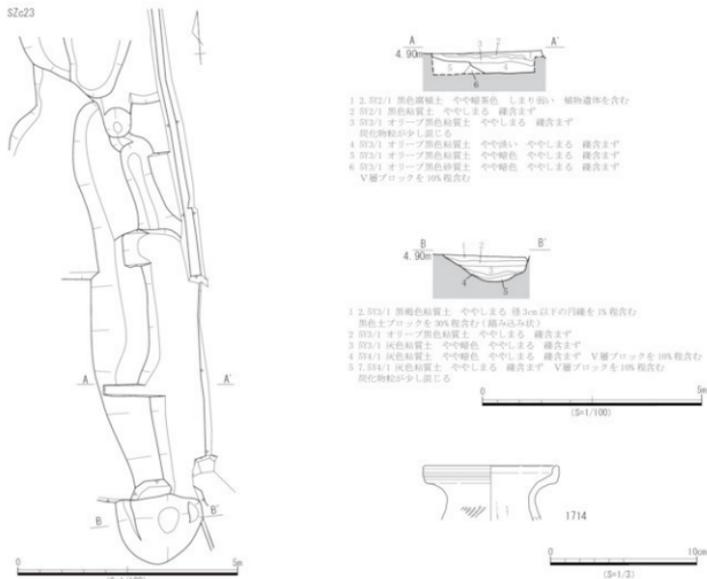


図274 SZc23

方向の溝状遺構となった。西側にはSZe29があり、この東溝を切って直線的な溝を掘削している。これが発掘区外の東側に屈曲し、方形の区画を作り出している可能性が考えられることから、方形周溝墓の溝と考えた。

方台部 方台部は発掘区外となり詳細は不明であるが、溝が南北に直線的であることから、方台部も方形又は長方形になることが考えられる。方台部が発掘区外となるため、墳丘盛土や主体部も確認できなかった。

周溝 西溝を検出したが、方台部側の東部分は発掘区外となるため、全容は不明であるが、検出した部分では、直線的な溝で、中央部が深くなり、西肩部にやや平坦になるテラスを持つ。北端部は他の遺構との重複と発掘区外となっていくため溝の連続性は不明であるが、南端部は溝が収束するため、南東隅部は連続しないで溝が途切れると考えられる。

遺物出土状況 周溝埋土から、土器片が140点散在して出土した。SKc0738から出土した土器と接合するものがあるが、これは当初SZe23として掘削していた部分を、再検出で平面形を変更したためである。

出土遺物 1714はIV-3期の壺A1類で、口縁部外面には回線を3条施す。頸部には刺突文を施す。

時期 図示した土器は周溝埋土下部からの出土であり、遺構の時期はIV-3期と思われる。

SZe24 (図275～図277)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。南溝部分はNRe1の上層の埋土が覆う関係となる。

方台部 検出した範囲は東辺部及び北辺部と南辺部の一部である。北辺部は直線的になるが、東辺部は湾曲しており、東辺部から南辺部にかけても緩やかに湾曲している。このため方台部の形状は一部隅丸の不整形若しくは不整形方形と思われる。墳丘盛土は厚さ約30cm程を確認したが、盛土は下部にオリーブ黒色土が15～20cm、その上に色や土質がV層に類似した土が水平に積まれており、ブロック状の堆積は認められなかった。主体部は盛土を掘り込むものはなかったため、主体部を作った後に盛土をしていると考えられる。主体部は墳丘盛土下部のオリーブ黒色土を除去したV層上面で検出した土坑のうち、形状や堆積状況から可能性がある2基を主体部と考えた。主体部1は細長い溝状で不定形である。浅く、壁面は開く。底面はほぼ平坦であるが、北端部が少し段を持って深くなる。単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性はある。主体部2は不整形円形で浅く、壁面は開く。底面はほぼ平坦である。単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性はある。

周溝 東溝及び北溝と南溝の一部を検出したが、西溝は発掘区外となる。コ字形に方形の区画を作り出しており、隅部は連続する。北溝は浅く、底面が幅広く、壁面は開く。東溝は中央部から南にかけて傾斜し深くなっていき、南溝へとつながる。南溝は、当初NRe1が部分的に深くなったものとして掘削していた部分となる。この辺りはNRe1の岸辺から水流のある流路部分までのテラス状となる平坦面であり、SZe30などの方形周溝墓の溝もこの面を掘り込むことや平坦面で土器棺蓋SZe36を検出したことから、SZe24の南溝もNRe1の岸辺の平坦面を掘り込んだと考えられる。幅は2.5m～3.8mで、最大の深さは0.64mである。埋土はほぼ水平堆積で自然堆積と思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から散在して土器が305点出土したが、北溝からは図示した土器がある程度のもたまりをもって出土した。1719～1726は調査時にNrC1出土遺物として取り上げた南溝出土のもので、1719・1720は下部の砂質土層から、1721～1724は上部の粘質土層から出土した。墳丘盛土からは弥生時代中期を中心に土器片が55点出土した。主体部からは主体部Iで土器片が1点出土したのみで、図示可能なものはなかった。石器類は東溝から叩石が1点、調査時にNrC1出土土器として取り上げた南溝出土のもので、石錐が1点、磨製石斧が1点出土した。

出土遺物 1715～1718はIV期の土器である。1715は壺の胴部片であるが、3本の沈線により弧状の線を描く。1716は蓋の底部片であるが、平底の底部から胴部がすぐに大きく開く。1717は平底の壺で、底部から胴部が大きく開く。1718は甕で、口縁部が外反して開き、口縁端部に刻みを施す。1719はIII～I期の壺で、口縁部を欠くが、上胴部に櫛描文帯と磨消帯を施す。1720はII～III期のものと思われる土製円盤で、二枚貝条痕を羽状に施した土器片の破断面を加工し、円形にしている。1721はV期の壺H1a類で、下胴部に焼成後の穿孔がある。1722はV期の壺K類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、外面に8条の沈線を巡らすことから、北陸系の壺と思われる。1723はV期の甕D1a類で、やや小型である。1724はVI期の甕D1a類で、いわゆるS字状口縁台付甕A類である。1725は石錐で、安山岩製である。

SZc24

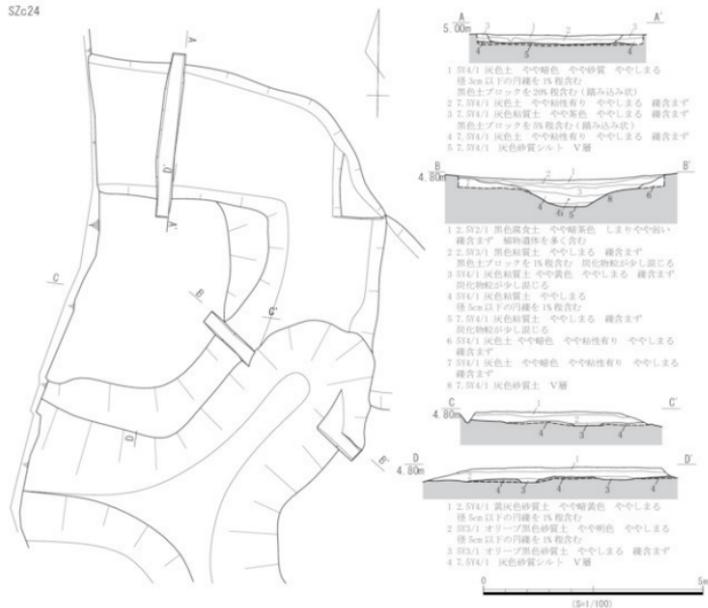


図275 SZc24

SZc24 墳丘下面

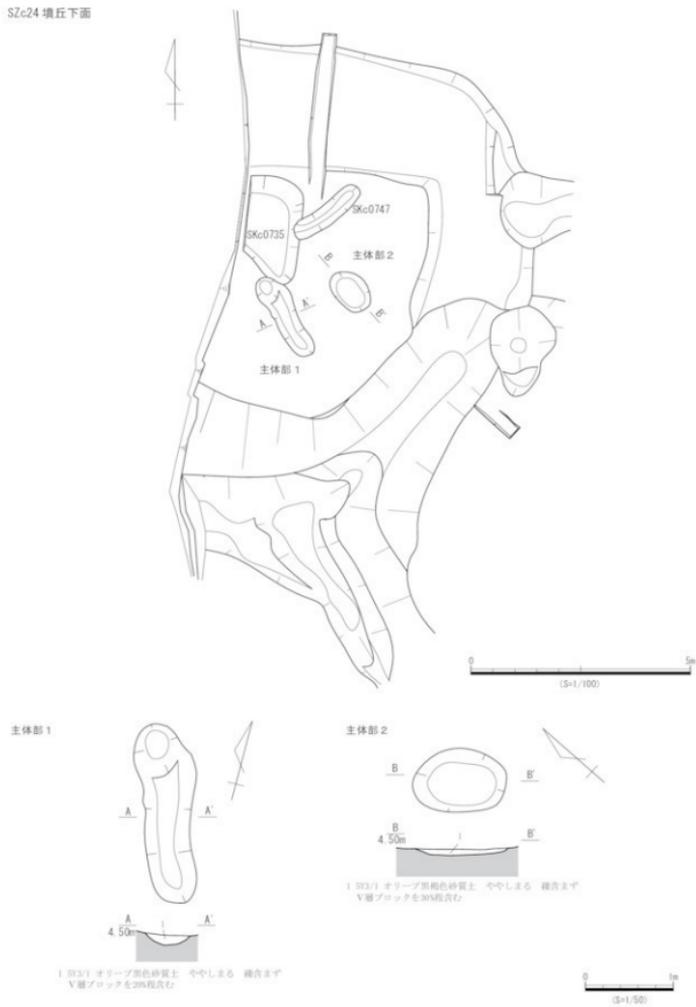


図276 SZc24墳丘下面

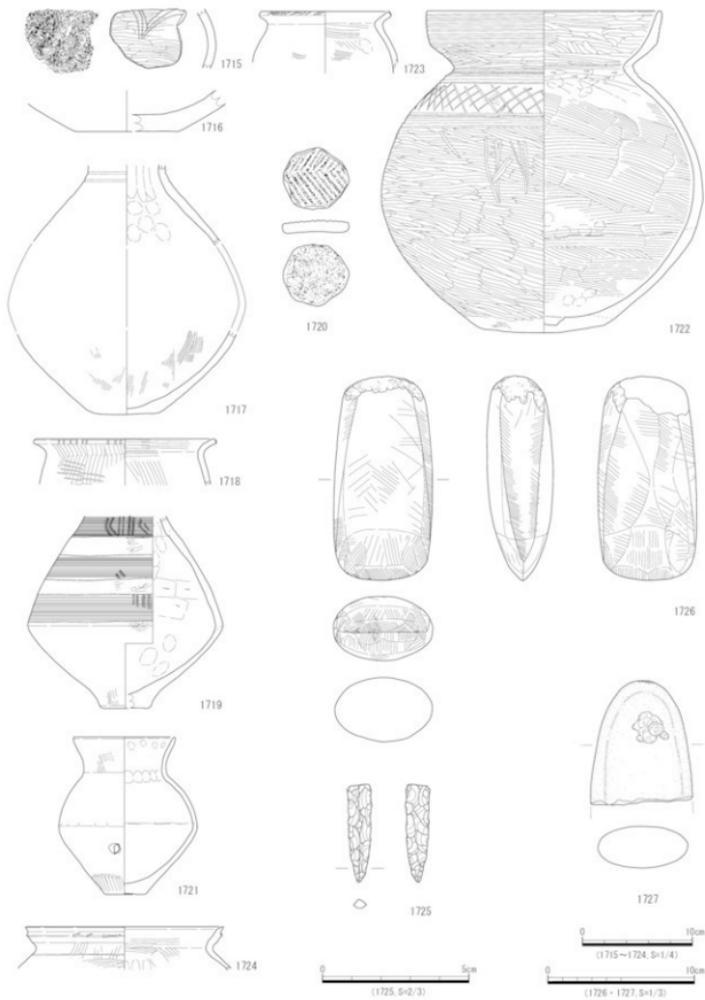


図277 SZc24出土遺物

1726は太型蛤刃石斧の完形品である。1727は叩石で、先端と平坦面に敲打痕が確認できる。

時期 墳丘盛土から出土した土器が弥生時代中期であり、北溝からある程度のもたまりを持ってIV期の土器が出土したことから、遺構の時期はIV期になると思われる。

SZc25 (図278)

検出状況 SZc21の溝の底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。半分以上が発掘区外に延びるため全容は不明であるが、溝状遺構がL字形に屈曲しており、方形に区画している可能性が高いことから、方形周溝墓と考えた。しかし、溝の屈曲が直角よりも小さく、いびつになることや、西溝と南溝の深さが異なることから、2つの土坑をまとめて溝として掘削した可能性もあり、その場合SZc26の主体部になることも考えられる。

方台部 検出した範囲は西辺部と南辺部の一部であるが、わずかに湾曲するもののほぼ直線である。南西隅部は直角よりもやや小さくなるが、方台部の形状は方形又は長方形になると考えられる。墳丘部はSZc21の溝の底面で検出したことから、確認できなかった。主体部も同様であるが、方台部の大半は発掘区外となるため、今回の発掘区内にはなかった可能性もある。

周溝 西溝と南溝の一部を検出したが、それ以外は発掘区外となる。溝の幅は1.3m前後で、西溝は浅く、南溝は深くなり、断面は逆台形になる。壁面は比較的立ち上がる。埋土はほぼ水平堆積で、埋土下部にV層ブロックを含むことから、壁面及び墳丘盛土の崩落の可能性がある。ただし前述のようにSZc26の主体部であった場合には、南溝の土層断面が積痕跡を示している可能性も考えられる。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 SZc21の溝の底面で検出したことから、それよりも古い時期の遺構と思われるが、周辺の方形周溝墓の時期から考えて、弥生時代中期と思われる。

SZc26 (図278)

検出状況 SZc21の溝の底面及びSZc28の墳丘盛土下面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。約半分が発掘区外に延びるため全容は不明であるが、溝状遺構がコ字形に屈曲しており、方形に区画している可能性が高いことから、方形周溝墓と考えた。

方台部 検出した範囲は西辺部と南辺部、北辺部の一部であるが、わずかに湾曲するもののほぼ直線的である。このため西辺部と北辺部の関係は直角よりもやや小さくなるが、方台部の形状は方形又は長方形になると考えられる。墳丘部はSZc21やSZc28によって削平されているため確認できなかった。主体部は墳丘が残存していない状態のため位置関係による推定であるが、方台部の南東部で検出した土坑を主体部1と考えた。主体部1は長楕円形で浅く、壁面は開く。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土にV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。

周溝 南溝と西溝及び北溝の一部を検出したが、それ以外は発掘区外となる。溝の幅は0.7m～1.2m、深さは0.42mで、やや細く浅い溝である。南西隅部は浅くなり、南東隅部は連続しないで途切れる。断面は逆台形となり、壁面は開く。埋土は5層に分層したが、上層からV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。このことから、SZc21やSZc28を構築する時にはSZc26の周溝は埋没しきっていない状態で、人為的にSZc26の墳丘を削り、周溝を埋めていることが考えられる。

遺物出土状況 南溝から土器の小片が8点出土したのみである。主体部1からは遺物が出土しなかった。

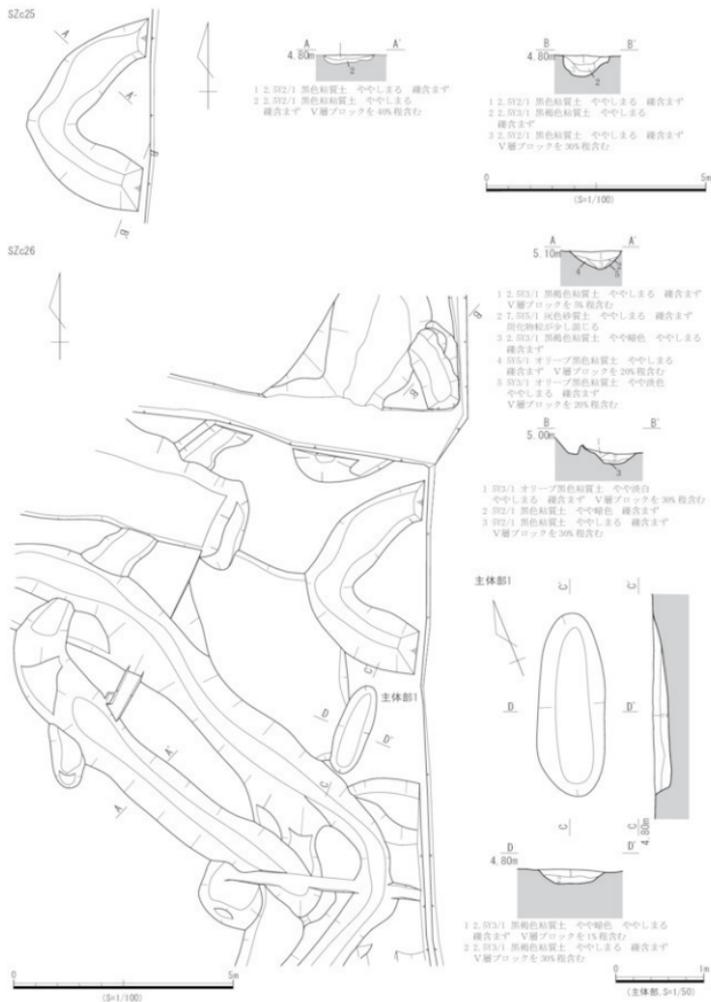


図278 SZc25・SZc26

出土遺物 小片ばかりで、図示可能なものはなかった。

時期 時期が特定できる遺物の出土はないが、Szc21の溝の底面及びSzc28の墳丘盛土下面で検出していることから、これらよりも古く、弥生時代中期のⅡ期になると思われる。

Szc27 (図279～図281)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。南西溝部分はNRe1の上層の埋土が覆う関係となる。

方台部 方台部の各辺はやや湾曲し、隅部も丸くなるため、方台部の形状は隅丸の不整形となる。墳丘盛土は厚さ約30cm程を確認したが、南側に厚く盛土をして平坦面を作り出してから、中央に黒褐色土を最大20cmほど盛土し、さらに全体にやや黄色の黒褐色土を盛土して造築している。主体部は墳丘盛土を除去したV層上面で土坑1基を検出したが、形状や堆積状況から、これが主体部になると思われる。主体部上部の黒褐色土の盛土が主体部埋土に落ち込むような堆積になることから、主体部を作った後に盛土をしていると考えられる。主体部1は、細長い楕円形でやや浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北東-南西方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。埋土は12層に分層したが、棺痕跡状の堆積が認められる。また、裏込めにあたる埋土にはV層ブロックを含むことから人為堆積と思われる。

周溝 全周して不整形の区画を作り出しており、隅部は連続する。溝は南にある自然流路NRe1に向かって順次深くなっている。北東溝は浅く壁面は開く。北西溝はSzc24の東溝と区分することができなかったため、共有していると考えられる。南東溝はSzc30の周溝がある程度埋没した段階で掘削し直しているように思われる。南西溝は調査時にはNRe1が部分的に深くなったものとして掘削していた部分となる。この辺りはNRe1の岸辺から水流のある流路部分までのテラス状となる平坦面で、Szc30などの方形周溝墓の溝もこの面を掘り込むことや平坦面で土器棺Szc36が検出されたことから、Szc27の南西溝もNRe1の岸辺の平坦面を掘り込んでいるものと考えられる。埋土はほぼ水平堆積で堆積状況ははっきりしないが自然堆積であると思われる。

遺物出土状況 溝内埋土から583点の土器が出土したが、北溝からはやや大きめの土器片が出土した。また、1728・1731・1732は調査時にNRe1出土土器として取り上げた南西溝出土のもので、溝上層からまとまって出土した。これらは時期が隔たることから、溝が埋没する最後の段階で入り込んだものと思われる。石器類は打製石鏃が2点、磨製石斧が1点出土した。墳丘盛土からはⅢ～Ⅳ期の土器片が64点出土した。主体部1からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 1728はV期の小型の壺A1b類で、口縁端部及び内面に羽状刺突を施す。1729はⅣ期の壺A1類で、口縁部外面には凹線文が1条巡る。1730はⅣ期の壺F類、いわゆる無頸壺で、穿孔を持つ。1731はⅢ期の壺で、口縁部と底部を欠く。1732はⅢ-3期の口縁部を欠く細頸壺で、凹線文出現期と重なる時期のものであると思われる。1733は墳丘盛土から出土したⅢ～Ⅳ期の甕で、口縁部が外反して開き、口縁部がやや肥厚する。1734はV期の高坏I3類で、ワイングラス形の高坏であるが、脚部は短くハ字状に開く。1735・1736は打製石鏃で、共に平基である。1737は扁平片刃石斧である。

時期 墳丘盛土から出土した土器片がⅢ～Ⅳ期であることや、図示した1729・1730が埋土下層からの

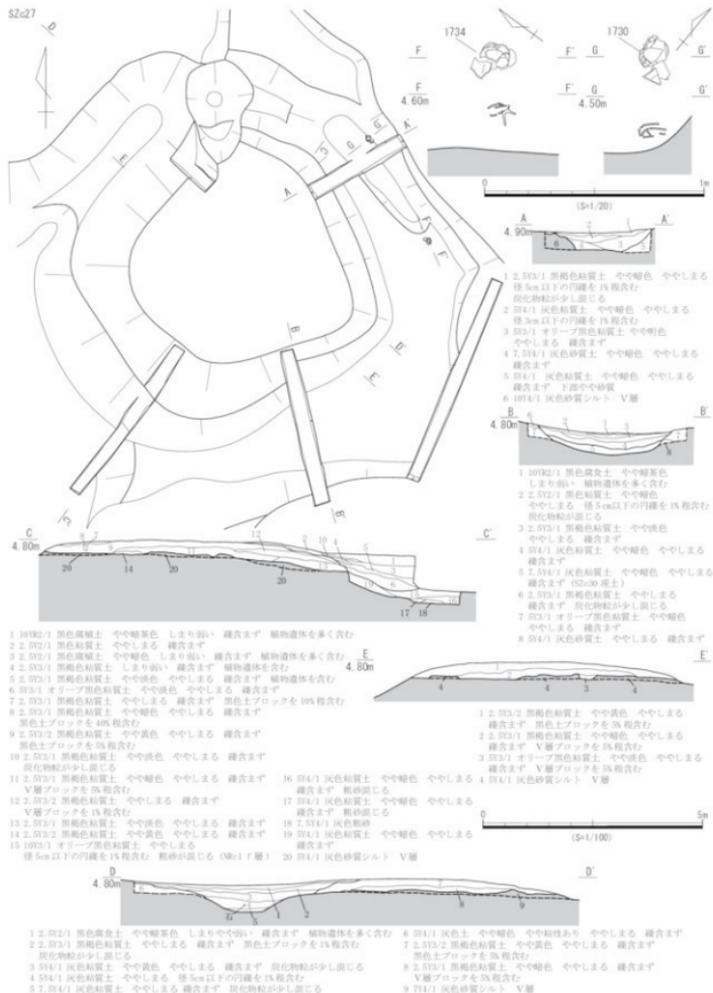


図279 Sz27

SZc27 墳丘下面

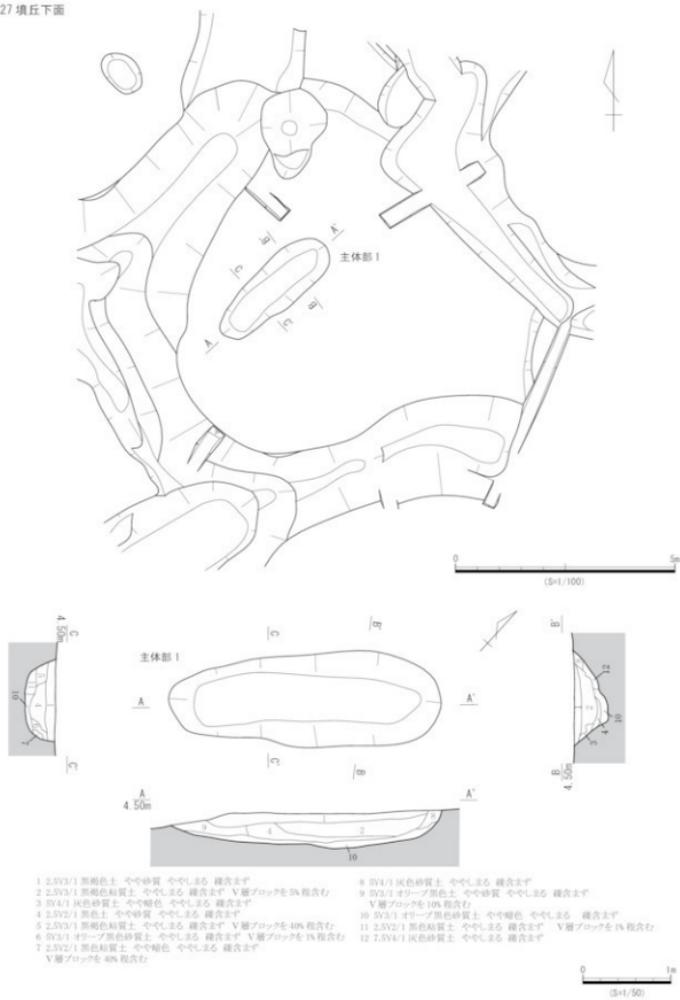


図280 SZc27墳丘下面

出土であることから、この遺構の時期はIV期になると思われる。

SZc28 (図282～図287)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。北東溝から北西溝にかけてはSZc21の南溝の底面から検出したが、出土遺物からはSZc21より新しくなることが考えられるため、切り合い関係を誤認した可能性が高い。

方台部 方台部の各辺は湾曲し、隅部も丸くなるため、方台部の形状は不整長楕円形となる。墳丘盛土は厚さ約30cm程を確認した。盛土は大きくは水平に積み上げられているようであるが、まず黒色土で中央部を10cm前後薄く積み、南から東にそして北から西の順に盛り上げられ、最後に再び中央部に積み上げられて、墳丘が造られているようである。盛土を除去して主体部を検出していることから、主体部を作った後、その上に盛土をしていき、墳丘部を構築したと考えられる。なお、調査時は盛土を掘り込むような堆積は確認できなかったが、主体部2の埋土にVI期の土器が混入することから、後世の掘り込みがあった可能性がある。主体部は墳丘盛土を除去したV層上面で検出した土坑のうち、形状や堆積状況から5基を主体部と考えた。平面形はいずれも比較的明瞭であった。主体部1は、不

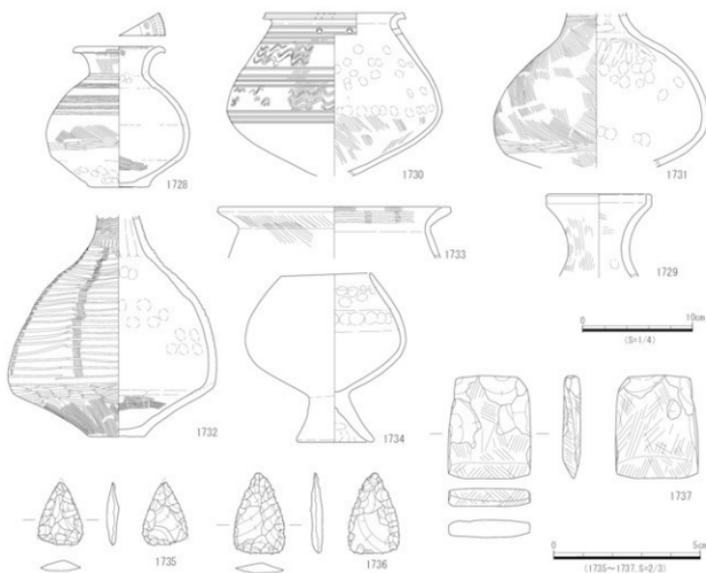


図281 SZc27出土遺物

SZc28

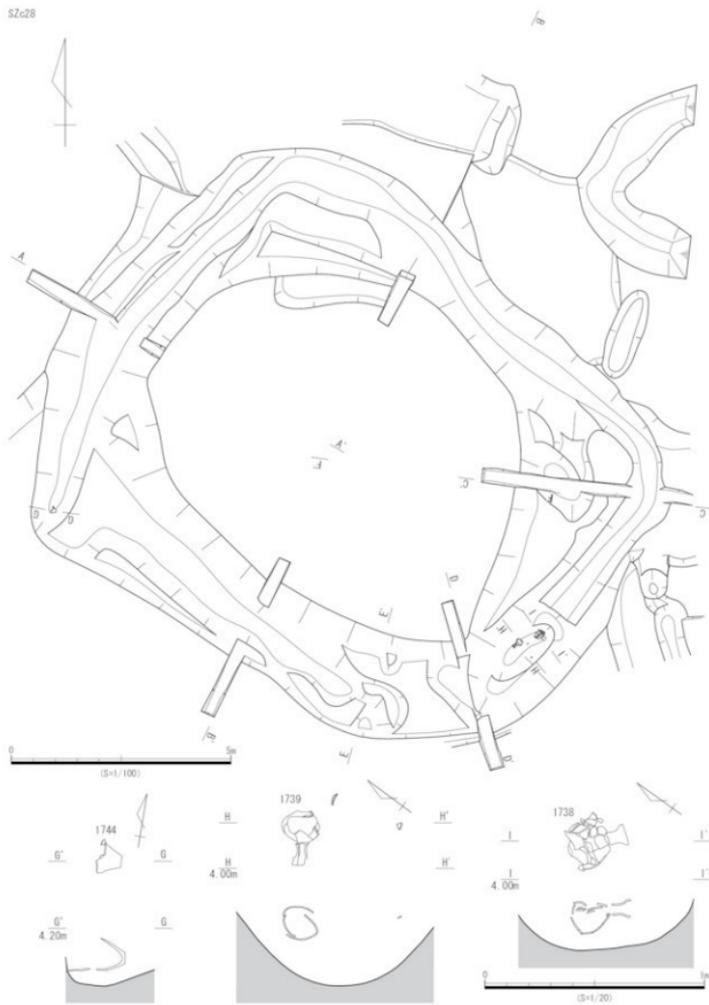
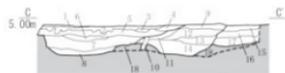


図282 SZc28 (1)

整長槽形で浅く、壁面はやや立ち上がる。長軸が南北方向となり、方形周溝墓の軸方向とは異なる。底面は概ね平坦であるが、南部が段を持ってやや深くなる。埋土は8層に分層したが、裏込め状の堆積がありV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。埋土3層が棺痕跡状である。主体部2は、不整長方形でやや浅く、壁面はやや立ち上がる。長軸が北西-南東方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面は南部が段を持ってやや深くなる。埋土は9層に分層したが、裏込め状の堆積がありV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。埋土2~4層が棺痕跡状の堆積と思われる。なお、SK0753との重複部分で平面形を見誤っており、一旦主体部2を完掘した後、SK0753を掘削する際に主体部2が西に伸びていることが判明したため、再度掘削した。主体部3は、不整長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北西-南東方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面は概ね平坦で、西端部が段を持って少し深くなるが、この部分を木棺の小口板の痕跡と見るかは難しい。埋土は7層に分層したが、裏込め状の堆積がありV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。規模が小さく通常の成人が入るような墓坑ではなく小児用かとも思われるが、それでも小さい。主体部4は、不整長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北西-南東方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面は概ね平坦で、両端部が細長く凹むが、埋土に明確な棺痕跡状の堆積は見えなかったことから、この両端の凹みを木棺の小口板の痕跡と見るかは難しい。埋土は9層に分層したが、V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。主体部5は、不整長方形でやや浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北東-南西方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面はほぼ平坦で、両端がやや浅くなる。埋土は13層に分層したが、埋土3層を棺痕跡と見なすことができるかも



- 1 2.533/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ 観分注書
- 2 2.532/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ、植物遺体を含む
- 3 2.533/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 4 2.533/2 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 5 2.533/1 黒褐色粘質土、ややしなる 雑草のみ 黒色土ブロックを1%含む
- 6 333/1 オリーブ黒色粘質土、ややしなる 雑草のみ V層ブロックを1%含む
- 7 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや茶色、ややしなる 雑草のみ
- 8 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 9 埋土ブロックを30%含む
- 10 333/1 オリーブ黒色粘質土、ややしなる 雑草のみ
- 11 2.533/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ V層ブロックを1%含む



- 1 2.533/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 2 333/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 3 V層ブロックを1%含む
- 4 333/1 オリーブ黒色粘質土、ややしなる 雑草のみ
- 5 333/1 黒色粘質土、ややしなる 雑草のみ
- 6 333/1 オリーブ黒色粘質土、ややしなる 雑草のみ
- 7 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 8 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 9 333/2 オリーブ黒色土、やや茶色あり、ややしなる 雑草のみ
- 10 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 11 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 12 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 13 V層ブロックを30%含む
- 13.7.334/1 灰白色土、やや暗色あり、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 14.333/1 灰白色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ

- 11 333/1 オリーブ黒色粘質土、やや茶色、ややしなる 雑草のみ
- 12 2.532/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 13 2.533/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 14 V層ブロックを1%含む
- 15 2.532/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 径5cm以下の円礫を1%含む
- 15.2.533/1 黒褐色粘質土、ややしなる、径5cm以下の円礫を1%含む
- 16 V層ブロックを20%
- 16.332/1 黒色粘質土、やや茶色、ややしなる 雑草のみ
- 17 V層ブロックを30%含む
- 17.2.532/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしなる 径5cm以下の円礫を1%含む
- 18 2.534/1 灰色砂質シルト、V層



- 1 2.533/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしなる 雑草のみ
- 2 V層ブロックを20%含む
- 3 2.533/1 黒色粘質土、ややしなる 径3cm以下の円礫を1%含む
- 4 V層ブロック、黒褐色土ブロックを30%含む
- 5 埋土物が認められる
- 6 333/1 オリーブ黒色粘質土、ややしなる 径20cm以下の円礫を1%含む
- 7 V層ブロックを30%含む
- 8 2.534/1 灰色粘質土、ややしなる 雑草のみ
- 9 黒褐色土ブロックを20%含む



図284 Szc28 (3)

しれない。埋土にV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。

周溝 不整形長方形に溝を巡らせて区画を作り出しており、隅部は連続する。溝は隅部で浅くなる傾向があるが、深さは最大0.85mとやや深く、壁面は開く。北部と東部の隅の内側はやや広いテラス状の平坦面ができる。南東溝の南部には土坑状に深くなる部分があるが、周溝内埋葬であるかは不明である。埋土は最大で7層に分層したが、ほぼ水平堆積である。埋土下部にはV層ブロックが含まれることから、壁面若しくは墳丘盛土が崩落した可能性がある。埋土上部は自然堆積であると思われる。

遺物出土状況 溝内埋土から644点の土器が出土したが、南東溝の南部には土坑状に深くなる部分からは供献土器と思われる1738・1739の2個体の壺が出土した。また、北隅部と西隅部からは1742・

SZc28 墳丘下面

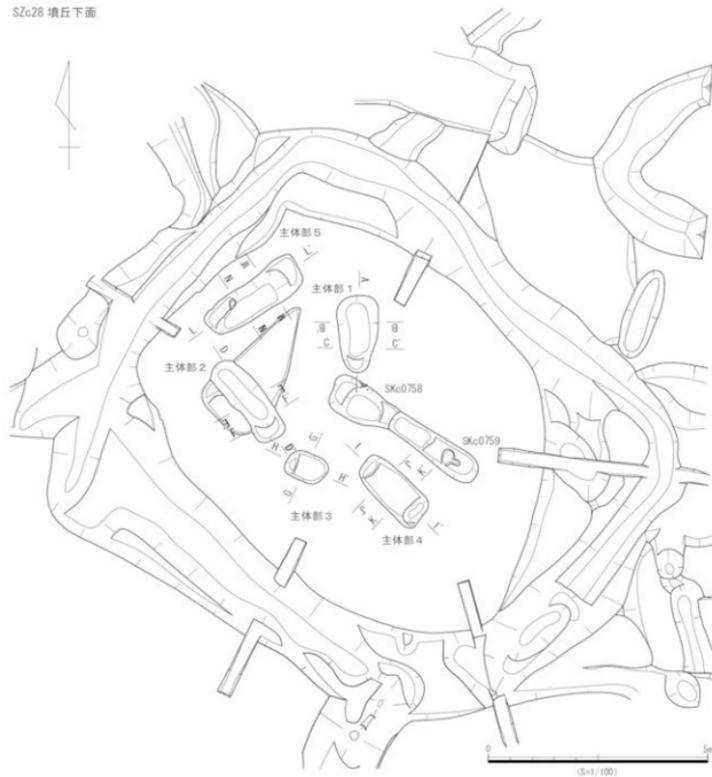


図285 SZc28墳丘下面

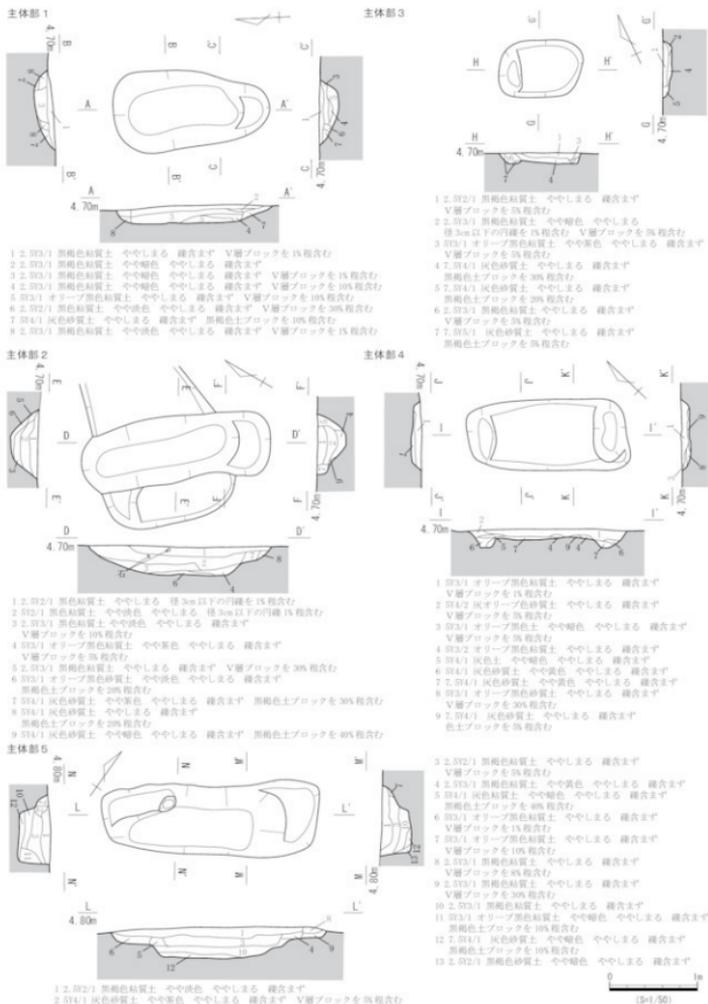


図286 Szc28主体部

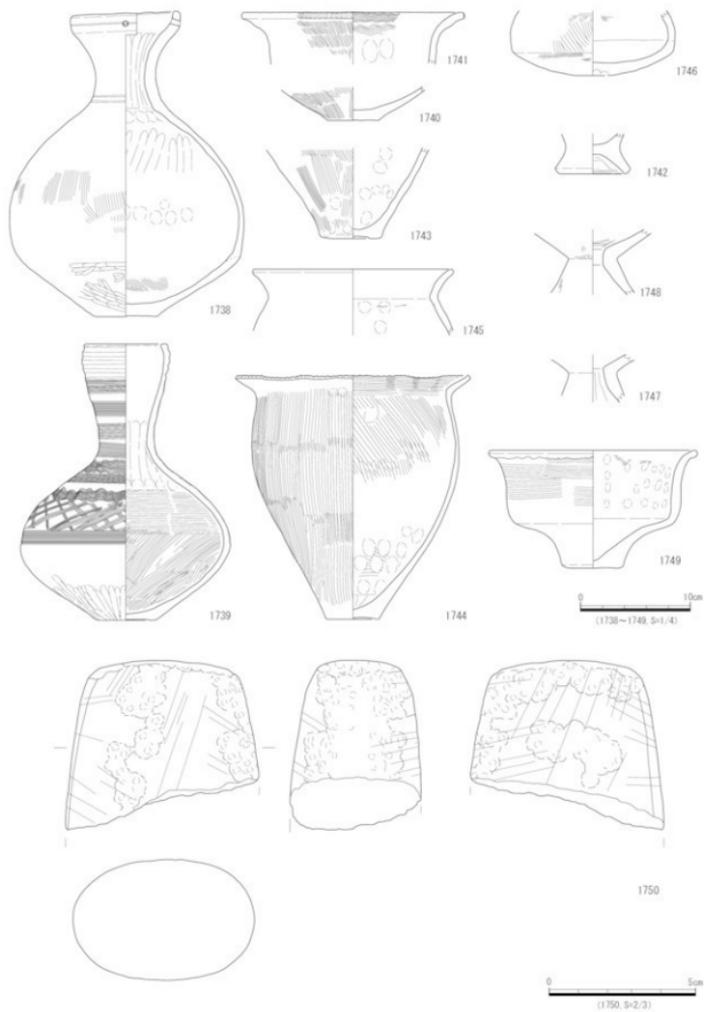


图287 SZc28出土遺物

1744の甕が出土した。石器類は打製石鏃が1点、磨製石斧が1点出土した。墳丘盛土からは土器片が120点出土したが、図示可能なものはなかった。主体部からは、主体部2から甕、鉢、器台の破片が出土したが、1745～1748は時期が新しくなり、1749は時期が古くなることから、混入の可能性が考えられる。それ以外は主体部1・3・5から土器の小片が少量出土したのみである。

出土遺物 1738～1744は周溝埋土からの出土である。1738はIV-1期の壺A1類で、口縁部外面に凹線文を1条施し、穿孔が1つある。1739はIV-1期の壺A2類で、口縁部外面に凹線文を4条、頸部には横線文や波状文、上胴部には格子目文などを施す。平底で胴部は中位で強く張る。1740はIV期の壺の底部である。1741はIV期の甕C類で、口縁部の破片である。1742はIV期の甕の台部で、ハ字状に開く。1743・1744はIII期の甕である。1743は凹み底で直線的に開く。1744は口縁部が屈曲して開く平底の甕で、口縁端部には強く刻みが施される。1745～1749は主体部2からの出土である。1745はVI期の甕B4類で、口縁部が外反して開く。1746はVI期の鉢の底部から胴部である。1747・1748はVI期の器台の基部である。1749はII期の鉢で、やや突出した平底から、胴部が大きく開いた後、強く湾曲して直立し、口縁部が外反する。口縁端部は外側に折り曲げられ、上胴部に轡描文を施す。1750は周溝埋土出土の太型蛤刃石斧であるが、先端部は欠損している。

時期 図示した1738・1739が埋土下層からの出土で供献土器と考えられることから、この遺構の時期はIV-1期になると思われる。

SzC29 (図288～図291)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握したが、南溝部ではSbc129やSzC34との間で平面形が非常に不明瞭であり、平面形を正確に捉えられなかった可能性がある。北東の一部のみ発掘区外となる。

方台部 方台部の各辺はやや湾曲し、隅部はやや丸くなるが直角に近い角度になっており、方台部の形状は不整長方形となる。方台部の北東、北西、南西の隅部はなだらかに低くなっている。墳丘盛土は厚さ約30cm程を確認した。盛土は大きくは水平に積み上げられているようである。まず、黒色～黒褐色土を何回かに分け盛土し、その後色や土質がV層によく類似した土を盛土している。盛土を掘り込むような堆積はなく、盛土を除去して主体部を検出していることから、主体部を作った後、その上に盛土をして、墳丘部を構築したと考えられる。主体部は墳丘盛土を除去したV層上面で検出した土坑のうち、形状や埋土堆積状況から1基を主体部と考えた。主体部1は、不整長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北西～南東方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面は概ね平坦であるが、両端部がやや浅く中央が細長く凹む。埋土は13層に分層したが、明確な痕跡の堆積は見えなかったものの、埋土にV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。

周溝 不整長方形に溝を巡らせて区画を作り出しており、隅部は連続するが、北東と北西の隅部は穴状にやや深くなる。深さは最大0.40mとやや浅く、壁面は開く。北溝と東溝は直線的であるが、西溝はやや湾曲する。南溝は中央部が外側に張り出す形状となり、三角形に幅広となる。埋土は最大で7層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土下部にはV層ブロックが含まれることから、壁面若しくは墳丘盛土が崩落した可能性がある。埋土上部は自然堆積であると思われる。SzC23やSzC28との重複部分

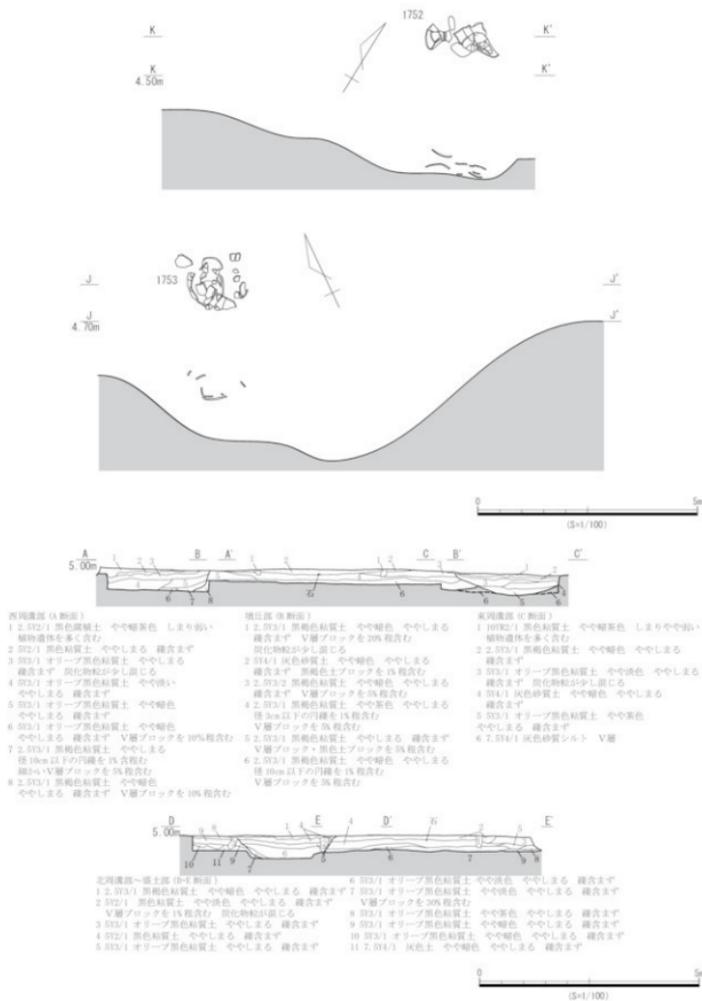


図289 SZc29 (2)

SZc29 墳丘下面

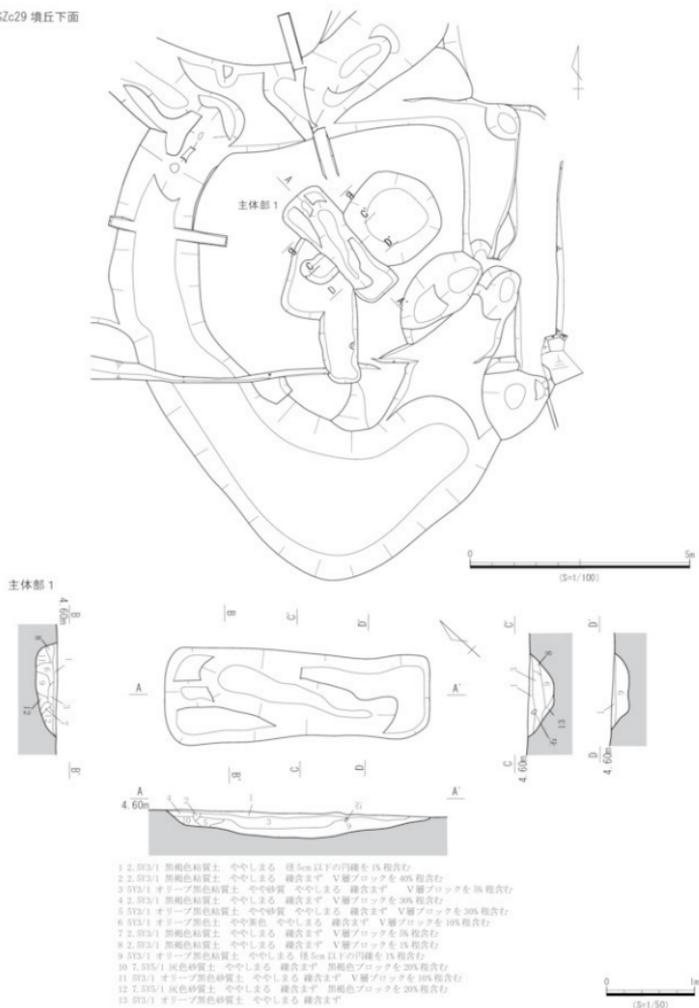


図290 SZc29墳丘下面・主体部1

については埋土を十分区別できていない所があり、掘りすぎ等により形状が不整形になっている。

遺物出土状況 溝内埋土から520点の土器が散在して出土したが、北西隅及び北東隅の穴状にやや深くなった所から1752は底面近くに横位で、1753は底面からやや浮いた状態で出土した。また東溝中央部埋土上部から、土器片のまとまった出土があった。石器類は打製石鏃が3点出土した。墳丘盛土からはⅢ～Ⅳ期の土器片が487点出土したが、図示した1755と1756がややまとまって出土した。主体部1からは、小片が1点出土したのみで、図示はできなかった。

出土遺物 1751～1754は溝内埋土からの出土である。1751はⅣ-1期の壺C類で、口縁端部に波状文、口縁部内面に羽状刺突文を施す。1752はⅣ-1期の細頸壺で、頸部に沈線を4条施す。上胴部にも浅い沈線を数条巡らす。1753はⅣ期の細頸壺だと思われるが、口縁部を欠く。器面が摩滅し、文様調整とも不明である。1754はⅠ期末頃の壺で、工字文を施す。1755と1756は墳丘盛土からの出土したⅣ期の甕C類で、1755は口縁部の破片、1756は平底で小型のものである。石器類は溝内埋土から出土した。1757～1759は打製石鏃である。1757はチャート製で先端を欠く。1758は下呂石製の有茎石鏃で、完形である。1759はチャート製である。

時期 図示した1752・1753が周溝埋土下層からの出土であり、方形周溝墓の構築時期に近いと考えられることから、この遺構の時期はⅣ-1期になるとと思われる。

SzC30 (図292～図295)

検出状況 V層上面で検出したが、Ⅳ層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。南西溝部分はNRe1の上層の埋土が覆う関係となる。

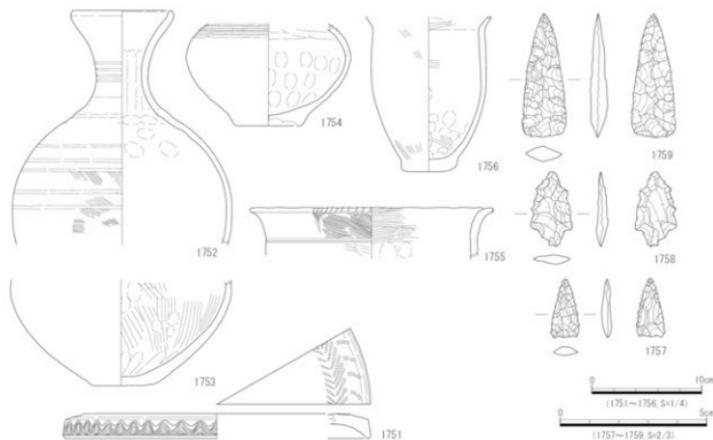


図291 SzC29出土遺物

方台部 方台部の北、西、南辺部はやや湾曲し、東辺部は屈曲する。隅部はやや丸くなるが直角に近い角度になっており、方台部の形状は不整長方形となる。墳丘盛土は北で厚さ約40cm、南で厚さ60cm以上の盛土を確認した。西及び南側のNRc1に面した部分は、地形がNRc1に向かって傾斜していくため、オリーブ黒色～黒褐色土を何回かに分けて盛土し、水平面を作り出してから、中央に色や土質がV層によく類似した土を盛土するような順序であった。西及び南側裾部はNRc1の岸边にあたる平坦面に続くため比高差が大きく、墳丘面の傾斜が緩くなっている。主体部は盛土を掘り込むものはなかったため、主体部を作った後に盛土をしたと考えられる。主体部は墳丘盛土を除去したV層上面で検出した土坑のうち、形状や埋土堆積状況などから2基を主体部と考えた。いずれも平面形は比較的明瞭であった。主体部1は、細長い長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北北西-南南東方向となり、

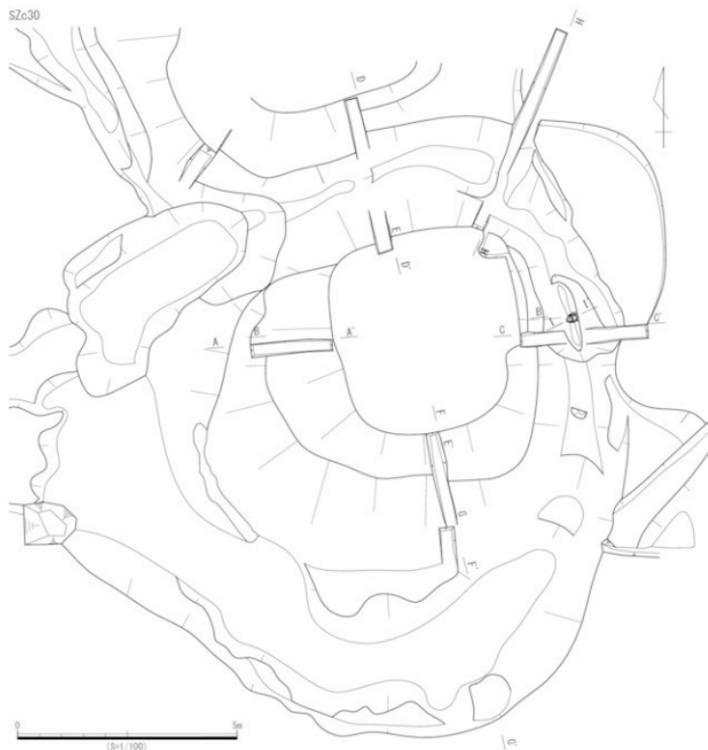


図292 SZc30 (1)

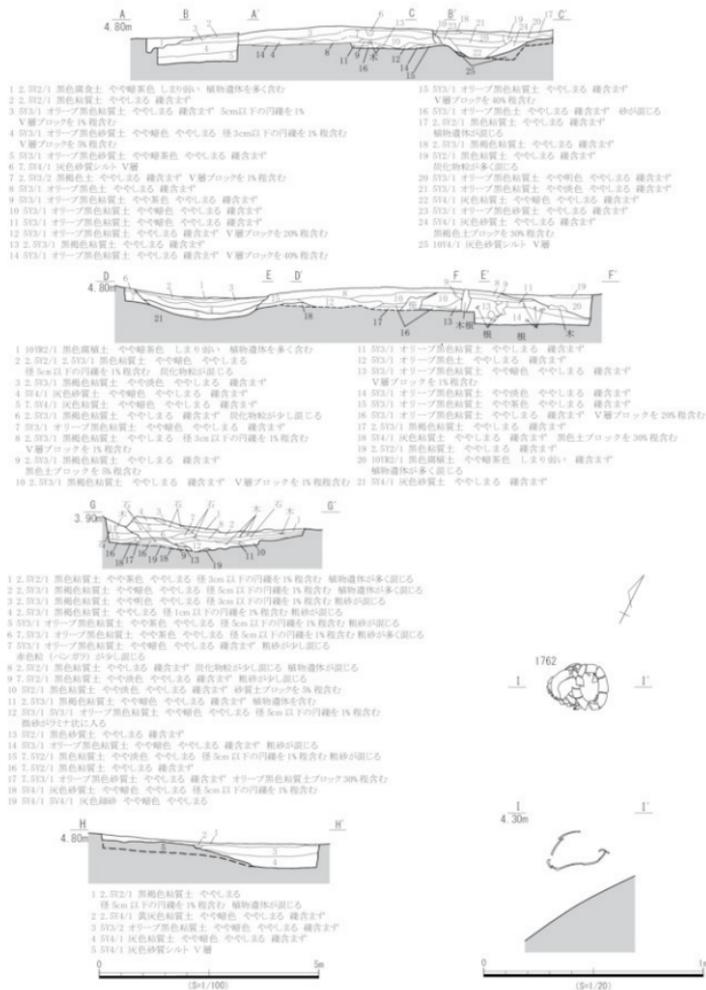


図293 Szc30 (2)

方形周溝墓の軸方向に近い。底面はほぼ平坦である。埋土は7層に分層したが、棺痕跡状の堆積が認められる。また裏込めにあたる埋土には、黒褐色土ブロックを含むことから、人為堆積と思われる。主体部2は、細長い長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北北西-南南東方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積である。埋土1層にV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。

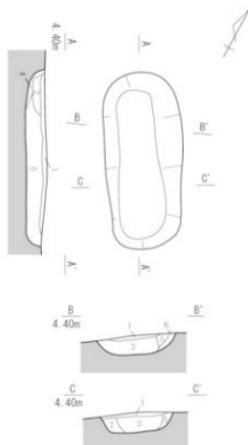
周溝 不整形方形に溝を巡らせて区画を作り出しており、隅部は連続する。溝は自然流路NRe1に向かって順次深くなるが、北溝は浅く壁面は開く。この北溝はSZe27の南東溝とほぼ同じ位置にあり、SZe30の北溝が埋没する過程で再度SZe27として掘削されている。東溝はやや深く掘削され、南へ向かって徐々に深くなり、NRe1にさしかかるところで西へ屈曲し南溝となる。南溝は外縁が大きく湾曲し西溝

SZe30墳丘下面



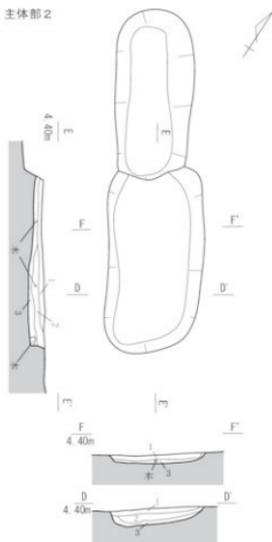
図293 SZe30墳丘下面

主体部1



- 1 2. 灰土 黒色粘質土 ややしまる 雑草まで
- 2 2/3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草まで V層ブロックを5%程度含む
- 3 2/3/1 オリーブ黒色粘質土 やや茶色 ややしまる 雑草まで
- 4 2/3/1 オリーブ黒色土 やや粘性あり やや褐色 ややしまる 雑草まで
- 5 2/3/1 オリーブ黒色土 やや砂質 やや褐色 ややしまる 雑草まで
- 6 2/4/1 灰色砂質土 ややしまる 雑草まで 黒褐色土ブロックを1%程度含む
- 7 2/3/1 オリーブ黒色土 やや褐色 やや砂質 ややしまる 雑草まで

主体部2



- 1 2. 灰土 黒褐色砂質土 ややしまる 径10cm以下の円礫を1%程度含む
- 2 2/3/1 オリーブ黒色粘質土 やや緑色 ややしまる 雑草まで
- 3 2/3/1 オリーブ黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 雑草まで

0 1m
($\times 1/50$)

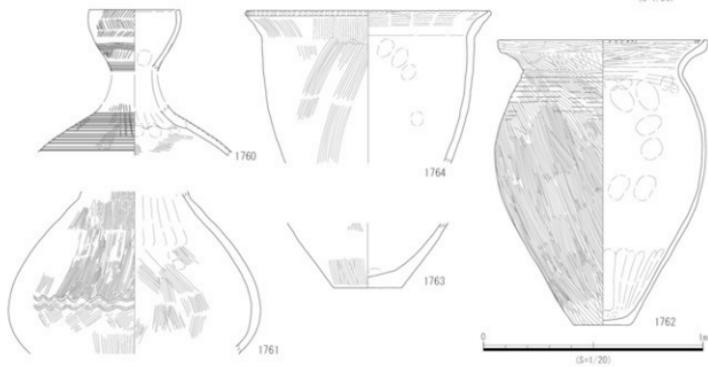


図295 SZc30主体部・出土遺物

へ続くが、西溝も外縁が湾曲している。これは基盤となるNRc1の岸辺の平坦面が砂質土であるため、壁面が崩落したものと思われる。なお、西溝は調査時にNRc1が部分的に深くなったものとして掘削した部分となるが、この辺りはNRc1の岸辺から水流のある流路部分までのテラス状となる平坦面部分で、SZc27などの方形周溝墓の溝もこの面を掘り込むことや平坦面で土器棺SZc36が検出されたことから、SZc30の西溝もNRc1の岸辺の平坦部を掘り込んでいるものと考えられる。埋土は南溝で最大19層に分層したが、どの溝においてもほぼ水平堆積で、埋土下部にはV層ブロックが含まれることから、壁面若しくは墳丘盛土が崩落したものと思われる。埋土上部は自然堆積であると思われる。

遺物出土状況 溝内埋土から367点の土器が散在して出土したが、東溝中央の穴状にやや深くなった埋土中位から甕1762が横位で出土した。1764は調査時にNRc1出土土器として取り上げた西溝出土のものである。土器以外では、南溝で木製品の加工材が1点出土した。墳丘盛土からは土器片が52点出土したが、図示可能なものはなかった。主体部からは、主体部1で土器片が3点、主体部2で土器片が1点、いずれも小片が出土したのみで、図示できるものはなかった。

出土遺物 いずれも溝内埋土からの出土である。1760はIV期の壺A2類で、口縁部と胴部は接合していないが、胎土等から同一個体と判断した。口縁部外面には羽状刺突文と横線文を施す。1761はIV期の壺の胴部片で、ほぼ中位で強く張り、波状文を施す。1762はIV-1期と思われる甕E類で、口縁端部の4箇所に刻み列を施す。胴部内面には帯状のお焦げが付着している。また、底部内面もお焦げが付着する。1763はIV期の甕で、平底の底部片である。1764はIII期の甕で、口縁部の緩やかに外反し、端部に刻みを施す。

時期 図示した1762がほぼ完形で供献土器と考えられることや、SZc27よりも切り合い関係で古くなることから、この遺構の時期はIV-1期になるとと思われる。

SZc31 (図296～図298)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。外縁部はSZc22・SZc27・SZc28に削平されており、一部埋土が残存するだけの部分があった。

方台部 方台部の南西辺部は直線的であるが、南東辺部と北東辺部は湾曲し、北西辺部は屈曲する部分があり、方台部の形状はややいびつな不整形方形となる。墳丘盛土は厚さ約30cmの盛土を確認した。盛土構築にあたっては、主にV層ブロックが混じるオリープ黒色～黒褐色土を何回かに分けて盛土しているようで、周囲に土手状に盛土した後、中央部を平坦になるように積み上げ、再度全体を盛土しているように見える。主体部は盛土を掘り込むものはなかったため、主体部を作った後に盛土をしていると考えられる。主体部は墳丘盛土を除去したV層上面で検出した土坑2基を、形状や埋土堆積状況などから主体部と考えた。いずれも平面形は比較的明瞭であった。主体部1は、細長い長方形で浅く、壁面はやや開く。長軸が北北西～南南東方向となり、方形周溝墓の軸方向と異なる。底面はほぼ平坦である。埋土は単層で、V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高い。主体部2は、ほぼ長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸がほぼ東西方向となり、方形周溝墓の軸方向と異なる。底面はほぼ平坦であるが、南側壁面に段がある。埋土は5層に分層したが、棺痕跡状の堆積が認められ、埋土にV層ブロックを含むことから人為堆積と思われる。

SZc31

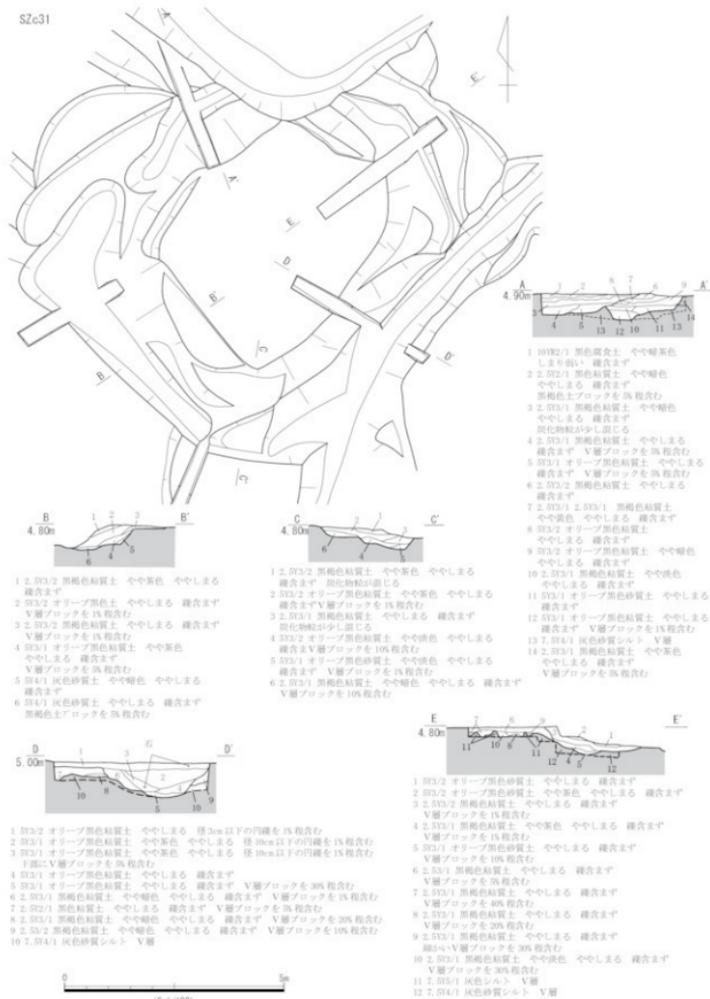
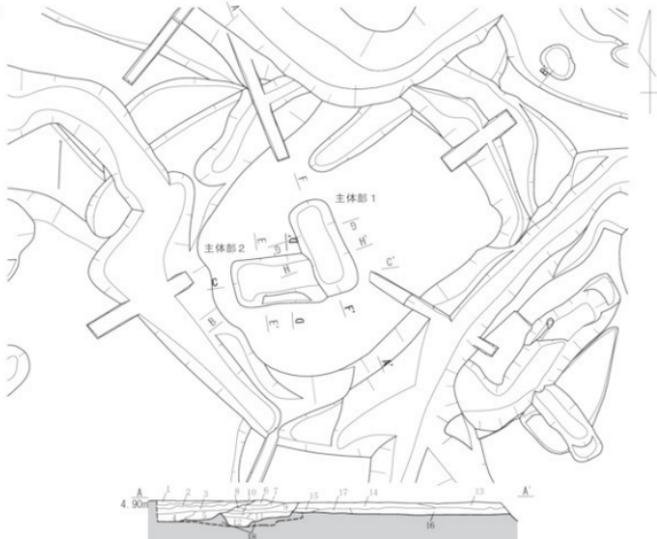
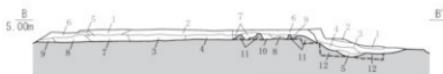


図296 SZc31 (1)

SZc31



- | | |
|---|---|
| 1 10層2/1 黒色腐植土、やや暗茶色、しまり強い、雑草ます | 13 2.033/1 黒褐色粘質土、ややしまる |
| 2 2.032/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます、黒褐色土ブロックを1%含む | 14 2.032/1 黒褐色粘質土、ややしまる |
| 3 2.033/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます | 15 2.032/2 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます |
| 4 2.033/1 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを1%含む | 16 2.032/1 黒褐色粘質土、やや黄褐色、ややしまる、雑草ます |
| 5 2.032/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを5%含む | 17 033/1 オリーブ黒色粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます |
| 6 2.032/2 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます | 18 2.032/1 黒褐色粘質土、やや黄褐色、ややしまる、雑草ます |
| 7 2.032/1 黒褐色粘質土、やや黄褐色、ややしまる、雑草ます | 19 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます |
| 8 032/2 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑草ます | 20 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます |
| 9 032/2 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます | 21 033/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑草ます |
| 10 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます | 22 033/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを1%含む |
| 11 032/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑草ます | |
| 12 033/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを1%含む | |



- | | |
|--|---|
| <p>掘削面記述</p> <p>1 2.032/1 黒褐色粘質土、ややしまる 径10cm以下の円礫を1%含む</p> <p>2 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを5%含む</p> <p>3 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗茶色、ややしまる、雑草ます、黒褐色土ブロックを1%含む</p> <p>4 032/1 オリーブ黒色粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます</p> <p>5 032/1 灰色粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます</p> <p>6 032/2 灰オリーブ粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます</p> <p>7 2.032/1 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます</p> <p>8 032/1 032/1 オリーブ黒色粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを1%含む</p> <p>9 032/2 オリーブ黒色粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます、V層ブロックを5%含む</p> | <p>掘削面記述</p> <p>1 032/2 オリーブ黒色砂質土、ややしまる、雑草ます</p> <p>2 032/2 オリーブ黒色砂質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます</p> <p>3 2.032/2 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます</p> <p>4 2.032/1 黒褐色粘質土、やや茶色、ややしまる、雑草ます</p> <p>5 032/1 オリーブ黒色砂質土、ややしまる、雑草ます</p> <p>6 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます</p> <p>7 2.032/1 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます</p> <p>8 2.032/1 黒褐色粘質土、ややしまる、雑草ます</p> <p>9 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます</p> <p>10 2.032/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草ます</p> <p>11 2.032/1 灰色シルト、V層</p> <p>12 2.032/1 灰色砂質シルト、V層</p> |
|--|---|

図297 SZc31 (2)

周溝 溝を巡らせてややいびつな方形区画を作り出しており、隅部もあまり深さを変えずに全周する。壁面は比較的開く。北隅部、南東溝、南西溝は他の方形周溝墓の溝に削平されており、外縁部の形状ははっきりせず、埋土も一部残存するのみであった。埋土は西溝で最大8層に分層したが、どの溝においてもほぼ水平堆積で、埋土下部にはV層ブロックなどが含まれることから、壁面若しくは墳丘盛土が崩落したものと思われる。埋土上部は自然堆積であると思われる。

遺物出土状況 溝内埋土から40点、墳丘盛土から30点の土器が散在して出土したが、図示可能なものはなかった。主体部からは、主体部1で土器片が62点、主体部2で土器片が2点、いずれも小片が出土したのみで、図示可能なものはなかった。

出土遺物 図示可能な土器はなかったが、溝内埋土、墳丘盛土から出土した土器片はⅢ～Ⅳ期のものであると考えられる。

時期 時期決定できる遺物の出土がないが、溝内埋土、墳丘盛土から出土した土器片はⅢ～Ⅳ期のものであると考えられることや、Ⅳ-1期以前としたSZc22よりも切り合い関係で古くなることから、この遺構の時期はⅢ期以前になると思われる。

SZc32 (図299)

検出状況 SZc28とSZc31の墳丘盛土を除去したところ、コ字状に溝状の遺構が配置された状態が観察されたため、方形周溝墓であると判断した。ただし、他の方形周溝墓に切られるため、西辺あると考えられる溝のうち、すべて検出した範囲は南東溝のみで、北西溝と南西溝はその一部を検出し、北東溝は確認できなかった。

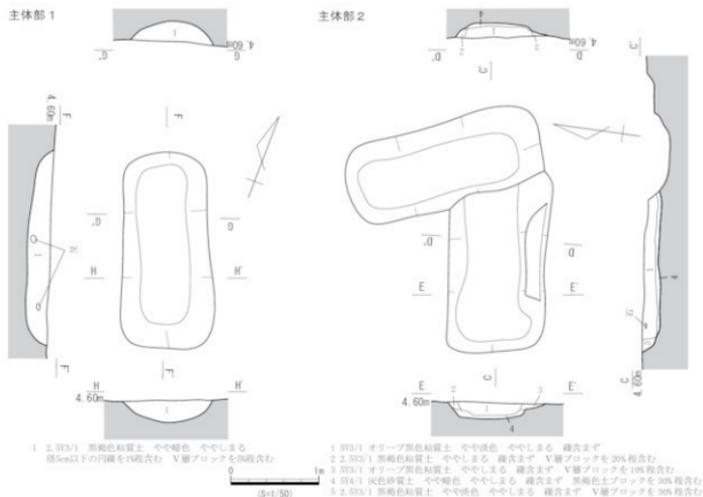


図298 SZc31主体部

方台部 確認できたのは南東辺部、南西辺部と北西辺部の一部であるが、ほぼ直線的で、辺同士はほぼ直角に交わる。また南西辺部が南東辺部に対して長くなるため、方台部の形状は長方形となると思われる。墳丘盛土は他の方形周溝墓に削平されており、確認できなかった。主体部も他の遺構に削平されている影響か、確認できなかった。

周溝 コ字状に溝が配置された状態であり、方形区画を作り出しているものと考えられる。4つの隅部のうち、北隅はSZc31の削平をうけ確認できないが、南隅は連続し、西及び東隅は連続せず途切れている。溝の深さは0.25mと浅く、壁面は開く。埋土は南東溝で最大3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土にV層ブロックが含まれることから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 溝内埋土から79点土器が散在して出土したが、小片ばかりで図示可能なものはなかった。

出土遺物 図示可能な土器はなかったが、溝内埋土から出土した土器片はⅢ～Ⅳ期ののものであると考えられる。

時期 時期決定できる遺物の出土がないが、溝内埋土から出土した土器片はⅢ～Ⅳ期ののものであると考えられることや、Ⅳ-1期以前としたSZc31よりも切り合い関係で古くなることから、この遺構の時期はⅣ-1期以前になると思われる。

SZc33 (図300～図305)

検出状況 V層上面で検出したが、Ⅳ層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。南西方向にあるNRc1に向かって地形が傾斜していき、南西部分はNRc1の上層の埋土が覆う関係となる。

SZc32

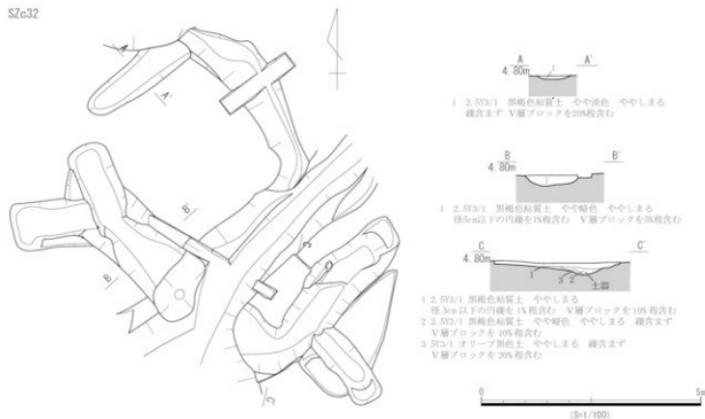


図299 SZc32

方台部 方台部の各辺部はやや湾曲し、隅部はやや丸くなり、西隅部は直角よりやや開き、南隅部は直角よりやや狭くなるため、方台部の形状は不整形長方形となる。墳丘盛土は北で厚さ約30cm、南で厚さ100cm以上を確認した。南西部のNRe1に面した部分は地形がNRe1に向かって傾斜しているため、この傾斜面にオリブ黒色～黒色土を厚く盛土してほぼ水平な平坦面を作り出している。そして平坦面に主体部1を構築した後に、中央にさらに盛土するような順序で墳丘が構築されている。主体部は墳丘盛土の掘り下げ時に検出した1基の土坑を形状や埋土堆積状況などから主体部と考えた。平面形は比較的明瞭であった。主体部1は、不整形長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。長軸が北東-南西方向となり、方形周溝墓の軸方向に近い。底面はほぼ平坦であるが、一部掘りすぎている。断ち割りを入れた上で土層確認したが、分層が難しく掘形はあまり明瞭に確認できていない。埋土は12層に分層したが、ほぼ水平堆積でV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。

周溝 コ字形に溝を巡らせて、ややいびつな長方形の区画を作り出しており、隅部は連続する。溝は自然流路NRe1に向かって順次深くなるが、北東溝は浅く壁面は開く。この北東溝はSZe29の南西溝とほぼ同じ位置にあり、SZe33の北東溝が埋没する過程で再度SZe29として掘削されている。南東溝と北西溝は、南へ向かって徐々に深くなりNRe1の岸辺から水流のある流路部分までのテラス状の平坦面へ続く。最大の深さは0.8mになる。NRe1の岸辺の平坦面では、SZe30のような南西溝は確認できず、平坦面をそのままにしている。北西溝南西端部のNRe1の岸辺の平坦面に達した部分では細長い長方形の土坑状に凹むが、これは埋葬主体（周溝内埋葬）の可能性が考えられる。しかし、調査時は記録を作成しておらず、遺物もあまり出土していない。埋土は北東溝で最大16層に分層したが、どの溝においてもほぼ水平堆積で、埋土下部にはV層ブロックなどが含まれることから、墳丘盛土や壁面の崩落したものと思われる。埋土上部は自然堆積であると思われる。なお、北東溝はSDe129とほぼ重複しており、土層断面のどこまでがSDe129なのか判断が困難であった。

遺物出土状況 溝内埋土から254点の土器が散在して出土したが、北東溝中央の埋土下部からほぼ完形の壺1766と破片のまとまりが出土した。1765・1767・1768・1769は墳丘の南西裾部から自然流路平坦面に至る部分で出土したものであるが、調査時にNRe1出土土器として取り上げたもので、整理の段階で、方形周溝墓に属するものであると判断した。土器以外では、打製石鏃が1点出土した。墳丘盛土からは土器片が404点出土したが、甕1772が1個体潰れた状態で出土した。周囲を精査したが掘形は確認できなかったため、盛土をする際に埋納したものと思われる。その他、砥石とスクレイパーが1点ずつ出土した。主体部1からは、土器片が26点散在して出土した。

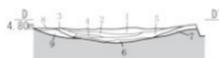
出土遺物 1765～1770は溝内埋土又は墳丘南西裾部からの出土である。1765はⅢ-3期の壺A2類で、胴部は下位で屈曲して張り、上胴部には沈線と磨消帯を施す。1766～1768はⅢ-3期の壺A3類である。1766は口縁部外面、頸部、胴部に貼り付け文を施す。胴部には櫛描文とそれを磨り消す沈線を施す。1767は上胴部に沈線が巡る。1768は上胴部は沈線と磨消帯、頸部に沈線と刺突文を施す。1769はⅢ～Ⅳ期と思われる甕の蓋と考えられ、頂部がやや凹むが、口縁部にかけて大きく開く。1770はⅠ期と思われる甕の底部片である。1771～1773は墳丘盛土からの出土である。1771はⅢ-3期の細頸甕で、外面に櫛描文を施す。上胴部にも櫛描文帯と無文帯を交互に配する。1772はⅢ-3期の甕で、口縁部が外反し、端部でやや内湾する。胴部はあまり張らず、平底である。1773はⅡ期の甕で、口縁部が外反し、端部に刻みを施す。1774は主体部1から出土したⅠ期と思われる甕で、口縁部が外反して開き、口縁



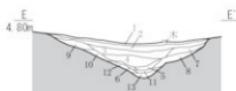
圖300 SZc33 (1)



- 1 5Y1/1 灰色粘質土、やや暗茶色、ややしまる 雑草まで
腐化層が少し混じる
- 2 5Y1/1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで
- 3 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、やや褐色、ややしまる 雑草まで
- 4 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる 雑草まで
- 5 2.5Y2/2 黒褐色粘質土、やや褐色、ややしまる 雑草まで
- 6 5Y1/1 灰色粘質土、ややしまる 雑草まで



- 1 2.5Y2/1 黒褐色粘質土、やや暗色、ややしまる
層3m以下の円礫を1%程度含む、黒色土ブロックを20%程度含む
- 2 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる 雑草まで
黒色土ブロックを1%程度含む、腐化層が少し混じる
- 3 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで
- 4 5Y1/1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで
V層ブロックを40%程度含む
- 5 5Y1/1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで
オリーブ黒色土ブロックを30%程度含む
- 6 5Y1/1 灰色砂質土、ややしまる 雑草まで
- 7 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる 雑草まで 傾圧感土
- 8 2.5Y2/2 黒褐色粘質土、ややしまる 雑草まで
黒色土ブロックを20%程度含む
- 9 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで



- 1 2.5Y2/1 黒色粘質土、ややしまる 雑草まで 黒色土ブロックを10%程度含む(踏み落ち状)
- 2 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、やや暗色雑草まで 腐化層が少し混じる
- 3 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、やや褐色、雑草まで V層ブロックを1%程度含む
- 4 2.5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる 雑草まで V層ブロックを3%程度含む
- 5 2.5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる 雑草まで やや暗色、白色粒が少し混じる
- 6 5Y2/1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで V層ブロックを3%程度含む
- 7 5Y1/1 灰色粘質土、やや暗茶色、ややしまる 雑草まで V層ブロックを1%程度含む
- 8 5Y1/1 灰色粘質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで
- 9 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、やや暗色、雑草まで 黒色土ブロック・V層ブロックを10%程度含む
- 10 5Y2/1 オリーブ黒色砂質土、ややしまる、やや暗色、雑草まで V層ブロックを30%程度含む
- 11 5Y2/1 黒色粘質土、ややしまる、やや褐色、雑草まで 白色粒が混じる
- 12 2.5Y2/1 オリーブ黒色砂質土、やや褐色、ややしまる 雑草まで
- 13 5Y2/1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる 雑草まで 白色粒が混じる

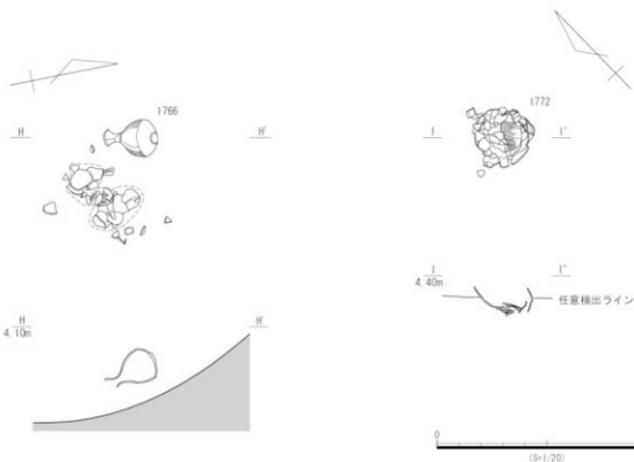


図302 SzC33 (3)

SZc33



図303 SZc33 (4)

SZc33 主体部

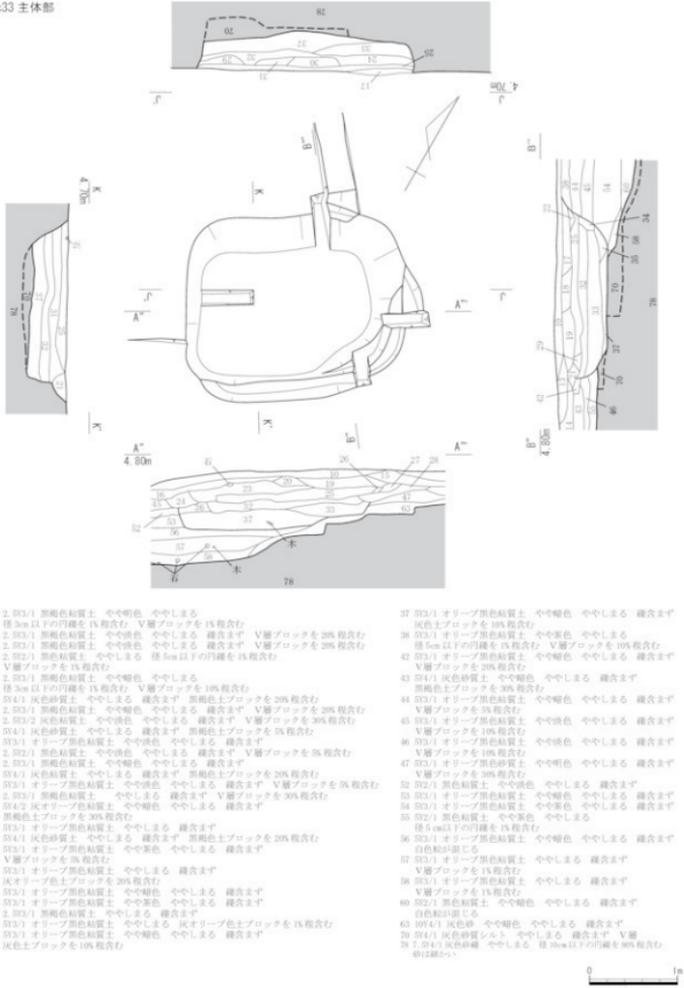


図304 SZc33主体部

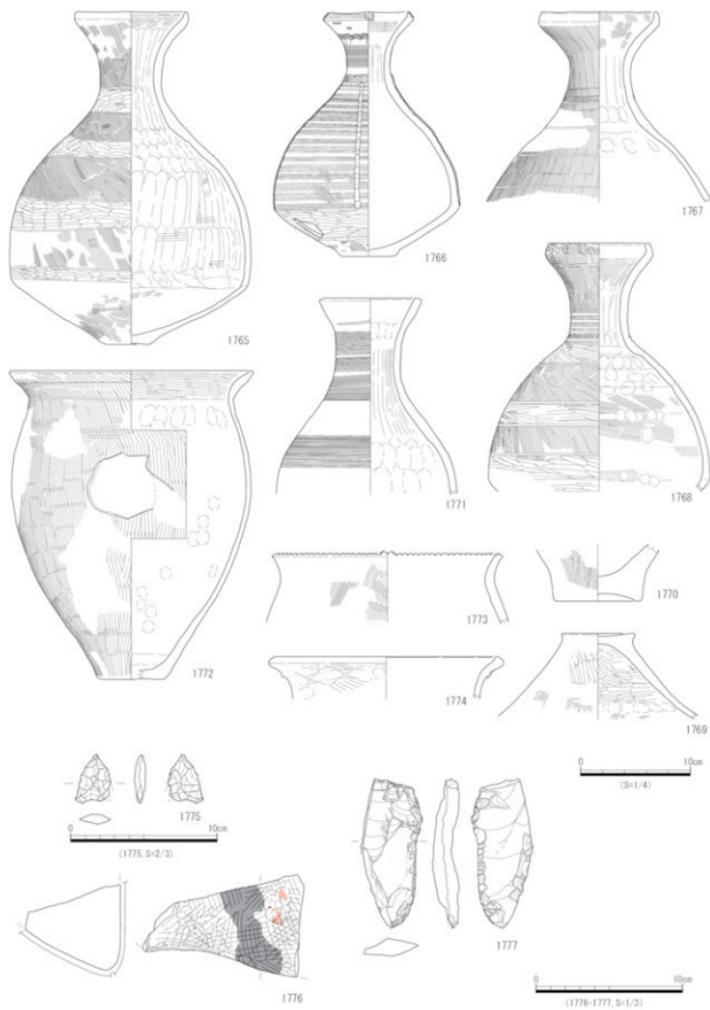


図305 SZc33出土遺物

端部はやや肥厚する。混入したものであると思われる。1775は下呂石製の打製石鏃で基部を欠損する。1776は砥石で被熱痕がある。1777はスクレイパーである。

時期 図示した1765が埋土下部からの出土で、供献土器と考えられることや、墳丘盛土から出土した1772が、出土状況から埋納されたものと考えられることから、遺構の構築時期を決定するものであると思われる。これらの土器から、この遺構の時期はⅢ-3期であると思われる。

SZc34 (図306～図307)

検出状況 V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。これを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、周溝の範囲や切り合い関係を把握した。大半が発掘区外となるため形状は不明であるが、溝がL字形に屈曲し、方形の区画を作り出していると思われることから、方形周溝墓であると判断した。

方台部 検出した範囲は北西辺部と南西辺部の一部のみであり、その他は発掘区外となる。北西辺部は比較的直線的で、南西辺部はやや湾曲する。西隅部はほぼ直角になることから、方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は厚さ約30cmを確認したが、ほぼ水平に積み上げられている。最下部に灰色土を10cm前後積み上げ、その上に黒色土を10～15cm、さらにその上にやや黄色のオリブ黒色土を盛土している。盛土を除去したが、主体部と考えられるような土坑は確認できなかった。

周溝 北西溝と南西溝の一部を確認した。どちらも断面形は逆台形となり壁面は開くが、北西溝は深く、南西溝は浅くなる。北西溝は幅2.5m前後であるが、南西溝は幅1.1～2.5mと一定しない。埋土は北西溝で最大10層に分層したが、どの溝においてもほぼ水平堆積で、埋土下部にはV層ブロックなどが含まれることから、墳丘盛土や壁面の崩落したものである。北西溝はSDe129とほぼ重複しており、土層断面のどこまでがSDe129なのか判断が困難であった。

遺物出土状況 溝内埋土から254点の土器が散在して出土したが、北西溝の埋土中位からの破損した壺1779が出土した。破片が散乱した状態であり、転落してきたものと思われる。また、同じく北西溝の埋土下部からは破片である程度のある程度のみとまりのある土器の出土があった。土器以外では、磨製石斧が1点出土した。墳丘盛土からは土器片が11点と打製石鏃が1点出土した。

出土遺物 1778～1780は溝内埋土からの出土である。1778はIV期の壺A1類で、口縁部外面に凹線を1条、頸部に沈線を3条施す。在土器で凹線的な作りである。1779はIV-2期と思われる壺A1類で、口縁部外面に凹線を1条施す。胴部は無文で胴部下半に煤が付着している。1780はIV-1～2期と思われる壺F類で、いわゆる無頭壺である。頸部に2個一對の穿孔が開けられている。外面に赤彩を施す。1781は墳丘盛土から出土した打製石鏃で、チャート製で先端部がわずかに欠損している。

時期 図示した1779が一部欠損するものの口縁部から底部まで残存しており供献されていた土器の転落と考えられることから、この遺構の時期はIV-2期であると思われる。

SZc35 (図308)

検出状況 SDe130の盛土と思われたマウンド状の高まりを掘削したところ、溝状遺構を確認した。大半が発掘区外となるため形状は不明であるが、L字形に屈曲し、方形の区画を作り出していると考えられるため、方形周溝墓と判断した。

Sz34

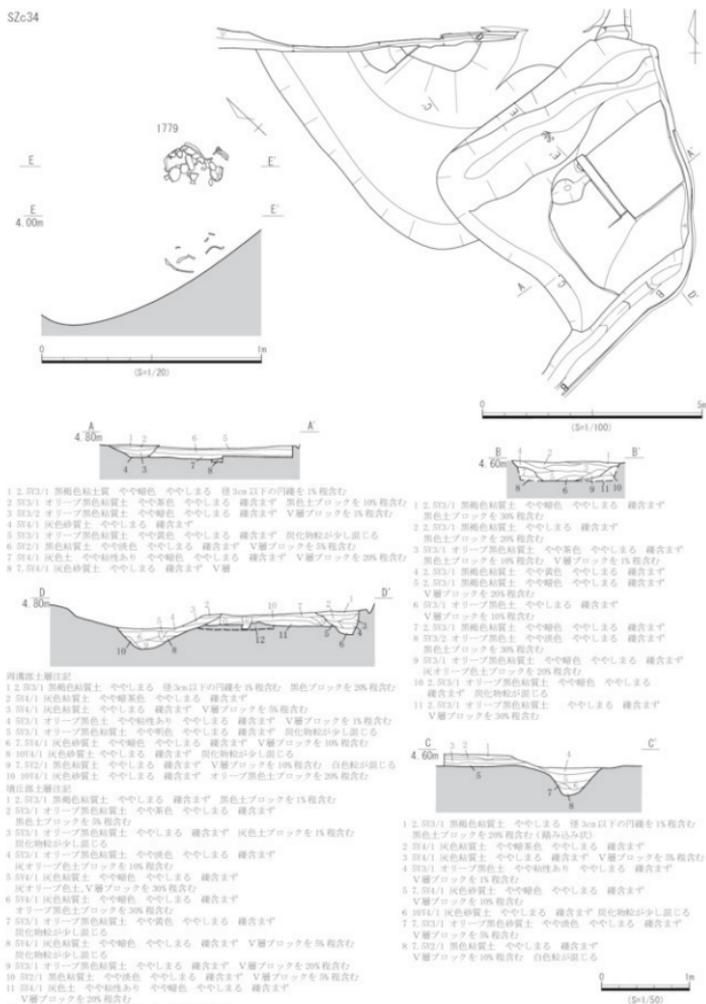


図306 Sz34

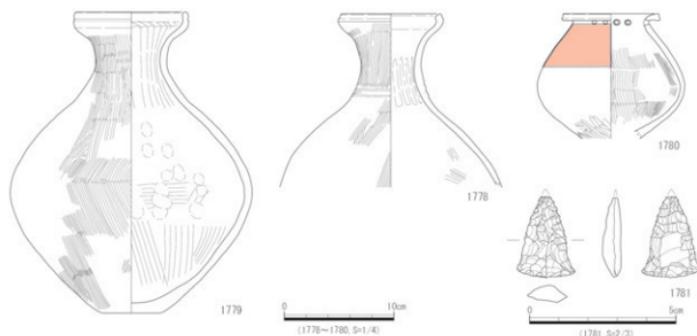


図307 SZc34出土遺物

方台部 検出した範囲は北辺部と西辺部の一部のみであり、その他は発掘区外となる。北辺部、西辺部はわずかに湾曲するがほぼ直線的であり、北西隅部は直角からやや開くが、方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。方台部にあたる上部には盛土状の堆積を70cmほど確認したが、堆積状況を確認した結果、SZc35の墳丘盛土と考えられるものは方台部中央最下層の20cmほどの黒色土の堆積である。それ以外の盛土は方形周溝墓の溝を覆う関係になるため、東側からの崩落土若しくは他の要因による盛土の可能性が考えられる。盛土を除去したところ、主体部と考えられるような土坑は確認できなかった。なお、調査の最終段階で、SZc35の方台部下の基盤層の断り割り調査を行ったが、植物遺体が含まれる層を確認したため、年代測定を行った（第5章第3節）。

周溝 北溝と西溝の一部を確認した。北溝から自然流路NRc1に面する西溝に変わる屈曲部で段を持って深くなる。溝幅は1m～1.9mで、断面形はU字形となる。埋土は西溝で最大8層に分層したが、どの溝においてもほぼ水平堆積で、埋土にラミナ状の堆積が見られたり、植物遺体が堆積したりすることから、自然堆積と思われる。

遺物出土状況 溝内埋土から33点の土器が散在して出土したが、供献土器と考えられるような土器の出土はなく、小片が多い。方台部上の盛土からは58点の土器が出土したが、前述のようにこの方形周溝墓に関わる盛土は一部であるが、盛土の層位で分けて取り上げていないため、この遺構に関わる遺物として選別できていない。

出土遺物 1782～1784は溝内埋土からの出土で、IV期の壺である。1782は胴部片で、櫛描文を施す。1783と1784は平底の底部片である。1785はII期の甕の底部片で、盛土からの出土であるが、やや上層からの出土でこの遺構に関わるかははっきりしない。

時期 溝内埋土から出土した図示した土器がいずれもIV期であることから、この遺構の時期はIV期であると思われる。

SZc36 (図309)

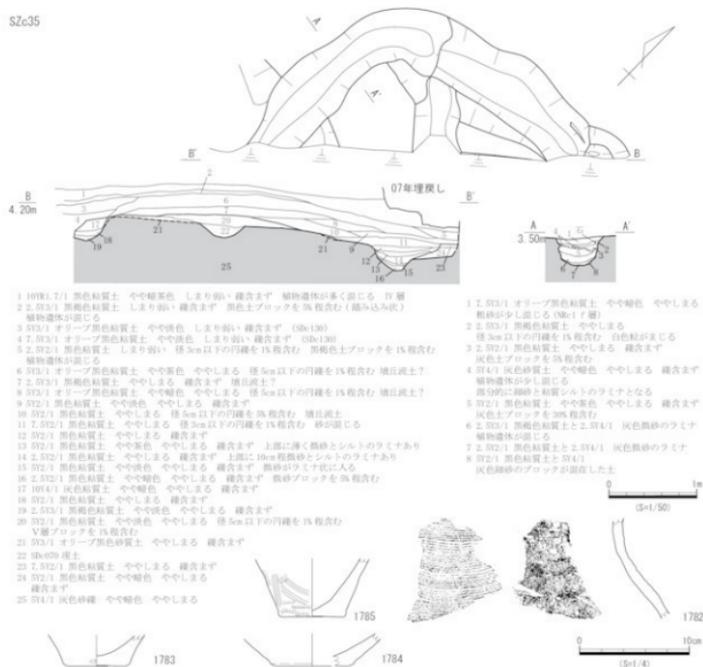
検出状況 遺跡西部を南北に流れる自然流路NRc1の東岸、テラス状の平坦面の上に検出する。NRc1の掘削中に土器が出土し、横位に置かれた状態であったため、土器箱と判断し、周囲の精査をして平面

形を確認した。平面形はやや不明瞭であった。調査時は別々の遺構と判断していた土器棺だが、出土した土器が同一個体で接合することが判明したため、同一遺構と判断した。掘形は不定形の土坑が二つ重なったような形状で浅く、壁面は開く。それぞれ底面はほぼ平坦であるが、一段下がる部分がある。埋土は単層で、土器を棺として埋納したものであることから、人為堆積である。

遺物出土状況 同一個体の甕が縦に二分され、それぞれ内面を上にした状態で出土した。これは、もともと1つのものとして埋納されたものが、何らかの作用によって2つに分かれたとも解釈できる。しかし、土器を確認したところ完全に接合するのではなく、縦に幅3cmほど破片が接けてしまい、底部もないことから意図的に打ちかかれた可能性が考えられる。そのため、埋納前に意図的に2つに割られ、それぞれ内面を上にして埋納されたのではないかと考えられる。

出土遺物 1786は土器棺として使用されていた、Ⅱ期の甕である。口縁部が外反し、胴部はあまり張らない。口縁部内面に波状のハケ目を施す。胴部外面もハケ目調整であるが、内面はナデ調整である。搬入品の可能性がある。

SzC35



時期 土器棺として使われていた土器から、この遺構の時期はⅡ期と思われる。

SKc0731 (図310)

検出状況 09_13地点北部、SZc22墳丘盛土下面(V層上面)で検出した。平面形はやや不明瞭で、長軸が1.65mの不整長方形で浅い穴である。埋土は4層に分層したが、1～3層はほぼ水平堆積で、4層は北東側のみに堆積する。堆積状況は不明であるが、遺物が埋納された状態で出土していることから人為堆積の可能性がある。また本遺構は、形状や堆積状況、土器の出土状況から墓坑の可能性が考

SZc36

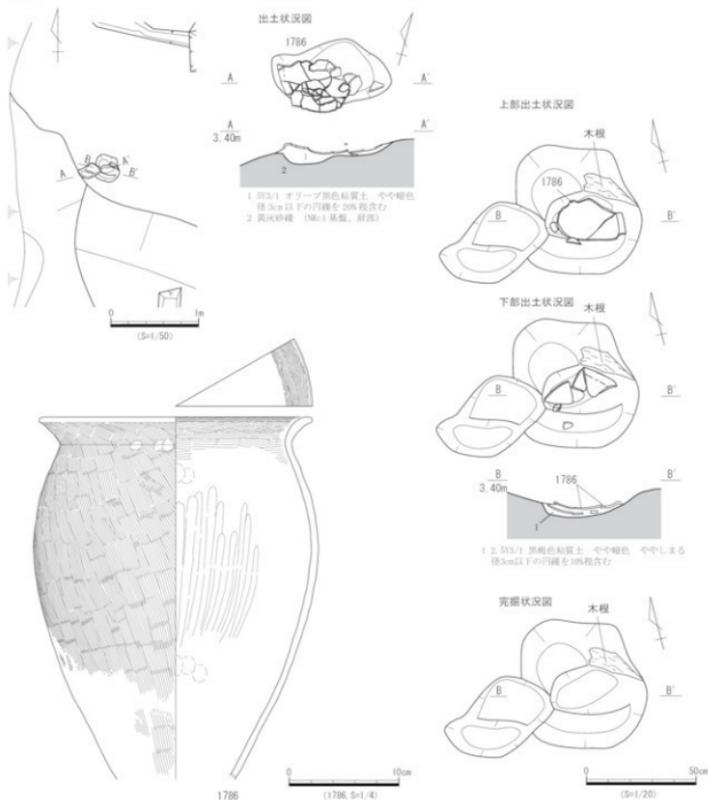


図309 SZc36

えられる。

遺物出土状況 埋土中から204点の土器片が出土したが、南東部の埋土中位からは土器片が埋納されたようにまとまって出土した。

出土遺物 1787はⅡ期の甕で、口縁部が短く外反し、端部を丸く収める。外面は条痕調整される。

時期 図示した土器から、Ⅱ期と思われる。

SKc0732 (図311)

検出状況 09_13地点北部、S2c22墳丘盛土下面（V層上面）で検出した。平面形はやや不明瞭で、半分以上が発掘区外となるため全体形状は不明である。底面は南西から北東に向かって段を持ちながら深くなっている。埋土は3層に分層したが、埋土中にV層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。すぐ南西に位置するSKc0745は、形状や堆積状況、土器の出土状況から墓坑の可能性があり、時期が同じとなる本遺構についても、推定される形状や堆積状況、出土した土器から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から204点の土器片が出土したが、南西隅に土器がまとまって出土した。

出土遺物 1788はⅠ期と思われる壺の底部片である。1789～1793はⅠ期と思われる甕である。1789は甕の口縁部で、頸部の隆帯の痕跡らしきものが見られる。1790は底部片であるが、1789と同一個体かもしれない。1791は底部片である。1792は亜流の遠賀川式系の土器で、口縁部が外反する。頸部に沈線文を4条施す。1793は遠賀川式系の甕で、口縁部が短く外反し、口縁端部に刻みを施す。頸部外面には沈線が巡る。1794は縄文時代晩期の土器で、径10～15cmの筒状になる。外面は二枚貝条痕調整で、煤が付着する。

時期 図示した土器は、Ⅰ期のものが主であり、縄文時代晩期の1794は混入したものとと思われるため、遺構の時期はⅠ期と考えられる。

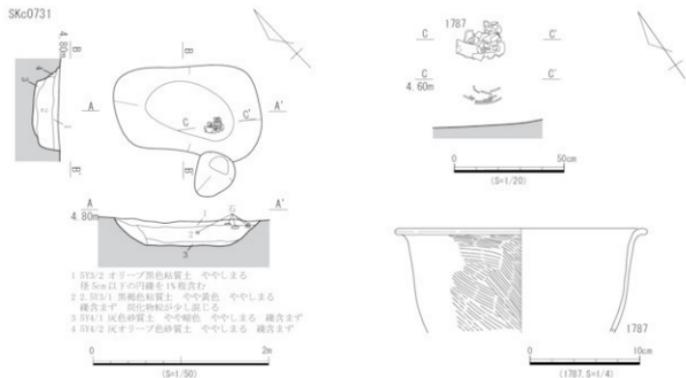


図310 SKc0731

SKc0733 (図312)

検出状況 09_13地点北部、SZc22墳丘盛土下面（V層上面）で検出した。平面形はやや不明瞭で、大半が発掘区外となるため全体形状は不明である。底面はほぼ平坦で、壁面は比較的立ち上がる。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積である。埋土2・3層に黒色土・V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。またすぐ南東に位置するSKc0741は、形状や堆積状況、土器の出土状況から墓坑の可能性があり、時期が同じとなる本遺構についても、堆積状況、土器の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から124点の土器片が散在して出土した。

出土遺物 1795はⅡ期の壺で、口縁部が外反し、頸部及び胴部中に櫛描文を施す。

時期 図示した土器から、遺構の時期はⅡ期であると考えられる。

SKc0736 (図312)

検出状況 09_13地点北東部、SZc23溝内埋土途中で検出した。平面形はやや不明瞭で、平面形は不整

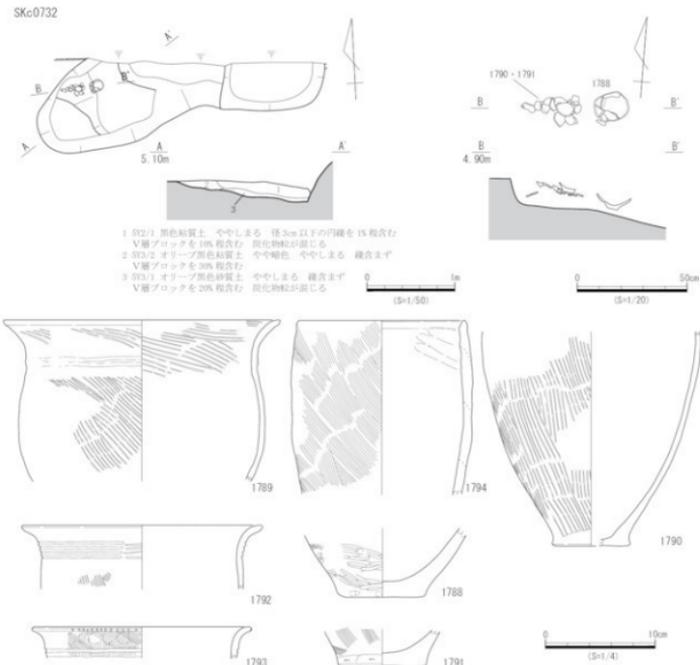


図311 SKc0732

長楕円形で、壁面は開く。底面は概ね平坦であるが、北半部にやや凹凸がある。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、埋土に黒色土・V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。埋土堆積状況や土器の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。また、SZc23の溝の埋土途中で検出したことから、周溝内埋葬の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から40点の土器片が出土したが、埋土中から散在して出土したほか、北西隅のやや深くなったところから鉢が出土した。これは土坑内に置かれたものである可能性が考えられる。

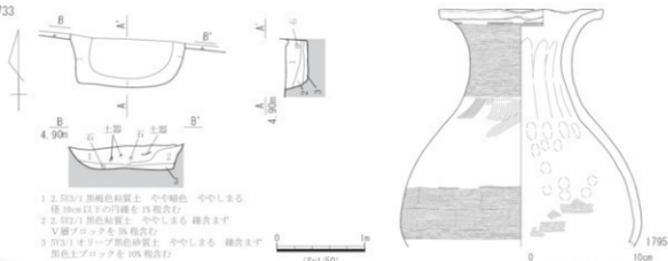
出土遺物 1796はIV期と思われる鉢で、やや突出した平底の底部から、胴部が開きながら立ち上がり口縁部となる。

時期 図示した土器から、遺構の時期はIV期であると思われる。

SKc0738 (図313~図314)

検出状況 09_13地点北東部、SZc21南溝底面から当初SZc23と考えて掘削していた埋土途中にかけて検出した。平面形はやや不明瞭で、平面形は東部が発掘区外となるため不明で、壁面は開く。底面は概ね平坦であるが、中央がやや凹む。これはSZc28の周溝埋土を掘り下げた可能性もある。埋土は8層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、一部の埋土に黒色土・V層ブロックを含むことから人為堆積

SKc0733



SKc0736

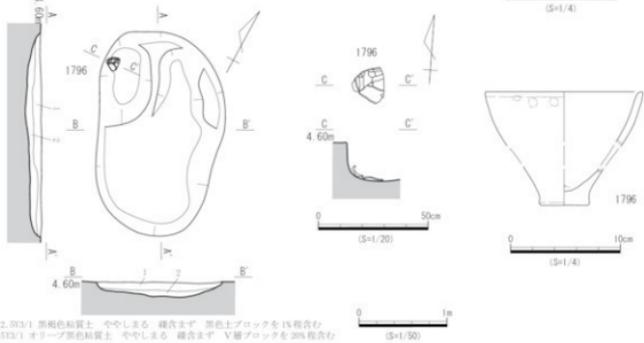


図312 SKc0733・SKc0736

の可能性がある。埋土堆積状況や土器の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。また、Szcz28の周溝と重複するため、この周溝内に掘削された土坑（周溝内埋葬）である可能性が考えられるが、平面形が東へ延びることや、IV-1期としたSzcz28と出土土器から時期に隔たりがあることから、その可能性は低いと思われる。

遺物出土状況 南西隅の底面近くでほぼ完形の甕が横位で出土した。これは土坑内に置かれたものであると思われる。その他は埋土中から土器の小片が20点出土したのみである。

出土遺物 1797はIV-2期と思われる甕A1類で、口縁部が屈曲して開き、端部に刻みを施す。胴部は上位で張り、底部は平底である。胴部最大径の位置に刺突列が巡る。

時期 図示した土器から、遺構の時期はIV-2期であると思われる。

SKc0739 (図315)

検出状況 09_13地点東部、Szcz29墳丘盛土下面（V層上面）で検出した。平面形は不整形円で、比較的明瞭であった。壁面がやや開く土坑で、底面はほぼ平坦であった。埋土は6層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土に黒色土・V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高い。3・4層には5cm以下の円礫が混じる。形状や埋土堆積状況、土器の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から191点の土器片が散在して出土したが、特に埋土上部から中部の5cm以下の円礫が混じる層に土器片がまとまって出土した。

出土遺物 1798・1799はII期の壺である。1798は壺A1a類で、口縁部が大きく開き、頸部に横線文を施す。口縁端部にも同様の沈線を施す。1799は口縁部を欠くが、口縁部が外反し、頸部及び胴部中に櫛歯文を施す。1800はI期の平底の甕の底部片である。混入したものであると考えられる。

時期 図示した土器のうち、残りの良い1798・1799は人為的に埋められたものであると思われる。遺構の時期はこれらの土器が示すII期であると考えられる。

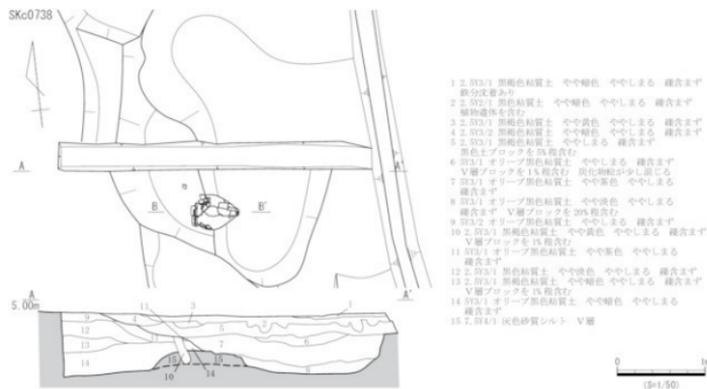


図313 SKc0738

SKc0745 (図315)

検出状況 09_13地点北部、Sz22墳丘盛土下面(V層上面)で検出した。平面形は比較的明瞭であった。平面形は不整長楕円形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。底面はほぼ平坦であった。南端部はSz22の南溝によって消失している。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土に黒色土・V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。形状や埋土堆積状況、土器の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から127点の土器片が出土した。特に埋土上部に土器片が比較的まとまった状態で出土しており、1801はSz22の墳丘盛土を除去した時点で、口縁部が検出面に露出していた。

出土遺物 1801はI期の壺で、口縁部が外反し、口縁端部に沈線を1条施す。頸部に沈線を3条施す。口縁部には蓋用の小孔を2箇所に開けている。

時期 図示した土器は人為的に埋められたものであると思われ、遺構の時期はこの土器が示すI期であると考えられる。

SKc0758 (図316)

検出状況 09_13地点北東部、Sz28墳丘盛土下面(V層上面)で検出した。平面形は比較的明瞭であった。平面形は不整長楕円形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。底面は両端部がやや浅く、段を持って中央が深くなる。埋土は13層に分層したが、裏込め状の堆積があり、V層ブロックを含むことから

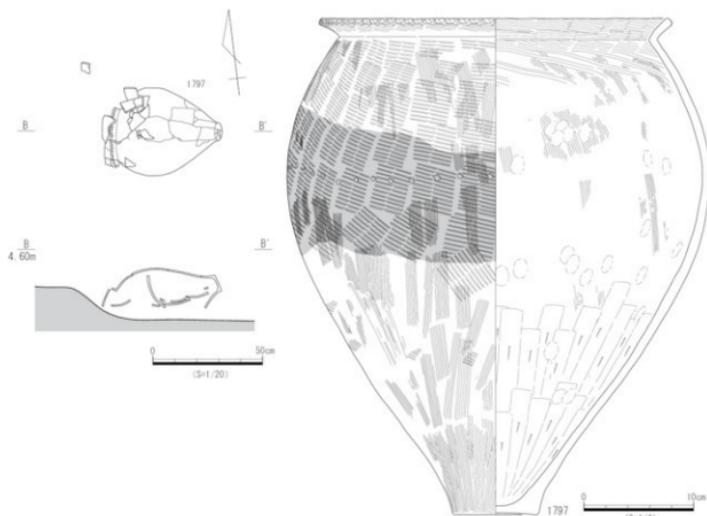
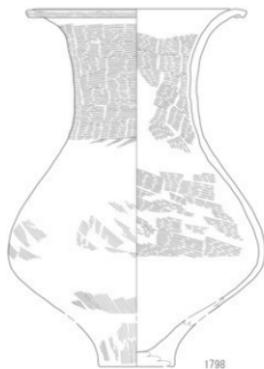
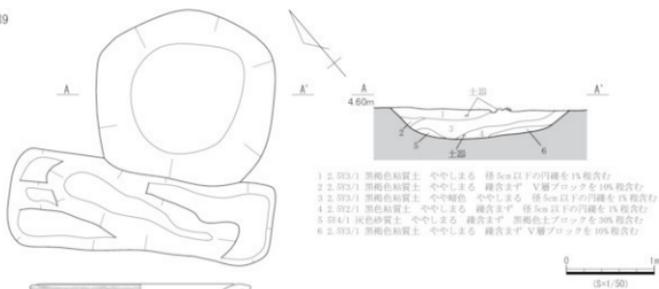


図314 SKc0738出土遺物

Skc0739



Skc0745

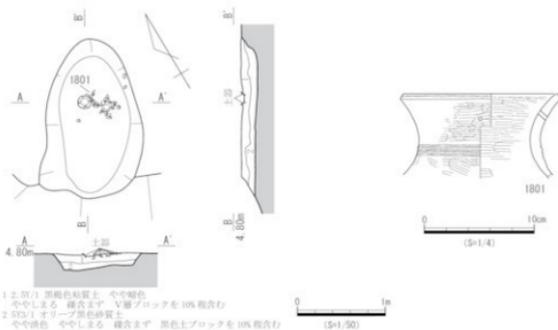


図315 Skc0739・Skc0745

人為堆積の可能性がある。埋土2～4層が棺痕跡状の堆積とも考えられる。以上のような形状や埋土堆積状況、また土器の出土状況から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から302点の土器片が出土した。図示した壺1802が中央西部の底面近くで、口縁部から上胴部が潰れた状態で出土した。埋め戻される際に混入したような状態ではなく、埋納されたと思われる。

出土遺物 1802はI期末の壺で、口縁部が大きく開く壺で、頸部及び胴部に沈線帯を施す。

時期 図示した土器は人為的に埋められたものと思われ、遺構の時期はI期であると考えられる。

SKc0759 (図317)

検出状況 09_13地点北東部、S2c28墳丘盛土下面(V層上面)で検出した。平面形は比較的明瞭であった。平面形は不整形長方形で浅く、壁面は比較的立ち上がる。底面は両端部がやや深くなり、東側に小穴状の凹みがある。埋土は11層に分層したが、明確な棺痕跡状の堆積は見えなかったものの、V層ブロックを含むことから人為堆積の可能性がある。なお、埋土1層を除く土坑の2基の切り合いにも見える。このような形状や埋土堆積状況から墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から3点のみ土器片が出土した。小片のみで図示可能なものはなかった。

SKc0758

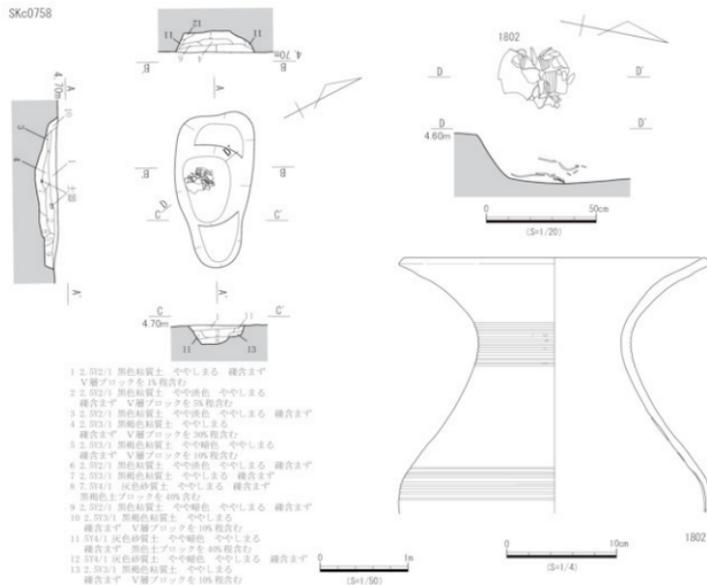


図316 SKc0758

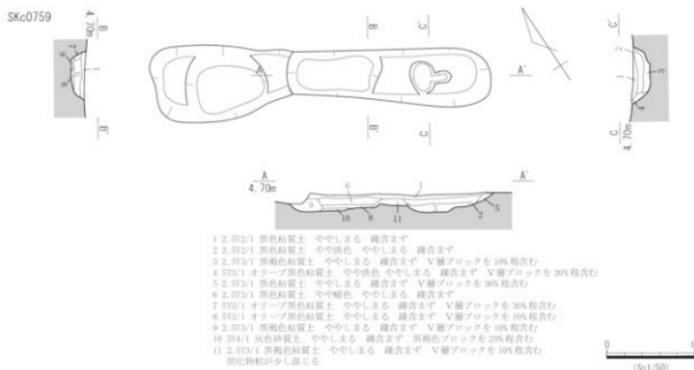


図317 SKc0759

時期 時期決定できる遺物の出土はないが、SKc0758に切られるものであり、I期以前であると考えられる。

SDc126 (図318)

検出状況 09_13地点北西部、方形周溝墓の墳丘間のV層上面で検出したが、平面形は非常に不明瞭であった。SDc126の掘り下げにより、壁面で掘り込みを確認したため、段階的に下げて最終的な平面形を確定した。大半が発掘区外に延びるため全形は不明であるが、幅が広い北東から南南西方向の溝状であり浅い。壁面は開く。底面には一部土坑状に少し深くなる部分があるが、土層は確認できていない。複数の遺構をまとめて掘削した可能性もある。埋土は4層に分層したが、ほぼ水平堆積で、堆積状況は不明である。東側に堆積している3層はV層ブロックが含まれるが、壁面の崩落土と思われる。形状から方形周溝墓の溝の可能性も考えられるが、遺構の一部しか検出していないことから、溝状遺構とした。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して405点出土したが、南端部の一段凹む部分で壺がまとまって出土した。1805は正位の状態、上胴部から口縁部が欠損しており、土器内部に別の壺1804の胴部片が落ち込んでいた。

出土遺物 1803～1805はI期の壺である。1803は口縁部が外反する壺で、口縁部と頸部に沈線をも1条ずつ施す。1804と同一個体か。1804は胴部片であるが、肩部に削り出しによる段を付け、沈線をも1条巡らす。1805は口縁部を欠く。平底の底部から胴部が開く。

時期 図示した土器が底面近くでまとまって出土していることから、I期であると考えられる。

SDc128 (図319)

検出状況 09_13地点北西部、方形周溝墓の墳丘間のV層上面で検出したが、平面形は非常に不明瞭であった。遺構平面形がはっきりしないため、段階的に下げて最終的な平面形を確定した。大半が発掘区外に延びるため全形は不明であるが、南北方向の溝状であり、やや深さがある。壁面は開く。底

面には多少凸凹があり、平面形が不明瞭であったことから、複数の土坑をまとめて掘削した可能性もある。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックが含まれることから、人為堆積の可能性はある。残りの良い土器が出土していることから、方形周溝墓の溝の可能性も考えられるが、遺構の一部しか検出していないことから、溝状遺構とした。

遺物出土状況 埋土中に土器片が散在して65点出土した。検出時に土器1806がややまとまって出土したが、それ以外は少ない。その他石器で磨製石斧が1点出土した。

出土遺物 1806はI期と思われる壺の底部片である。平底で径が大きい。1807は大型給刃石斧である。

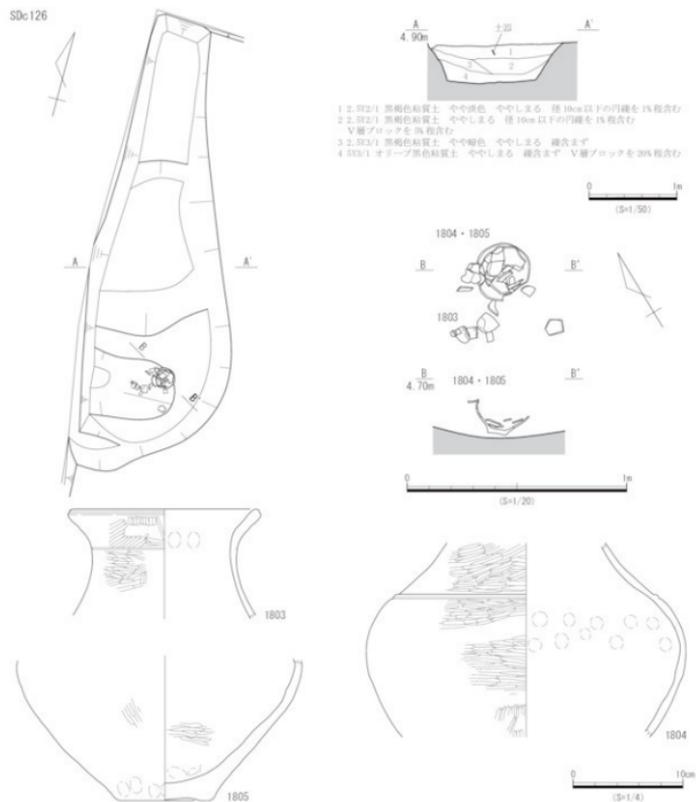


図318 SDc126

時期 1期としたSDe126に切られることや図示した土器から、1期であると考えられる。

SDe129 (図320～図321)

検出状況 09_13地点南東部において、SZe29南溝、SZe33南東溝、SZe34北西溝を完掘したところ、これらがほぼ直線的に連なり、これらが他の溝よりも深くなることから、方形周溝墓を構築する前段階に、溝を深く掘削した可能性があるのではないかと考えた。このSDe129の南東側、SZe34とSDe130との間には、マウンド状の高まりがあるが、この部分がSDe129掘削により生じた排土による盛土となる可能性を考えた。埋土は溝部分についてはそれぞれの方形周溝墓の周溝として掘削している。方形周溝墓を構築する前段階における溝と考えると、一段深くなる部分がSDe129としての掘形になる可能性がある。マウンド部分は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、黒色土やV層ブロックが含ま

SDe128

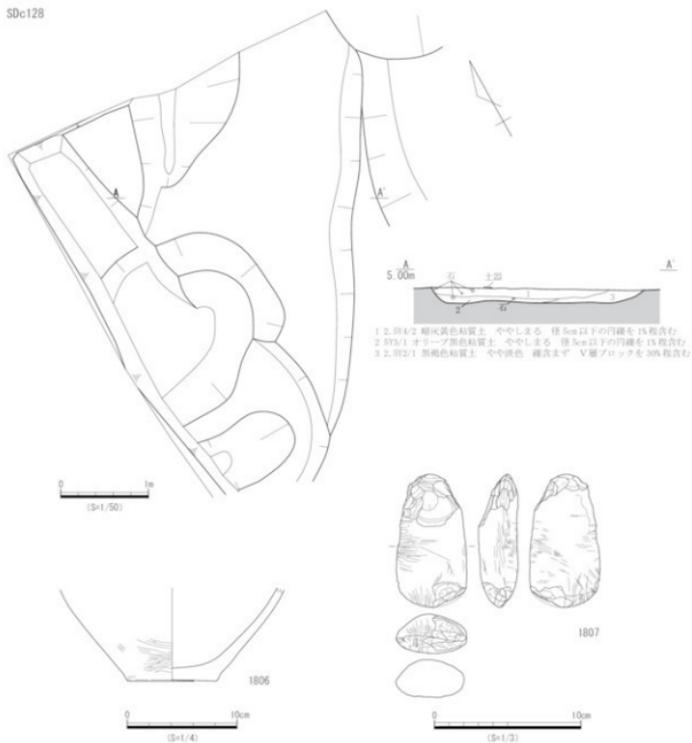
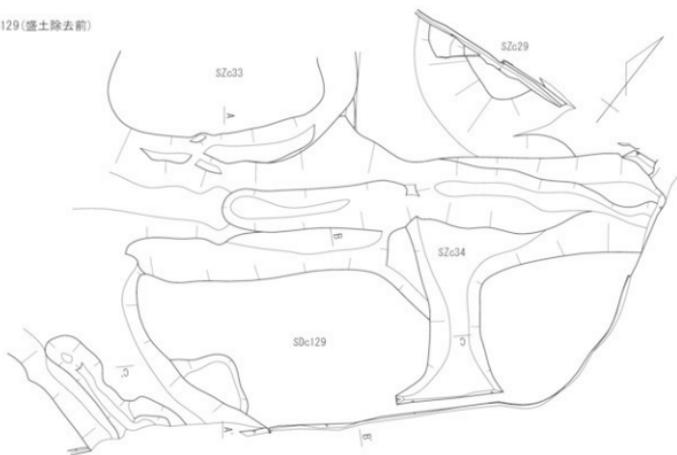


図319 SDe128

SDc129(盛土除去前)



SDc129(盛土除去後)

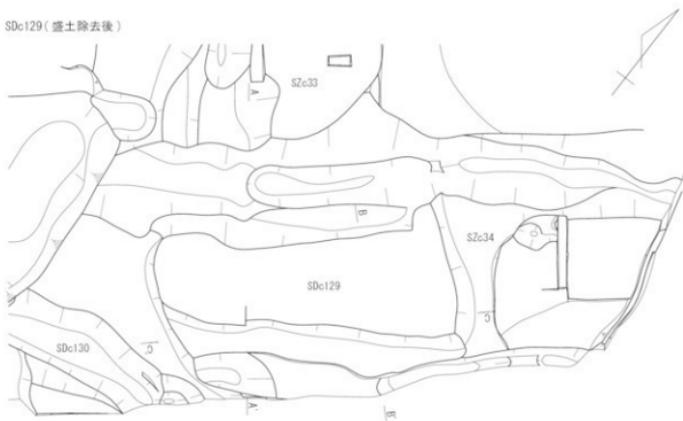


図320 SDc129(1)

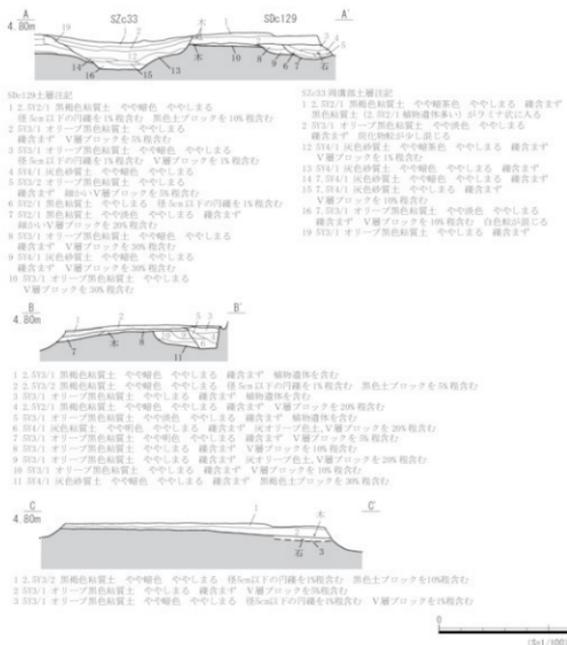


図321 SDC129 (2)

れることから、人為的に盛土した可能性が考えられる。

遺物出土状況 盛土中に土器片が散在して16点出土したが、小片ばかりで図示可能なものはなかった。

時期 時期決定できる遺物の出土はないが、方形周溝墓を構築する前段階に掘削された区画溝であると考えられることから、この付近の方形周溝墓SZc29、SZc33、SZc34のうち、一番古くとなると考えられるSZc33のⅢ-3期以前になると思われる。

SDc130 (図322)

検出状況 09_13地点南東部、V層上面で検出したが、IV層を除去したところで色や土質がV層によく類似した土が起伏を持って現れ、マウンド状の高まりとなった。このため方形周溝墓の可能性を考え、マウンド状の高まりを墳丘部と捉え、その周囲に周溝を探したが、確認が困難であった。そのためサブトレンチを先行して掘削し、溝の範囲や切り合い関係を把握した。最終的には、溝が巡らないことから方形周溝墓としての可能性は考えられず、溝状遺構と判断した。マウンド状の高まりもSDc130とは関連がなく、土層堆積からその一部がSZc35に伴うものと判断した。発掘区外へ延びるため全体形状は不明であるが、東西方向の溝状で自然流路NRc1に注ぐように掘削された位置となる。溝

SDc130

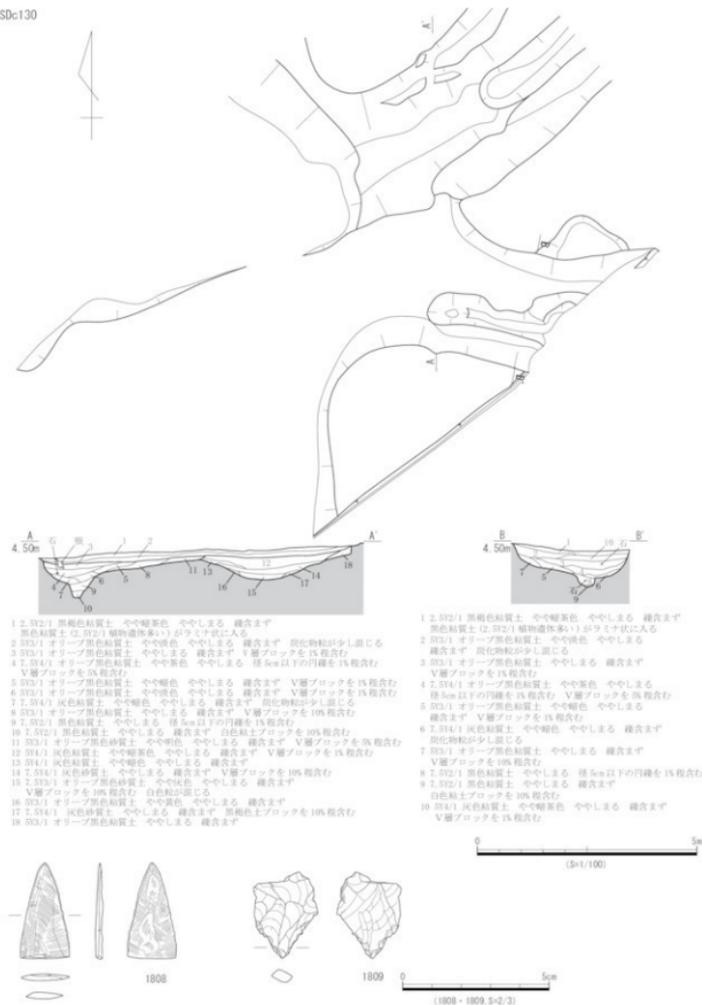


図322 SDc130

底には段を持って深くなる部分があり、水流によって抉られた可能性が考えられる。埋土は9層に分層したが、ほぼ水平堆積で、自然堆積であると思われる。

遺物出土状況 埋土中に土器片が19点出土したが、小片のみで図示可能なものはなかった。その他、石器類では磨製石鏃が1点、石鏟が1点出土した。

出土遺物 1808は泥岩製の磨製石鏃で、基部は抉りがなく直線的である。1809は石錐で、使用のため先端が摩耗する。

時期 時期決定できる遺物の出土がないが、SZc35の溝を覆うマウンド状の高まりを掘り込むため、SZc35の構築時期であるIV期以降のものと考えられる。

溝列 (図323)

検出状況 09_13地点発掘区北部の方形周溝墓SZc22の方台部上に、鋤溝状の遺構SDc121～SDc125を確認した。まとめて溝列として報告する。調査時はV層上面と考えたが、検出した場所が墳丘が残存する方形周溝墓の墳丘部であり、第1面調査時にはIV層の堆積していない場所であったため、III層基底面の遺構とする。鋤溝状の遺構は09_12地点のIV層上面で検出した水田の耕作土を除去したV層上面や08_12地点の方形周溝墓の方台部内でも検出されており、この発掘区で検出した溝列も耕作に伴う溝状遺構と思われる。溝列は、東西方向又は南北方向の細長く非常に浅いもので、直角に交わる。埋土は単層で、V層ブロックを少し含む黒褐色土であることから、人為堆積の可能性が高い。周辺に区画を示すような畦畔は確認されなかった。

遺物出土状況 溝列で合わせて15点土器が出土しているが、すべて小破片であり、図示可能なものはなかった。

時期 第2面で調査を行った遺構であるが、前述したように09_12地点と08_12地点で検出されたものと同様の鋤溝状の溝状遺構であることから、古代以降の可能性が高いと思われる。

NRc1 (図324～図347)

検出状況 NRc1はC地区西部、地形がもっとも低くなる場所を流れる自然流路であり、07.2・3地点・09.11・13地点の範囲では、09_13地点南部、07.2地点、09_11地点にかけてのV層上面で検出した。自然流路に当たる部分はIV層上面から凹んだ状態となっており、V層上面では明瞭に確認できた。

溝列

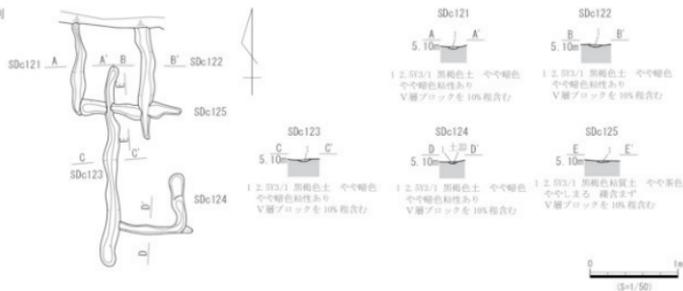


図323 溝列 (SDc121～SDc125)

09_13地点南部では流路左岸の肩を、09_11地点では流路兩岸の肩をそれぞれ検出しており、川幅は40m以上、深さは最大で約2mとなる。C地区全体で見ると、位置関係や堆積状況、遺物出土状況から、94年度発掘区北部及び11_9地点で検出した自然流路と同一のものであると考えられる。そこから09_13・11地点へ向かって流れていると推定できることから、大きくは遺跡の西部を北西から南東方向に流れていると考えられる。なお、国道21号線を挟んで北側のB地区11_4地点においても自然流路

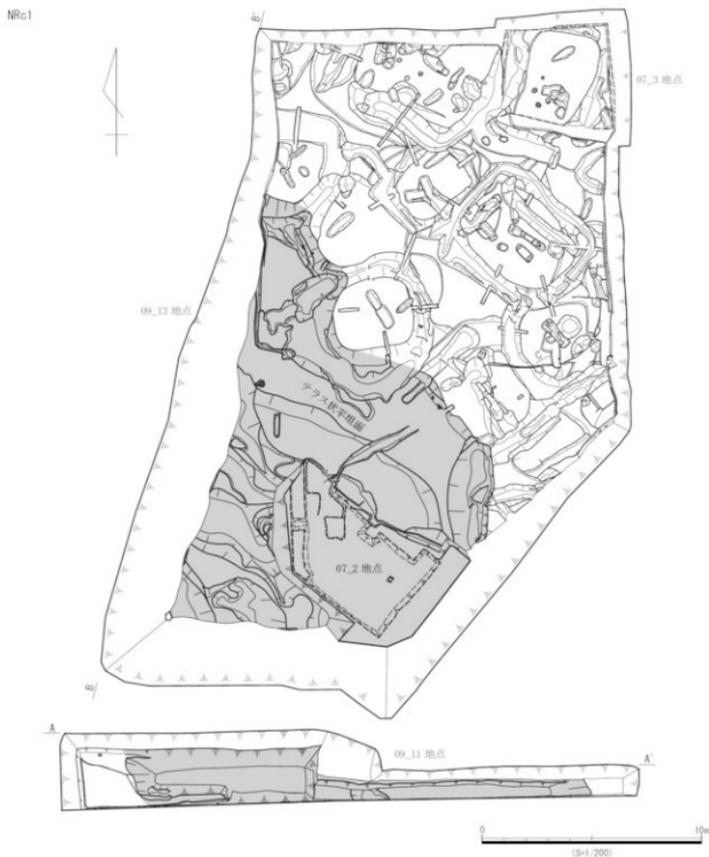


図324 NRc1 (1)

を検出しているが、同一の自然流路となるかは不明である。09_13地点においては、NRc1左岸肩部の微高地の川沿いに弥生時代中期の方形周溝墓が造営されており、その微高地から流路の落ち込みにかけての間にテラス状の平坦面がある。この平坦面には、基盤となる砂礫層の上に砂層が堆積しており、自然流路がオーバーフローした際に運ばれてきた砂が堆積したものと思われる。この砂層からは弥生時代前期の遺物が出土していることから、弥生前期までに堆積したと思われる。その後この平坦面には、方形周溝墓の溝の掘り込みが確認できたほか、Ⅱ期の土器棺墓Sz636も検出したことから、弥生時代中期には離水しており、土地利用が可能になっていることが分かる。また、この平坦面には根株が出土しており、樹種同定をおこなったが、アカガシ亜属とエノキ属であった（第5章第6節）。その後、弥生時代後期初頭までに、自然流路の深くなる部分に砂礫が堆積し、その後は水流が減少するとともに滞水し、この平坦面にも浸水が始まって次第に湿地化したと思われ、粘質土が堆積する。最上部の堆積は植物遺体を多量を含む腐食土層となっており、最終的には凹みとなった湿地に多くの植物が繁茂し、完全に埋没したと考えられる。埋土は各地点で多くの分層を行っているが、堆積している土の状況から、大ききくは三分で、出土遺物においても時期差を認めることができる。1つめは、下部の砂礫層を中心とした堆積（流路下部砂礫層）である。この層は、09_11地点では北壁土層図41層で、遺物取り上げ時の区分はf層に対応する。09_13地点では、西壁土層図61層から83層で、遺物取り上げ時の区分はk層・1層に対応する。下部の砂礫層下位には、ベンガラと考えられる赤色粒が多く含まれており、09_11地点では帯状に観察できるほどであった（第5章第12節）。07_2地点では、遺物取り上げ時の区分はj層から1層に対応する。流路の底面は灰色粘土層となるが、水流による凹凸があり、09_13地点西壁土層では、砂礫層が切り合うように観察できることから、何度か水流の位置が変化していることが分かる。なお、流路底面の灰色粘土層に含まれる植物について年代測定を行ったが、縄文時代後期後葉の範囲を示した（第5章第3節）。2つめは、09_13地点における左岸肩部、微高地から流路の落ち込みにかけての間にテラス状の平坦面に堆積する砂質土層・砂層（流路岸辺テラス部）で、遺物取り上げ時の区分は南半部調査時のc層・d層・h層・j層・m層からo層に対応する。3つめは、上部の薄い砂層を間に挟みながら、植物遺体を多量を含む粘質土が幾重にもなっている堆積（流路上部粘質土層）で、最上層は植物を多量に含んだ腐食土層となる。この層は、09_11地点では北壁土層図18層から40層で、遺物取り上げ時の区分はa層からe層に対応する。09_13地点では、西壁土層図19層から60層で、遺物取り上げ時の区分は北半部調査時のa層・b層、南半部調査時のa層・b層・e層からg層・i層に対応する。なお、09_13地点北半部調査時の遺物取り上げ区分であるd層からi層は、整理作業の段階で、Sz24の南溝埋土として判断した。07_2地点では、遺物取り上げ時の区分はg層からi層に対応する。

遺物出土状況 埋土中からは多量の遺物が出土した。下部の砂礫層からは縄文時代晩期～弥生時代中期の土器が出土しており、縄文時代晩期の土器は摩滅したものが多く、弥生時代前期から中期の土器は破片が比較的大きく、摩滅も少ない。中にはあまり移動したようには見えない破片もある。砂礫層の観察から切り合い関係が認められたことから、水流の時期差を土器と合わせて検討したが、出土した土器からは明確に時期差を明らかにすることはできなかった。なお、摩滅したものであるが縄文時代中期の土器が1点出土した。上部の粘質土層からは弥生時代後期の土器が、さらにその上層からは古墳時代前期の土器を中心として、多くの木製品が出土した。07_2地点においては、砂礫層の上

A-A' 断面 (09_11 地点北壁)

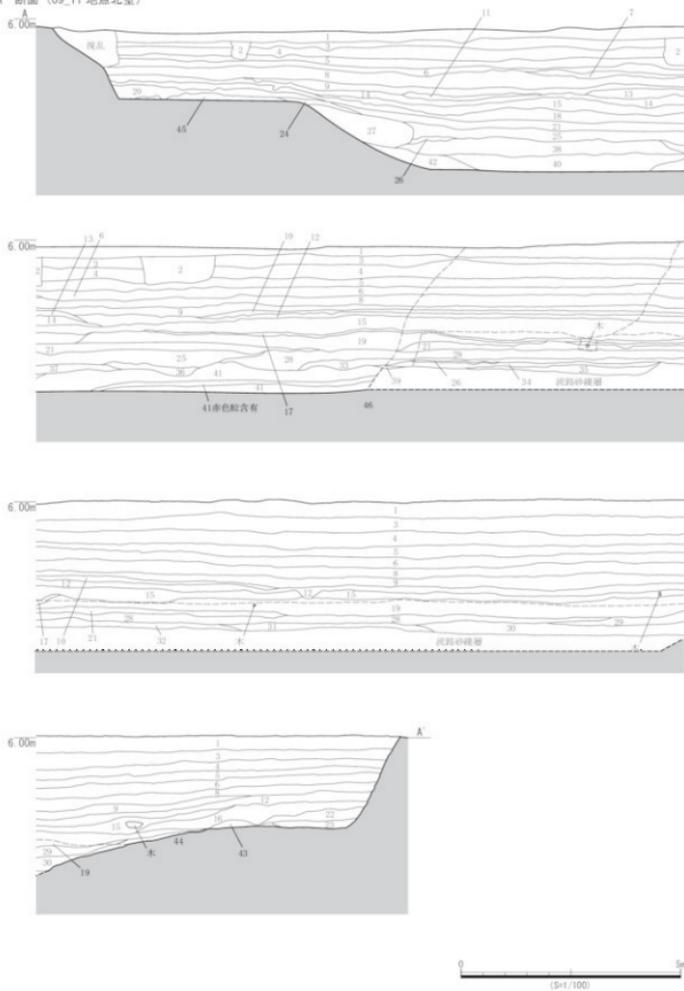


図325 NRc1 (2)

4.4 注記

- 1 204/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで 鉄分沈着あり 1層 (1×層は連続で削片)
 2 1013/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草まで 鉄分沈着あり
 3 7.53/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草まで 鉄分沈着あり
 4 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 径10mm以上の円錐を1枚含む 白色粒が少し混じる
 5 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで 灰色粘質シルトと植物遺体をフタに含む部分あり 灰色粒が少し混じる
 6 2.53/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで
 7 2.53/1 黒褐色粘質土 ややしまる 雑草まで 薄く植物遺体のフタもあり
 8 204/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで
 9 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで 白色粒が少し混じる
 10 2.53/1 灰色粘質土 2.53/1 黒褐色粘質シルトのフタ (4層まで連続あり) しまり強い
 11 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで 砂と黒色土のフタを部分的に含む (10層以上連続あり)
 12 2.53/1 黒褐色粘質土 しまりやや強い 雑草まで 砂鉄ブロックを10%含む
 13 204/1 灰色粘質土 灰色粘質土のフタ しまり強い 植物遺体が多く混じる
 14 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 1013/1 黒褐色粘質土 (やや暗色) とフタになる 上部が積み上がったような土層の高れあり 雑草まで
 15 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで 植物遺体が混じる (西半部少なく 東半部多い)
 16 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 雑草まで 植物遺体が多く混じる
 17 1012/1 黒褐色粘質シルト やや暗褐色 土 2.53/1 黒褐色粘質シルトのフタまで
 18 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗褐色 しまり強い 雑草まで 植物遺体が混じる
 19 2.53/1 黒褐色粘質土 しまり強い 植物遺体がフタに堆積 黒褐色粘質土(17層と5層)が連続に堆積
 20 2.53/1 灰色粘質土 やや暗褐色 ややしまる 径5mm以下の円錐を1枚含む 黒褐色土ブロックを30%含む
 21 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草まで 灰色粘質土ブロックを30%含む
 22 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 雑草まで 植物遺体が多く混じる
 23 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 雑草まで 植物遺体が多く混じる 灰色土ブロックを30%含む
 24 204/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円錐を1枚含む
 25 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円錐を1枚含む 植物遺体が混じる
 26 2.53/1 黒褐色粘質土 しまり強い 植物遺体の堆積
 27 2.53/1 灰色土 しまり強い 雑草まで 径5mm以下の円錐を1枚含む
 28 204/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 径5mm以下の円錐を1枚含む 西半部が多く混じるが東半には少なく白色粒が少し混じる
 29 2.53/1 黒褐色粘質土 しまりやや強い 雑草まで 植物遺体が少し混じる
 30 204/1 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 径5mm以下の円錐を1枚含む
 31 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 雑草まで 植物遺体が多く混じる
 32 1012/1 灰色粘質土 ややしまる 粗砂が混じる
 33 204/1 灰色粘質土 ややしまる 雑草まで 植物遺体が混じる
 34 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円錐を1枚含む 粗砂が混じる
 35 204/1 オリーブ黒色粘質土 しまり強い 下部砂鉄 植物遺体がフタに混じる
 36 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまり強い 下部砂鉄 植物遺体がフタに堆積
 37 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 しまり強い
 38 2.53/1 灰色粘質土 やや暗色 しまり強い
 39 204/1 灰色粘質土 やや暗色 しまり強い
 40 2.53/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 径3mm以下の円錐を5枚含む 植物遺体が多量に混じる
 41 砂鉄 上部が細かく下部は粗い層 (径約0.6mm) 中央に赤褐色を含む部分あり
 42 砂鉄 上部は粗く下部は細い層 (径約0.6mm) 中央に赤褐色を含む部分あり
 43 2.53/1 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや強い 雑草まで
 44 204/1 灰色粘質土 ややしまる 雑草まで
 45 7.53/1 灰色粘質シルト V層
 46 7.53/1 灰色粘質土 ややしまる 雑草まで 植物遺体が薄くフタに混れる

図326 NrC1 (3)

部に堆積した粘質土層 (遺物取上 i 層～ j 層) において、弥生時代後期前半と思われる土器がまとまって出土した。ほぼ完形の壺1913と甕1934が i 層から、破片ではあるものの狭い範囲から高坏1942と1945が j 層から出土し、NrC1の水流が減少し埋没環境が変化した時期を示すと思われる。木製品は自然流路の中央付近から出土することや、付近に加工場と思われる遺構やそれに伴う遺物などが検出されていないことから、その多くは増水時などに上流から流れてきたものや、この場所に廃棄されたのではないかとと思われる。また、最上層として掘り下げた腐植土層からは、古代から中世の土器や木製品も出土した。

出土遺物 1810～1896は、流路下部砂礫層から出土した縄文時代晩期からⅢ期の土器である。1810～1816は縄文時代晩期の土器である。1810は鉢と想われ、外面に沈線による施文、内面に凹線を1条施す。1811は浅鉢で、口縁部がく字に屈曲する。1812～1816は深鉢で、1812は口縁部外面に刻みを付けた突帯を巡らす。摩擦が激しい。1813は口縁部部からやや下がった位置に突帯を巡らせ押圧する。外面は二枚貝条痕調整である。1814は口縁部外面に素文の突帯を巡らす。口縁部内面には沈線を1条施す。摩擦が激しい。1815は口縁部外面に刻みを付けた突帯を巡らす。摩擦している。1816は口縁部部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、二枚貝で刻む。1817～1859はⅠ期の壺である。1817～1824は口縁部から頭部にかけての破片である。1817・1818は口縁部が外反して短く開き、頭部に太い沈線を施す。1819は口縁部が外反して大きく開き、頭部に細い沈線を4条施す。1820は口縁部が外反して開き、削り出しによる段を施す。1821・1822は口縁部が外反して短く開き、頭部に沈線を1条施す。

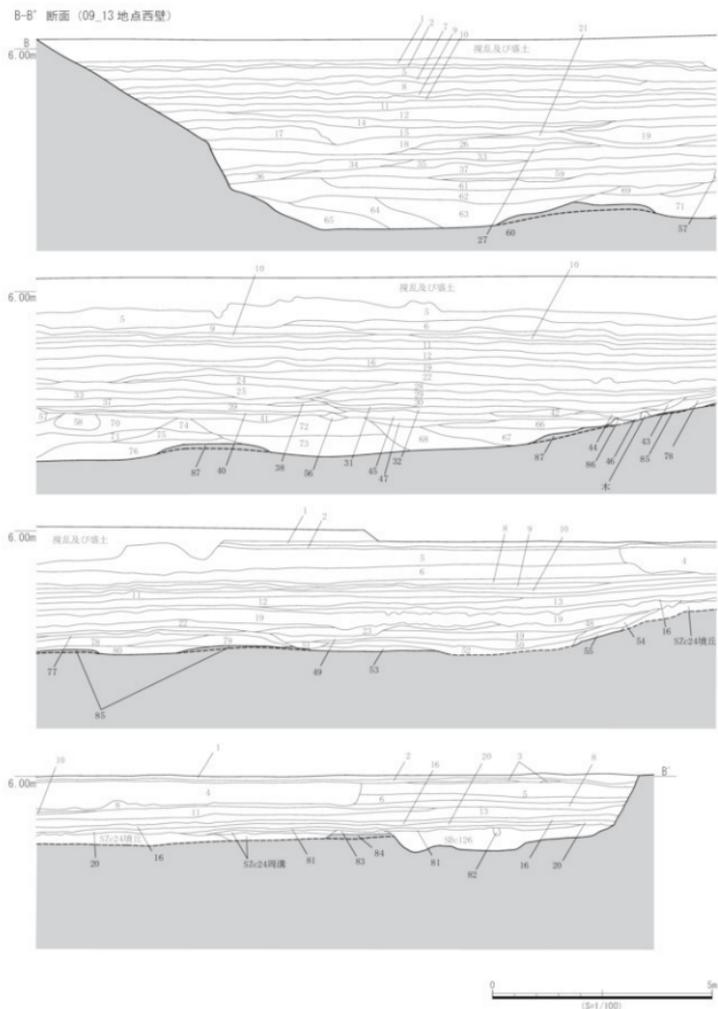


図327 NRc1 (4)

B-47 注記

1. 07(1) 灰色粘質土 しまり強い 確実まず I-a層
2. 07(2) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 しまり 砂分少し沈着 I-b層
3. 07(3) 黒褐色砂質 しまり強い 径5mm以下の円礫を含む
4. 09(1) オリーブ黒色粘質土 ややしまる 確実まず 黒色土ブロックを多数含む
5. 10(1) オリーブ黒色粘質土 ややしまる 確実まず 砂分沈着強い I-a層
6. 08(1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず 上部に砂分沈着
7. 07(4) 灰色粘質土 やや暗色 しまり強い 確実まず 砂分沈着あり
8. 07(2) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 灰色土ブロックを30%含む
9. 07(4) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 上部に植物遺体を含む 黒色土ブロックを10%含む 07-2地点B層の下位部
10. 07(2) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 植物遺体がラミナ状に堆積 07-2地点B層
11. 07(1) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 植物遺体が認められる 下層との境界は線粒性の 07-2地点A層
12. 07(4) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 植物遺体が認められる 下層との境界不明瞭 植物遺体の侵入程度の違い 07-2地点A層
13. 07(3) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 堆積りもしまりが弱い層を含む
14. 07(1) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 黒褐色シルト・植物遺体がラミナ状に認められる
15. 07(3) 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 黒褐色シルト・植物遺体がラミナ状に認められる
16. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 黒褐色を含む
17. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
18. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
19. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
20. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
21. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
22. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
23. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
24. 07(2) 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
25. 07(2) 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
26. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
27. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 堆積性堆積
28. 07(3) 灰色粘質土 ややしまる 径3mm以下の円礫を1%含む 粗砂が認められる
29. 07(2) 灰色粘質土 ややしまる 確実まず 植物遺体がラミナ状に認められる
30. 07(1) 灰色粘質土 ややしまる 径3mm以下の円礫を1%含む 粗砂が認められる
31. 07(2) 灰色粘質土 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
32. 07(2) 灰色粘質土 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 自然色が認められる
33. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 自然色が認められる
34. 07(1) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
35. 07(2) 灰色粘質土 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い 自然色が認められる
36. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
37. 07(4) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
38. 07(2) オリーブ黒色砂質土 やや暗色 しまりやや弱い 径2mm以下の円礫を20%含む 粗砂が多量に認められる
39. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 粗砂が多量に認められる
40. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 粗砂が多量に認められる
41. 07(2) 黒褐色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径3mm以下の円礫を40%含む 粗砂が認められる
42. 07(2) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径3mm以下の円礫を20%含む 植物遺体が多い
43. 07(2) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径3mm以下の円礫を20%含む 植物遺体が多い
44. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径3mm以下の円礫を10%含む 植物遺体が多い
45. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまり強い 上部に灰色砂質ブロックのたこみあり 径10mm以下の円礫を1%含む 粗砂が認められる
46. 07(2) オリーブ黒色粘質土 しまり強い 径5mm以下の円礫を40%含む 粗砂が認められる
47. 07(2) オリーブ黒色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を10%含む 粗砂が認められる
48. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまり強い 確実まず 植物遺体がラミナ状に堆積 上部に2段階のたこみ(部分的)のある
49. 07(2) 灰色粘質土 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
50. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
51. 07(2) 灰色粘質土 ややしまる 径3mm以下の円礫を30%含む 砂が主体
52. 07(3) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
53. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 確実まず 植物遺体が多い
54. 07(1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず 植物遺体が多い
55. 07(3) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず 堆積性堆積が少し認められる
56. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず 堆積性堆積が少し認められる
57. 07(2) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む 粗砂が主体
58. 07(3) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む 粗砂が主体
59. 07(2) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む 粗砂が主体
60. 07(1) オリーブ黒色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を40%含む 粗砂が主体
61. 07(1) オリーブ黒色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を40%含む 粗砂が主体
62. 07(4) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む
63. 07(4) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む
64. 07(1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫と粗砂による
65. 07(1) オリーブ黒色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む
66. 07(4) 灰色粘質土 しまり強い 径5mm以下の円礫を30%含む 粗砂が主体
67. 07(1) オリーブ黒色粘質土 しまりやや弱い 径10mm以下の円礫を40%含む 粗砂が主体
68. 07(4) 灰色粘質土 しまり強い 径10mm以下の円礫を30%含む 粗砂が主体
69. 07(4) 灰色粘質土 しまりやや弱い 確実まず
70. 07(4) 灰色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径10mm以下の円礫を30%含む 粗砂が主体
71. 07(4) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を20%含む 粗砂が主体
72. 07(1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径10mm以下の円礫を40%含む 粗砂が主体
73. 07(1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 しまりやや弱い 径10mm以下の円礫を40%含む 粗砂が主体
74. 07(4) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を30%含む 粗砂が主体
75. 07(3) 黒褐色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を15%含む 粗砂・黒色シルトがラミナ状に認められる
76. 07(4) 灰色粘質土 しまりやや弱い 径5mm以下の円礫を10%含む 粗砂が主体
77. 07(4) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円礫を40%含む 粗砂が主体
78. 07(2) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円礫を20%含む 粗砂が主体
79. 07(2) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円礫を10%含む 粗砂が多量に認められる
80. 07(4) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円礫を30%含む 粗砂が主体
81. 07(1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず 20層の積み込みによる黒色土ブロックを30%含む
82. 07(2) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず 自然堆積が多量に認められる
83. 07(4) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 確実まず
84. 07(4) 灰色粘質土 V層
85. 10(1) 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 径10mm以下の円礫を40%含む
86. 07(4) 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 径10mm以下の円礫を30%含む 粗砂が主体
87. 07(4) 灰色粘土 ややしまる 確実まず 変化した植物遺体をラミナ状に含む

1823は口縁部が外反して短く開き、頸部に太い沈線を3条施す。1824は口縁部が外反して短く開き、頸部に細い沈線を2条施しているが、ミガキによって消滅しかかっている。1825～1829は口縁部から頸部にかけての破片である。1825は口縁部が外反して開き、頸部に削り出しによる突帯若しくは段を施す。1826は口縁部が外反して開き、頸部に削り出しによる突帯を施し、突帯上と両側に沈線を施す。1825・1826の口縁部には穿孔がある。1827は口縁部が外反して開き、頸部に削り出しによる突帯を施し、突帯上に太い沈線を2条施す。1828は口縁部が外反して開き、頸部に貼り付けによる突帯を施す。1829は口縁部が外反して開き、頸部に削り出しによる突帯を施す。1830・1831は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部が外反して開く。1832は口縁部が外反して開き、頸部を削って口縁部側を一段高くしているが、段は不明瞭である。1833は口縁部が外反して開き、口縁端部に沈線を巡らす。頸部には刻みを付けた突帯を施す。1834は口縁部が外反して開き、口縁端部に沈線を巡らす。頸部には削り出しによる段を施し、段を作った上に沈線を加えている。口縁部に2個一対の穿孔がある。1835は口縁部が外反して開く無文土器である。1836は頸部の上を削り出し突帯で両端に沈線を回す。その下を3条の沈線で区画し、頸部には縦位沈線、上胴部には連弧文を施す。1837は口縁部は短く外反し、頸部に断面三角形の貼り付けによる突帯を1条巡らせる。口縁端部には沈線を施し、胴部上半に沈線2条を施す。1838は口縁部が外反する大型の壺で、頸部及び上胴部に削り出しによる段を施す。1839は条痕文系の壺で、口縁端部に刺突を施す。外面は二枚貝条痕調整である。1840は条痕文系の壺で、

C-C' 断面 (テラス状平坦面)

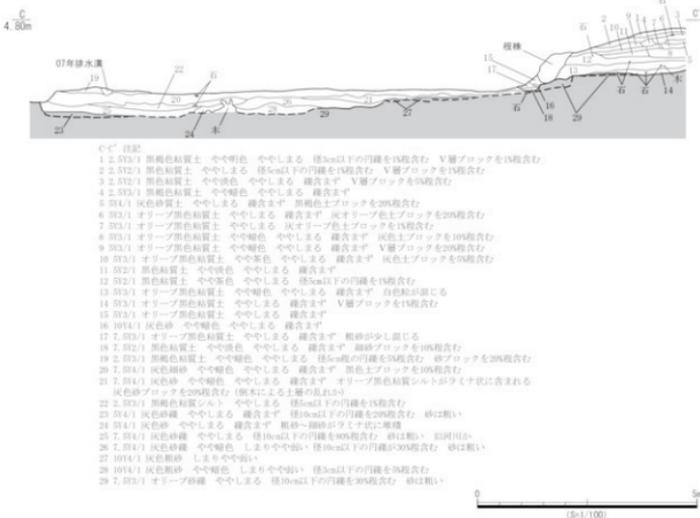


図329 NRc1 (6)

口縁端部に刻みを入れ、外面に刻みを付けた突帯を巡らす。1841は頸部片で、沈線を施す。1842～1847は胴部片である。1842は沈線による連弧文を施す。1843は削り出しによる段を施しているが形骸化しており、その下に沈線を施している。1844は刻みをつけた突帯を3条貼り付けている。1845は最大径の位置の上部に貼り付けによる突帯を3条巡らす。1846は沈線と貼り付け突帯による溝文を施す。1847は最大径の位置の上に沈線帯を施す。1848は壺の胴部から底部で、平底で胴部は強く張り、肩部に沈線を5条施す。1849～1859は平底の底部片である。1851は底部外面も磨く。1852は大型品である。1853は底面が摩耗している。1854は胴部に対して底部の器壁が薄い。1855は底面の摩滅が激しい。1858・1859は凹み底の底部片で、1858は外面は削り調整、1859は底部から胴部が開く。1860～1874はI期の甕である。1860～1872は口縁部から頸部にかけての破片である。1860は口縁部がやや開き、口縁端部に刻みを施す。器面は二枚貝条痕調整する。1861は口縁部が外反し、口縁端部に刺突を施す。外面調整は条痕調整である。1862は口縁部が外反し、端部に刻みを施す。頸部と胴部の境界に段を持つ。1863は口縁部が外反し、端部に刻みを施す。頸部に沈線を施す。1864は緩やかに外反する口縁部で、端部に刺突を施す。外面は二枚貝条痕調整である。1865は口縁部が強く外反する甕で、胴部の張りが無い。1866は口縁部が外反して開き、端部に刻みを施す。頸部には太い沈線を2条施す。1867は口縁部が大きく外反して開き、端部に刻みを施す。頸部には沈線を施す。1868は口縁部が外反し、口縁端部に半裁竹管状工具による刻みと頸部に沈線を2条施す。1869は口縁部が外反し、口縁端部に板状工具で刻む。頸部に沈線を2条施す。外面には煤が付着する。1870は条痕文系の甕で、口縁部外面に刻みを付けた突帯を巡らす。胴部外面は二枚貝条痕調整である。1871は口縁部が直口する甕で、二枚貝条痕調整を施す。1872は亜流遠賀川系の口縁部が外反する甕で、半裁竹管によって口縁端部を刻み、頸部に沈線を4条施す。1873は口縁部が外反し、口縁端部を刻み、頸部に沈線を1条施す。古手ものであると思われる。1874はやや凹み底となる底部片で、底部外面は削り調整、胴部外面は削り後ハケ目調整されている。1875・1876はI期の鉢である。1875は口縁部が外反し、頸部に沈線を3条施す。内外面ミガキ調整である。1876は大型の鉢と思われる。口縁部が緩やかに外反し、外面はハケ目調整、内面はハケ目後ミガキ調整である。1877はI期の土製品で甕底部片の転用かと思われる。ほぼ中央に径1cmほどの穿孔があるが、焼成前に開けられたものと思われ、穿孔を開けた土器底部片を円盤状に打ち欠いた物と思われる。1878はI～III期と思われる不明土製品で、厚い円盤の中央を凹ませた形状である。摩滅の状態から、平坦な面が底面となると思われる。胎土はI期の土器に近い。1879～1883はII期の壺である。1879・1880は壺A類の口縁部片で、口縁部が大きく外反して開く。1879は口縁端部を下方にやや拡張して端部に沈線や刻みを施す。1880は口縁端部に沈線を巡らせ、端部下端に刻みを施す。1881は壺B類で、口縁部が大きく外反して開き、口縁部内面の4箇所指頭による押圧を加え、各指頭押圧間に刻みを施す。頸部外面は櫛描文で埋める。1882は頸部片で、沈線と波状文を施す。1883は平底の底部片で、底部から胴部が外反して立ち上がる。外面は横方向のミガキである。1884～1888はII期の甕で、すべて口縁部片である。1884は口縁部が緩やかに外反し、口縁部内面にD字状の刻みを施す。外面に煤が付着する。1885は口縁部が短く外反し、端部を丸く収める。1886は条痕文系で、口縁部が大きく外反して開き、口縁端部上端に刻みを施す。1887・1888はいわゆる大地式の甕である。1887は外面に沈線による施文、内面に凹線を2条施す。1888は口縁部内面に段を持ち、沈線を施す。口縁部外面には沈線とL状文を施す。1889・1890は内傾口縁土器である。1889は内屈した口

縁部で無文である。1890は口縁部が肥厚し、内側に屈折する。1891～1893はⅢ期の壺である。1891は壺A3類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、屈曲部外面に刻みを施す。1892は壺B類で、口縁部が緩やかに開き、口縁端部に面を持ち櫛描文を施す。頸部にも櫛描文を施す。1893は胴部片のみであるが、最大径の位置に刻みを持つ突帯を巡らせ、上胴部には櫛描文帯と磨消帯を施す。1894～1896はⅢ期の甕である。1894は緩やかに外反する口縁部で、頸部に扁平な突帯を貼り付け、その上を刻む。口縁端部は丸い。1895は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部が強く外反し、口縁端部に刻みを施す。外面の煤の付着は少ない。1896は底部片で、焼成後の穿孔が中央に開けられている。

1897～1907は、流路岸辺テラス部から出土した縄文時代晩期からⅠ期の土器である。1897は縄文時代晩期の深鉢で、口縁部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、二枚貝で押圧する。器面は摩滅している。1898～1901はⅠ期の壺の口縁部片である。1898は口縁部が強く外反して開く無文の壺である。1899は口縁部が外反して開き、頸部に削り出しによる突帯を施す。突帯上に太い沈線が施され、ミガキが丁寧である。1900は口縁部が外反して短く開き、頸部に沈線を1条施す。1901は口縁部が外反して大きく開き、頸部に細い沈線を4条施す。1902はⅠ期の壺の頸部から胴部にかけての破片で、頸部に削り出し突帯を施し、その後沈線を加えている。1903は胴部片で、肩部に沈線を5条施す。1904は小型の無頭壺で、口縁部に2個一対の穿孔を開ける。1905はⅠ期の壺蓋で、比較的扁平なものである。表面に木葉文のくずれかと思われる沈線による文様がある。1906はⅠ期後半と思われる深鉢で、口縁部がやや肥厚して、端部に面を持つ、砲弾形のものである。外面は二枚貝条痕調整である。1907はⅠ期の浅鉢で胴部に丸みがあり、口縁部が外反する。胴部に2条1単位の浮線による菱形の文様を施す。自然流路のため共伴するとははっきり言えないが、この土器と共に09_13地点南半部o層から出土した土器には遠賀川式系ものが混じることから、Ⅰ期と判断した。

1908～1950は、流路上部粘質土層から出土した土器である。1908は縄文時代晩期の深鉢の口縁部で、口縁部からやや下がった位置に突帯を巡らせ、二枚貝で押圧する。1909はⅡ期の広口壺の口縁部で、外反して開く。口縁端部には沈線を1条巡らせて刻みを施す。頸部にも沈線を施す。1910・1911はⅢ-3期の壺である。1910は壺A3類で、口縁部外面には櫛歯状工具による刺突文、頸部から上胴部には櫛状工具による横線文を施す。1911は凹み底の底部からやや外反して胴部が立ち上がり、胴部はやや下位で強く張る。上胴部には櫛描文を施す。1912はⅣ期の壺A1類で、頸部に沈線を施す。1913～1916はⅤ期の壺である。1913は壺B1類で、口縁部が外反し、端部に面を持つ。胴部は中位でやや算盤玉状に張り、底部は平底となる。1914は壺H3類で、口縁部が直口する。1915は壺J1類で、小型の短頸壺である。短い口縁部が立ち上がる。胴部はほぼ中位で張り、平底となる。1916は小型の壺で、口縁部を欠く。ほぼ球形の胴部で、平底である。上胴部には横線文を挟んで波状文を2帯施す。1917はⅥ～Ⅶ期の壺で、胴部に赤彩を施す。上胴部には横線文と刺突文を施す。1918～1920はⅧ期の壺である。1918はいわゆる小型丸底壺で、口縁部はやや内湾して開く。1919は口縁部から上胴部を欠く。底部は突出し、胴部は中位で強く張る。外面には煤が付着している。1920は柳ヶ坪型壺であるが、口縁部外面に粘土帯を貼り付けて端部を下方に拡張し、内外面に羽状刺突を施す。上胴部には横線文と波状文を施す。底部はやや突出した平底である。1921～1924はⅣ期の甕で、1921～1923はA1類、1924はA2類である。1921は口縁部が強く外反し、端部は丸く収める。外面に煤が付着する。1922は口縁部が強く外反し、端部に刻みを施す。胴部はやや上位で張り、外面には叩き調整の痕跡が残る。1923は口縁部が屈曲して開

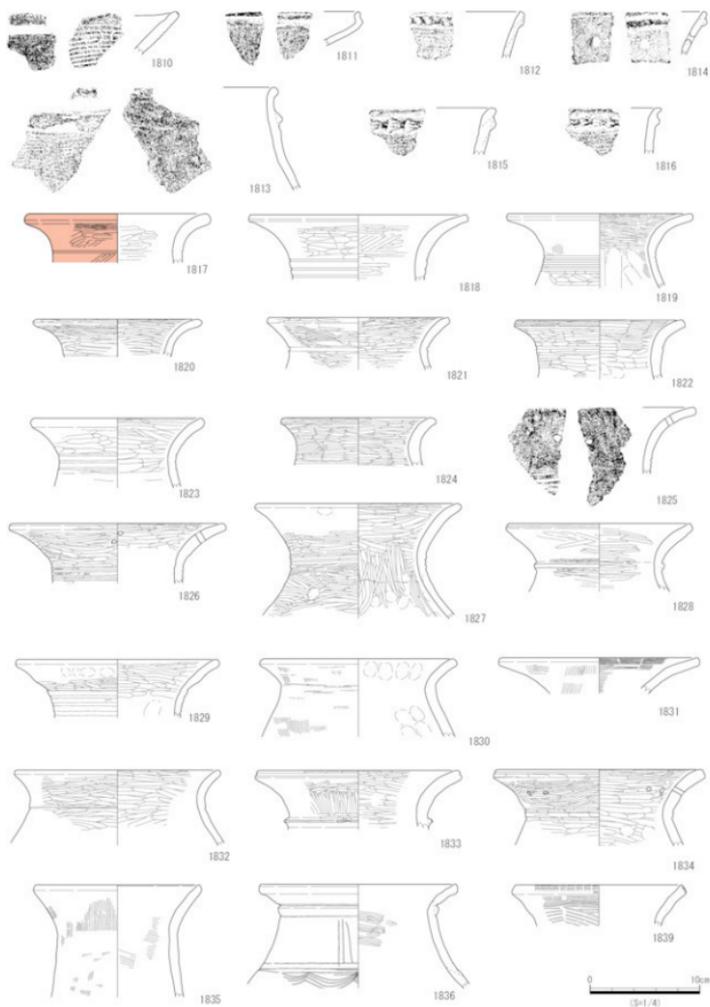


図330 NRc1出土遺物（1）

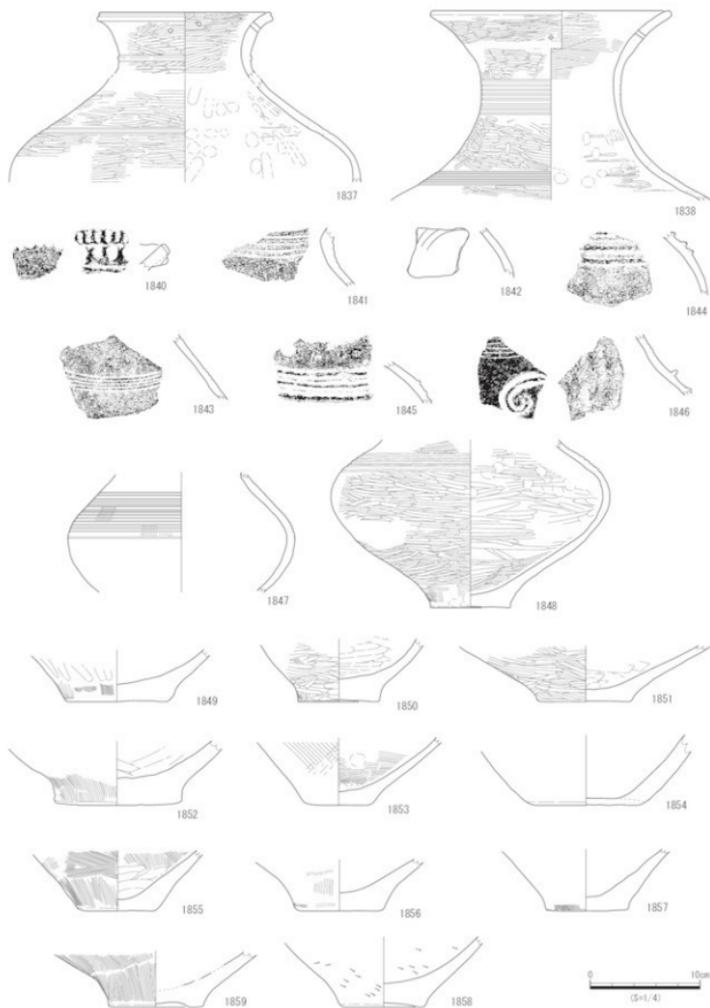


図331 NRc1出土遺物（2）

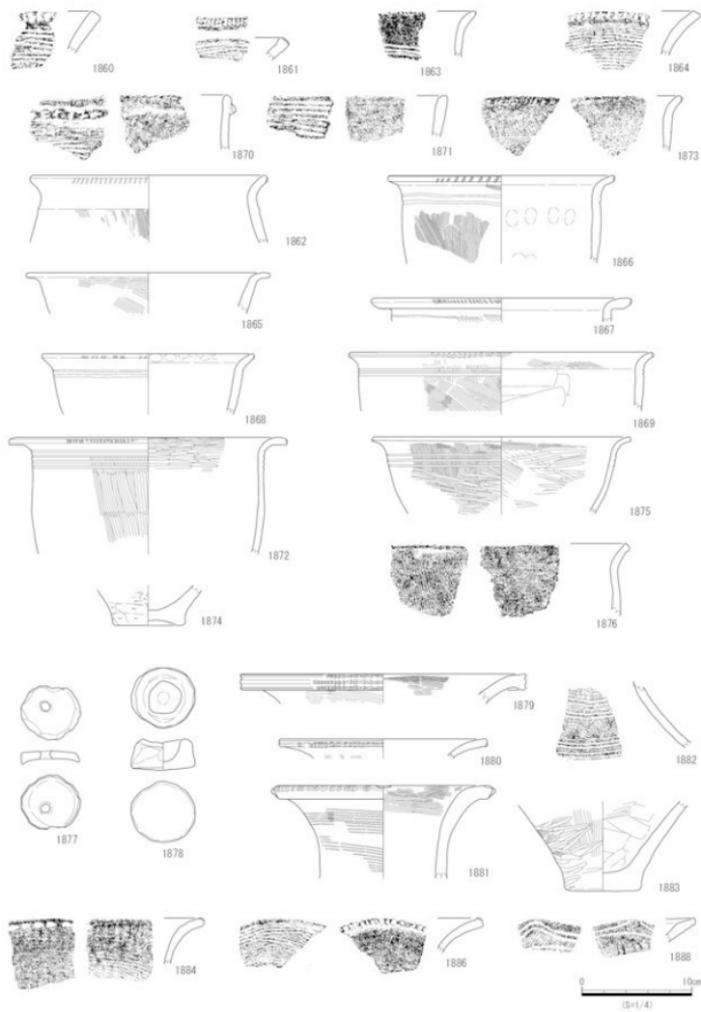


図332 NRc1出土遺物(3)



図333 NRc1出土遺物 (4)

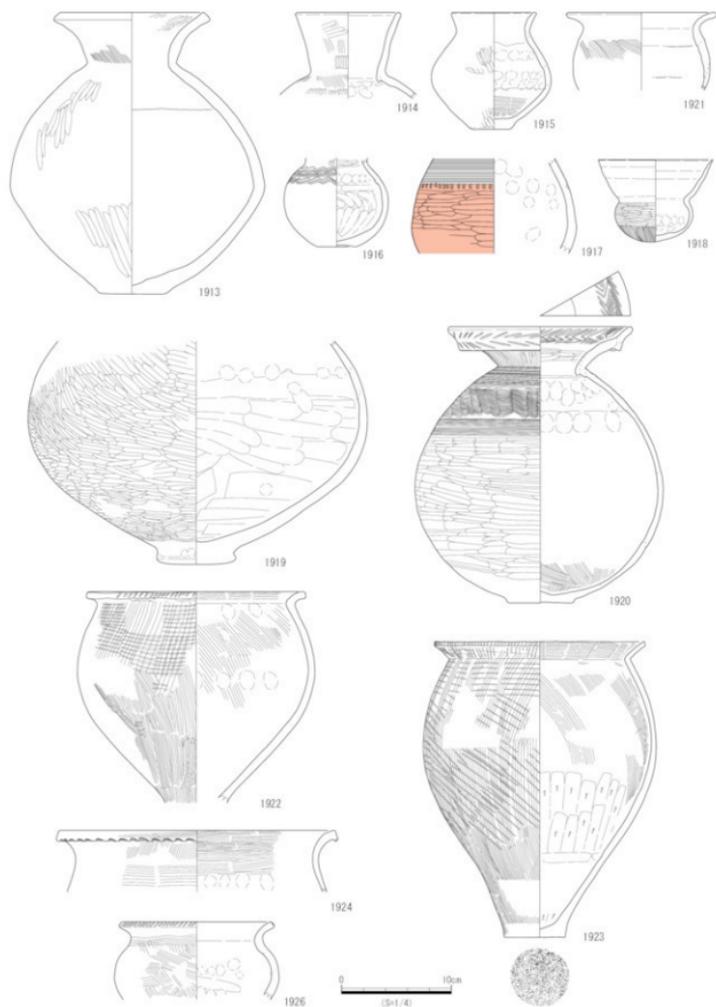


図334 NRc1出土遺物 (5)

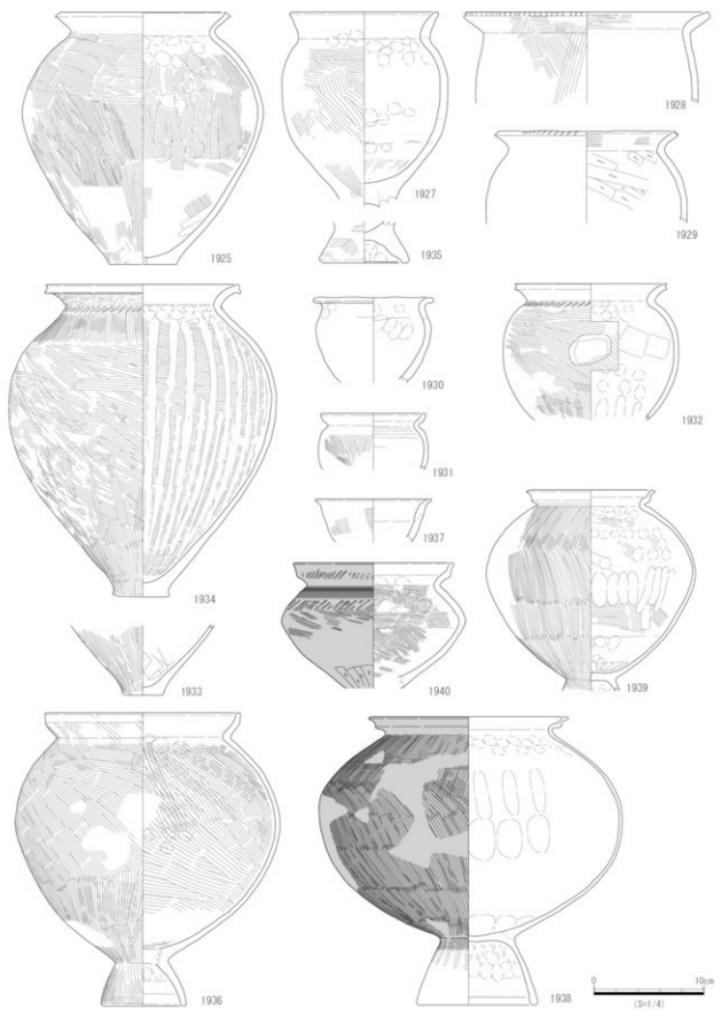


図335 NRc1出土遺物 (6)

き、端部に刻みを施す。胴部はやや上位で張り、外面には叩き調整の痕跡が残る。平底である。1924は口縁部が強く外反して開き、端部が下方に拡張されて面を持つ。口縁端部下端には刻みを施す。外面に煤が付着する。1925～1934はV期の甕である。1925は甕A4類で、口縁端部は強く撫で調整するため、上下に広がる。胴部はやや上位に最大径があり、平底である。外面に煤が多く付着する。北陸系のものか。1926～1928は甕B1a類である。1926は口縁端部に面を持ち、櫛歯状工具による刺突文を施す。1927は台部を欠く。口縁部は緩やかに外反し、胴部の張りは弱い。1928は口縁部は外反して開き、口縁端部に刻みを施す。1929は甕B1b類で、口縁端部に刻みを施す。外面には煤が付着する。1930・1931は甕E類で小型のものである。1930は頸部が強く外反し、短い口縁部が開く。1931は頸部が屈曲し、短い口縁部が内湾して開く。1932～1934は甕F類である。1932はく字甕で、口縁部の横ナデ調整により、口縁端部が凹線状となる。頸部には刺突を施す。1933は平底の底部であるが、調整や胎土から1932と同一個体の可能性がある。1934は1932と同じタイプの土器で、底部は小さい平底で、胴部は中位よりも上で張る。1935はV～VII期と思われる甕の脚台部で、八字に開く。1936はVI期の甕C1類で、外面に煤の付着が激しい。1937はVI～VII期の甕E6類で、小型のものである。胴部の張りはあまりない。1938・1939はVIII期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類である。1938は口縁部上段が外反し、内面に面を持つ。胴部は肩部で強く張り、ヨコハケを施す。1939は口縁部上段が外反し、端部はやや肥厚する。胴部は肩部で強く張り、ヨコハケを消失している。1940はV期の鉢A1類で、口縁部が屈曲して受口状となり、外面に刺突文を施す。肩部にも刺突文を施す。外面には煤が多く付着する。1941はV期の鉢D類で、底部若しくは脚台部を欠損していると思われる。胴部から口縁部が内湾して立ち上がる。口縁端部は粗い調整である。1942～1946はV期の高坏である。1942は高坏B2a類で、坏部上段が外反して立ち上がる。脚裾部が強く外反して開く。1段3方向透かし。1943は高坏H類で、坏部が大きく弧状に開き、脚部も強く外反する。1944は高坏I1a類のワイングラス形のものである。坏底部は水平に開き、胴部が強く湾曲して立ち上がる。口縁部は外反して、端部に面を持つ。脚部は裾部で大きく開く。脚部には横線文を施す。1段3方向透かし。1945・1946は高坏I2類のワイングラス形のものである。1946は口縁部を面取りし、坏部上半には赤彩、下半には黒色の顔料を塗る。1947・1948はVI期の高坏の口縁部である。1947は高坏C2b類で、坏部がやや深く、口縁部がやや内湾する。1948は高坏C3b類で、やや内湾する口縁部の内面を肥厚させ、多条沈線を施す。1949はVII期の高坏D1類で、坏部が大きく開く。1950はIX期の高坏で、坏部が直線的に開き、脚部も強く外反する。1951は中世の小皿で、比較的浅く、口縁部は外反する。底部には高台を付けることから、藤澤編年の4型式と思われる。07.2地点a層での取り上げであり、IV層に対応する層からの出土である。

1952～1957は、流路下部砂礫層から出土した石器である。1952は叩石で、側面下部に敲打痕が見られる。1953～1956は砂岩製の砥石である。1953は板状で表裏に砥面がある。1954は縁辺部の表裏に強い光沢がある砥面がある。1955は平面上の砥面と共に、溝状の砥面がある。敲打痕、被熱が見られる。1956は4方向に砥面があり、一部溝状の砥面も見られる。1957は石棒と思われる。先端を両側から挟るように加工し、尖らせており、その部分には敲打痕が見られる。表面は磨かれており、磨製石斧に転用された可能性がある。1958は流路岸辺テラス部の砂質土層から出土した磨製石斧で、後に打製石斧に転用したものか。1959は流路上部粘質土層から出土した叩石で、端部に敲打痕が認められる。

1960～1963は流路下部砂礫層から出土した木製品である。1960は又鋸の刃の未製品と思われ、表面

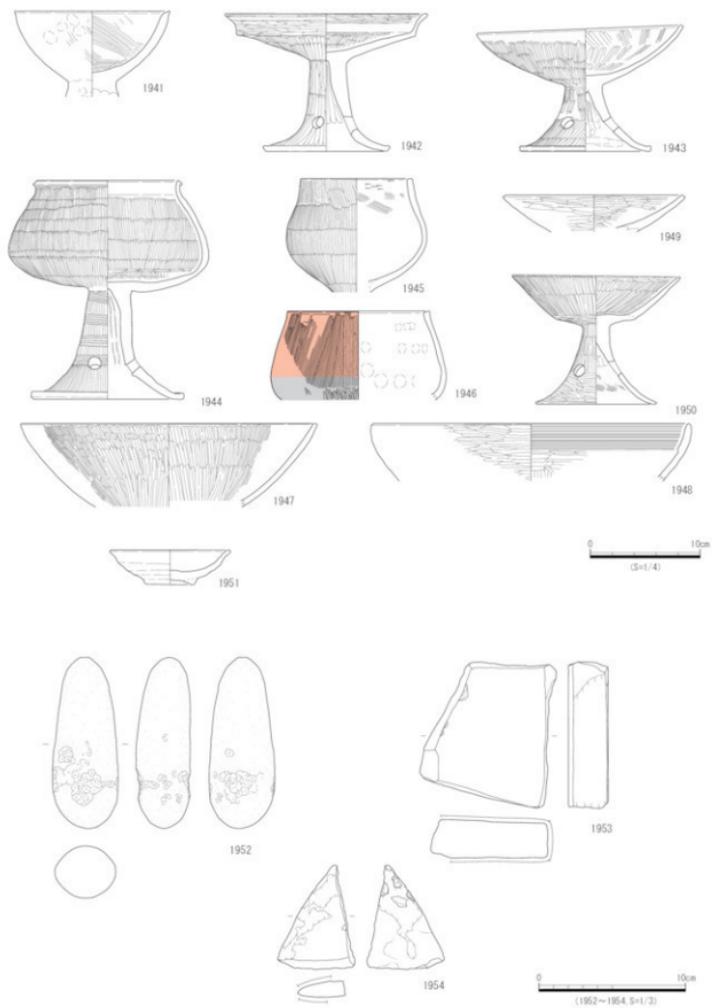


図336 NRc1出土遺物 (7)

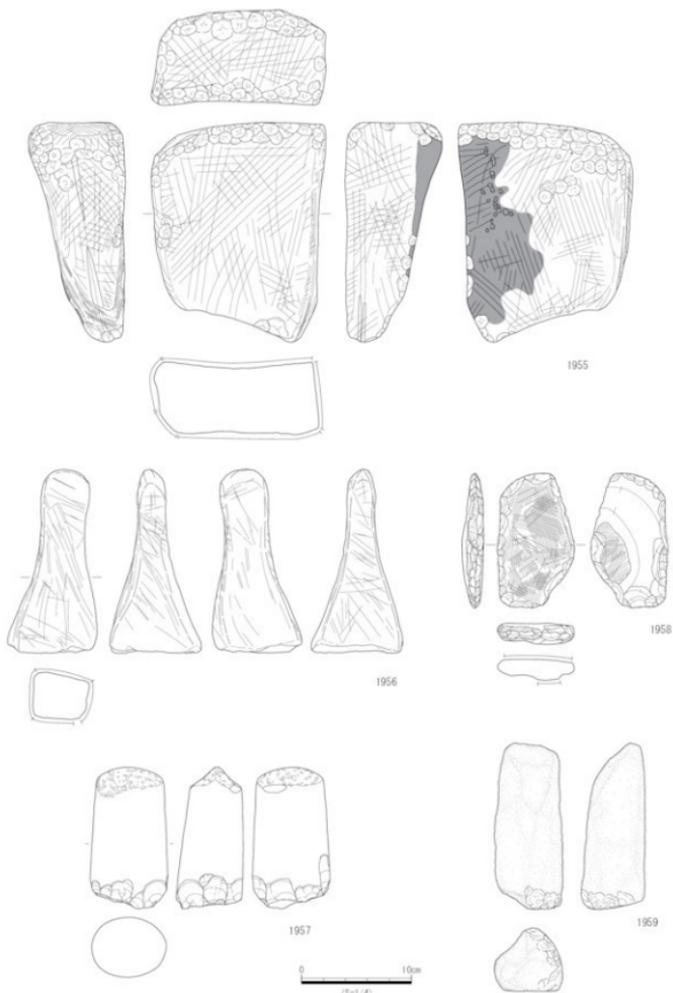


図337 NRc1出土遺物(8)

は縦方向に削り、上部より下部を薄く加工している。1961は列物の槽で、片側半分は欠損している。1962は建築部材の分割板材である。1963は加工材で、分割材の上端、下端を斜めに削って加工している。1964は流路岸辺テラス部の砂層から出土した杓子で、内面に黒漆、外面に黒漆のち赤漆が施してある。1965～2030は、流路上部粘質土層から出土した木製品である。1965は、曲柄銀の突起部分。1966・1967は三つ又銀で、1966は刃の左側全てと、右側、真中は途中から欠損している。1967は刃の部分である。1968は泥除けの一部と思われる。1969は泥除けで下部半分は欠損している。1970は払い銀で、上部が欠損し、使いべりしている。1971は断面蒲鉾形で細長い棒状材で、銀の柄と思われる。表面は面取り加工しており、平滑である。1972は田下駄の足板である。1973は横樋で、円柱状の模様で柄を丸く削りだしている。1974は天秤棒で、上部にコ字型の溝がある。1975は櫛状木製品である。1976～1980は槽の成品・木製品である。1976は大型槽の分割品で、断面方形の角材で下端の一方を削り尖らせている。表面には加工痕が残る平滑に仕上げている。1977は長方形の四脚付き槽で、表面に削り出しによる突起が1個みられる。断面は緩やかな弧を描いている。1978は左側半分以上が欠損している。1979は大型の方形槽で、左側が欠損している。1980は剣抜容器皿の素材で、ミカン割材を平坦に加工している。1981は曲物の側板である。1982は曲物の底板で大型の物である。片側面は欠損している。1983は組物の部材、1984は組物の側板である。1985は番串で、下部は欠損している。1986は剣形の形代である。1987・1988は竿と思われるが、柄の可能性もある。1987は上部に穴があるが、貫通していない。1989は先端にわずかにへこみがあり、その棒先に同様のものを多数を括り付け、振り回して音を出す楽器とされるものと思われる。1990は底部に脚が付く溝があり、椅子と思われるが机かもしれない。大型曲げ物の底板を転用している。1991は火錐白で、うすく炭化している。1992は釣瓶の桶部が欠損したものである。1993・1994は蒸籠状の組物の杵材である。1995～1998は建築部材の柱材である。1995は上方に孔があり、門柱かと思われる。1996は下方と裏面を欠損している。1997は裏面を上方から平らに粗く削っている。右側面に数箇所切りこんだ部分がある。1998は両先端部を欠損している。1999～2001は屋根材である。1999は屋根飾り、2000は破風材と思われる。2001は孔が1つ開く。2002～2004は垂木で、2004は角材を再利用して垂木にしている。2005～2009は横架材である。2006は上部にくびれがある。2007は角材を円柱状に削りだしている。2008は床の横架材であると思われる。2009は先端部付近の側面をコの字に加工している。2010・2011は棧材で、2010は断面台形の細長い棒状材で上下端ともやや細くなるように削って加工している。2011は上部に円孔がある。2012・2013は梯子、2014は床板である。2015～2019はその他の建築部材である。2015は下部を欠損するが、施設部材の固定部かと思われる。2016は縦に方形の孔が5つあり、杵材かと思われる。2017は先端部が欠損するが、壁材か杵材であろう。2018・2019は壁材で、2018は全体にゆるい曲線となる。2019は縦方向に穿孔が3箇所ある。2020は土木部材で杭、2021は器具部材であるが、器種は不明である。2022は木樋で右側下部を欠損している。2023～2026はその他の部材の構造部材である。2023は中央に方形の孔が開いており、上方に向かって幅が細くなる。2024は構造部材の固定部、2025は上部が有頭状に加工されたもので、垂木の再利用品である。2026は角材で下部が炭化している。2027～2029は加工材の板材である。2027は孔が4つ見られる有孔板、2028・2029は整形板材である。2030は加工材の棒材で、先端が尖る。2031～2044は、07_2地点a層からf層及び09_11地点15層での取り上げであり、流路最上層となるIV層に対応する層からの出土である。2031は田下駄で、

輪標型田下駄か。2032は列物で、古代の盤である。轆轤で整形している。2033は指物箱物容器の部材で、裏面は全体的に炭化している。2034は平面は塊状で、円形孔が9個ある。曲物の底板を櫃として再利用している。2035～2038は棧材と思われる。2039は加工材の板材で、厚板である。上下両端に切断の加工痕がある。2040は加工材の棒材で、断面方形の細い角棒状材を使用し、中央をコの字状に大きく削り取っている。中心ラインに沿って釘穴が、6個並んでおり、釘が4箇所残っている。2041はその他の加工材で用途不明品である。薄く加工され、周縁を面取りしている。2042～2044は加工材の残材である。2042は扁平な板材で、上下端を欠損している。側辺を弧状に挟り、中心には7mmの円孔が貫通している。2043は表面、裏面共に加工痕がみられる。左側縁部を斜めに加工している。2044は上下両端を斜めに加工している。

時期 下部の砂礫層から出土する遺物は、縄文時代晩期～弥生時代中期のものであり、この時期には水流があったものと思われる。弥生時代後期以降、水流が弱くなり、湿地化していき、ほぼ埋没するのは古墳時代前期頃と思われる。

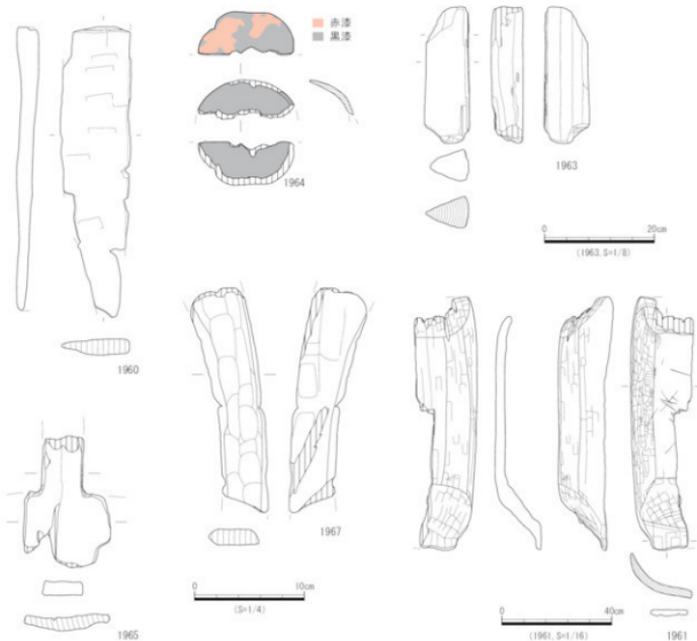


図338 NRc1出土遺物(9)

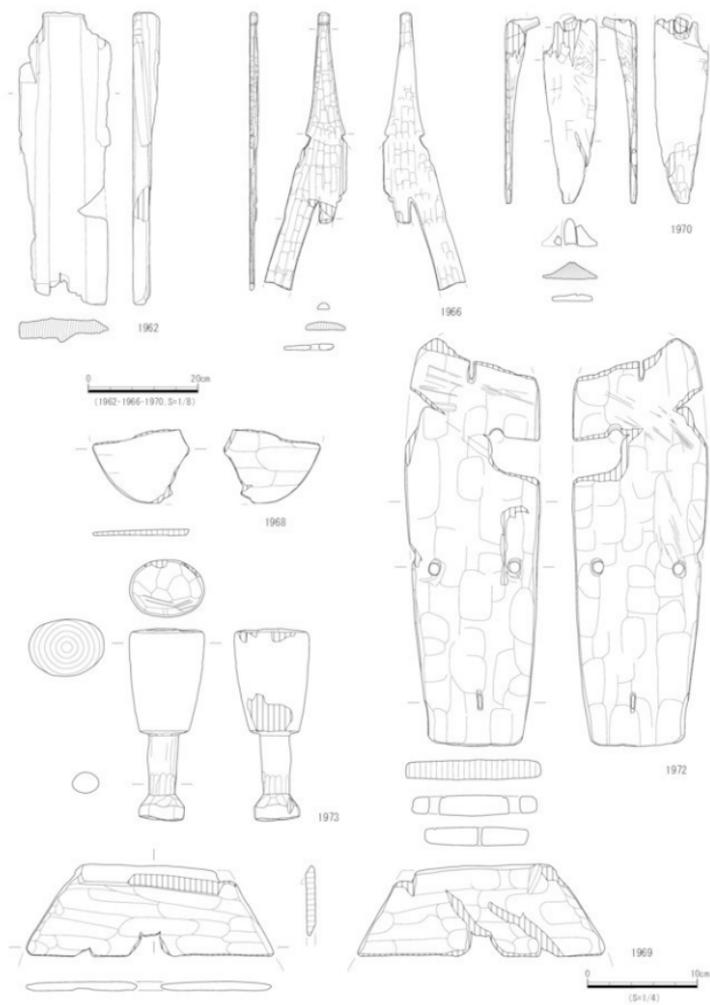


図339 NRc1出土遺物 (10)

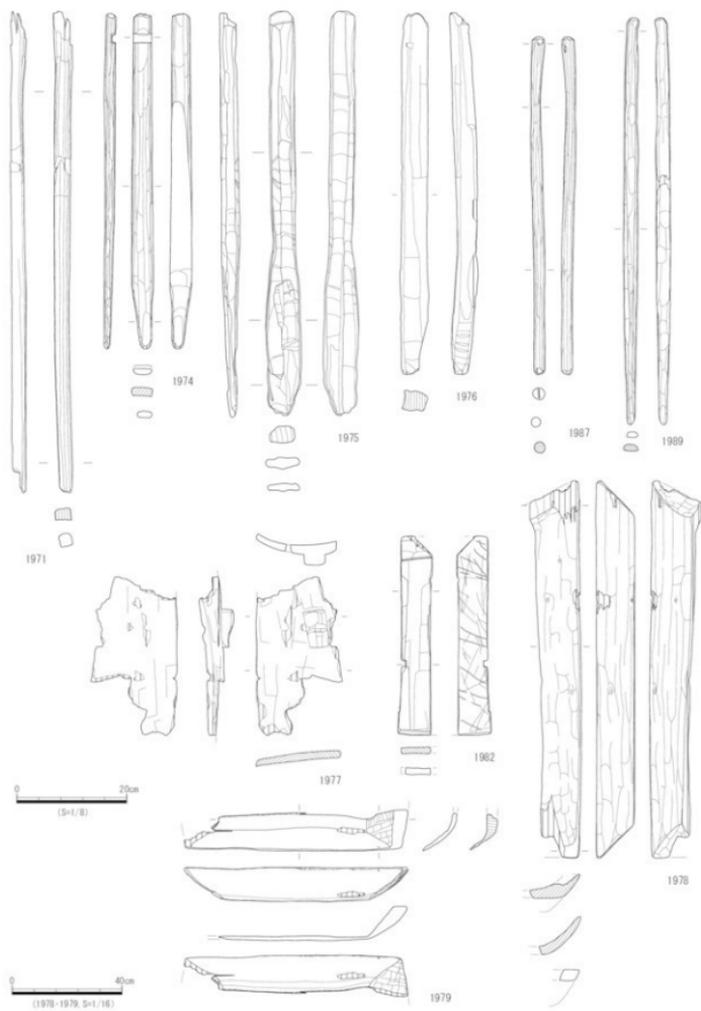


図340 NRc1出土遺物 (11)



図341 NRc1出土遺物 (12)

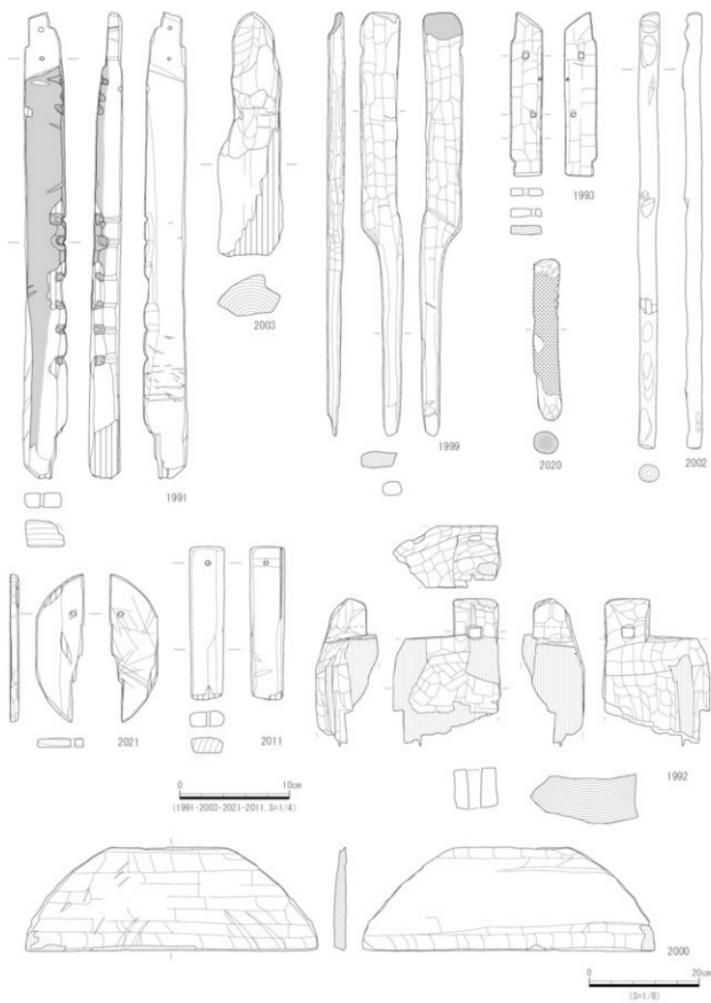


図342 NRc1出土遺物 (13)

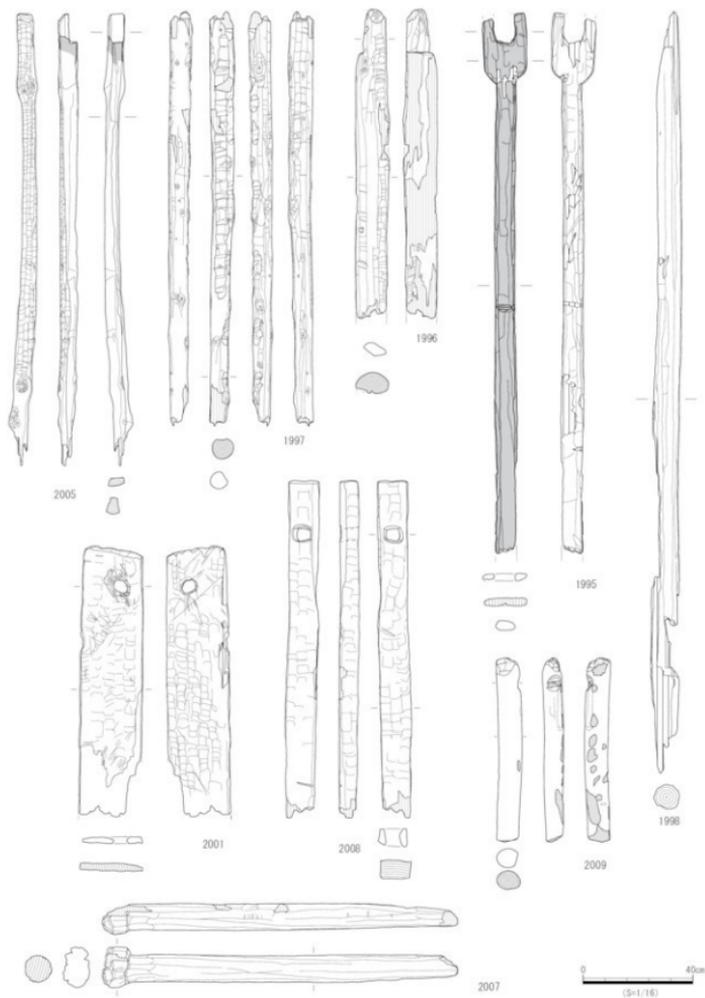


図343 NRc1出土遺物 (14)

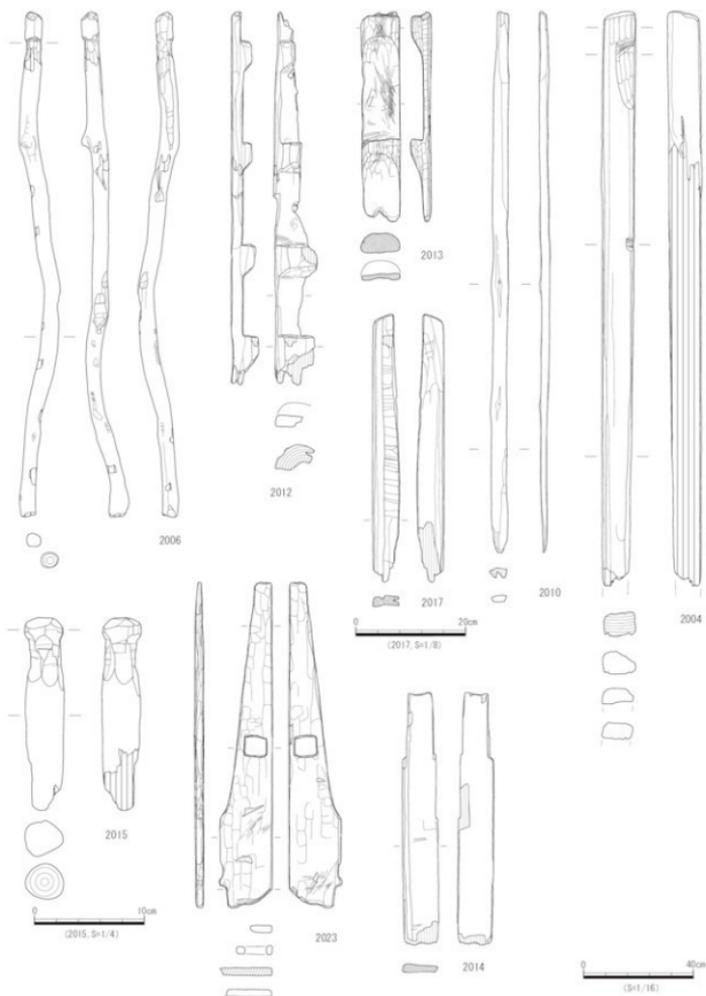


图344 NRc1出土遺物 (15)

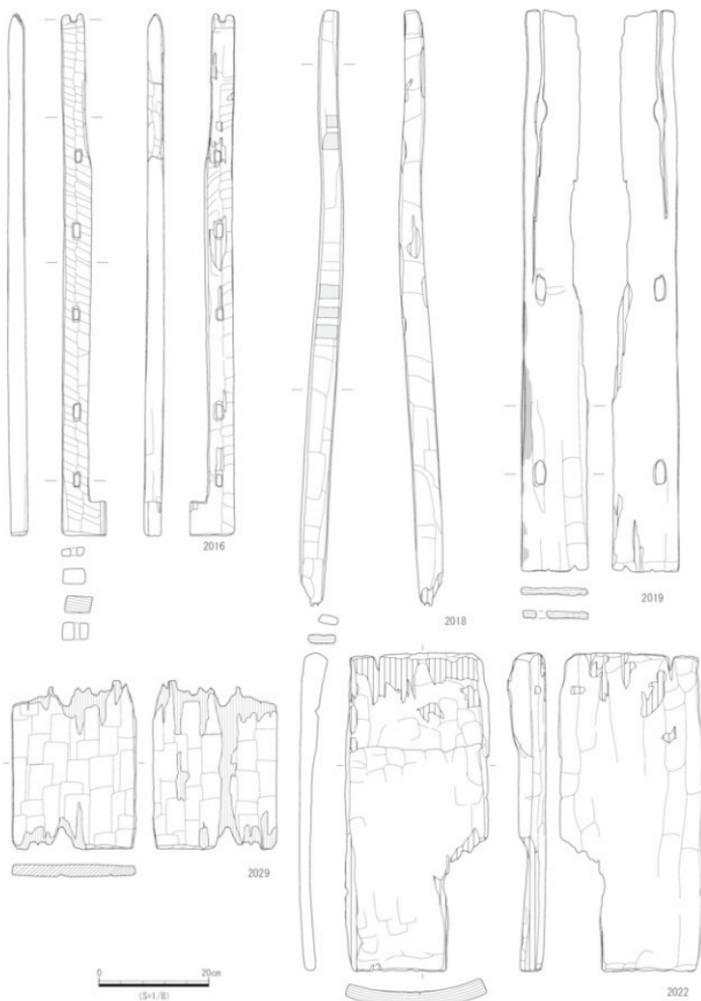


図345 NRc1出土遺物 (16)

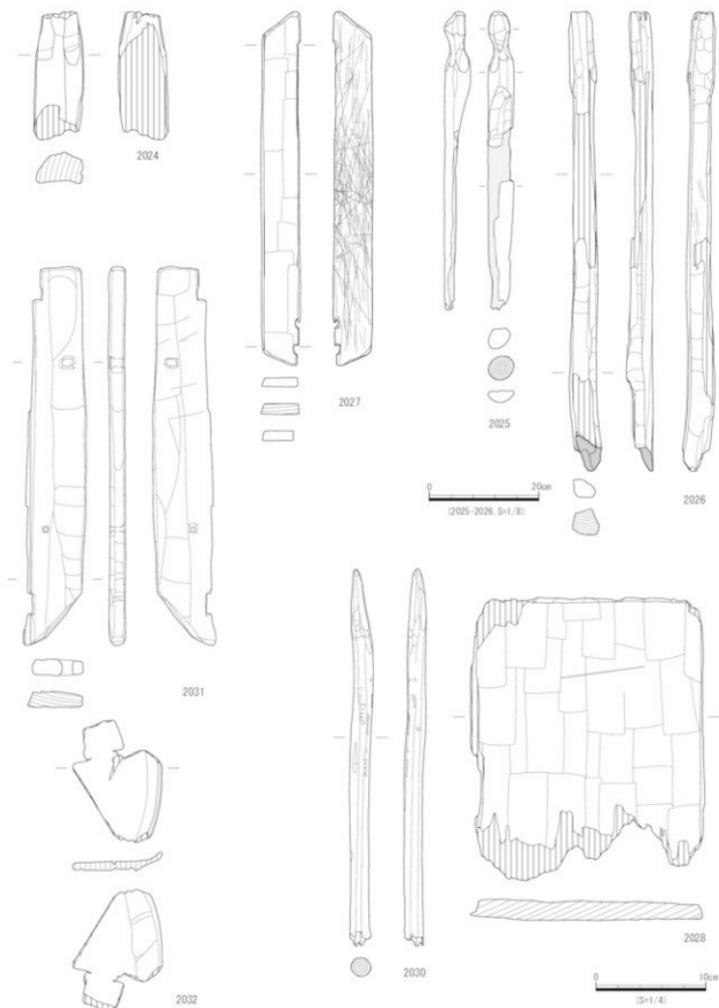


図346 NRc1出土遺物 (17)

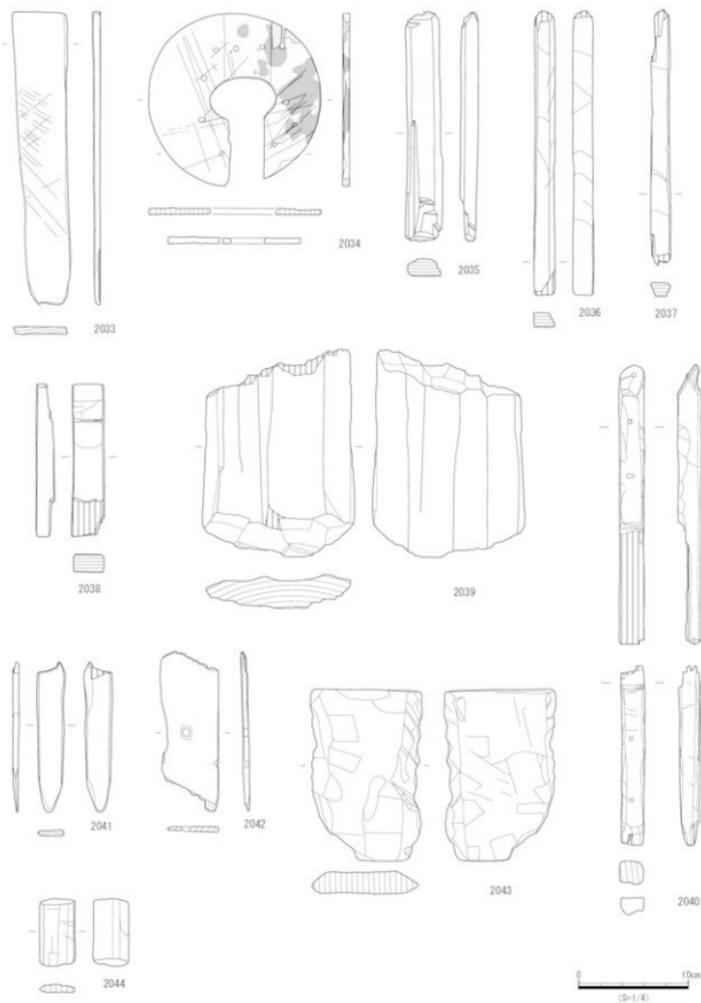


図347 NRc1出土遺物 (18)

NRc2 (図348)

検出状況 09_13地点、自然流路NRc1の左岸テラス状となる平坦面で、埋土である黒色粘質土を除去した、暗灰粘質土層上面で検出した。平面形は比較的明瞭であったが、両端をNRc1埋土として掘削しており、遺構として認識できていないため全容は不明だが、始まりはSZc30南溝からだと思われる。検出した範囲では長さ約8 m、幅0.5 mのほぼ南北方向の浅い溝状で、底面は一段落を持って深くなる場所があるが、ほぼ平坦である。底面のレベルが南端で低くなることから、北から南へ水流があったと思われる。埋土は単層で自然堆積と思われる。NRc1のテラス状の平坦面に自然堤防上から水流があり、その流れによって作られたものと思われることから、人為的な遺構ではなく、自然に生じた小流路と判断した。

遺物出土状況 埋土中からは20点の土器片が出土した。一部深くなる場所で土器のまとまりがあった。

出土遺物 2045はV期の斐A2a類で、口縁部外面には刺突文、上胴部には横線文と波状文を施す。

時期 NRc1のテラス状の平坦面で検出したことから、この平坦面が土地利用可能な時期であった弥生時代中期頃のものと思われる。V期の土器が出土していることから、弥生時代後期になって、湿地化とともに埋没していったと考えられる。

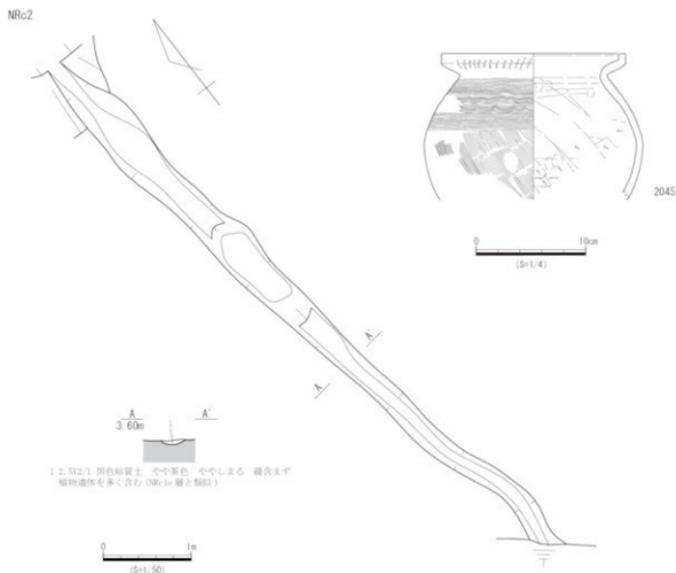


図348 NRc2

5 まとめ

東側には静里排水路を挟んで08_12地点が、その北側には09_12地点が位置する。方形周溝墓の方台部にあたるⅢ層基底面で、耕作に伴うと思われる鋤溝状の溝列を検出しているが、同様の溝列は08_12地点や09_12地点においても検出していることから、この周辺において古代以降に水田耕作が行われていたと考えられる。このことを示すように、Ⅳ層からは出土例が少ない唐鋤、Ⅲ層からは馬鋤が出土した。

V層上面では方形周溝墓、土器棺墓、土坑、溝及び自然流路を検出したが、主な遺構は弥生時代中期の方形周溝墓群である。

方形周溝墓はⅡ期からⅣ期までのものを確認した。SDe129が方形周溝墓を構築する前段階に掘削された区画溝として考えられることから、計画的に方形周溝墓を造営したものと推測できる。特にⅣ期の方形周溝墓は溝を重複するものがありながらも、自然流路の左岸岸辺に北西から南東にかけて2列に並ぶように造られている。

これらの方形周溝墓においては、他の地点と比較して埴丘盛土が残存しているものが多く、主体部も検出した。主体部を検出した方形周溝墓のうち、SZc33を除くすべては、主体部は埴丘に盛土する前につくられており、主体部を造った後に黒色の粘質土を盛り、さらにその上にV層によく類似した土を盛っていくという順序で構築している。これら共通する構築方法をとる方形周溝墓はⅣ期のものであり、荒尾南遺跡C地区において、この時期の方形周溝墓を特徴づけるものといえる。

また、埴丘盛土下のV層上面からは、形状や堆積状況、土器の出土状況から墓坑になるのではないかとと思われるⅠ～Ⅱ期の土坑群、岸辺のテラス状平坦面からはⅡ期の土器棺墓を検出している。

以上のことから、自然流路とその岸辺の微高地となる本地点においては、Ⅰ～Ⅱ期の土坑に墓の可能性が考えられるものがあることから、弥生時代前期になって土坑墓を中心とする墓域として使われ始めた可能性があり、その後弥生時代中期になると次第に方形周溝墓が造られるようになっていく。そして、Ⅳ期となって方形周溝墓の造営はピークを迎えることになる。

これは、本地点南西部を流れる自然流路の変遷に伴うものといえる。つまり弥生時代前期までに微高地から流路の落ち込みにかけての間のテラス状の平坦面に砂が堆積し、そこが弥生時代中期には離水したことで、土地利用が可能になっていった。この時期には方形周溝墓を中心に墓域として活用されるようになった。そして、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、砂礫層の堆積後、自然流路の流れが止まり始め、岸辺付近にも浸水が始まって次第に湿地化し、完全に埋没していった。この時期になるとこの付近では遺構は見られなくなる。その後、再び古代以降に水田として使われるようになっていったのである。

第9節 09_14地点

C地区南西部、07_1地点・08_13地点東側に位置する調査地点で、調査面積は108㎡である。本線橋脚が位置するが、北側には市道を挟んで09_11地点がある。

1 層序

西壁土層を図示した(図349)。基本層序のI層からV層を確認したが、ほぼ水平堆積である。IV層については黒色粘質土で植物遺体を含むIV a層と、オリーブ黒色～黒褐色粘質土のIV b層に分層できる。遺構検出面はIV a層上面とV層上面となる。なお、III層上の7層は洪水堆積層であると考えられ、灰色細砂と黒褐色粘質シルトの互層が4回繰り返されて、40～50cmの堆積がある。

2 包含層出土遺物(図350)

この地点で出土した遺物は、269点であるが、その大半が弥生土器・土師器類である。このうちIII層は42点、IV層は165点で、遺構出土遺物は62点である。包含層から出土した遺物は、石製品3点、木製品2点のほかは土器類で、須恵器の1点を除くと、弥生土器や土師器であった(表21)。

包含層出土遺物として実測したのは、III層・IV層から出土した弥生土器5点、IV a層から出土した須恵器1点、IV b層から出土した石器1点である。2046は扁平な宝珠つまみをもつ須恵器の杯蓋で、古代のものである。2047は弥生時代中期と思われる壺で、平底の底部である。2048はIV期の甕で、平底の底部であるが、中央を打ちかいたように孔を穿つ。2049・2050はVI期の高坏である。2049は高坏C2b類で、内湾する口縁部の内面に断面三角形の段を持つ。2050は高坏C3b類で、やや内湾する口縁部の内面を肥厚させ、多条沈線を施す。2051は縄文時代晩期の深鉢で、素文の突帯を巡らす。変容壺の可能性もある。2052は下呂石製の打製土織で、先端部は欠損している。

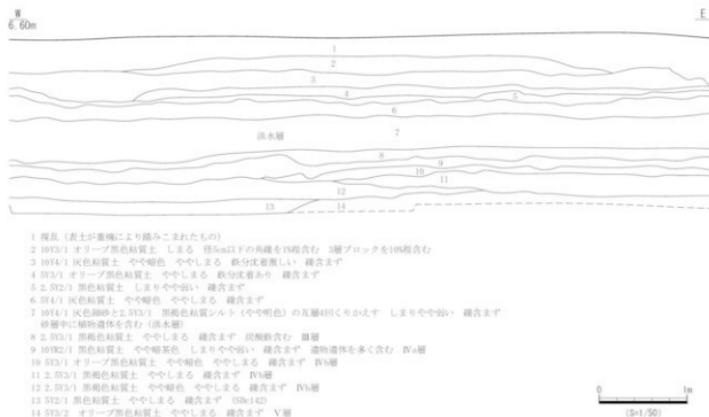


図349 09_14地点西壁土層図

表21 09_14地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
III層	0	42	0	0	0	0	0	0	0	42
IV層	0	159	1	0	0	0	3	0	2	165
IV上遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V上遺構	0	60	0	0	0	0	2	0	0	62
合計	0	261	1	0	0	0	5	0	2	269

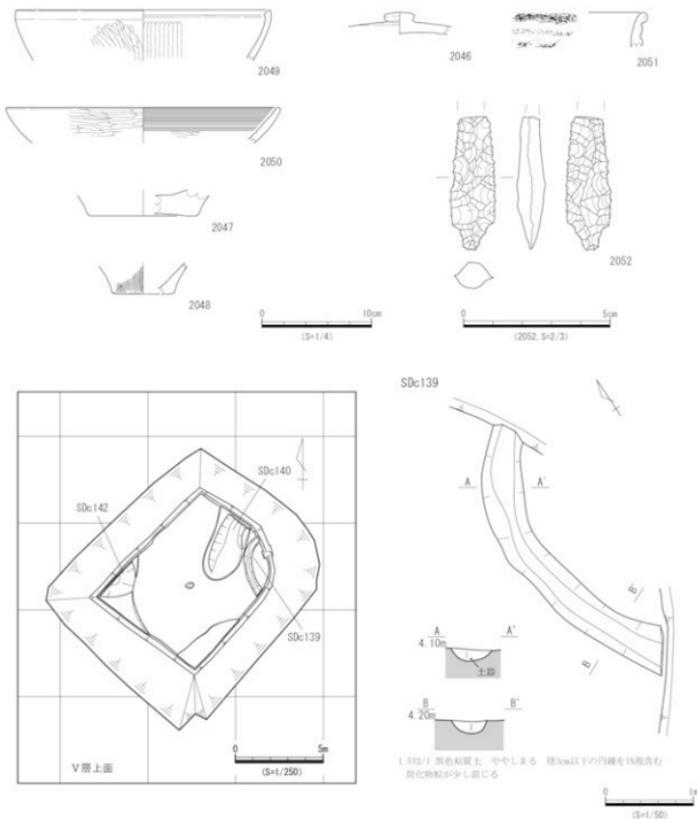


図350 09_14地点包含層出土遺物・V層上面平面図・SDc139

3 IV層上面の遺構と遺物

IV層上面では遺構は検出できなかった。

4 V層上面の遺構と遺物 (図350)

V層上面では、土坑1基、溝状遺構4条を検出した。溝状遺構は、いずれも部分的に検出できたものであり、発掘区外へと続くため全容は不明であるが、3条の溝状遺構を図示した。

SDc139 (図350)

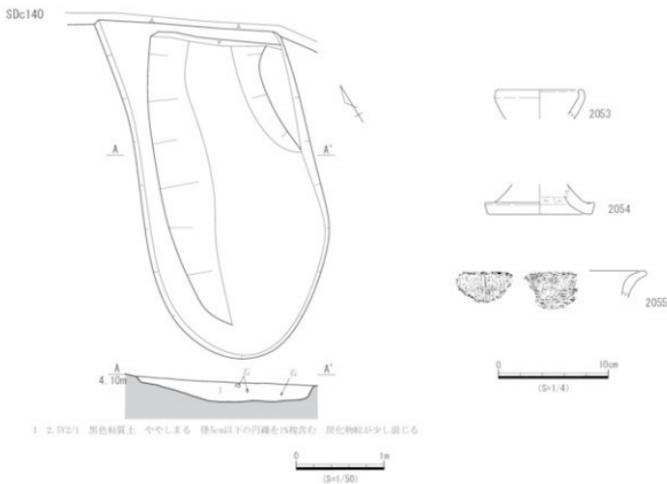
検出状況 発掘区北東部隅、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。発掘区外に伸びるため全容は不明であるが、弧を描く溝状遺構で、やや浅く壁面は開く。埋土は単層で堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が3点出土したが、小片のみで図示可能なものはなかった。

時期 時期を特定できる遺物の出土はないが、V層上面で検出したことから、弥生時代から古墳時代前期のものと思われる。

SDc140 (図351)

検出状況 発掘区北東部、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。ほぼ南北方向の溝状遺構で、南端部は確認できたが、北側は発掘区外へ伸びる。09_11地点では、この遺構の続きと考えられるものは確認できていないが、南端から北側に向かって深くなっていくため、NRe11に向かっていっている可能性がある。このため、人為的なものというよりも自然の水流によって作り出された溝状の凹みであることも考えられる。埋土は単層で堆積状況は不明である。



遺物出土状況 埋土中から土器片が37点、剥片が1点出土した。土器片は時期が確認できるものはIV期のものばかりである。

出土遺物 2053はIV期の壺A1類で、口縁部が屈曲して立ち上がる細頸壺である。2054はIV期の壺で、脚台部であると思われる。ハ字状に開き、端部が上方に拡張されて面をなす。2055はIV期の甕C類で、口縁部が外反する。

時期 出土した土器がIV期のものばかりであることから、IV期の遺構と思われる。

SDc142 (図352)

検出状況 発掘区南西部隅、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。大半が発掘区外となるため形状は不明であるが、弧を描くようなものである可能性がある。浅く、壁面は開く。底面は中央部が土坑状に凹む。埋土は単層で堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が5点、RFが1点出土している。土器片は時期が確認できるものは弥生時代中期のものである。

出土遺物 2056はIV期の甕で、平底の底部片である。

時期 出土した土器が弥生時代中期のものであることから、弥生時代中期の遺構と思われる。

SDc142

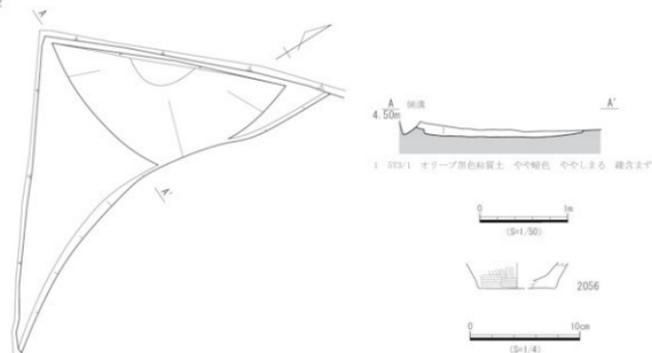


図352 SDc142

5 まとめ

この地点は、遺構や遺物が少なく、発掘区が狭小であるため、遺構の全容も不明なものが多い。

IV層上面の遺構は確認できず、V層上面の遺構では土坑、溝を検出したが、時期がある程度特定できるものは、弥生時代中期の遺構であり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構ははっきり確認できない。すぐ西隣の07_1地点・08_13地点では弥生時代中期から古墳時代前期の土坑や方形周溝溝壘を中心とする遺構を多く検出していることから、NRc1の右岸にあたるこの地点は09_11地点の西側の状況と合わせて弥生時代から古墳時代前期にかけて、積極的な土土地利用はされていない場所といえる。

第10節 07_1地点・08_13地点・09_15地点

C地区南部、09_14地点西側に位置する調査地点で、調査面積は479㎡である。本線橋脚が位置するが、南西側には市道を挟んで08_14地点・09_16地点がある。

1 層序

07_1地点西壁土層を図示した(図353)。基本層序のⅠ層からⅤ層を確認したが、ほぼ水平堆積である。Ⅳ層については黒色粘質土で砂質土のブロックを含むⅣa層と、オリーブ黒色粘質土のⅣb層に分層できる。遺構検出面はⅣa層上面、Ⅳb層上面、Ⅴ層上面となる。なお、Ⅲ層上の6～8層は洪水堆積層であると考えられ、灰色細砂とオリーブ黒色粘質土の互層で、厚さ30～40cmの堆積がある。

2 包含層出土遺物(図354～図356)

この地点で出土した遺物は、総数11,662点であるが、その大半が弥生土器・土師器類である。このうちⅠ～Ⅱ層は14点、Ⅲ層は1,477点、Ⅳ層は2,548点で、遺構出土遺物は7,623点である。包含層から出土した遺物は、石製品88点、木製品36点のほかは土器類で、須恵器9点、中世陶器類3点を除くと、弥生土器や土師器であった(表22)。

包含層出土遺物として図示したのは、Ⅲ層・Ⅳ層から出土した弥生土器19点、石器18点、木製品4点である。2057～2062はⅢ層から出土した土器である。2057はⅡ期のS字状口縁台付甕D類で、口縁部上段が外反し端部は肥厚する。胴部外面のハケ目は粗くなる。2058はⅣ期の甕C類で、口縁部が外反し、外面に条痕状のハケ目が残る。頸部には短沈線を縦位に1.5cm～2cm間隔で施す。2059はⅡ期の甕で、口縁部が強く外反し、口縁端部に刻みを施す。口縁部内面には波状文を施す。2060はⅤ～Ⅲ期と思われる高坏B3b類で、口縁部が外反する有稜高坏である。内外面とも縦方向のミガキ調整である。2061はⅤ～Ⅶ期の鉢B類で、平底の底部に円孔を持つと思われる。2062はⅤ～Ⅵ期の鉢である。やや丸底気味で胴部は丸く、頸部がやや外反する。底部内外面に螺旋状の工具痕が認められる。2063～2074はⅣ層から出土した土器である。2063はⅦ期の壺B3類で、口縁部が外反して開く無文の壺である。

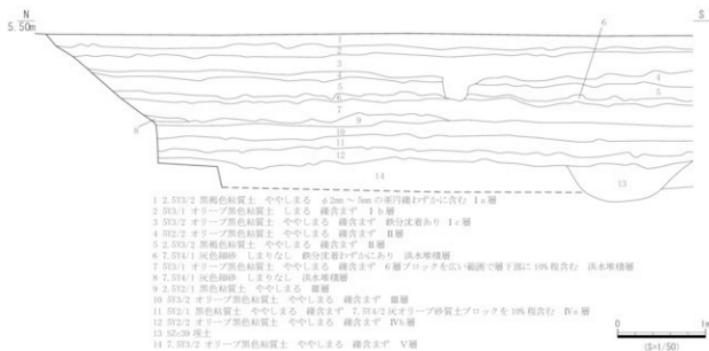


図353 07_1地点西壁土層図

表22 07_1地点・08_13地点・09_15地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰輪 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	13	0	0	0	0	1	0	0	14
III層	0	1,427	8	0	3	0	11	0	28	1,477
IV層	0	2,463	1	0	0	0	76	0	8	2,548
IV上遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V上遺構	0	7,340	3	0	1	0	191	1	87	7,623
合計	0	11,243	12	0	4	0	279	1	123	11,662

V期以降の可能性もある。2064はV期の大型の壺の胴部片である。器面は剥落し調整痕は不明瞭であるが、横線文と波状文が胴上部に見える。2065はIV期の細頸壺の胴部片である。胴上部に横線文や波状文を施す。2066はIII期の壺B類で、口縁部が内湾し、端部で内折する細頸壺。屈曲部には刺突文、口縁部から頸部には竹管状工具による横線文や波状文を施す。2067・2068はV-1期の甕A1類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる。2069・2070はV期以降と思われる甕の脚台部である。2071はV期の鉢A2類である。2072はV期の鉢B類で、平底の底部に凹孔を持つと思われる。2073はIV期の高坏A類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、外面に凹線を1条施す。2074はVI期の高坏C4c類で口縁部がやや内湾し、内面に多条沈線を施す。2075はIV期の甕の蓋と思われるもので、比較的扁平な形状であるが、口縁部側に凹孔がつけられている。2076は安山岩製の打製石鏃で完形品である。2077はサヌカイト製の石錐で、基部は欠損する。2078・2079は楔形石器で、2079は磨製石斧の転用品である。2080は石核で、泥岩製である。2081は太型蛤刃石斧で、完形品である。2082・2083は叩石である。2082は端部に敲打痕があり、砥面も確認できる。2083は拳大の鏝の平坦面に敲打による凹状の痕跡がみられる。2084～2089は砥石で、2084・2087はU字状の溝が見られる。2085・2088には敲打痕が見られる。2089は砥面が5面、U字の溝状の砥面が4箇所と径1cmの円形で垂直に砥いだ痕が1箇所ある。2090～2093は紅崖石片岩製の石鋸で、2092は先端を欠損する。2093は角が取れており円盤状である。2094は鋸の刃先で、下端刃部は両刃で左側縁部も両面から加工している。2095・2096は形代で番車であると思われる、古代のものである。2097は加工材の板材で、表面・裏面を縦方向に削っている。表面にはケビキのような斜格子状の痕跡が認められる。

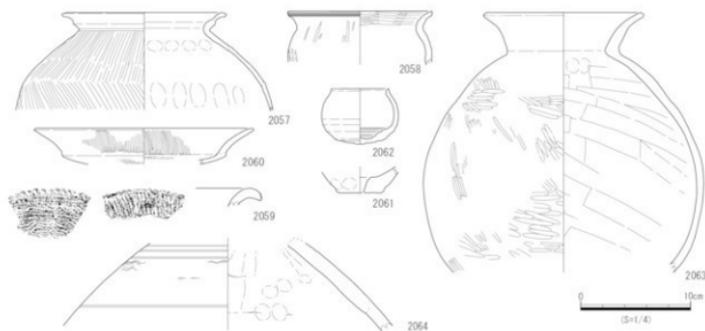


図354 07_1地点他包含層出土遺物(1)

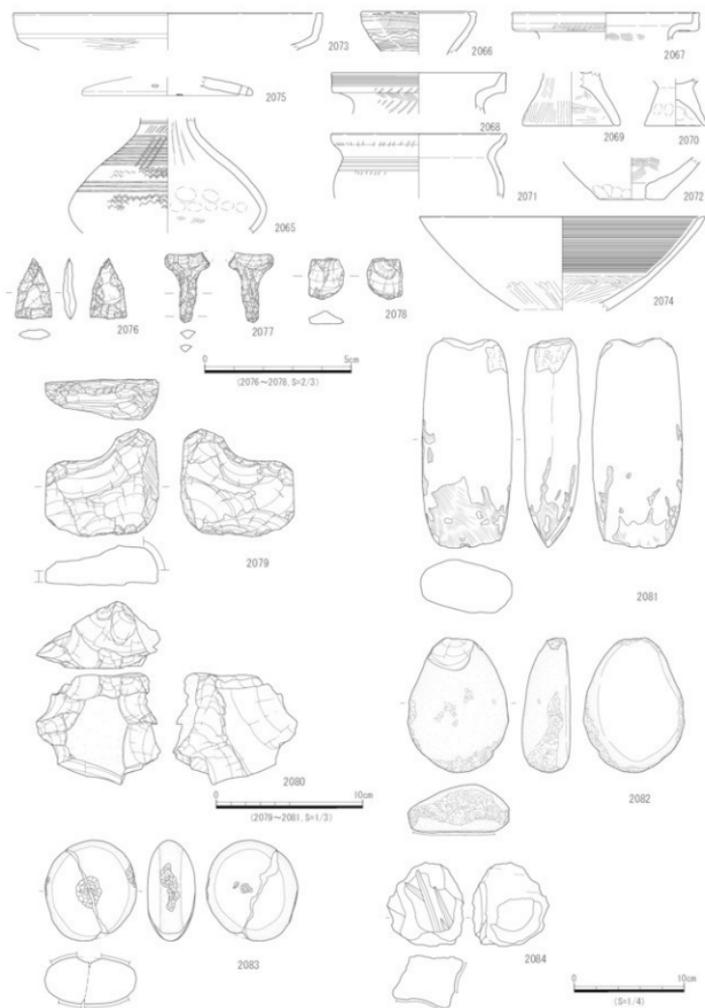


図355 07_1地点他包含層出土遺物(2)

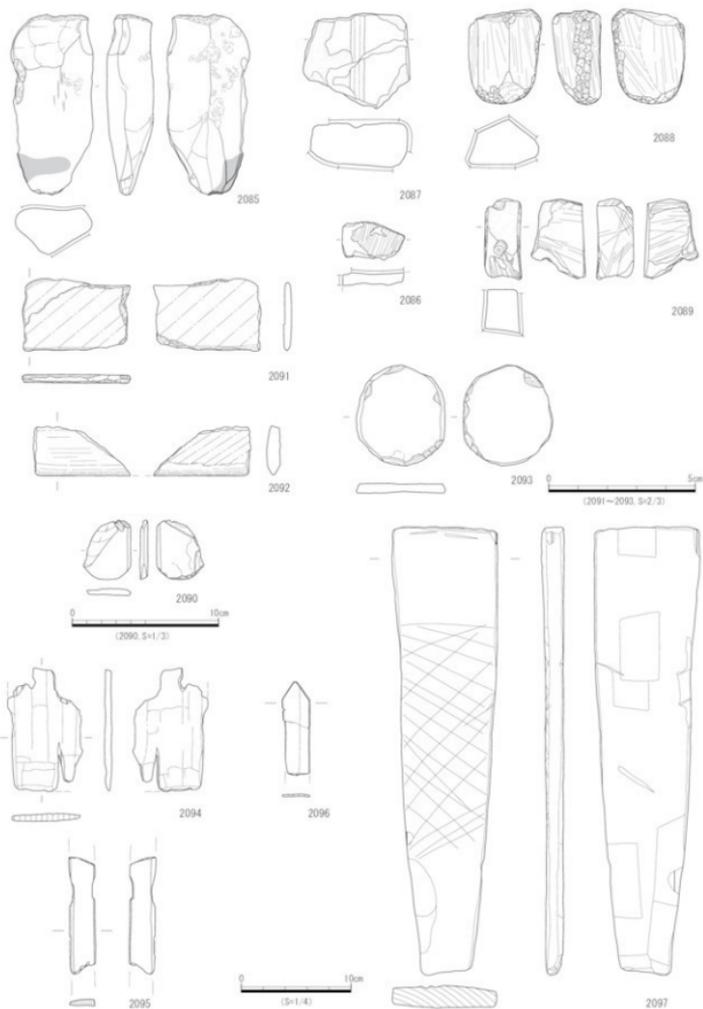


図356 07_1地点他包含層出土遺物(3)

3 IV a層上面の遺構

IV層 a 上面では遺構は検出できなかったが、08_13地点においてはⅢ層を除去した時点で、SZc40、SZc41の墳丘の盛り上がりや周溝の凹みについて確認することができた。

4 IV b層上面の遺構

IV a 層を除去したIV b 層上面で、SZc40、SZc41の周溝平面形を引き、掘削を開始したが、発掘区西壁土層断面で堆積状況を確認した結果、IV b 層は周溝埋土を覆うことが確認できたため、SZc40、SZc41はV層上面の遺構であると判断した。

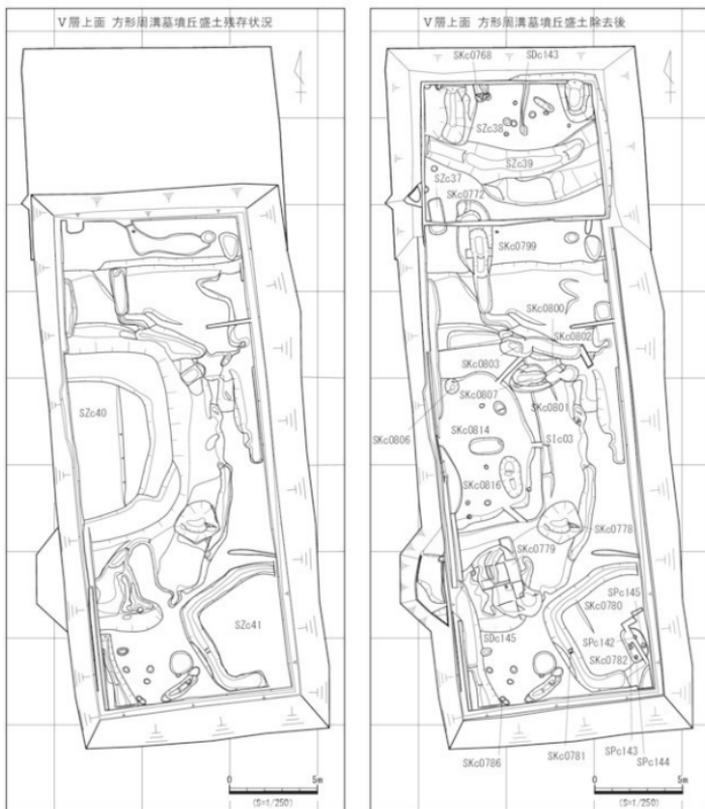


図357 07_1地点・08_13地点・09_15地点V層上面平面図

5 V層上面の遺構と遺物

V層上面では、木棺墓1基、方形周溝墓4基、土坑55基、柱穴7基、溝状遺構4条、集石遺構1基を検出した(図357)。木棺墓、方形周溝墓、方形周溝墓に関連すると考えられる土坑・柱穴・集石遺構、土坑墓の可能性が考えられる土坑などを図示した。

SPc142 (図358)

検出状況 SZe41の墳丘盛土を除去した後、V層上面で検出したSKc0782の底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状はほぼ円形で、壁面は立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は単層で、堆積状況は不明である。SKc0782底面において検出した他の柱穴やSZe41南西周溝中央で検出したSKc0781らと組み合い、上屋を建てる際の柱穴とも考えられるが、時期がはっきりしないため、関連性は不明である。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 遺物の出土がないためはっきりしないが、V層上面の遺構であり、SZe41の墳丘下土坑底面で検出したことから、SZe41と同時期のⅦ期か、それ以前の弥生時代であると考えられる。

SPc143 (図358)

検出状況 SZe41の墳丘盛土を除去した後、V層上面で検出したSKc0782の底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。形状はほぼ楕円形で、壁面は立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層したが、柱痕跡の堆積があり、人為堆積の可能性が考えられる。SKc0782底面において検出した他の柱穴やSZe41南西周溝中央で検出したSKc0781らと組み合い、上屋を建てる際の柱穴とも考えられるが、時期がはっきりしないため、関連性は不明である。

遺物出土状況 土器片が3点出土しているが、小片ばかりで実測できる遺物はなかった。

時期 時期が分かる土器の出土がないためはっきりしないが、V層上面の遺構であり、SZe41の墳丘下土坑底面で検出したことから、SZe41と同時期のⅦ期か、それ以前の弥生時代であると考えられる。

SPc144 (図358)

検出状況 SZe41の墳丘盛土を除去した後、V層上面で検出したSKc0782の底面で検出したが、平面形

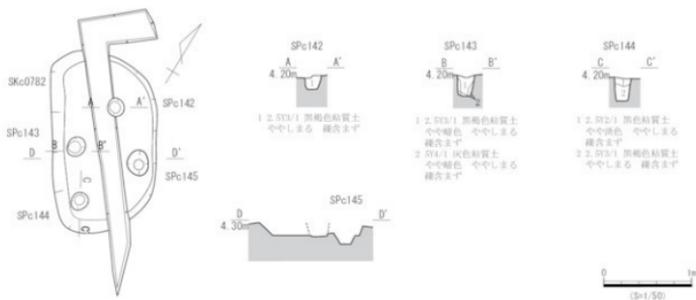


図358 SPc142～SPc145

は比較的明瞭であった。形状はほぼ円形で、壁面は立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、堆積状況は不明である。SKc0782底面において検出した他の柱穴やSZc41南西周溝中央で検出したSKc0781らと組み合い、上屋を建てる際の柱穴とも考えられるが、時期ははっきりしないため、関連性は不明である。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 遺物の出土がないためはっきりしないが、V層上面の遺構であり、SZc41の墳丘下土坑底面で検出したことから、SZc41と同時期のⅦ期か、それ以前の弥生時代であると考えられる。

SPc145 (図358)

検出状況 SZc41の墳丘盛土を除去した後、V層上面で検出したSKc0782の底面で検出したが、SKc0782掘削時に同時に掘り下げてしまっており、現場では別遺構として扱っていなかった。形状はほぼ楕円形で、壁面はやや開く、底面はやや丸くなる。埋土はSKc0782と同時に掘り下げたため不明である。SKc0782底面において検出した他の柱穴やSZc41南西周溝中央で検出したSKc0781らと組み合い、上屋を建てる際の柱穴とも考えられるが、時期ははっきりしないため、関連性は不明である。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 遺物の出土がないためはっきりしないが、V層上面の遺構であり、SZc41の墳丘下土坑底面で検出したことから、SZc41と同時期のⅦ期か、それ以前の弥生時代であると考えられる。

SZc37 (図359・360)

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。木棺材が見えたことで検出し直して平面形を確認した。

形状 残存する木棺は、長さ1.79m×幅0.57mの組合せ式箱形木棺で、側板、小口板、底板、蓋板で構成されるが、腐食が激しく、特に側板の一部が確認できただけであった。蓋と思われる板材も腐食して落ち、最低7つに分かれている。福永分類(福永1987)のⅡ型であると思われるが、底板が別の材を2枚組み合わせていることや、小口側に高さが異なることなど、特異な部分が見られる。組み合わせた2枚の底板のうち北側の1枚は、中央にほぞ穴のような長楕円形の穴があり、もう一方の南側は槽と思われる材で、どちらも転用である。北側の底板の北端部には小口を塞ぐような板材が置かれていたが、南側は底板から立ち上がりがある。側板に当たる部分も立ち上がりが認められる。掘形は、長軸2.05m×短軸1mで、北側は長方形となるが、南側は隅丸で南辺は湾曲する。

埋土 深さが0.15mと浅いため、かなり土圧によって潰れていると思われるが、土層断面(A断面)では、IV b層に覆われるため、V層上面の遺構であったことは間違いない。このIV b層はほぼ水平に木棺墓を覆うことから、盛土状のものは確認できなかった。掘形内は最大5層に分層できるが(D断面)、4・5層は木棺が腐食した後の流入土、6～10層は裏込め土と思われる。

遺物出土状況 木棺の内部からは、人骨や副葬品と思われるものは確認できなかった。土器は埋土中から8点出土した。

出土遺物 2098はV期と思われる甕A3類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる。2099～2106は木棺材である。2099・2100は木棺の蓋板になるとと思われるもので腐食している。2099は大型長方形の槽の側板部を転用したもので、腐食が著しい。2100は大型長方形の側板で、表面を縦方向に削っている。2101・2102・2103は側板であると思われるが、細片である。2101は扁平な加工材で、平面

形は不整形である。2102は右側面が斜めに立ち上がっている。2103は中央部に刃物痕がある。2104は小口板で、大型長方形の槽を再利用しており、表面を平滑に仕上げている。2105・2106は底板である。2105は北部分で、厚さは全体的に均等である。2106は南部分で、大型の槽を木棺に利用している。内面は剥がれが多いため加工痕は不明で、外面に手斧痕が残る。

時期 層位的にV層上面の遺構であり、出土した甕（2098）がV期のものであることや、木棺の形式から、V～VI期と思われる。

SZc38（図360）

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。東溝の一部のみ検出しており、その南部分はSZc39により、削平されている。その他大半が発掘区外となるが、SZc39との重複部分で西に屈曲するような平面形が確認できたため、方形周溝墓と判断した。

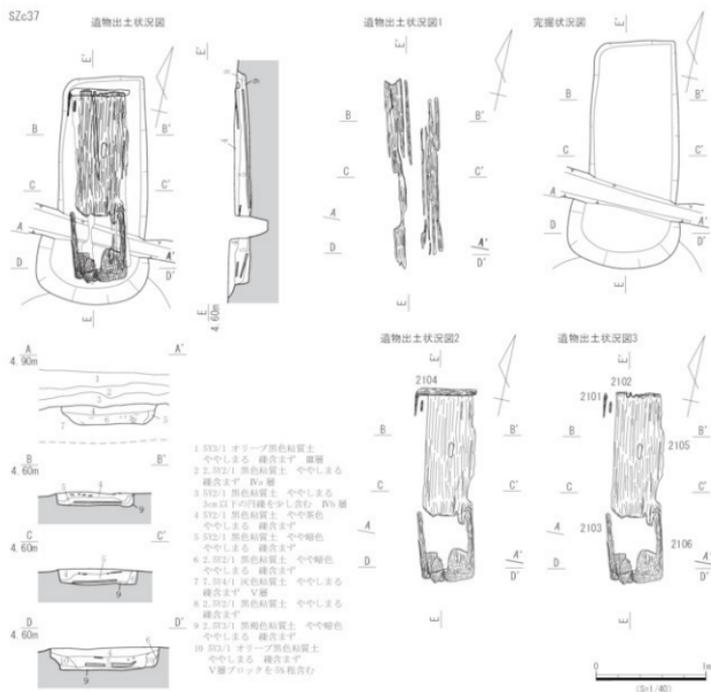
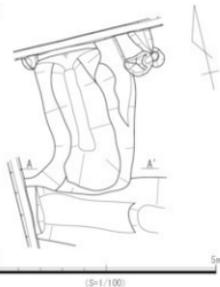


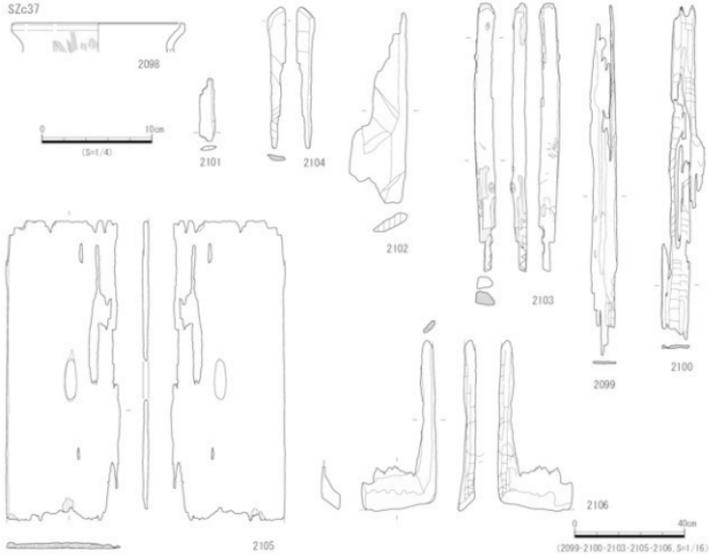
図359 SZc37

SZc38



- 1 灰3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 厚3cm以下の円錐を少し含む
- 2 灰2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎
- 3 灰3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを1%含む
- 4 2.灰3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを2%含む
- 5 灰2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎 赤色粒が少し混じる
- 6 灰2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを30%含む
- 7 灰3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを35%含む
- 8 灰3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎
- 9 V層ブロックを20%含む 灰化物が混じる
- 9 灰3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを30%含む
- 10 2.灰2/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを50%含む
- 11 2.灰2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎 V層ブロックを10%含む
- 灰化物・赤色粒が少し混じる
- 12 2.灰4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎
- 13 2.灰4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑草茎 黒色土ブロックを20%含む
- 14 10灰/1 灰色粘質土 ややしまる 雑草茎 黒色土ブロックを10%含む
- 15 10灰/1 灰色粘質土 ややしまる 雑草茎 黒色土ブロックを3%含む

SZc37



SZc38

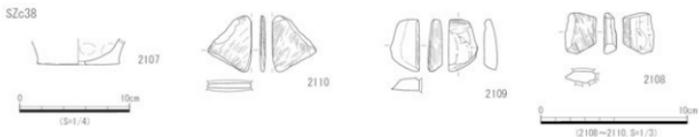


図360 SZc37出土遺物・SZc38

方台部 東辺の一部と南東のコーナー部のみしか検出されていないため、全体の形状は不明であるが、東辺は比較的直線的で、南東隅は隅丸となる。方台部はIV b層が水平に堆積しており、墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認できなかった。

周溝 東溝の南部分から南東隅にかけての一部しか検出していないが、南北方向の溝で幅2.13m、深さ0.95mの深い溝で、壁面は開く。底面はほぼ平坦であるが、南側のSZc39の重複部分に向かって浅くなる。その他の方形周溝墓のコーナー部が浅くなる状況と似ることから、方形周溝墓と判断する理由となる。埋土は15層に分層したが、多くの埋土中にV層ブロックや黒色土ブロックを含む。しかし、堆積は周溝外や方台部から流れ込むような堆積が見られることから、自然堆積の可能性が高い。V層ブロックや黒色土ブロックは、壁面や墳丘盛土の崩落の可能性が考えられる。

遺物出土状況 溝内埋土から141点の土器が散在して出土したが、弥生時代中期の土器片が小片ながら多く出土した。石器類は打製石斧1点、剥片6点、砥石1点が出土した。その他に、埋土中からは赤鉄鉱や鉄鉱石（5章10節参照）が出土した。

出土遺物 2107はIV期の甕の底部片で、平底である。2108～2110は剥片で、擦り切り痕がある。

時期 埋土中に細片ながら弥生時代中期の土器片が多く含まれることや、この遺構を切るSKc0768がII期と考えられることから、この遺構の時期はII期になると思われる。

SZc39（図361・362）

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。半分以上が発掘区外となるが、南溝と東溝の一部を検出しており、方形に区画を区切ると思われることから、方形周溝墓と判断した。

方台部 南辺と東辺の一部しか検出されていないため、全体の形状は不明であるが、南辺は緩やかに湾曲しており、東辺は比較的直線的で、南辺と東辺はほぼ直角に交わっており、方台部は方形又は長方形になると考えられる。方台部にはIV b層が水平に堆積しており、墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認できなかった。

周溝 南溝の大部分と東溝の一部しか検出していない。南溝は幅2.24m、深さ0.88mの深い東西方向の溝で、壁面は開く。平面形は、南側に張り出したようにやや湾曲する。底面は中央で深くなり、東端や西側ではやや浅くなる。東溝は幅2.48m、深さ0.74mの深い南北方向の溝で、壁面は開く。底面はほぼ平坦である。南溝と東溝は接続せず、南東隅は陸橋状となる。南溝は7層、東溝は11層に分層したが、南溝はやや複雑な堆積、東溝はほぼ水平堆積である。共に下層では崩落土と思われる黒色土ブロックやV層ブロックが含まれることから、自然堆積の可能性が高い。なお、東溝は12層以下まで掘削を行っているが、無遺物層であり、ラミナが発達しており自然堆積層と考えられるため、VI層相当と判断した。

遺物出土状況 溝内埋土から628点の土器が散在して出土したが、小片が多かった。石器類は石錐1点、剥片10点、叩石1点、砥石11点、勾玉1点が出土した。

出土遺物 2111はV-1期の高坏A1類で、坏部がやや深く、口縁部が外反する。上層からの出土である。2112はII期の壺、2113はII期の甕のそれぞれ平底の底部片である。2114はII期の甕C類で、口縁部が外反し、端部に面を持つ。外面及び口縁端部に条痕調整を施す。2115はI期の壺の平底の底部片である。2116・2117はI期の甕で外面調整は縦方向のハケ目である。2116は口縁部の屈曲が強いことや、沈線

がないことから、Ⅱ期初頭の可能性もある。2117はゆるく口縁部が外反し、鉢とも考えられる。2118はⅠ期の鉢で、口縁部が外反して開き、端部が面取りされる。2119・2120はⅠ期の蓋蓋で、2119は口縁部側に円孔が2箇所あり、2120は平板のものである。2121・2122は磁石で、2121には敲打痕が見られる。2123は勾玉を模した石製品か。両側から穴を開けているが、貫通していないことや表面に削痕が残ることから、木製品の可能性もある。

時期 時期決定できる供献土器の出土はなかったが、実測した遺物の中では上層から出土した2111以外はⅠ期からⅡ期の土器になり、埋土中に細片ながらこの時期に当たる土器片が多く含まれることから、この遺構の時期はⅡ期と思われる。

Sz39

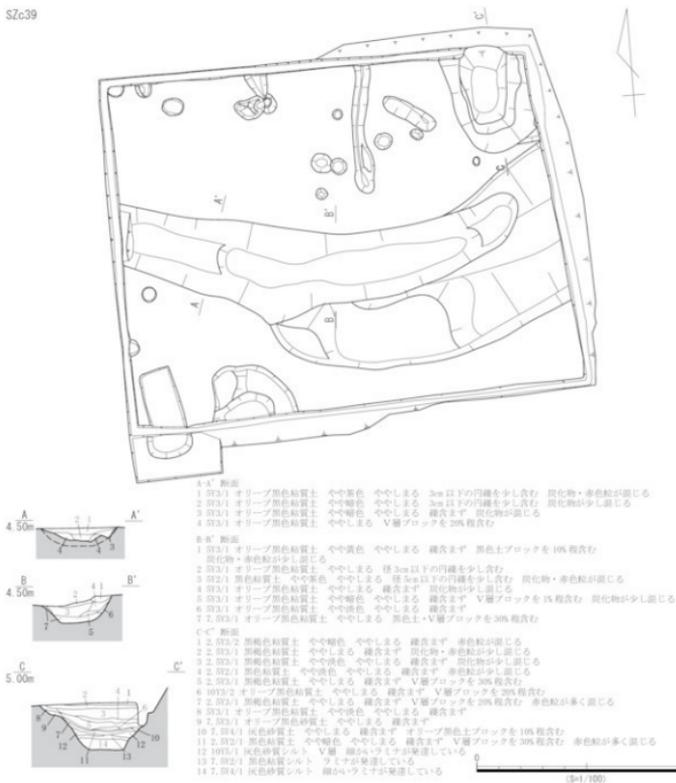


図361 Sz39

SZc40 (図363~図371)

検出状況 III層に対応する洪水堆積層を除去した段階で、墳丘の盛り上がりと周溝部の凹む状況が確認できた。さらにIV a層を除去した段階で、周溝平面形を確認し、掘削を開始したが、発掘区西壁土層断面で堆積状況を確認した結果、IV b層は周溝埋土を覆うことが確認できたため、SZc40はV層上面の遺構であると判断した。なお、表土掘削時に、墳丘盛土の上部を重機により一部削平してしまっている。

方台部 西半分以上が発掘区外となるため、全体の形状は不明である。検出した東辺部及び北辺部は直線的であるが、南辺部は緩やかに湾曲している。隅部はやや丸みがあり、方台部の形状は隅丸の不整方形になると思われる。墳丘盛土は、最も高く残る部分で1.55mを確認した。また方台部の外縁には、幅1~2mのテラス状の段があり、墳丘の最上部とは20cm前後の高低差ができている。主体部は、墳丘が残存しており、盗掘も認められないことから、本来確認できるものであるが、盛土堆積状況から、墳丘構築時に遺体を埋納していると思われるため、明確な掘形は確認できなかった。また、副葬品と思われる遺物も出土していないため、主体部の形状を把握することはできなかった。このような

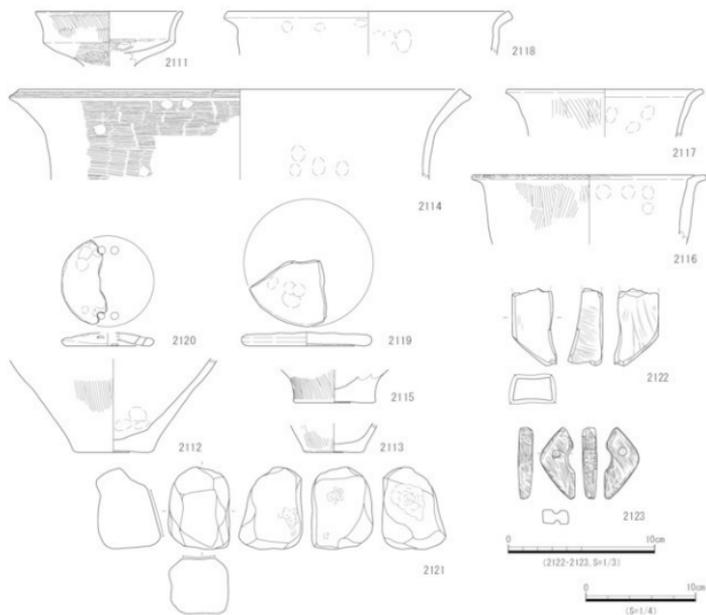


図362 SZc39出土遺物

墳丘の構築工程は、荒尾南遺跡南西にある養老町象鼻山1号古墳（前方後方墳）とよく似るもの（養老町教委1999）であり、土層堆積状況の観察からは、墳丘の構築には以下のような9段階の工程があらると考えられる。

- ①工程 周溝部も含めて全体を地表面から30～40cm掘り下げる。墳丘中央部が最も深くなるようにし、墳丘裾にあたる部分を方形に巡る畦状に少し高く残した上で、周溝部を墳丘裾部よりも少し深くする。通常は周溝部のみを掘り下げる場合、墳丘盛土の下層には、旧表土と思われる土層が堆積する例があるが、この墳丘墓では確認できない。墳丘中央部で標高3.85m、北側のV層上面で4.3m、墳丘裾部で4.0mほどとなり、高低差が生じている。この段階で平面形を決定している。
- ②工程 方形の畦状の高まりにさらに盛土をして、土手状にしているが、南辺中央ではその盛土は確認できない。
- ③工程 全体的に黒色系の粘質土を盛る。縁辺部ほど厚く盛っているため、中央部の凹みがやや目立つ。この段階で縁辺部は標高4.25m、中央部4.1m（西壁での高さ）となる。
- ④工程 縁辺部やや内側に土手状に盛土する。北辺では比較的厚いが、北東隅から南辺にかけては北ほど盛土をしていない。
- ⑤工程 中央の凹みを充填するように盛土する。まず中央から南半にかけて土を入れ、その後中央から北半に土を入れている。それでも中央部はやや凹みが残る。
- ⑥工程 縁辺部やや内側に土手状に再び盛土するが、北辺と南辺では確認できるもの、北東隅から東辺、南東隅では確認できない。可能性として、南中央から西辺、北中央にかけてコ字形に盛土をしていることが考えられる。この盛土では、南辺の盛土は2回に分けている可能性がある。
- ⑦工程 再度中央に凹みができており、ここを埋めるように中央から東辺にかけて盛土している。象鼻山1号墳の例から考えると、この盛土をする前に遺体を置いている可能性が高い。
- ⑧工程 東辺のみ⑥工程の土手状盛土がなく、低いままであったところに、北や南と高さを揃えるように盛土をする。
- ⑨工程 最終的な盛土をするが、このときには、各辺の縁を1～2m程テラス状に残して、中央部及び南東隅に盛土している。

象鼻山1号古墳では①工程～③工程が整地になっており、また、最終段階においてテラス状の段を設けていることも異なるが、構築墓坑¹⁾であること、土手状に盛土をしていることに共通点が見られる。なお、盛土に黒色系の土を最初に用いる点は、SZc22ほか、09_13地点において検出した弥生時代中期の方形周溝墓との共通点が見られ、時期差こそあるものの、この地内における墳丘墓の構築手法の特色かもしれない²⁾。

周溝 東溝及び北溝と南溝の一部を検出した。確認した範囲では北溝は直線的であるが、東溝と南溝は湾曲する。幅は4m以上となり幅広いが、深さは最大でも0.3mほどであり浅い。底面は大きくは平坦であるが、凸凹が目立つ。埋土は基本的には3層に分層できるが、埋土上層には植物遺体が多く含まれ、水性堆積の可能性が高い。部分的に深くなる部分はより多くの分層ができるが、墳丘構築前の遺構を同時に掘り下げた可能性もある。また、南溝において、周溝を横断するように陸溝状の盛土

SZc40

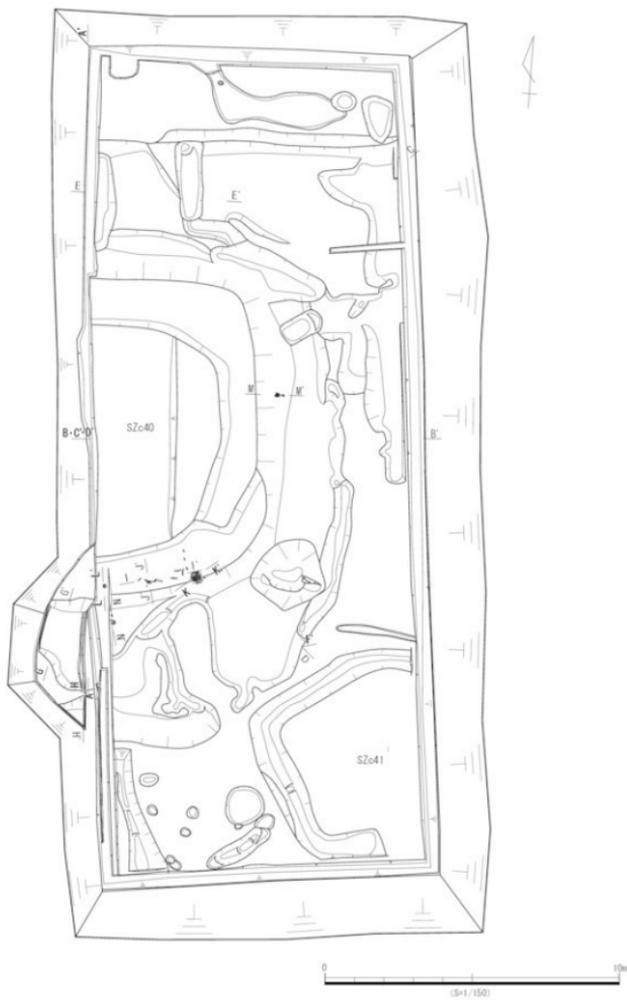


図363 SZc40 (1)



図366 SZc40 (4)

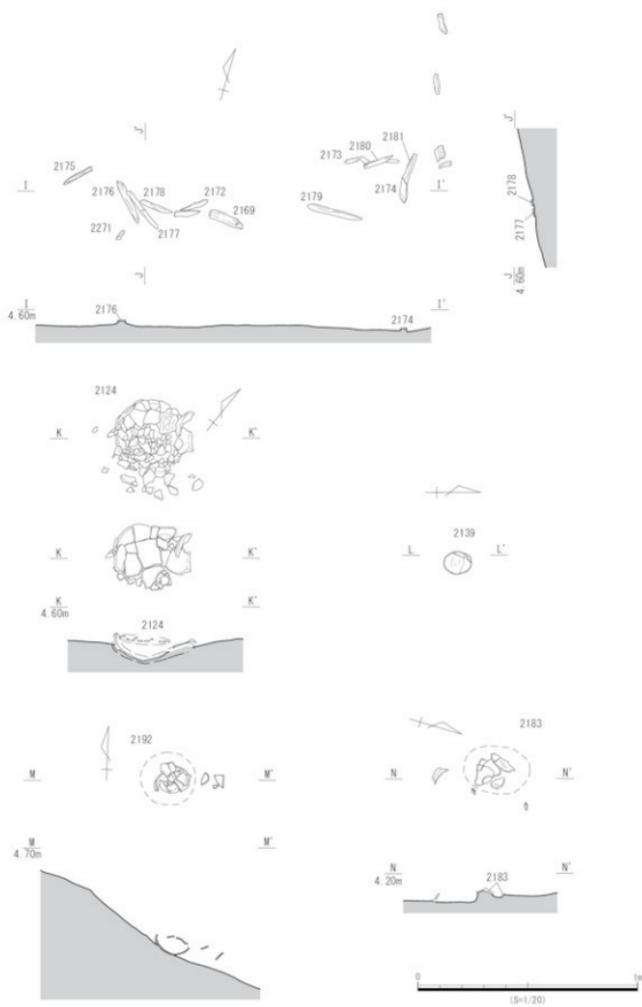


図367 SZc40遺物出土状況図

状遺構（SKc0779）が存在するが、周溝底面を少し掘り下げた後に盛土しているものである。盛土の上部を周溝埋土が覆うため、方形周溝墓と同時期のものであると考えられ、何らかの関連があるものと考えられる。

遺物出土状況 墳丘盛土から土器片3, 212点、石器64点、木製品21点、周溝埋土から土器片が1, 005点、石器12点、木製品1点、銅鏝1点が出土した。墳丘盛土最上層からは須恵器と山皿が数点出土したが、墳丘崩壊であり、洪水堆積層の攪乱を受けており、Ⅲ～Ⅳ層に対応する層になると考えられる。墳丘盛土からは弥生時代中期から弥生時代後期末までの土器が散在するが、原位置性の高い遺物は墳丘南東隅に一部露出した状況で出土した壺2124で、掘形が確認できないことから、墳丘構築時に埋納したものと思われる。他に盛土下部から高坏B部2142が逆位で出土したほか、埋納された壺よりもやや古い時期の土器が出土した。また、墳丘構築の②工程の際に、東辺で赤彩が残る礎が出土しており（Stc03）、墳丘構築の際の祭祀に関わる可能性がある。周溝からは、墳丘から転落したような状況で、東溝から鉢、南溝から小型壺と銅鏝が出土した。その他、墳丘面検出の際に、斎串状木製品が13点まとまって出土したが、その後の調査で墳丘覆土である洪水堆積層からも同様の木製品が出土したため、この墳丘に伴うものではないと考えられる。

出土遺物 2124～2181は墳丘盛土からの出土である。2124はⅦ期の壺A5類で、口縁部が外反し、口縁端部を下方に拡張して、横線文を施す。口縁部内面は凹み、羽状刺突文を施す。胴上部は横線文と山形文を施し、赤彩する。2125はⅥ期の壺B1類で、口縁部が外反して開き、端部を外側に折り曲げるように屈曲させる。2126はⅥ期の壺で、凹み底の底部片であるが、強い二次焼成を受けて、器面が変色している。2127はⅣ期の壺の底部片である。2128はⅡ期の壺A1類で、大きく開く口縁部で、端部を下方に拡張し、波状文を施した後、ユビによる押圧を加える。2129はⅡ期の壺B類で、口縁部が外反し、端部を上方にやや積み上げて面をなし、波状文を施す。口縁端部下端には押圧を施した突帯を巡らす。口縁部内面や頸部外面には条痕地に半截竹管状工具による波状文を施す。2130～2132はⅡ期の壺の底部片。2133はⅥ期の甕B3類で、口縁端部にユビによる圧痕が認められる。2134はⅥ期の甕E5類で、口縁部がやや内湾する小型の甕である。2135・2136はⅡ期の甕B類で、口縁端部に刻みを施す。2137はⅡ期の甕の底部片である。2138はⅥ期の鉢C類で、小型の鉢である。2139はⅥ期の鉢E類で、小さな平底の底部から、胴部は直線的に開き、口縁部でわずかに内湾する。2140はⅤ期の鉢B類で、円孔を開けた鉢の底部片である。2141はⅤ～Ⅵ期と思われる鉢G類で、底部はやや丸底気味で胴部は丸く、口縁部がやや外反する。胴部内外面に同心円状の工具痕が認められる。ほぼ同じ形態の土器が包含層からも出土している。2142～2148はⅥ期の高坏である。2142は高坏B4類で、口縁部が外反して開くが、坏部がやや深い。2143は高坏C2c類で、坏部が深く口縁部がやや内湾する。口縁部内面は肥厚し、多条沈線文を施す。2144・2145は高坏C3b類で、口縁部がやや内湾し、口縁部内面を肥厚させて多条沈線文を施す。2146～2148は高坏の脚部で、裾部が内湾する。2149はⅡ期の内傾口縁土器で、屈曲した口縁部片である。2150はハイアロクロスタイト製の楔形石器で、磨製石斧の転用品である。2151・2152は剥片としたが、玉製作時の素材片と思われる。2153は柱状片刃石斧で上部は欠損する。2154～2156は太型蛤刃石斧で、2154・2155は扁平で、2156は柱状である。2157～2159は叩石で、2157には砥面が確認できる。2158は上下端部に、2159は下端部に敲打痕が見られる。2160～2163は砥石で、2160・2162にはU字状の溝がある。2163には砥面に敲打痕が確認できる。2164～2166は石鋸で、紅靡石片岩製で

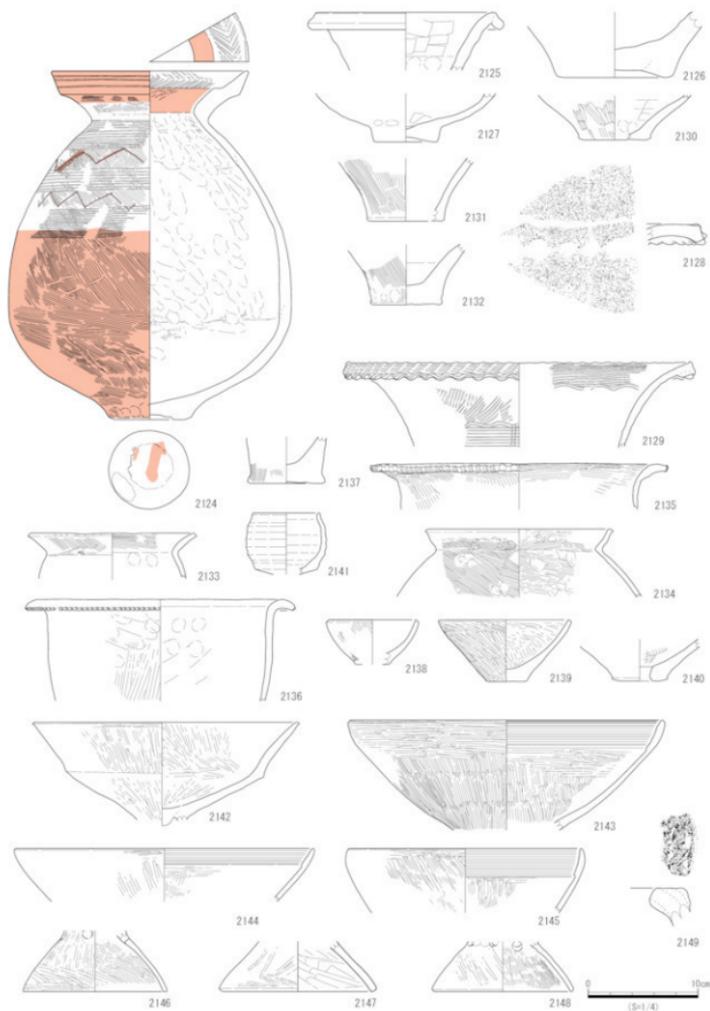


図368 SZc40出土遺物（1）

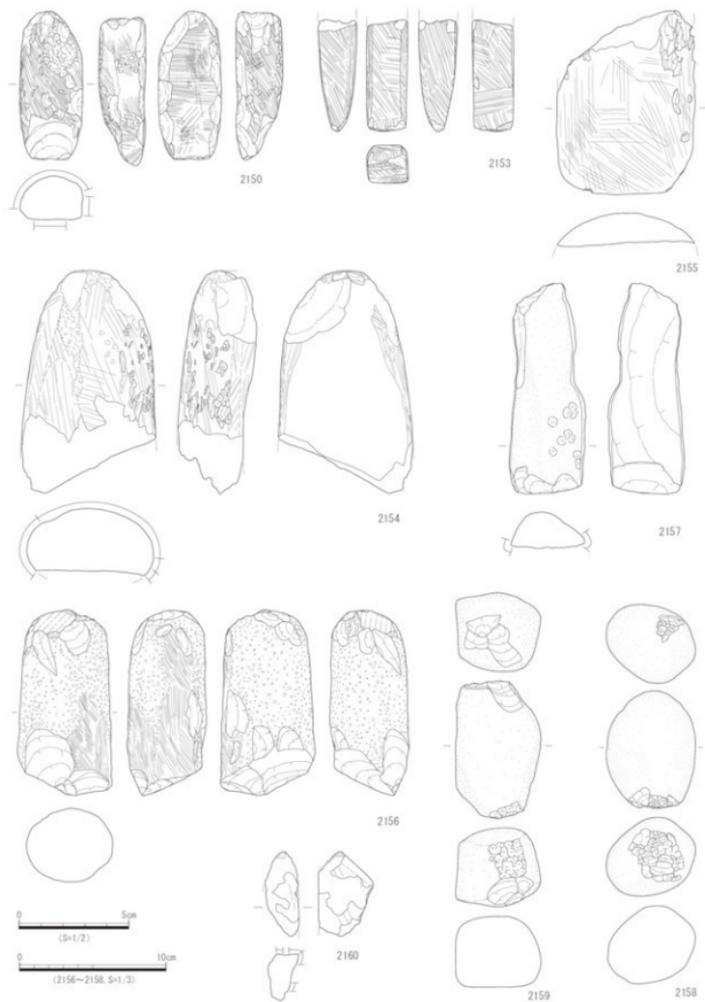


图369 SZc40出土遺物 (2)

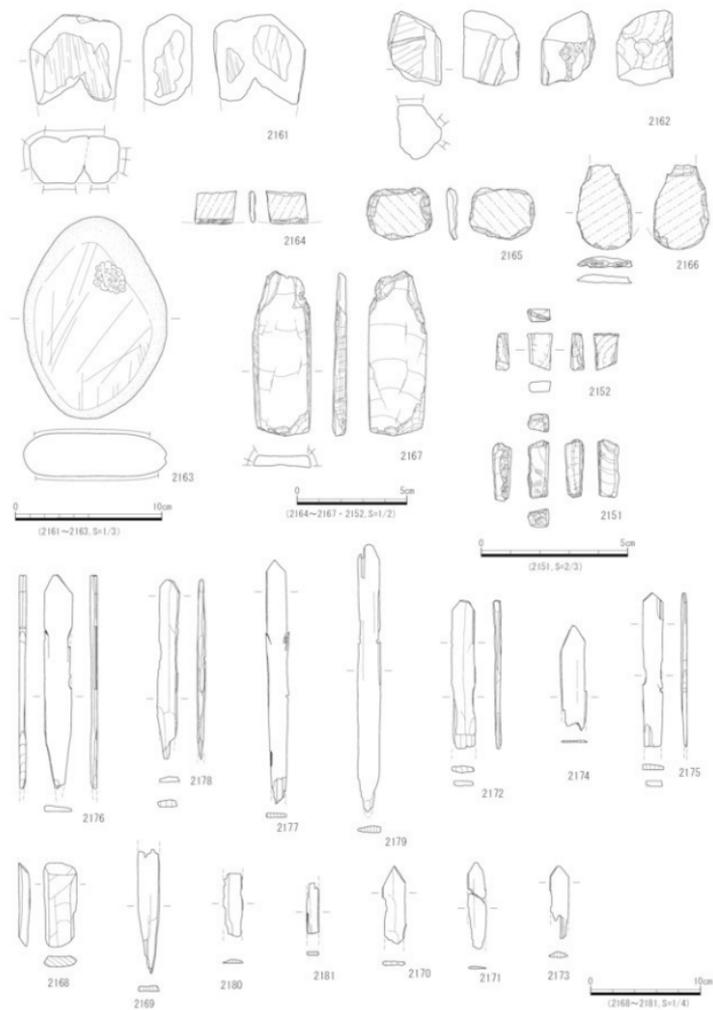


図370 SZc40出土遺物 (3)

ある。2167は石製品で縄文時代の石棒。端部が楔状になり、敲打痕があるため、二次利用された可能性がある。2168は建築部材の棧材で、上下両端部を斜めに切断している。2169～2181は畜串状木製品で、古代律令期のものであると思われる。いずれも薄く加工されているが、一部に欠損がある。2175～2179には両側面に1箇所ずつ切れ込みが入れている。

2182～2199は周溝埋土からの出土である。2182はV～VI期と思われる壺H2a類で、口縁部がやや内湾する。2183はVI期の壺H類で、口縁部を欠く。2184・2185はVI期の壺の底部片で、2184は底部内外

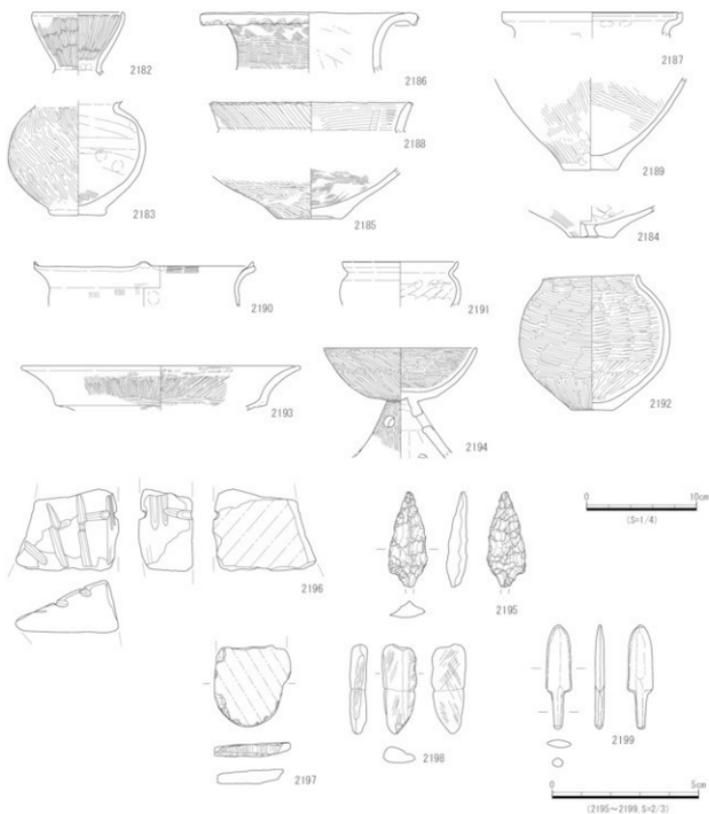


図371 Szc40出土遺物（4）

面から円孔をあけている。2186はⅡ期の壺A1類で、口縁部が強く外反し、端部下端を肥厚させて、ユビによる圧痕を施す。2187はⅥ期の甕A2類の口縁部、2188はⅥ期の甕B3類、く字甕の口縁部で、端部の調整が粗く、ユビによる圧痕が認められる。2189はⅥ期の甕の平底の底部片である。2190はⅡ期の甕A類で、口縁部で外反して開き、端部を2～4箇所ユビで押圧する。2191はⅥ期の鉢A1類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる小型の鉢で、胴部が張る。胴下半には煤が付着する。2192はⅥ期の鉢F類で、球形の胴部に平底の底部が付き、口縁部が外反して短く立ち上がる。2193はⅥ期の高杯B3類、2194はⅥ期の高杯H1類で、杯部が緩やかに内湾して開く碗状の形態で、脚部は基部から開く。2195はチャート製の打製石織で、基部を欠損する。2196は砥石で、細いU字状の溝が8箇所見られるが、楔を打って割った痕跡か。2197は石鋸で、紅廉石片岩製である。2198は玉の未製品で、全体的に摩滅が進んでいる。裏面は研磨と摩滅面のみで、左側に面が作られ、表面右側に溝がある。2199は銅織で完形品である。

時期 時期決定に関わる遺物としては、墳丘に埋納された壺(2124)がⅦ期(廻間Ⅱ式後半)、周溝内に転落したと思われる小型壺(2183)や鉢(2191)はⅥ期(廻間Ⅰ式)と考えられることから、墳丘に埋納された土器と周溝埋土出土の土器では時期差が認められる。このことから、Ⅵ期にこの方形周溝墓は構築され、その後祭祀儀礼が行われ、その時に埋納されたのが壺(2124)であると考えられる。

SZc41 (図372～図375)

検出状況 Ⅲ層に対応する洪水堆積層を除去した段階で、墳丘の盛り上がりと周溝部の凹む状況が確認できた。さらにⅣa層を除去した段階で、周溝の平面形を引き、掘削を開始したが、発掘区西壁土層断面で堆積状況を確認した結果、ほぼ同時期になると思われるSZc40において、Ⅳb層は周溝埋土を覆うことが確認できたため、本遺構についてもⅤ層上面の遺構であると判断した。なお、方形や長方形に土地を区画するように溝を配置した遺構であるため方形周溝墓に分類したが、後述するように、墳丘が残存するにもかかわらず主体部と考えられる遺構が検出できないことや、その他関連すると思われる遺構の存在や遺物出土状況から、墓ではなく、祭祀儀礼に関連する遺構である可能性がある。

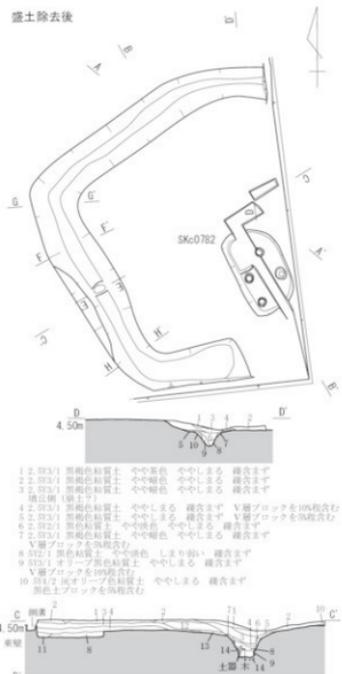
方台部 一部が発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、検出した南西北辺部は直線的である。北西北辺部は直線的であるが、東端部で緩やかに湾曲する。南東辺部は直線的ではあるが、中央付近で溝が途切れるため、形状ははっきりしない。隅部はやや丸みがあり、方台部の形状は隅丸の方形又は長方形になると思われるが、北西北辺部の東端部の湾曲がコーナー部であるとする、東辺部は湾曲している可能性がある。墳丘盛土は、最も高く残る部分で0.23mを確認した。墳丘盛土としては低く、上面は平坦である。墳丘にはⅤ層ブロックや円礫が少し混じるオリブ黒色～黒褐色の粘質土を水平に堆積していることから、構築については整地後に単純に盛土したと考えられる。主体部は、墳丘が残存しており、盗掘もないことから、墳丘面の検出時から注意して精査したが、主体部の可能性のある土坑は確認できなかった。墳丘面上で方形土坑SKc0780を検出したが、棺痕跡がなく、その上に盛土もないことから、主体部とは考えにくい。また墳丘盛土下でSKc0782を検出したが、位置が墳丘中央ではなく南側によっていることや棺痕跡が確認できないことから主体部の可能性は低いと考えられる。このSKc0782の底面からは4基の柱穴SPc142～SPc145を検出しているが、これら一連の遺構は、SZc41構築に伴う可能性も考えられる。

SzC41



- 1 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、しまり強い、雑草多し 炭化物粒が混じる
 2 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 3 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、IV層
 4 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 5 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 6 2. 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 7 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 8 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 9 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 10 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 11 107R:1 灰色砂質土、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを30%混含む
- 関係部注記
 1 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、しまり強い、植物遺物を多く含む
 2 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、砂5cm以下の層を1%混含む
 3 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを1%混含む
 4 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを1%混含む
 5 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを10%混含む
 6 2. 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを5%混含む
 7 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを1%混含む
 8 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 9 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 10 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを20%混含む
 11 7. 07R:1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを10%混含む
 12 107R:1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを30%混含む
- 関係部注記
 1 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを30%混含む
 2 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを5%混含む
 3 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 4 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 5 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 6 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを30%混含む
 7 07R:1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを30%混含む
 8 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを10%混含む
 9 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 10 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 11 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 12 07R:1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを10%混含む

盛土除去後



- 1 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 2 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 3 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 4 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 5 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを10%混含む
 6 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを5%混含む
 7 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 8 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 9 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 10 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 11 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 12 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 13 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 14 V層
- 関係部注記
 1 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、砂5cm以下の層を1%混含む
 2 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、砂5cm以下の層を1%混含む
 3 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 4 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを10%混含む
 5 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを30%混含む
 6 2. 07R2:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、V層ブロックを5%混含む
 7 107R:1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 8 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 9 07R:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 10 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 11 7. 07R:1 灰色砂質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し、黒色土ブロックを10%混含む
 12 2. 07R2:1 黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 13 07R:1 オリーブ黒色粘質土、やや暗色、ややしまる、雑草多し
 14 V層

図372 SzC41

周溝 北西溝及び南西溝と南東溝の一部を検出した。幅は0.7～1.2mほどで、底面は狭く、ほぼ平坦であるが、コーナー部ではやや浅くなる。断面はV字状で傾斜がきつい。南東溝は途切れており、屈曲する可能性もある。また、南西溝底面中央において、小穴Skc0781を検出したが、V層上面の他の遺構との底面レベルに違いがありすぎることや、位置が南東溝の中央になることから、木柱を立てたようなものではないかと推測される。埋土は11層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックについても壁面の崩落の可能性があることから、自然堆積のように思われる。しかし、V層ブロックが埋土の上層部でも確認できることから、ある段階では人為的な埋め戻しがあった可能性も考えられる。

遺物出土状況 墳丘盛土から土器片424点出土し、原位置性の高いものはないが、墳丘面上で高坏(2158)が出土し、同一個体の土器片が周溝埋土中からも出土したことから、墳丘盛土内に存在し墳丘崩落とともに転落したものである可能性が考えられる。石器は9点出土し、内訳は剥片2点、砥石5点、石鋸2点である。周溝埋土からは土器片が298点が散在して出土した。石器は14点出土し、内訳は、磨製石斧1点、削器1点、MF1点、剥片6点、石核1点、叩石1点、砥石2点、石鋸1点であった。木製品は41点が出土したが、南西溝埋土下部では、砥石と共に端部を加工した板材や棒材がまとまって出土した。材や木取りに共通性があり、墳丘祭祀で用いられた容器や台のようなものの部材の可能性もある。また動物形代も1点出土した。

出土遺物 2200～2211は墳丘盛土からの出土である。2200は墳丘面上と周溝埋土上層から出土したⅦ期の高坏Ca類で、坏部が大きく開きやや浅くなる中型の高坏で、坏底部が比較的小さい。脚部はやや内湾して開く。1段4方向透かし。口縁部内面に沈線1条と連弧文を1条施すが、部分的に連弧文が直線文になっている。2201は甕の脚台部であるが、裾部がやや内湾することからⅥ期と思われる。2202はⅤ～Ⅵ期の甕の脚台部である。2203はⅣ期の甕の平底の底部片である。2204・2205はⅡ期の甕である。2204は甕A類で口縁部は短く外反する。2205は甕B類で、口縁部が強く外反し、端部に刻みを施す。口縁部内面には波状文を施す。2206は瑪瑙製の楔形石器。2207～2211は砥石であるが、2209・2210は板状で、2210にはU字状の溝が見られる。2211は表裏に砥面があり、敲打痕も見られる。2212～2238は周溝埋土からの出土である。2212はⅥ期の高坏の内湾する脚部で、比較的短脚である。1段4方向透かしである。2213はⅣ期の甕B類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる。口縁部外面に刺突文を施す。2214は大型蛤刃石斧の完形品である。2215は削器で下部は欠損する。2216・2217は砥石で、2217には敲打痕が見られる。2218～2220は鋤である。2218は一木鋤の屑の部分かと思われる。2219は2218と同一のものかもしれない。2220は三又鋤の真ん中の刃で、上端部は欠損している。上部は断面が長方形をしているが、下部先端は表面から斜めに削って尖らせている。2221は動物形代で、上部が欠損しているが、右側が尾部分と思われる。2222～2229は建築部材の残材で、樹種はスギ、木取りは柾目又は追柾目である。2222～2224は端部を斜めに加工して尖らせている。2226～2228は左右側面を斜めに加工している。2230～2232は加工材の板材で、樹種はスギ、木取りは柾目又は追柾目である。仕事は粗い。2233～2237は加工材の棒材で、いずれも角材である。2221の樹種はヒノキ、それ以外はスギで、木取りはすべて柾目である。2238は加工材の残材で、上端部は欠損している。側面を細かく加工している。

時期 墳丘面上と周溝埋土中から出土した土器片が接合した高坏(2200)から、古墳時代前期(Ⅶ期)の遺構と考えられる。

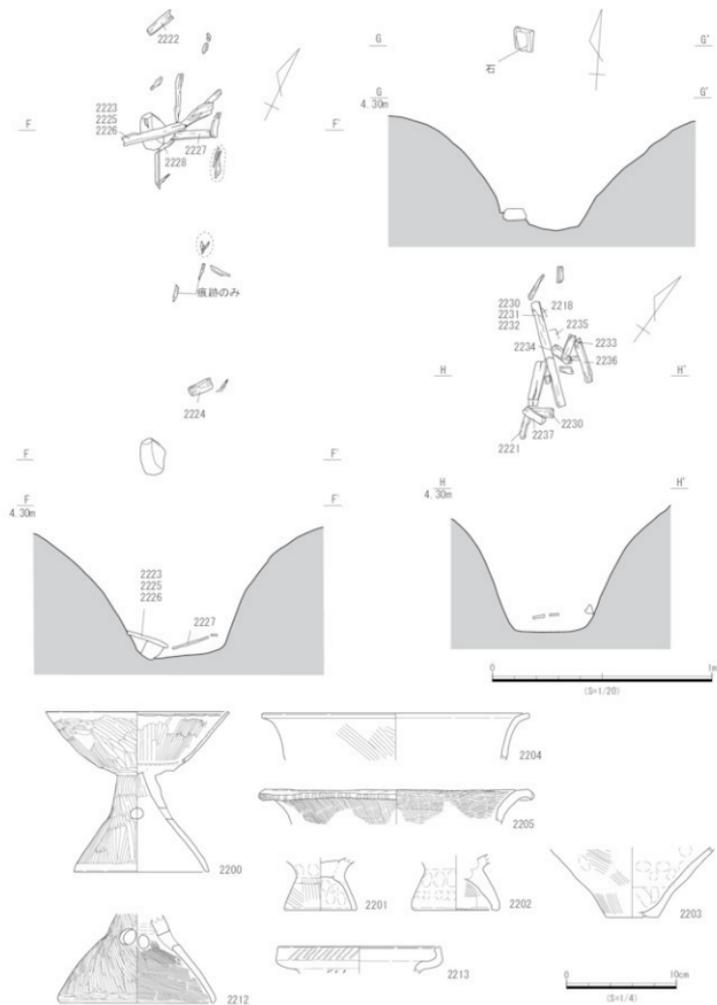


図373 Szc41出土遺物(1)

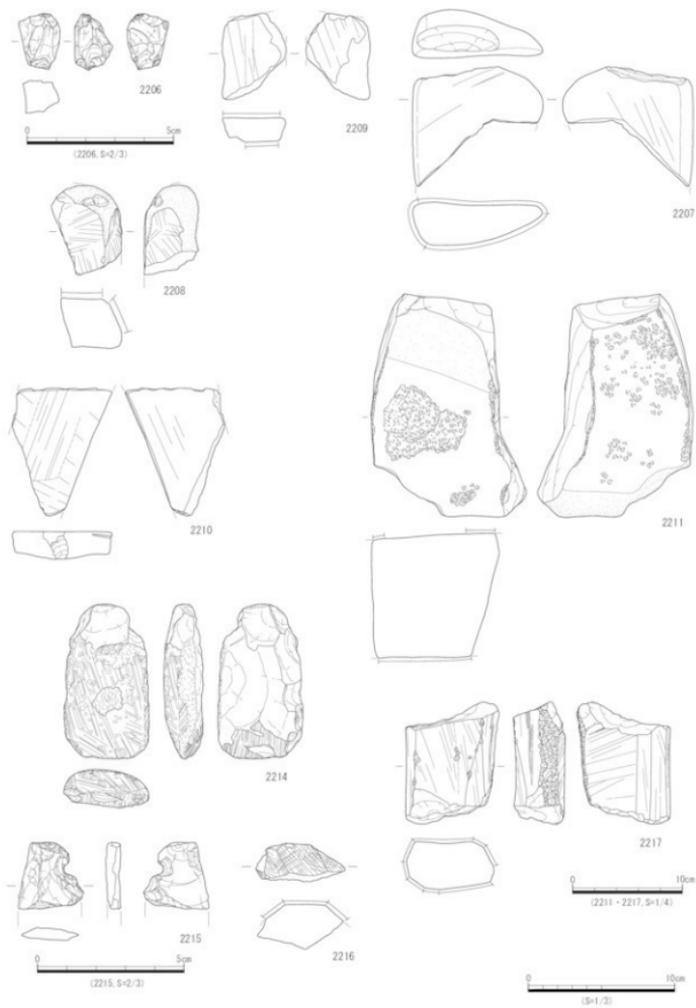


図374 SZc41出土遺物（2）

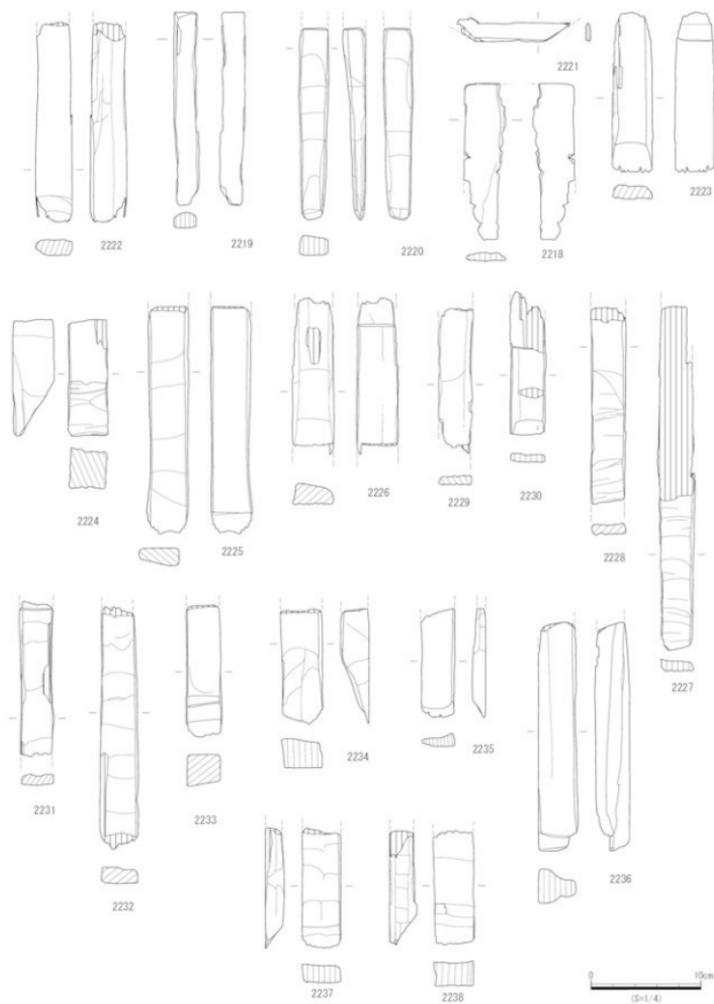


图375 SZc41出土遺物(3)

SKc0768 (図376)

検出状況 IV b層を除去した、V層上面で検出した。平面形は比較的明瞭で、東部を他の遺構に削平されるが不整長楕円形のやや深い穴で、壁面は開く。底面は西側にテラス状の段があり、東側は小穴状に低くなる。埋土は3層に分層したが、埋土2層が埋土3層を切るように堆積しており、その上を埋土1層が覆っており、いずれもV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が22点出土したが、埋土上部で一個体の壺2239が散乱して出土した。**出土遺物** 2239はII期の壺A1a類で、口縁部が大きく開く。口縁端部を下方に拉張り、端部は直線文を施し、上下に押圧と刻みを施す。頸部から胴上部外面に横線文を施す。

時期 図示した土器から、II期と思われる。

SKc0772 (図377・378)

検出状況 IV b層を除去した、V層上面で検出した。平面形は不明瞭で、08_13地点ではサブトレンチを掘削し遺構の掘り込みを確認してから、土壌化したV層を10cm程度掘り下げて、平面形を確認した。平面形は不整長楕円形のやや深い穴で、底面はほぼ平坦である。壁面は開く。埋土は8層に分層したが、ほぼ水平堆積で、黒色土ブロックやV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。完形の壺が出土したことや堆積状況から、墓坑の可能性が考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して98点出土した。底面近くでは壺2240が1個体横位で出土した。

出土遺物 壺と甕を図示したが、いずれもIII期のものである。2240は壺A1類で小型のものである。口縁部が短く開く。胴部は下位で強く張り、平底となる。口縁部から頸部に横線文帯を施し、胴上部に

SKc0768

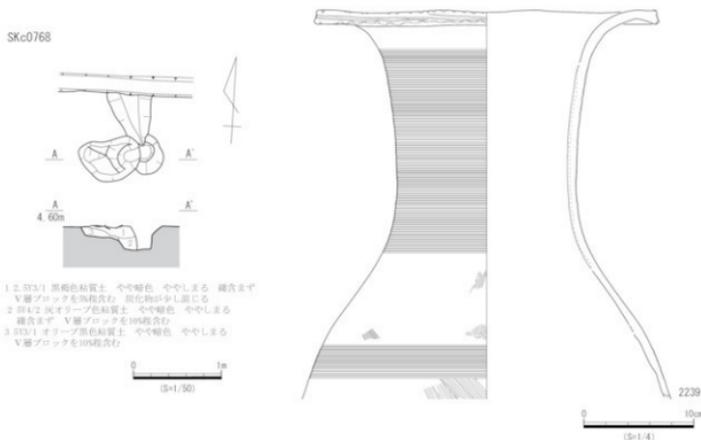
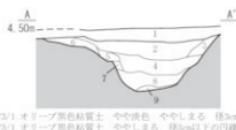
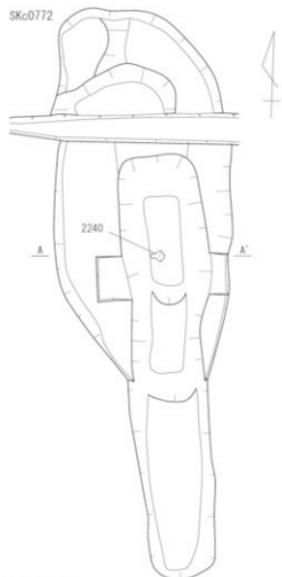


図376 SKc0768

は横線文と縦位の波状文を施す。2241は壺B類で、口縁部が外反して開き、口縁端部に横線文を施す。また、口縁端部を上下にユビで押さえ、波状としている。頸部から胴上部にかけては、櫛状工具による横線文や波状文を施す。2242は壺の平底の底部片である。2243～2245は甕の口縁部で、外反して開いた端部に刻みを施す。

時期 図示した土器から、Ⅲ期と思われる。

SKc0772



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 径5cm以下の円錐を15個含む
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 径5cm以下の円錐を15個含む
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5cm以下の円錐を15個含む
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑骨まで 黒色土ブロックを20%含む
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑骨まで V層ブロックを20%含む
- 6 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 雑骨まで 炭化物が少し混じる
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑骨まで V層ブロックを10%含む
- 8 7.5Y4/1 灰色砂質土 ややしまる 雑骨まで 黒褐色土ブロックを40%含む
- 9 5Y4/1 灰オリーブ色粘質土 ややしまる 雑骨まで 黒色土ブロックを20%含む



遺物出土状況

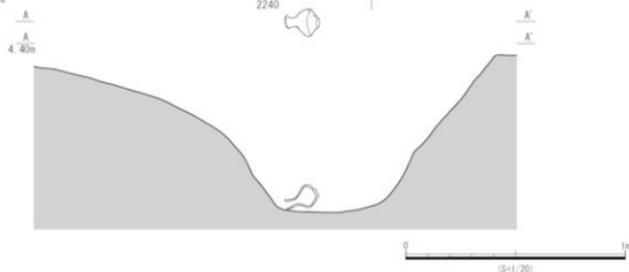


図377 SKc0772

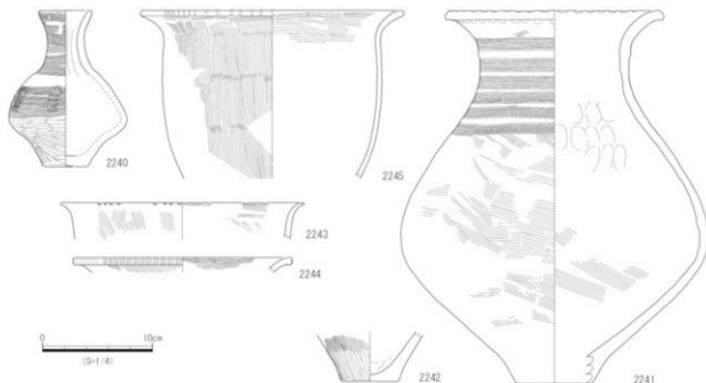


図378 SKc0772出土遺物

SKc0778 (図379)

検出状況 SZe40の周溝底面で検出したが、一部SZe40の墳丘を掘り込んでいた。平面形は比較的明瞭で、不定形で深い穴である。壁面は段をもって開く。底面はほぼ平坦であるが、狭い。埋土は11層に分層したが、ほぼ水平堆積でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して33点出土したが、小片のみで図示可能なものはなかった。

時期 墳丘を掘り込むものの、SZe40周溝埋土に覆われていることから、墳丘構築後すぐに掘削されたものであると思われる。SZe40の墳丘がVI～VII期に構築されていることから、VI～VII期と思われる。

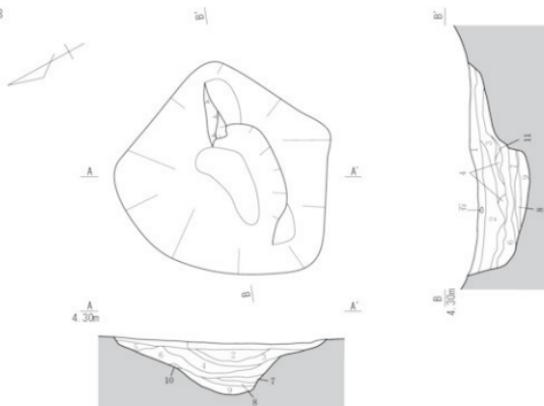
SKc0779 (図379・380)

検出状況 III層に対応する洪水堆積層除去した段階で、墳丘の盛り上がりと周溝部の凹む状況が確認できたが、その際にSZe40周溝の凹みに、陸橋状の高まりとして検出した。平面形は不定形で、SZe40周溝を横断するように盛土されており、南北に長い形状である。周溝の底面をほぼ平坦に10～15cmほど掘り下げているため土坑としたが、盛土をしており、深さはあまりなく、盛土部分の方が多い。埋土は62層に分層したが、ブロック状の堆積であり、人為的に埋め、かつ盛られたものと思われる。性格不明の土坑であるが、可能性として、周溝内埋葬も考えられたが、副葬品のような遺物はなく、棺のような痕跡も確認できなかった。また、方形周溝墓の陸橋としては、一般に陸橋は掘り残す方が効率的であることや、一旦掘り込んでから盛土していることなど不可解な点が残る。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して82点出土した他、剥片が4点出土した。土器の中にはIV～V期の甕やVI～VII期の高坏と思われる小片が出土したが、図示可能なものはなかった。

時期 SZe40に関連する遺構と考えられる。盛土が墳丘に乗ることから、墳丘構築後であるが、周溝埋土に覆われることから、時期差はあまりないと考えられる。従って、SZe40と同時期のVI～VII期と思われる。

SKc0778

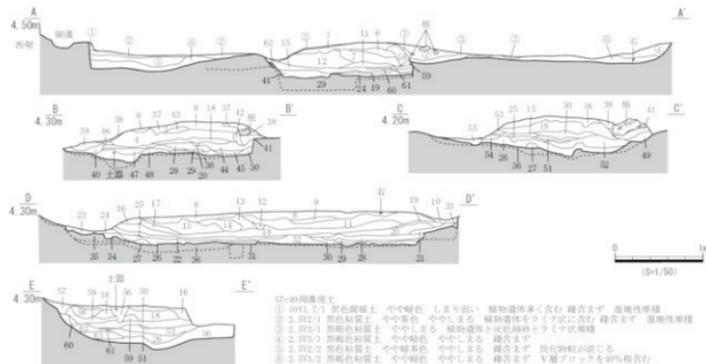


- 1 2. 073/1 黒色粘質土 ややしまる 緑色以下の片礫を1%程度含む
- 2 2. 072/1 黒色粘質土 ややしまる 緑含まず V層ブロックを1%程度含む
- 3 073/1 オリーブ黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず V層ブロックを20%程度含む
- 4 2. 072/1 黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず V層ブロックを10%程度含む
- 5 7. 074/1 灰色砂質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず 黒色土ブロックを1%程度含む
- 6 073/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 緑含まず V層ブロックを40%程度含む
- 7 073/1 オリーブ黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず V層ブロックを10%程度含む
- 8 7. 072/1 黒色粘質土 ややしまる 緑含まず V層ブロックを1%程度含む
- 9 1072/1 黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず V層ブロックを10%程度含む
- 10 073/1 オリーブ黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず V層ブロックを30%程度含む
- 11 7. 073/1 オリーブ黒色粘質土 やや褐色 ややしまる 緑含まず V層ブロックを30%程度含む

SKc0779



図379 SKc0778・SKc0779 (1)



- 52:04河階礫土
 ① 1011/2) 黒色粘質土 やや暗色 しまり強い 植物体多く含む 礫含まず 崖地性発露
 2) 7.574/1) 黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを10%程度含む 植物遺体を含む
 3) 2.572/1) 黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを10%程度含む 植物遺体を含む
 4) 58/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 5) 52/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 6) 59/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色砂質土ブロックを10%程度含む
 7) 2.573/1) 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色砂質土ブロックを20%程度含む 植物遺体を含む
 8) 7.574/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 9) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 10) 7.574/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 11) 7.574/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 12) 57/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 13) 2.573/1) 灰色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを40%程度含む
 14) 57/1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを40%程度含む
 15) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色砂質土ブロックを10%程度含む
 16) 57/1) オリーブ黒色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色砂質土ブロックを20%程度含む
 17) 58/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 18) 2.572/1) 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず
 19) 2.572/1) 黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを20%程度含む
 20) 1014/1) 灰色砂質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 21) 2.573/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロック、灰色土ブロックを30%程度含む
 22) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む 植物遺体を含む
 23) 57/1) 灰色粘質土 ややしるる ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを40%程度含む
 24) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 25) 58/1) 灰色砂質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 26) 57/1) 黒色粘質土 ややしるる 礫含まず V層ブロックを40%程度含む (58/1)礫土
 27) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 28) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず V層-V層
 29) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず
 30) 2.572/1) 黒色粘質土 やや暗褐色 しまり強い 礫含まず 礫がV層
 31) 2.571/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを5%程度含む
 32) 2.572/1) 黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 33) 7.574/1) 灰色砂質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 34) 2.573/1) 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを10%程度含む (58/1)による影響
 35) 1014/1) 灰色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む (58/1)による影響
 36) 7.571/1) 灰色砂質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 37) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 38) 57/1) オリーブ黒色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを10%程度含む
 39) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを10%程度含む
 40) 57/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 41) 1014/1) 灰色砂質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを20%程度含む
 42) 57/1) 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 43) 58/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 44) 7.571/1) 灰色砂質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを5%程度含む
 45) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 46) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを5%程度含む
 47) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを20%程度含む
 48) 57/1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 49) 57/1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 50) 2.573/1) 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 礫がV層ブロックを10%程度含む
 51) 57/1) 灰色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
 52) 7.571/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 53) 1014/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 54) 2.573/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず
 55) 57/1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 灰色砂質土ブロックを20%程度含む
 56) 1014/1) 灰色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 57) 57/1) 灰色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 58) 2.574/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む
 59) 57/1) 黒褐色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを30%程度含む
 60) 57/1) オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしるる 礫含まず 礫がV層
 61) 7.571/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず ややしるる 礫含まず
 62) 57/1) 灰色粘質土 ややしるる 礫含まず 黒褐色土ブロックを10%程度含む

図380 SKc0779 (2)

SKc0780 (図381)

検出状況 SZe41の墳丘上面で検出したが、平面形は比較的明瞭で、不整形形で浅い穴である。壁面はやや開く。底面はほぼ平坦である。埋土は単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性はある。SZe41の主体部としては、棺痕跡が全く確認できないことや、浅い上に覆う土がなかったことから、その可能性は低いと考えられる。SZe41が祭祀の場として使われた可能性を考えると、それに関連する施設である可能性もある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が24点、石器類では石鋸が2点出土した。

出土遺物 2246はⅡ期の壺B類で、条痕文を施すものである。口縁部が大きく開いた後、端部を屈曲して立ち上げる。屈曲部の下には突帯を巡らせ、ユビによる押圧を加える。2247・2248は石鋸で2247は結晶片岩製、2248は紅麻石片岩製である。

時期 時期を特定できる遺物の出土はないが、SZe41墳丘上面での検出であることやSZe41墳丘上面でⅦ期の高杯が出土したことから、Ⅶ期と思われる。

SKc0781 (図382)

検出状況 SZe41の南西周溝底面で検出したが、平面形は明瞭であった。不整形形でやや浅い穴である。壁面は立ち、底面はほぼ平坦である。埋土は単層で堆積状況は不明である。性格不明の穴であるが、南西溝のほぼ中央に位置することから、SPe142～SPe145と共に、SZe41の構築に関連する可能性はある。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 SZe41との関連があると考えられ、SZe41と同時期の古墳時代前期(Ⅶ期)と思われる。

SKc0782 (図382)

検出状況 SZe41の墳丘盛土を除去した後、V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は不整形形で浅い穴である。底面はほぼ平坦で、この底面からSPe142～SPe145を検出している。ただし、積極的にこの土坑に付属すると考える根拠はない。SPe145については、本遺構を掘り下げ時に一緒に掘削してしまっている。埋土は5層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土の一部に黒色土ブロックやV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性はある。SZe41の主体部の可能性も考えられたが、棺痕跡が確認できないことや方台部の南よりに位置することから、その可能性は低いと思われる。また、内部から4基の柱穴を確認していることから、SZe41の構築に伴う遺構の可能性も考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して12点出土したが、小片のみで図示可能なものはなかった。

時期 時期が分かる土器の出土がないためはっきりしないが、SZe41の墳丘下のV層上面で検出したことから、SZe41と同時期のⅦ期か、それ以前と思われる。

SKc0786 (図383)

検出状況 IVb層を除去したV層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は不整形形で深い穴である。壁面は立ち、底面はほぼ平坦である。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して33点出土したが、小片のみであった。砥石が1点出土し

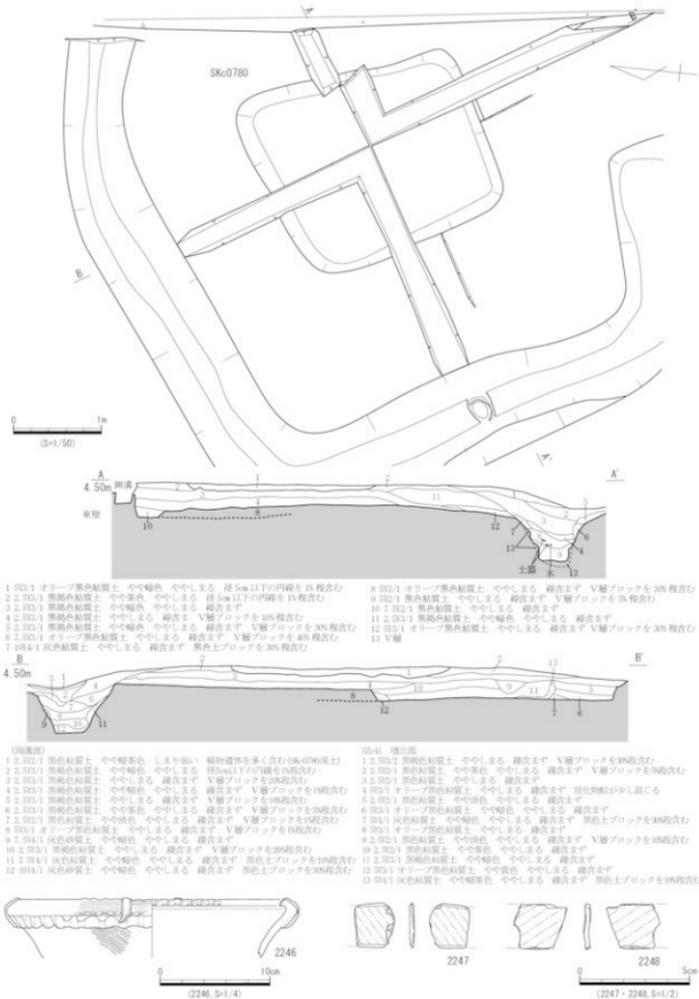
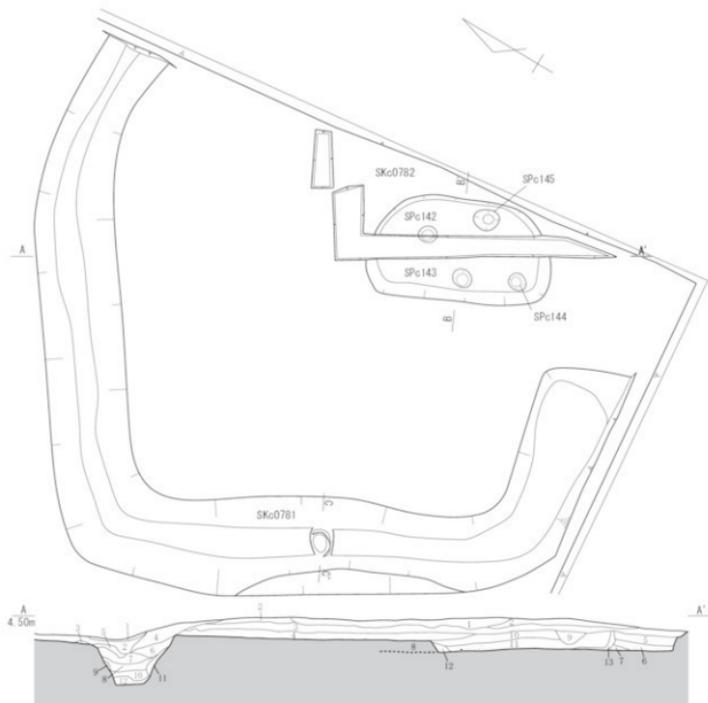


図381 SKc0780



- 両溝部
- 1 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗茶色 しまり強い、細砂遺体を多く含む
 - 2 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 径5mm以下の円鏡を1%程度含む
 - 3 2. S2/1 黒色粘質土 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを20%程度含む
 - 4 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 5 2. S2/1 黒色粘質土 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを1%程度含む
 - 6 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを10%程度含む
 - 7 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 8 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを1%程度含む
 - 9 2. S2/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 10 2. S2/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを30%程度含む
 - 11 2. S2/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず 灰色土ブロックを10%程度含む
 - 12 10/4 灰色砂質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず 灰色土ブロックを30%程度含む
- 堀込部
- 1 2. S2/2 黒色粘質土 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを30%程度含む
 - 2 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 3 2. S2/1 黒色粘質土 ややしまる 鏡含まず
 - 4 S2/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 鏡含まず 屈折物鏡が少し混じる
 - 5 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 6 S2/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 7 S2/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 - 8 S2/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 鏡含まず
 - 9 2. S2/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず(SK-0782埋土)
 - 10 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず(SK-0782埋土)
 - 11 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず(SK-0782埋土)
 - 12 S2/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず (SK-0782埋土)
 - 13 S2/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず 灰色土ブロックを10%程度含む(SK-0782埋土)
- 1 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
 2 2. S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず V層ブロックを10%程度含む
 3 S2/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
- 1 S2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 鏡含まず
- 0 1m
 (1/50)

図382 SKc0781・SKc0782

た。

出土遺物 2249は砥石で、板状のものである。両面に砥面があり、一方にはU字状の溝が見られる。

時期 時期が決定できる遺物の出土はないが、V層上面の遺構であり、弥生時代であると思われる。

SKc0799 (図383)

検出状況 SZc40の周溝底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。当初は盛土状の遺構であると思ひ掘削したが、土坑であった。平面形は不整長楕円形でやや深い穴である。壁面はやや開き、底面はほぼ平坦である。埋土は16層に分層したが、ブロック状の堆積があり、人為堆積であると思われる。人為堆積が考えられる堆積状況であることや遺構の形状、周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して77点出土したが、小片のみで図示できるものはなかった。石鋸が1点出土した。

出土遺物 2250は石鋸で、紅塵石片岩製である。

時期 弥生時代中期の土器が出土したことや、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

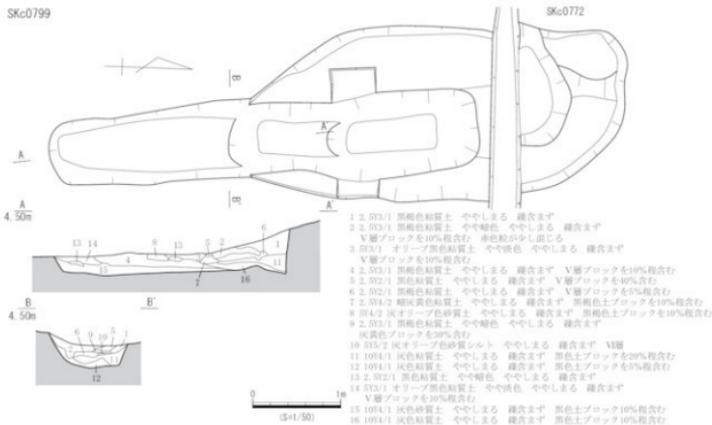
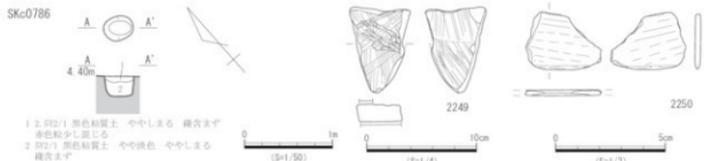


図383 SKc0786・SKc0799

SKc0800 (図384)

検出状況 SZc40の周溝底面で検出したが、土器片がややまとまって出土したことから精査して平面形を確認した。平面形は不整形円形でやや浅い穴である。壁面は立ち気味で、底面は北東側にわずかに段がつくが、ほぼ平坦である。埋土は10層に分層したが、ブロック状の堆積があり、人為堆積であると思われる。人為堆積が考えられる堆積状況であることや遺構の形状、周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して43点出土したが、埋土上部に破片となった甕2251がまとまって出土した。

出土遺物 2251はⅡ期の甕A類で、口縁部が強く外反する。端部は丸く収める。

時期 図示した甕をはじめ、弥生時代中期の土器が出土したことや、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

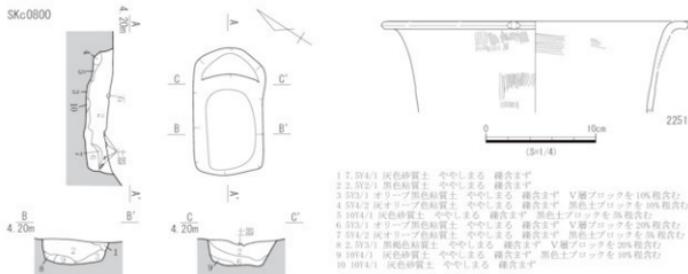
SKc0801 (図384)

検出状況 SZc40の周溝底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は他の遺構に切られるため不明であるが、浅い穴である。壁面はやや開く。底面はやや丸みがある。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積である可能性がある。人為堆積が考えられる堆積状況であることや遺構の形状、周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が30点出土したが、小片ばかりで図示可能なものはなかった。

時期 弥生時代中期の土器が出土したことや、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

SKc0800



SKc0801

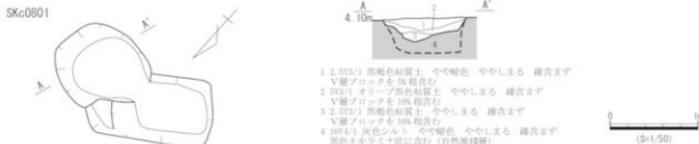


図384 SKc0800・SKc0801

SKc0802 (図385)

検出状況 SZe40の周溝底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は不整形楕円形で浅い穴である。壁面はやや開く。底面はほぼ平坦である。他の類似する遺構と比較して長軸が長すぎるとも言え、2つの遺構を1つにしてしまった可能性もある。埋土は4層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積である可能性がある。人為堆積が考えられる堆積状況であることや周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が28点出土したが、小片ばかりで図示可能なものはなかった。

時期 弥生時代中期の土器が出土したことや、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

SKc0803 (図385)

検出状況 SZe40の墳丘及び周溝底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形はほぼ楕円形でやや浅い穴である。壁面はやや開く。底面はほぼ平坦であるが、南側へ傾斜している。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積である可能性がある。人為堆積が考えられる堆積状況であることや周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が19点出土したが、時期が特定できるものは弥生時代中期のものである。

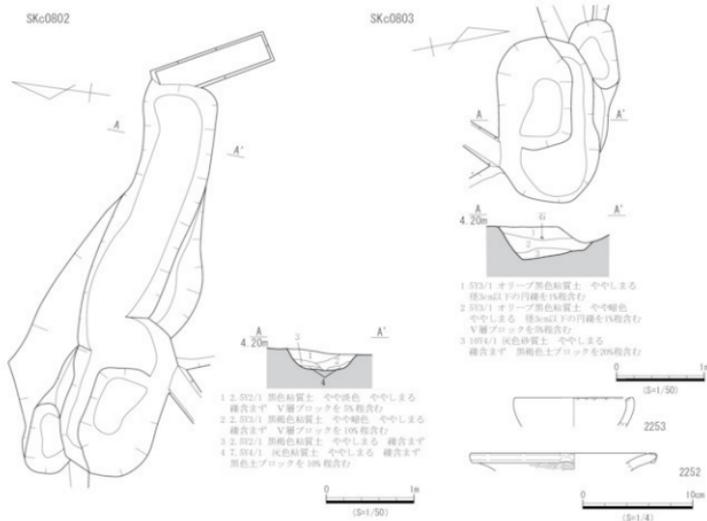


図385 SKc0802・SKc0803

出土遺物 2252はⅡ期の壺A2類の口縁部で、押圧が一箇所確認できる。2253はⅡ期の壺C類で、口縁部が強く内湾し受口状となる。口縁端部内側に刻みを施す。

時期 図示した土器の他、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土していることから、弥生時代中期と思われる。

SKc0806 (図386)

検出状況 SZc-40の墳丘底面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。平面形は不整形形で深い穴である。壁面は立ち気味である。底面はやや丸みがある。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積である可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が9点出土したが、小片が多い。また、石片が1点出土した。

出土遺物 2254はⅡ期の甕A類で、口縁部が短く外反する。2255は石片で、砥面に微量にベンガラ由来の赤色顔料(第5章第12節参照)が残存する。持ち手部分は加工跡はなく、自然の形状をそのまま用いている。

時期 図示した土器から、弥生時代中期と思われる。

SKc0807 (図387)

検出状況 SZc-40の墳丘及びび岡溝底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は不定形でやや深い穴である。底面はほぼ平坦であるが、壁面は段をもって開く部分があり、中央が長楕円形の土坑状となる。埋土は8層に分層したが、ブロック状の堆積があることから、人為堆積である可能性がある。人為堆積が考えられる堆積状況であることや周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が46点出土したが、小片が多い。また、鉄鉱石が1点出土した。

SKc0806

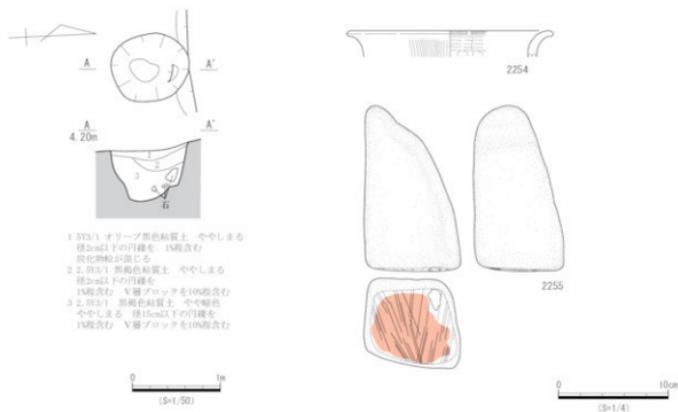


図386 SKc0806

出土遺物 2256はⅡ期の甕B類で、口縁部は外反し、口縁端部を浅く押圧する。

時期 図示した土器の他、弥生時代中期の土器が出土したことや、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

SKc0814 (図388)

検出状況 SZc40の墳丘底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は長楕円形で浅い穴である。壁面はやや開く。底面はほぼ平坦であるが、東端に小穴状の凹みがある。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積である可能性がある。人為堆積が考えられる堆積状況であることや周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が25点出土した。埋土1層からは粘土塊が出土した。

出土遺物 2257・2258はⅡ期の甕である。2257は甕B類で、口縁部が外反し、口縁端部に刻みを施す。2258は甕の底部片で、やや凹み底である。

時期 図示した土器の他、弥生時代中期の土器が出土したことや、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

SKc0816 (図388)

検出状況 SZc40の墳丘底面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。平面形は長楕円形でやや深い穴である。壁面はやや開く。底面はほぼ平坦であるが、中央に小穴状の凹みがある。埋土は6層に分層したが、上部1・2層が3層以下を切るような堆積であり、2基の土坑の可能性も考えられるが、平面的には確認できていない。なお、1・2層及び3～6層はそれぞれほぼ水平堆積で、V層ブロックを含むことから、人為堆積である可能性がある。人為堆積が考えられる堆積状況であることや

SKc0807

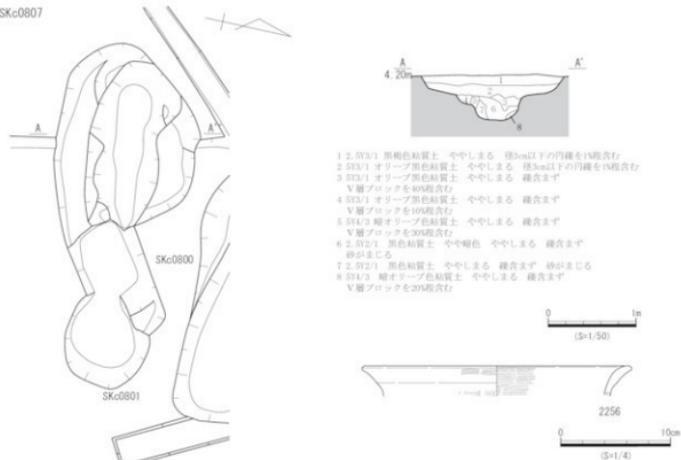


図387 SKc0807

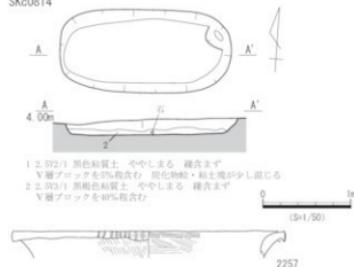
周囲に類似する土坑が群集することから、墓坑の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中から土器片が25点出土した。

出土遺物 2259・2260はⅡ期の壺である。2259は大型壺の胴部片。胴部の最大径の位置の上部に柳描きによる波状文、横線文、鋸歯状の文様を施す。2260は平底の底部片であるが、器面が剥落している。なお、胎土が黒褐色で搬入品の可能性がある。

時期 図示した土器や、周囲の類似した遺構からも弥生時代中期の土器が出土したことから、弥生時代中期と思われる。

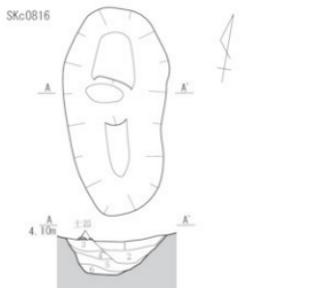
SKc0814



1. 2. 2257/1 黒色粘質土 ややしまる 雑合まず
V層ブロックを5%程度含む 炭化粒・粘土塊が少し混じる
2. 2. 2257/1 黒褐色粘質土 ややしまる 雑合まず
V層ブロックを40%程度含む



SKc0816



1. 2259/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 雑合まず
2. 2259/1 黒色粘質土 やや黄色 ややしまる 雑合まず
V層ブロックを20%程度含む
3. 2. 2259/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑合まず
4. 2259/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑合まず
V層ブロックを20%程度含む
5. 2259/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 雑合まず
V層ブロックを20%程度含む
6. 2. 2247/1 灰色粘質土 ややしまる 雑合まず 黒色土ブロックを10%程度含む

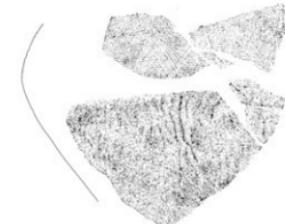


図388 SKc0814・SKc0816

SDc143 (図389)

検出状況 07_1地点発掘区中央部、IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較の明瞭であった。東西方向の溝状遺構で、西端部は確認できたが、東側は発掘区外へ伸びる。底面はほぼ平坦であるが、西から東にかけて傾斜して低くなっていく。埋土は3層に分層し、ほぼ水平堆積であるが、その成因は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して559点出土したが、特に検出時から埋土1層にかけて同一個体の土器が散乱した状態で出土した。土器片は時期が確認できるものは弥生時代中期、特にIV期のものが目立つ。石器類では、剥片14点、磨製石斧1点、叩石2点、砥石8点、石鏝2点、石製品1点が出土した。

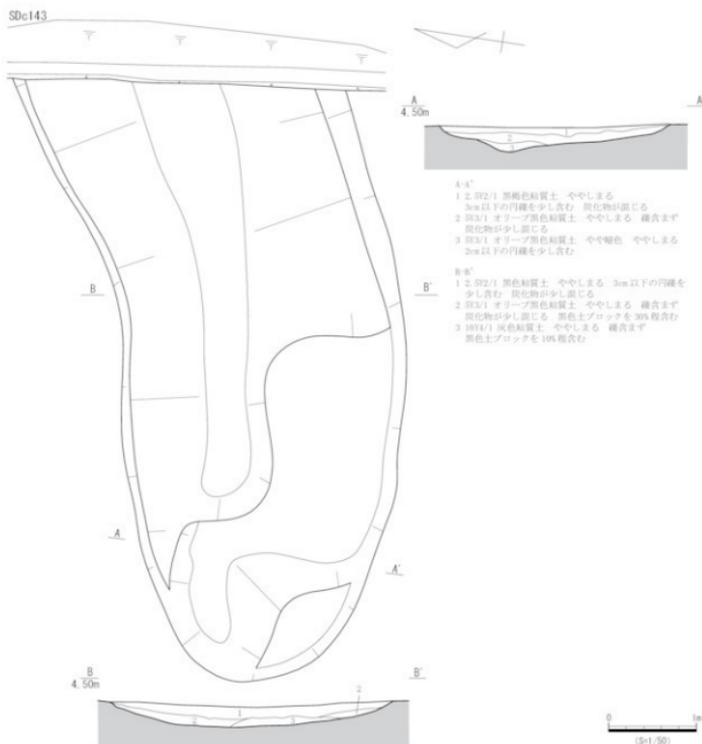


図389 SDc143

出土遺物 2261はV期の壺で、大型の胴部片である。器面は剥落し調整痕は不明瞭であるが、横線文と波状文が胴上部に見え、ミガキ調整の痕跡も一部確認できる。2262～2267はIV期のものである。2262は壺A1類で、口縁部が受口状になる壺。胴部はやや上位で張り、平底である。口縁部には凹線文はなく、ハケ目後ヨコナデ調整である。2263は壺B1類で、口縁部が短く立ち上がり、端部を下方に拡張して面をなす。口縁端部には波状文、下端には刻み、頸部外面に上2段は簾状文で、下2段は直線文を施す。2264は壺F類で、口縁部が短く外反する壺。口縁端部がやや拡張され、面を持つ。2265は細頸壺の頸部片である。頸部に刺突を巡らす。2266は壺A4類で、口縁部が外反し、口縁端部の上下を刻む。2267は壺B2類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、外面に刺突文を施す。胴上部にも横線文や波状文を施す。2268は磨製石斧で完形である。2269・2270は砥石で、共に敲打痕が見られる。2271は黒色片岩製の石鋸である。

時期 2261は理土上部で混入と考えられ、その他の図示した遺物から、IV期の遺構と思われる。

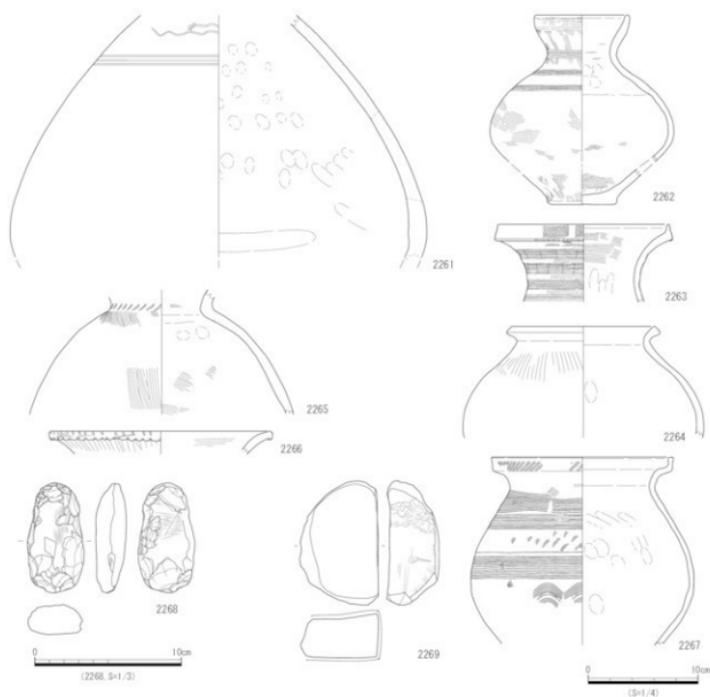


図390 SDc143出土遺物（1）

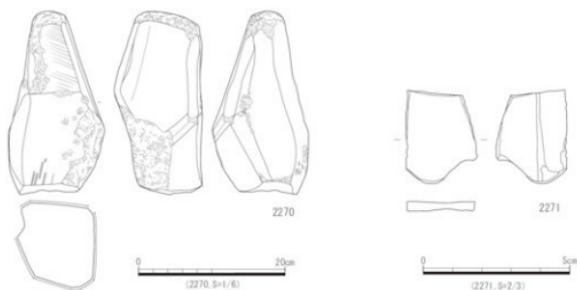


図391 SDc143出土遺物(2)

SDc145 (図392)

検出状況 08_13地点発掘区南西部、IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。SZe40の墳丘盛土下へ続いていく遺構である。大半が発掘区外へ続くため、全体の形状は不明であるが、南北方向の溝状遺構である。底面はほぼ平坦である。埋土は5層に分層したが、ほぼ水平堆積で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器片が散在して270点出土した。土器片は時期が確認できるものはIV～V期のものが目立つ。石器類では、打製石鏃・磨製石鏃1点ずつ、剥片2点、磨製石斧1点、叩石1点、剥片1点が出土した。

出土遺物 2272はV期の高坏B3b類で、口縁部がやや外反する。2273はIV期の壺で、やや凹み底となる。破片となつてから被熱したようにすすけている。2274はIV期の甕B1類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる。口縁部外面には波状文を施す。口縁部は内傾し、やや凹む。2275はII期の甕の平底の底部片である。2276は打製石鏃、2277は磨製石鏃の共に完形品である。2278は大型蛤刃石斧であるが、上下端部は欠損している。2279は剥片としたが、擦り切り痕が見られることから、玉製作時の素材片と思われる。

時期 重複関係からSZe40より古くなることと、埋土中の遺物がIV～V期のものが多いことから、この遺構の時期はV期と思われる。

S1c03 (図393)

検出状況 SZe40墳丘盛土19層除去時に出土した。細長い大小2つの礫が並んで出土したが、これは墳丘構築の①工程を終了後、②工程に入って据え置かれたものと判断した。①工程によって削り出された、畔状の高まりの周溝側に位置する。墳丘構築途中で据え置かれた状況や大きな礫には赤彩があることから、墳丘構築に伴う祭祀の可能性がある。

遺物出土状況 細長い大小2つの礫が並んで出土しているが、これに伴う土器はなかった。

出土遺物 2280と2281は共に砥石。2280は砥面に赤彩が認められる。

時期 SZe40墳丘盛土内からの出土であることから、墳丘構築時のものでVI期である。

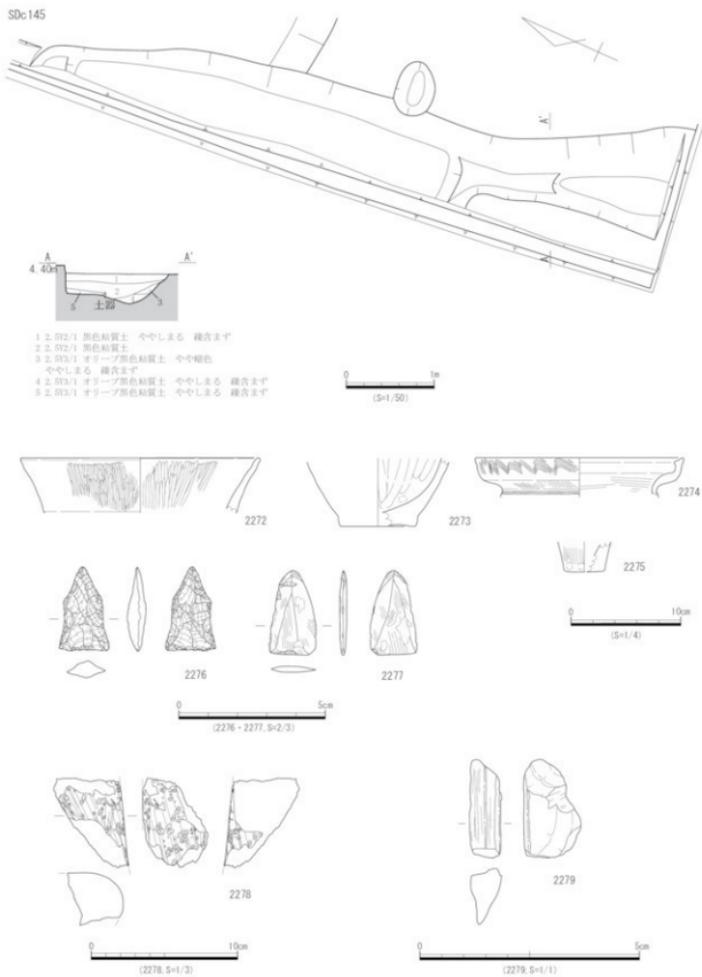


図392 SDc145

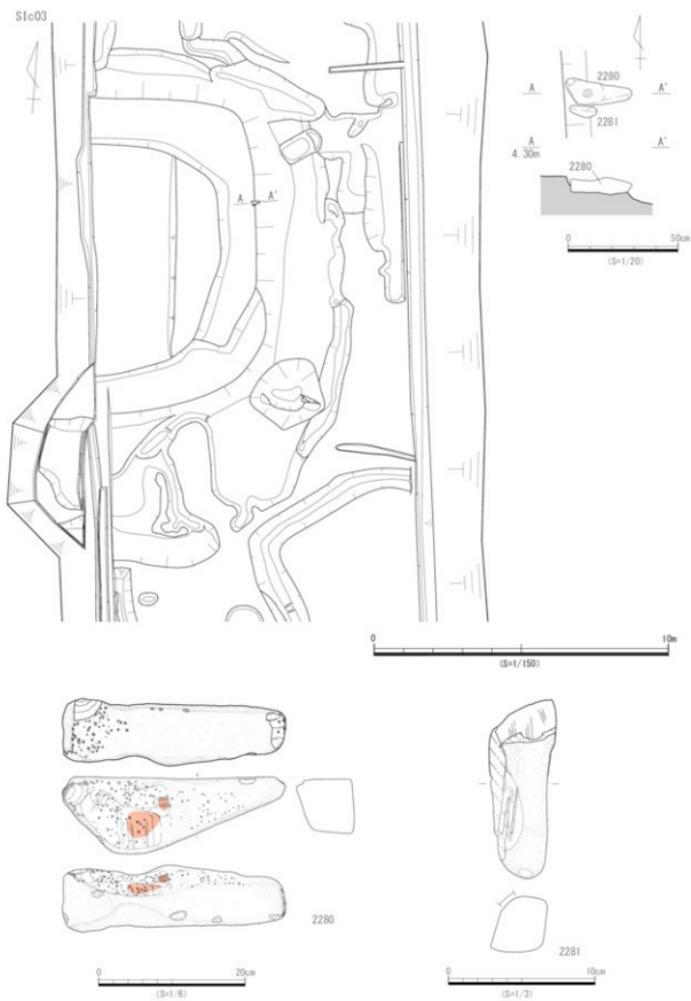


図393 S1c03

5 まとめ

この地点では、09_14地点すぐ西側に位置する調査地点であるが、09_14地点が遺構や遺物が少なかったのとは対照的に、遺構や遺物の数は多い。IV層上面の遺構は確認されなかったが、V層上面の遺構では柱穴、木棺墓、方形周溝墓、土坑、溝状遺構を検出した。

木棺墓は弥生時代後期のものと思われ、B地区西部を流れる自然流路NR2やNR9の縁辺部で検出された木棺墓群はI期であるため、時期が異なる。組合せ式箱形木棺であるが、底板に槽の転用材と板材を2枚組み合わせていることや、小口側に高さが低いことなど、特異な部分が見られるものである。

方形周溝墓は弥生時代中期のものや弥生時代後期から古墳時代前期のものを検出したが、弥生時代中期のものは墳丘が残っていなかったのに対し、弥生時代後期から古墳時代前期のものは墳丘盛土が残存していた。特にSZc40の墳丘盛土残存状況は良好であり、構築方法を確認することができた。その構築方法の特徴すべき点は、地面を少し掘り窪めた後に黒色粘質土を盛り、その後土手状に盛っていった墳丘を造り出しており、主体部を構築墓坑としていることである。この構築方法は近隣では当遺跡南西方向に位置する養老町の象鼻山1号古墳と類似するものであり、また墳丘に盛土する最初の段階で黒色土を盛るのは、時期は異なるものの09_13地点における弥生時代中期の方形周溝墓と類似性があり、これらは当遺跡及び西濃地方における墳丘墓構築方法の特徴の1つになると思われる。この構築方法に加え、SZc40は大きさが溝の上端の長軸で20m超、方台部の盛土が1.5m以上となり、やや突出する傾向を見せ始める。複数回の祭祀的行為も特異な点である。また、SZc41とした遺構は、祭祀の場である可能性もあり、SZc40の二次的な祭祀に使用されたと思われる墳丘盛土内から出土したバレススタイル土器と同時期になるため、何か関連があるものとも考えられる。また、これより北西方向（平成6年度発掘区）に向けて弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓が展開していくことを考えると、方形周溝墓を構築していく際の起点になった可能性もある。

弥生時代中期では方形周溝墓の他に、土坑墓の可能性のある土坑群を検出した。09_13地点においても、I～II期にかけての同様の土坑群を検出しており、方形周溝墓が多く造られるようになる弥生時代中期以前までは、C地区においては土坑墓群を中心に所々に墓域が形成されていた可能性がある。

以上のようにC地区では弥生時代を通じて、その形態こそ異なるものの、墓域が各所で展開されてきたと言える。

この地点では特徴的な遺物の出土がいくつかあった。1つめは、剥片・砥石・石鋸など、石器・石製品製作に関わるような遺物が大量に出土したことである。直接製作に関わるような遺構こそ検出されていないものの、玉類の未製品も出土した。これらの遺物は、弥生時代中期以降の遺構埋土、盛土に混じって出土したことから、この発掘区周辺は弥生時代中期以前に石器・石製品製作に関わる場であった可能性が考えられる。

2つめはベンガラ由来の赤色顔料の付着した石椁である。弥生時代中期と思われる土坑SKc0806から出土したが、この時期の石椁の出土例としては、当遺跡の北西に位置する東町田遺跡がある。方形周溝墓SZc38の埋土中から赤鉄鉱が出土し、やや距離は離れるが北西を流れるNR1の埋土からもベンガラ由来の赤色顔料を検出していることと合わせ、この発掘区周辺で赤色顔料の生産を行っていた可能性が考えられる。

3つめは、方形周溝墓や土坑の埋土から出土した鉄鉱石である。弥生時代中期の遺構の埋土から出

土したことから、弥生時代中期以前に持ち込まれたものであると考えられる。しかし、鍛冶関連の遺構は検出されておらず、鉄滓などの出土もないため、これらの鉄鉱石がなぜ持ち込まれたのか、どのように扱われたものなのかは不明である。

4つめは、方形周溝墓墳丘面やその周辺の包含層から出土した畜串状木製品である。遺物の時期は古代律令期のものと思われるため、直接関連する遺構はないものの、まとまって出土していることから、古代においてこの地点の南側に洪水をおこした河川があり、これに対する祭祀的行為が考えられる。

注

- 1) 和田晴吾「葬制の変遷」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社1989
青木敏「古墳築造の研究 一墳丘からみた古墳の地域性一」六一書房2003
- 2) 『朝日遺跡Ⅶ』（愛知県埋蔵文化財センター2009）では、方形周溝墓の方台部の盛土について、「盛土はすべて黒色の砂質シルトが一般的であり、基盤層である砂層・黄色シルト層を使用した事例はほとんど確認できない。つまり、周囲に溝を掘削するが、その発生土を封土として使用した痕跡は認められない。盛土の選択に強い習俗性が推測できる」とあり、盛土に基盤層とは別の土を使用する点、黒色土を盛土に使用する点について、C地区の方形周溝墓と共通点が見られる。

第11節 08_14地点・09_16地点

C地区南西部、遺跡最南端に位置する調査地点で、調査面積は341㎡である。本線橋脚が位置するが、北東側には市道を挟んで07_1地点・08_13地点・09_15地点がある。

1 層序

08_14地点東壁土層を図示した(図394)。基本層序のI層からV層を確認したが、一部IV層が確認できない部分があるものの、ほぼ水平堆積である。IV層については、植物遺体を多く含む黒色粘質土のIV a層とやや灰色でしまりのある黒色粘質土のIV b層に分層できる。遺構検出面はIV b層上面とV層上面となる。なお、III層に対応する6・7層は洪水堆積層であると考えられ、灰色砂と黒褐色粘質シルトの互層が合わせて20回以上繰り返される。0.7~1.0mの堆積があるが、南にいくほど厚くなっていく。

2 包含層出土遺物(図395-396)

この地点で出土した遺物は、17,727点であるが、その大半が弥生土器・土師器類である。このうちI~II層は49点、III層は3,700点、IV層は7,235点で、遺構出土遺物は6,743点である。包含層から出土した遺物は、石製品4点、木製品14点のほかは土器類で、山茶碗の1点を除くと、弥生土器や土師器であった。なお、I~II層出土とした土器は、発掘区壁面成形時にII層として取り上げた1点を除き、排土中から取り上げたものをI層出土としたものである(表23)。

包含層出土遺物として図示したのは、III層・IV層から出土した弥生土器20点、石器1点、木製品2点である。2282~2301はすべてVI期の土器である。2282は壺A4類で、頸部を垂直に立ち上げ、口縁部が外に屈曲して聞き、口縁端部を積み上げるようにして面をなす。文様はない。2283は壺B1類で、口縁部が外反する無文の壺。2284、2285は壺の底部片で、2284はやや凹底となる底部片、2285はやや突出した平底の底部片である。2286~2288は甕A3類である。2286は口縁部が屈曲して受口状となる。屈曲部外面に刺突文、上胴部に横線文を施す。2287は口縁部が屈曲して立ち上がり受口状となる。屈曲部外面には刺突文を施す。上胴部外面には横線文と刺突文を施す。2288は口縁部の屈曲が弱く、口

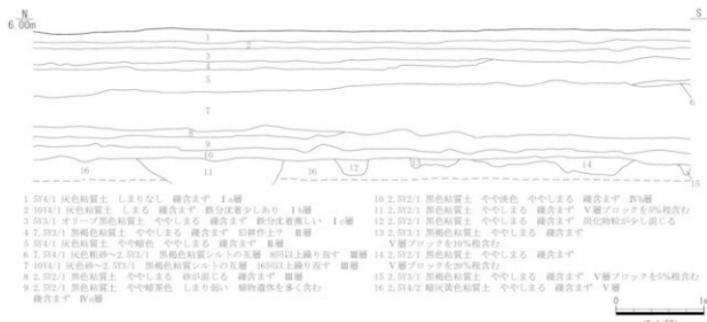


図394 08_14地点東壁土層図

表23 08_14地点・09_16地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	48	0	0	1	0	0	0	0	49
III層	0	3,686	0	0	1	0	1	0	12	3,700
IV層	0	7,230	0	0	0	0	3	0	2	7,235
IV上遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V上遺構	0	6,695	0	0	0	0	5	0	43	6,743
合計	0	17,659	0	0	2	0	9	0	57	17,727

縁部が内傾する面を持つが、A3類に含めた。屈曲部外面に刺突文を施す。2289は甕B3類で、口縁端部の調整が粗い。2290は鉢B類で、平底の底部に径15mmほどの孔を開けている。2291は鉢H類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となるが、口縁端部と上胴部に沈線を施す。2292は高坏B3b類で、口縁部がやや外反して開く有段高坏。底部もやや深みがあるため、坏部高がやや深い。2293は高坏C2c類で、坏部が深く口縁部がやや内湾して立ち上がる。口縁部内面を肥厚させて多条沈線を施す。2294は高坏G3b類で、坏部が深い小型の高坏で、口縁部がやや内湾して立ち上がる。口縁部外面には多条沈線を施す。坏底部内面に段を持つ。脚部は大きく外反し1段3方向透かしを施す。2295は高坏I3類で、口縁部がやや内湾する。2296～2299は高坏の脚部である。2296・2297は裾部がやや内湾する脚部で、2297は2個1対の透かし孔を2方向からあける。2298は脚部が大きく開く脚部片で、外面に沈線、鋸歯状山形文、刺突文を施す。2299は比較的低い脚部で裾部が内湾する。2個1対の透かし孔を2方向からあける。2300は器台B2類で、受部が内湾する。2301は手捏ねB類で、鉢状の器形で、平底をやや凹ませ、口縁部を立ち上げている。2302は砥石で、三角柱状の一面に砥面がある。2303は大足の足台の台木で、左側縁上部は欠損している。中央部に方形の孔が1つ両面から開けられている。中央部上面にはコの字状の掘り込みがある。2304は畜串で、下端部は両面から削り尖らせ、中央部には2方向の切り込みが入っている。

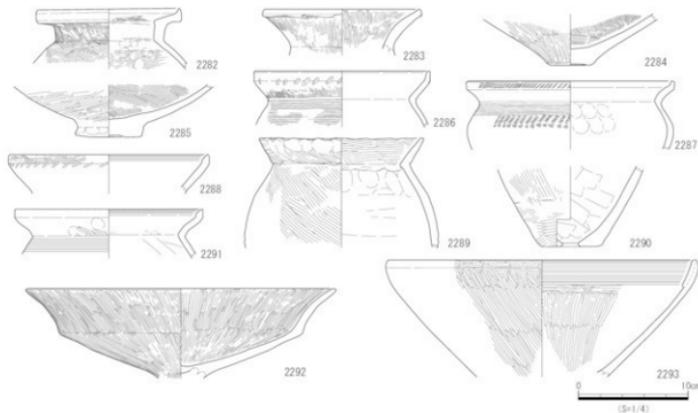


図395 08_14・09_16地点包含層出土遺物(1)

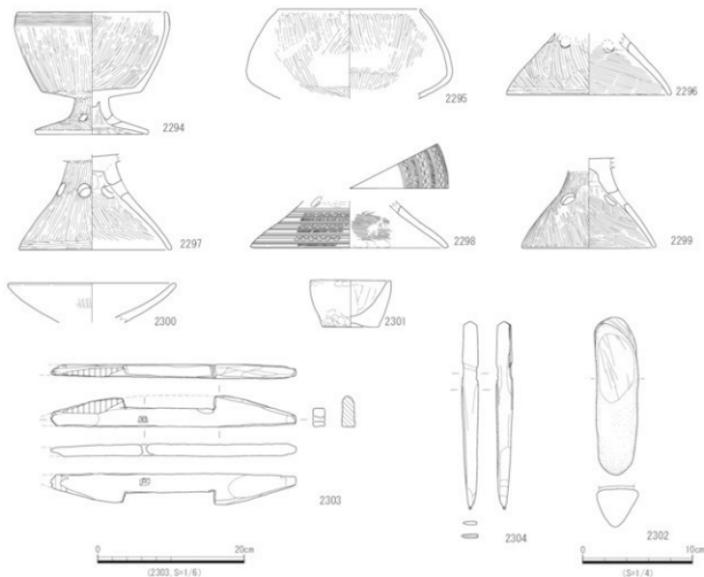


図396 08_14・09_16地点包含層出土遺物(2)

3 IV層上面の遺構と遺物

IV層b上面で遺構検出をおこなったが、遺構は検出できなかった。

4 V層上面の遺構と遺物(図397)

V層上面では、竪穴住居跡1軒、柱穴3基、方形周溝墓1基、土坑16基、溝状遺構11条を検出した。竪穴住居跡、方形周溝墓、区画溝と考えられる溝状遺構などを図示した。

SBc03(図397)

検出状況 IV層b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。大半が発掘区外に広がり、確認できたのは南西側隅部の一部である。検出では、SDe152を切ると判断したが、SZe42土層断面において、SDe152がSZe42の埋土を切るのに対して、SBc03周壁溝の埋土は確認できないことから、SBc03→SZe42→SDe152の順に掘削されたものと思われる。検出したのは、竪穴住居の周壁溝と柱穴であり、竪穴状の掘込は確認できなかった。

形状 大半が発掘区外であるが、南西隅部の周壁溝の形状から、方形若しくは長方形の平面形と思われる。竪穴状の掘込は確認できず、上部を削平されているものと思われる。

埋土 埋土は確認できなかった。

床面 床面はほぼ平坦で水平である。貼床や炉跡は認められなかったが、南西～南東壁側に壁溝を検

出した。壁溝は南西辺部では幅が狭く浅いが、南東辺部では幅がやや広がり、少し深くなる。また床面で小穴を1基(P1)検出したが、このP1が位置関係から柱穴と思われる。また、南西外側に壁溝に沿って並ぶ3基の小穴(P2~P4)を検出しており、この住居に関連する施設であると考えられる。

遺物出土状況 壁溝及び柱穴いずれからも遺物の出土はなかった。

時期 遺物の出土がないためはっきりした時期は不明であるが、切り合い関係からSZc40よりも古くなると考えられるため、V期以前の弥生時代と考えられる。

SZc42 (図398・399)

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。08年の調査では方台部の範囲が狭く、盛土を確認できないまま、V層上面まで包含層として掘削して下けているが、09年の調査では方台部に盛土を確認することができた。

方台部 大半が発掘区外となるが、東辺部及び南辺部の一部を確認した。検出した東辺部及び南辺部はわずかに湾曲している。隅部はやや丸みがあり、方台部の形状は隅丸の不整形になると思われる。

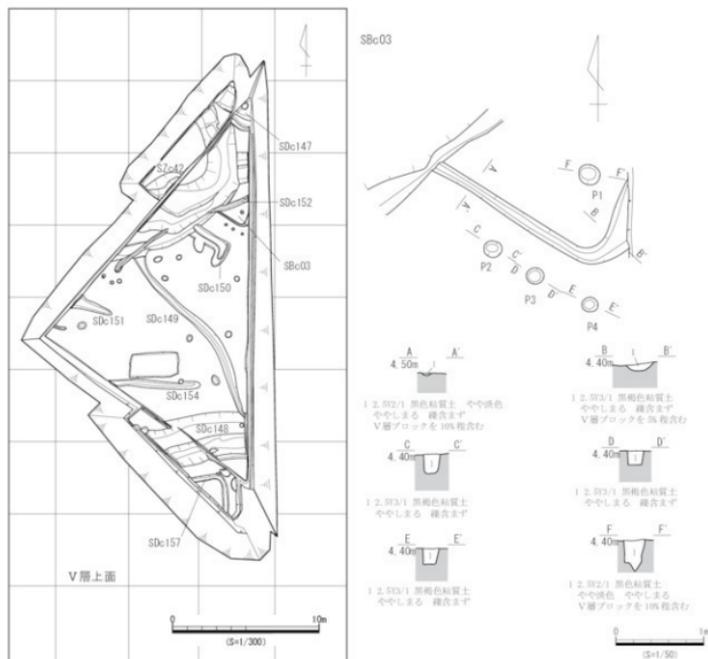


図397 08_14地点・09_16地点V層上面平面図・SBc03

SZc42

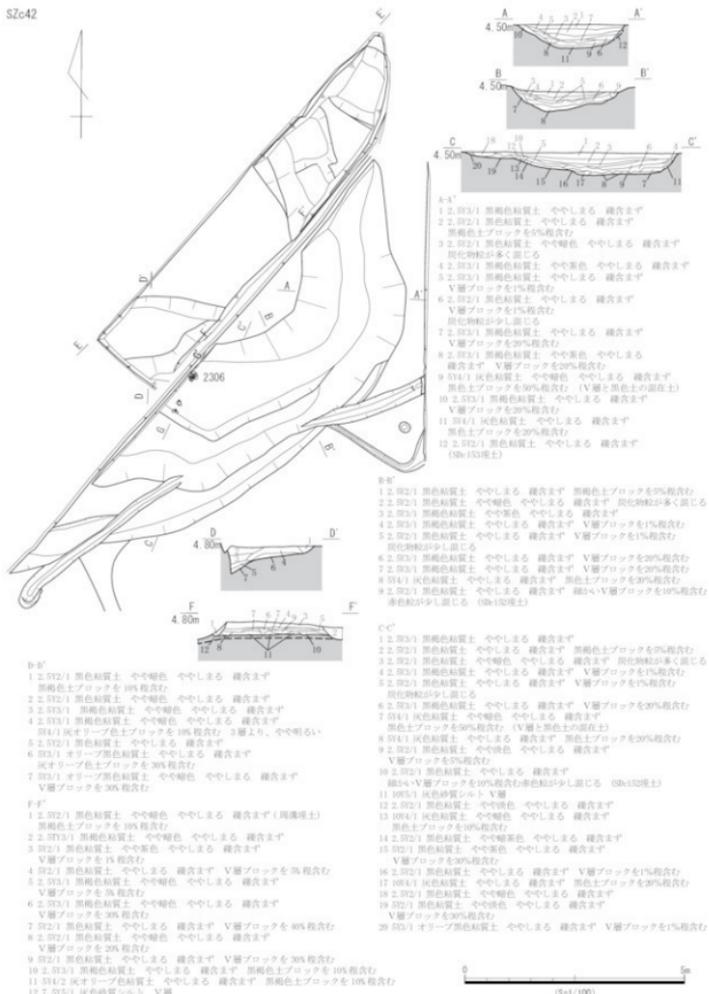


図398 SZc42 (1)

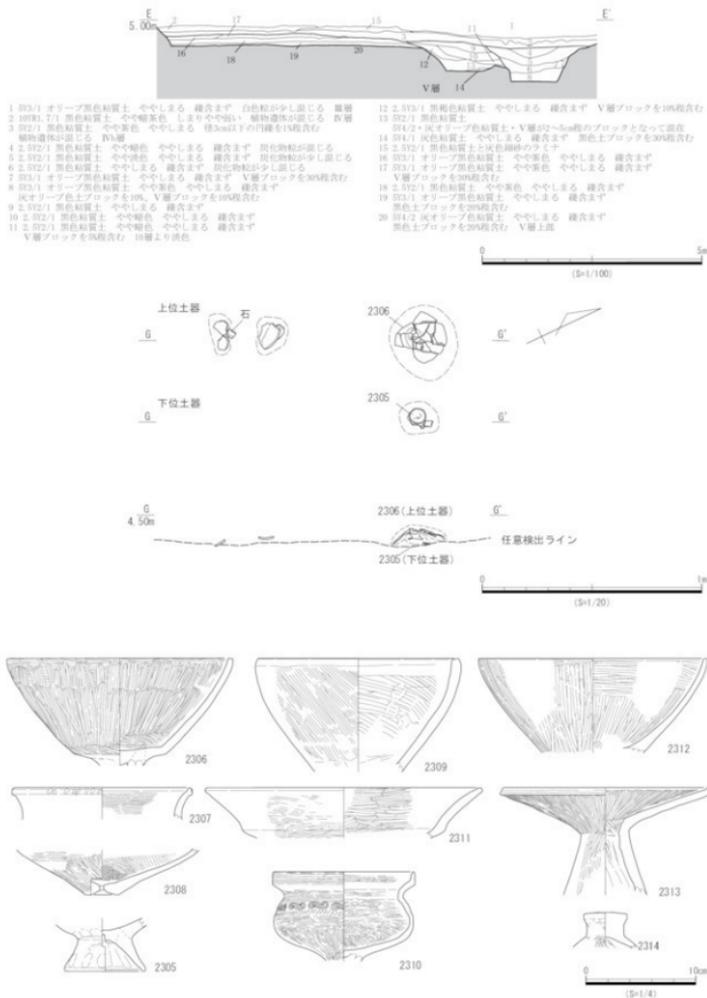


図399 SzC2 (2)

墳丘盛土は、08年の調査では確認できなかったが、09年の調査で約20cm程の盛土を確認した。ほぼ水平に堆積しているが、ブロック状の堆積もある。盛土下層には黒色粘質土が盛られている。主体部は確認することができなかった。

周溝 東溝及び南溝の一部を検出した。確認した範囲では両溝ともほぼ直線的であり、L字形に屈曲することから、方形の区画を作り出している。幅は2～4m程となり幅広いが、深さも深い。底面はやや丸みがありながらも概ね平坦である。壁面は方台部側が傾斜が急で、外側は傾斜が緩やかになるが、部分的に傾斜は異なる。埋土は最大20層に分層できるが、埋土下層部にはV層ブロックを多く含むことから、墳丘盛土や壁面の崩落の可能性が考えられる。なお、埋土最上層については、凹地に堆積したIVb層と考えられ、この土を除去するとSDe152の平面形が確認できるため、検出時の平面的な切り合い関係の観察が、掘削後の土層観察によって逆転している。

遺物出土状況 墳丘盛土から土器片45点、周溝埋土から土器片が477点、石器1点、木製品2点が出土した。周溝埋土中では遺物は散在して出土したが、埋土中位から下位には少ない。なお、この方形周溝墓とは直接的な関係はないかもしれないが、検出時に南溝方台部寄りに、高坏坏部(2306)が逆位で出土し、その中に甕の台部(2305)が意図的に置かれた状態であった。

出土遺物 2305・2306は検出面上に出土したVI期の土器である。2305は甕の台部で、比較的低く、八字状に開く。2306は高坏C2a類で、やや深い坏部で口縁部がやや内湾する。口縁端部は面取りし、浅い沈線が巡る。坏底部から口縁部が立ち上がる屈曲部内面に段がある。2307～2314は周溝埋土中の出土の土器ですべてVI期と思われる。2307は甕B1a類で、口縁部が外反し端部に刺突を施す。2308は鉢B2類で、小さな凹底の底部から、胴部が大きく開く。底部には5mmほどの小孔を焼成前に開けている。2309は鉢B3類で、胴部から口縁部にかけて内湾する。2310は鉢H類で、脚部を欠くが、北陸から山陰方面に系譜を持つ台付き鉢と思われる。口縁部は屈曲して立ち上がり、外面に沈線を施す。上胴部外面には横線文、双頭渦文状のスタンプ文、刺突文を施す。2311は高坏B3b類で、口縁部がやや外反して開く。2312は高坏C3a類で、坏部がやや深い。2313は器台B1a類で、受部が直線的に開き、口縁端部が上下にわずかに拡張し、面を持つ。2314は蓋のつまみ部であると思われる。

時期 図示した遺物はVI期のものであるが、いずれも周溝埋土上層からの出土で、この遺構の構築時期よりは新しい時期のものと考えられる。またVI期の遺構であるSDe152に切られることから、この遺構の時期はV～VI期と思われる。

SDc147 (図400)

検出状況 発掘区北端、IVb層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。発掘区内では極一部を検出しただけであり、全形は不明であるが、東西方向の深い溝状遺構であるため、土地を区画する溝か、方形周溝墓の周溝の可能性がある。埋土は最大で5層に分層したが、ほぼ水平堆積で堆積状況は不明である。しかし、遺物が大量に廃棄された状態で出土していることから、人為的に埋められた部分もあると思われる。

遺物出土状況 埋土中から土器片が2,460点、叩石が2点、木製品が25点出土した。意図的な配置を示すような出土状況は確認できなかったが、埋土上層部では土器が多く、埋土中・下層には木製品が目立って出土した。

出土遺物 図示した土器はすべてVI期のもと思われる。2315・2316は甕B2類で、口縁部が外反して

開く。2316はやや小型で口縁端部に面を持ち、沈線を施す。2317は甕B1b類で、口縁部がやや内湾する。口縁部外面には横線文と刺突文を交互に施す。刺突文は横一列の刺突と、山形の刺突を横線文の間に配置する。二次的な被熱のためか、あばた状に器面が剥落している。2318は甕J1類で、小型で口縁部が直口する。2319は小型の壺の底部で、平底でやや突出する。2320は甕A2b類で、口縁部内面を強くヨコナデし、口縁部を屈曲させて、外面に刺突文を施す。2321は甕A3類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる甕で、屈曲部外面に刺突文を施す。胴部は中位で張り、上胴部に横線文と刺突文を施す。2322は甕B1a類で、頸部の屈曲がやや弱く、口縁端部に刻みを施す。2323は甕B1b類で、口縁部が外反して開く。2324～2326は甕B3類で、口縁部が屈曲して開く。口縁端部の調整は粗く、圧痕が明瞭に残る。2327は甕C1類で、口縁部がやや内湾し、湾曲した外面に刺突文を施す。2328・2329は甕D1a類で、いわゆるS字状口縁台付甕A類で、古段階と思われる。2328は屈曲部外面に押し引きを施す。2329Bは台部で2329Aと同一個体と思われる。内面の折り返しがない。2330・2331は甕E2類で、2330は小型の台付甕で口縁部はやや屈曲して開く。台は比較的低く、八字状に開く。2331は中位のく字甕で、口縁端部を面取りする。2332は鉢A2類で、口縁部がやや屈曲して受口状となり、口縁端部は面取りする。胴部は中位で張る。胴下半部には煤が付着する。2333は鉢B3類で、底部は小さい平底で、やや突出し、径20mm弱の孔を開けている。胴部から口縁部はやや内湾して開く。2334は鉢B類で、平底の底部に径15mmほどの孔を開けている。2335～2337は鉢C類で、口縁部が内湾して立ち上がる。器面の調整が粗い。2338は鉢の底部から胴部であるが、底部は非常に小さく、丸底状となる。外面に煤が付着する。2339・2340は高杯B3a類である。2339は坏部が段を持ち、口縁部がやや外反して開く。段外面は断面三角形の突帯を貼り付ける。脚部は裾部で大きく外反し、1段3方向透かしを施す。2340は口

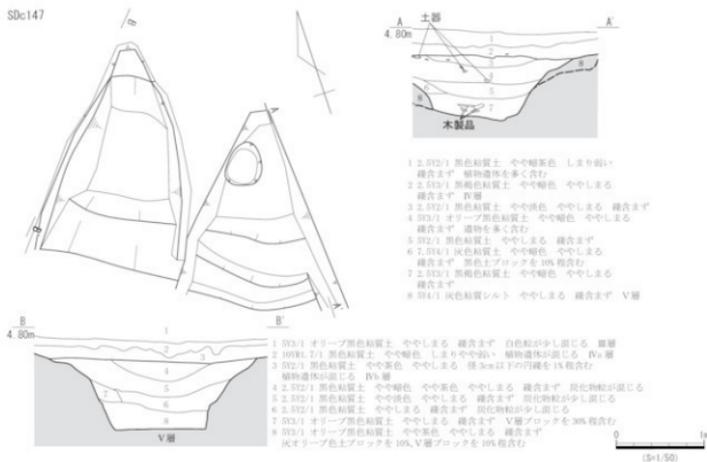


図400 SDc147

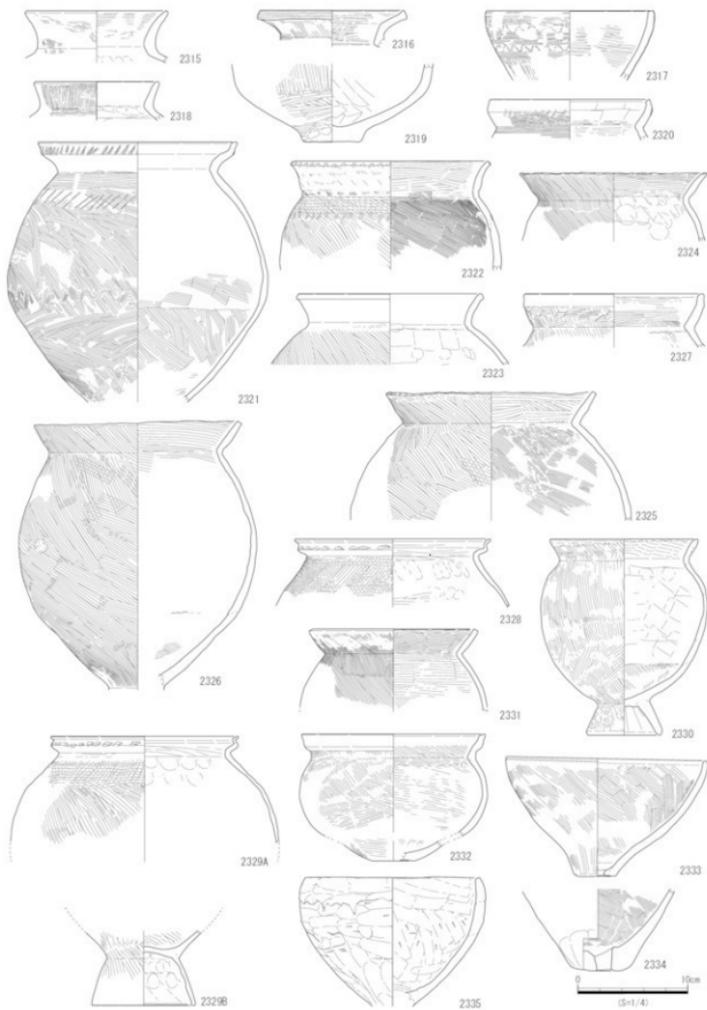


圖401 SDc147出土遺物 (1)

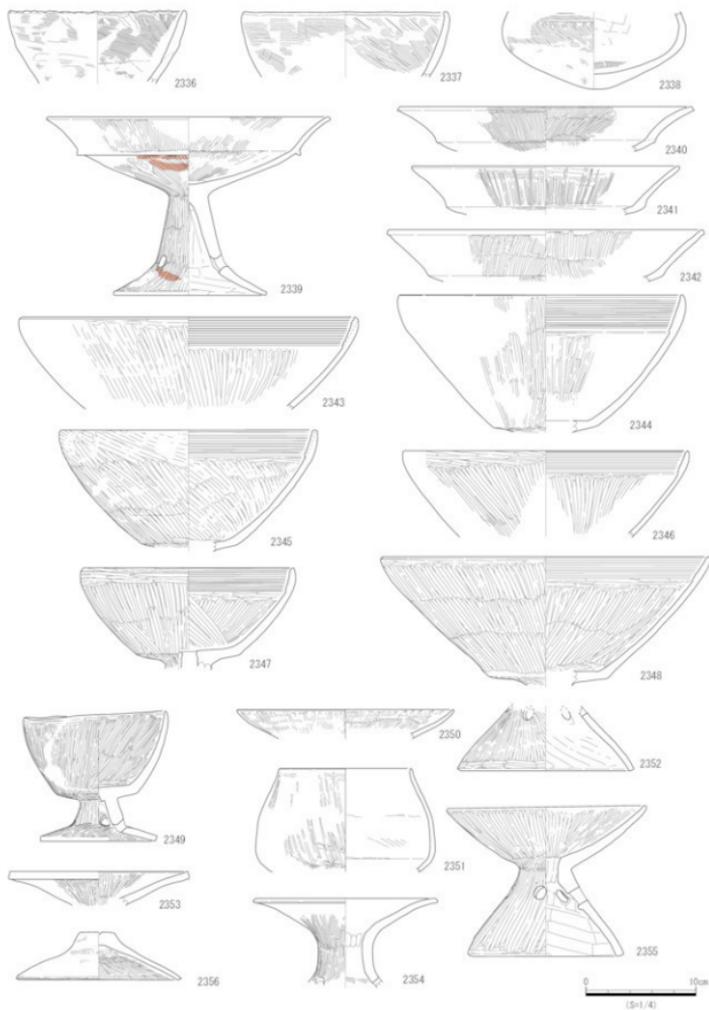


図402 SDc147出土遺物（2）

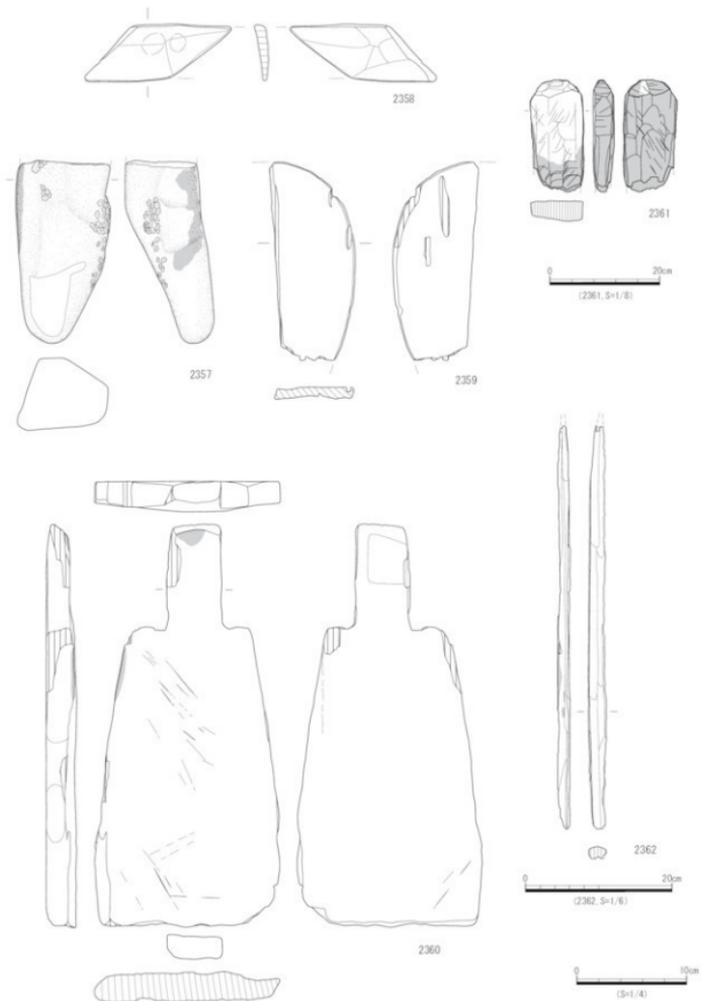


圖403 SDc147出土遺物（3）

縁部片で、外反して開く。坏部に段を持つ。外面に煤が付着している。2341は高坏B3b類で、口縁部が緩く外反する。2342は高坏B4類で、口縁部がやや外反して開く。2343～2346は高坏C2c類で、坏部がやや深く、口縁部がやや内湾する高坏で、口縁部内面を肥厚させ、多条沈線を施す。2343は破片の大半がIV b層出土であるが、1点のみSDc147から出土した。2347・2348は高坏C3b類で、やや深い高坏で、口縁部はやや内湾し、内面に多条沈線を施す。2347はやや小型である。2349は高坏G3a類の小型のもので、坏部は深くやや内湾して口縁部が立ち上がる。脚部は強く外反して開く。1段4方向透かしを施す。坏部外面には黒色の顔料が塗られている。2350は高坏H1類で、坏部が浅い碗状となる。2351は高坏I2類で、坏部は碗状となり、口縁部がやや外反して立ち上がる。2352は高坏の脚部片で、裾部がやや内湾する。2353・2354は器台B1a類であるが、2353は口縁部が直線的となり、2354は口縁部がやや外反する。2355は器台B3類で、受部が内湾し、脚部は基部から開いて、脚裾部でやや内湾する。2356は蓋と思われるが、天井部外面は中央に凹みがあるがほぼ平坦で、これを底部とする浅い皿状の器形かもしれない。口縁部が大きく開き、端部は調整が粗い。2357は叩石で、側面と端部に敲打痕があり、煤が付着する。2358は木包丁で、右側は欠損している。2359は儀器で団扇である。2360は椅子の脚で斜めに開く。2361は横架材で、全体が炭化しており、建物本体が燃えたものと思われる。2362は加工材の角材である。

時期 図示した遺物をはじめ、出土した土器がVI期のものばかりであることから、VI期の遺構と思われる。

SDc148 (図404・405)

検出状況 発掘区南東部隅、V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。第1面調査時から凹地として認識していた部分があったが、これはSDe148に重複していた新しい溝状遺構であると考えられる。東西端はそれぞれ発掘区外となるため正確な形状は不明であるが、東西方向の溝状遺構で、上面では幅は広いが、底面では狭くなる。深さは0.46mで、壁面は開く。北側にはテラス状に平坦面ができるが、これはSDc148として掘削したが、別の新しい溝状遺構の掘形になるとと思われる。埋土は13層に分層したが、1～5層は別遺構である溝状遺構の埋土である。ほぼ水平堆積で、下部には砂質土が堆積しており、自然堆積であると思われるが、それより上部では遺物を多く含み、V層ブロックも含むことから、人為堆積の可能性もある。

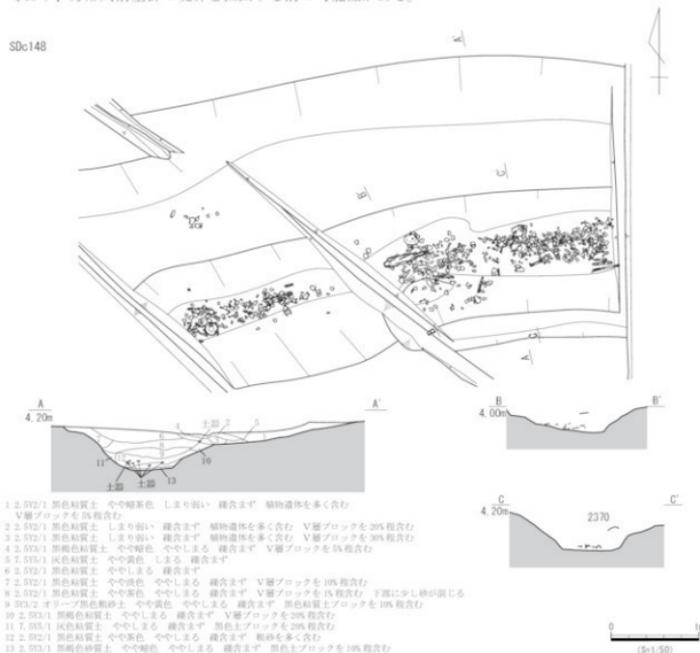
遺物出土状況 埋土中からは土器片3,407点、叩石・砥石各1点、木製品16点と土器を中心に遺物が大量に出土した。埋土中位では木製品が出土し、そこから南壁にかけて土器片も多く出土した。さらに埋土下部においては土器細片が敷き詰められたように出土した。

出土遺物 図示した土器はすべてVI期のものと思われる。2363～2365は壺B1類で、口縁部が外反する。2365は胴部を欠くが、丸底気味の底部が同一個体と思われる。2366は壺J1類で、小型壺の口縁部である。2367～2370は壺の胴部から底部片である。2367は赤色顔料が認められ、壺A類の底部片と思われる。2368は底面中央部が凹む。2369・2370は小型のもので、平底である。2370の胴部は中位で強く張る。2371は甕A2b類で、口縁部が短く屈曲して立ち上がる。屈曲部外面に刺突文を施す。2372は甕A3類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる。外面には刺突文を施す。2373・2374は甕A4類で、2373は口縁部が短く屈曲して立ち上がり、外面に刺突文を施す。2374は口縁部が屈曲して開き、口縁端部を面取りして刺突文を施す。2375は甕B1a類で、短い口縁部が屈曲して開き、口縁端部に刻みを施す。

2376は鉢A4c類の小型の鉢で、口縁部が直線的に開く。胴部は中位で張る。2377は鉢C類の小型の鉢で、底部は平底で胴部が張り、口縁部はやや外反して立ち上がる。2378は高坏B2c類で、口縁部がやや外反する。2379は高坏B類で、脚部が大きく開く。1段3方向透かしを施す。2380は高坏C3b類で、やや小型である。坏部は深く口縁部が内湾する。口縁部内面には多糸沈線を施す。2381は高坏の大きく開く脚部片である。2382は器台B1a類で、口縁部が直線的に開き、口縁端部がわずかに上方に立ち上がる。2383は曲柄鉢で、いわゆるなすび形鉢で、上部部に縛るためのスリットがある。2384は建築部材で薄い板である。上部部は丸く、下部部は平らに加工している。止め針穴が上部部に2箇所、下部部に1箇所ある。隠し板か。

時期 図示した土器をはじめ、出土した土器がVI期のものであることから、VI期の遺構と思われる。なお、溝の埋土下部に砂質土、砂と共に土器細片が多く出土する状況は、B地区SD0588、SD0652、SD0653、SD1198にも見られるが、SD0588、SD0652は水田城の南端を区画し、SD0653、SD1198は遺跡の東端を区画するものであり、このSDc148についても、遺跡の南端、方形周溝墓群の南に位置するものであり、方形周溝墓群の境界を区画する溝の可能性がある。

SDc148



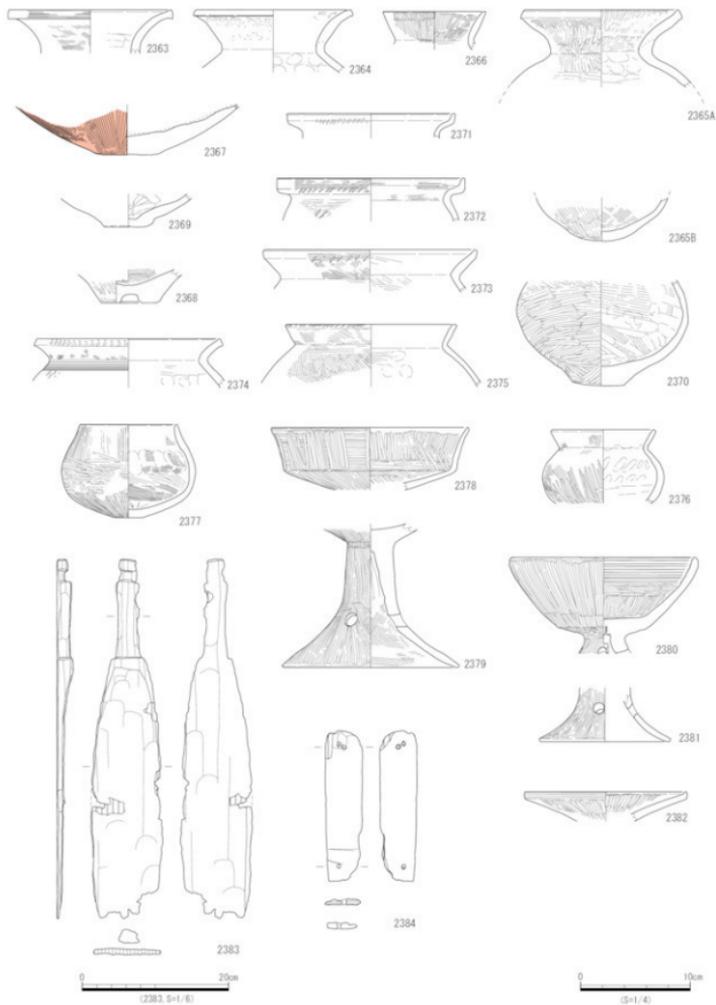


図405 SDc148出土遺物

SDc149 (図406)

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。北端はSZc42とSDc152に切られ、南端はSDc148に切られ発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、北北西から南南東へやや湾曲しながら向かう細い溝状遺構で、やや浅く壁面は開く。底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土2層にV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中からは土器片74点出土した。図示した甕の他、S字状口縁台付甕の胴部の破片が出土した。

出土遺物 2385はV期の甕A1類で口縁部が強く屈曲して立ち上がり、受口状となる。外面には刺突文を施す。口縁屈曲部の下には、工具の当たり痕が見られる。2386はVI期の甕A2b類で、口縁部が屈曲して立ち上がり、受口状となる。外面には刺突文を施す。

時期 VI期の遺構に切られるが、土器にはS字状口縁台付甕も混じることから、VI期の遺構であると思われる。

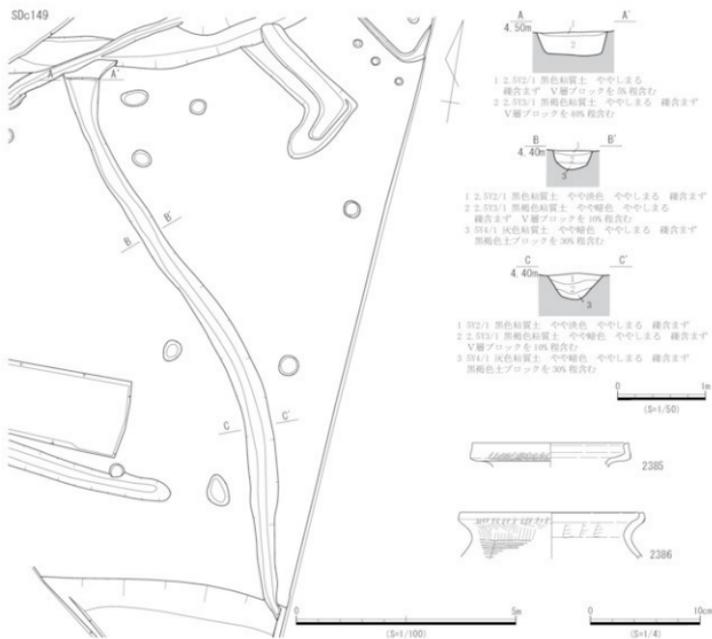


図406 SDc149

SDc150・SDc151 (図407)

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。SDc150が北側にあり、SDc151が南側にあったが、東西の方向が類似し、SDc150の東端は南に向かって直角に屈曲することから、両者が長方形の区画を作り出しているように見えるため、区画溝であると判断した。区画内外にある小土坑との関連は不明である。SDc150はL字に屈曲し、壁は段をもって開く。埋土は2層に分層したが、堆積状況は不明である。SDc151は東西方向の溝状遺構で、浅い。埋土は単層でV層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 SDc150の埋土中からは土器片32点、SDc151の埋土中からは土器片2点が出土した。いずれも小片ばかりであった。

出土遺物 図示した2点はいずれもVI期の土器である。2387は壺の底部片で、平底でやや突出する。2388は高環C3a類の口縁部片で、やや深い高環と思われる。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が出土したことから、VI期の遺構であると思われる。

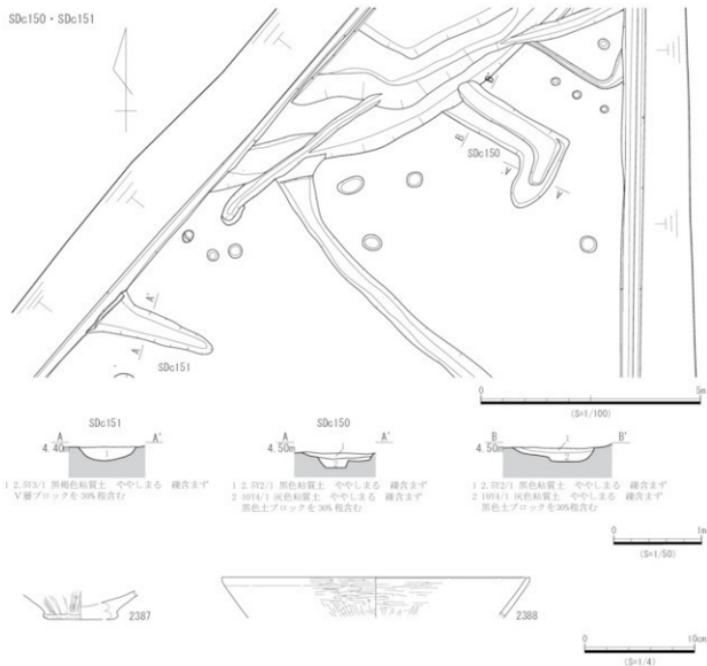


図407 SDc150・SDc151

SDc152 (図408)

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。検出時はSZc42が新しいと判断しSZc42を先に掘削したために、東部分と西部分とを別遺構として調査したが、両者ともSZc42の土層観察からSZc42の埋土を掘り込んでいることが確認でき、かつ同一遺構である可能性が高いため、1つの遺構として報告する。形状は東端は発掘区外へ伸びていくため、全体の形状は不明であるが、西南西から東北東へ向かう、細長い溝状遺構で、底面はほぼ平坦で、壁面はやや開く。埋土は最大2層に分層でき、ほぼ水平堆積である。SZc42掘削時には埋土1層を一緒に掘削しており、埋土2層の部分を土層観察により、確認したものと思われる。

遺物出土状況 埋土中からは土器片77点が出土した。西端部において土器片が比較的多くまとまって出土しており、溝の埋め戻しに伴う廃棄の可能性が考えられる。

出土遺物 図示した3点はいずれもVI期の高坏である。2389は高坏C2c類で、坏部がやや深く、口縁部がやや内湾する。口縁部内面をやや肥厚させて多条沈線を施す。2390は高坏C3b類で、口縁部がやや内湾し、内面を肥厚させて多条沈線を施す。2391は高坏C類で、口縁部を欠くが、やや深い坏部の高坏で、欠損部が肥厚し始めるところから、口縁部内面を肥厚させ、多条沈線を施すと思われる。

時期 V～VI期としたSZc42を切り、図示した遺物をはじめVI期の遺物が出土したことから、VI期の遺構であると思われる。

SDc154 (図409)

検出状況 IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。西端は発掘区外へ伸びていくため、全体の形状は不明であるが、ほぼ東西方向の細長い溝状遺構で、底面はほぼ平坦で、壁面はやや開く。SDc148にほぼ並行するが、東端はSDc148よりも西側で止まっている。埋土は2層に分層したが、ほぼ水平堆積で堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中からは土器片40点と少量の遺物が出土した。

出土遺物 2392はVI期の甕A2類で、口縁部が短く屈曲して立ち上がり、外面に刺突文を施す。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が出土したことから、VI期の遺構であると思われる。

SDc157 (図409)

検出状況 発掘区南端部、IV b層を除去したV層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南西部は発掘区外へ伸びていくため、全体の形状は不明であるが、検出した部分ではL字形に屈曲した浅い溝状遺構で、底面はほぼ平坦で、壁面は開く。方形に溝が巡ることや、溝の内側にはV層ブロックが混じる埋土が見られることから、堅穴住居跡の可能性が考えられた。そこで溝の内側については床面を想定して掘り下げを行ったが、2～3cmほどでV層となり、柱穴などの遺構は検出されなかったことから、性格不明の溝状遺構であると判断した。埋土は単層で、V層ブロックを含むことから、人為堆積の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中からは土器片49点と少量の土器片が出土したが、小片が多い。

出土遺物 図示した3点はすべてVI期のものである。2393は甕の台部片であるが、やや短く八字に開く。2394は器台B1a類で、口縁部が直線的に開く。2395は器台の基部から脚部上部の破片である。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が出土したことから、VI期の遺構であると思われる。

SDc152

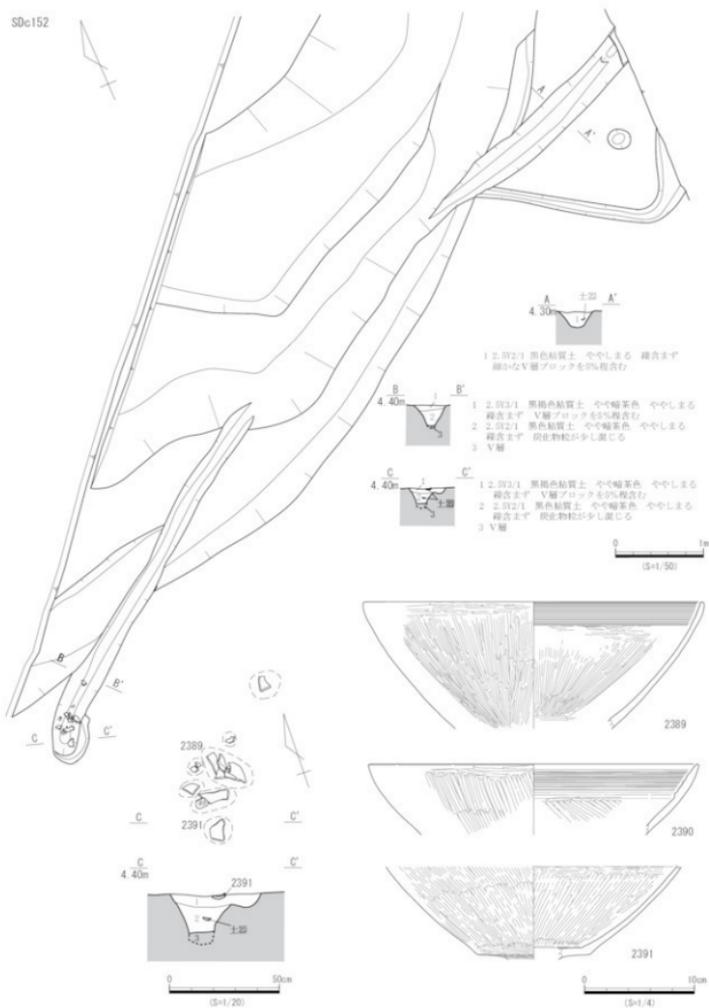


図408 SDc152

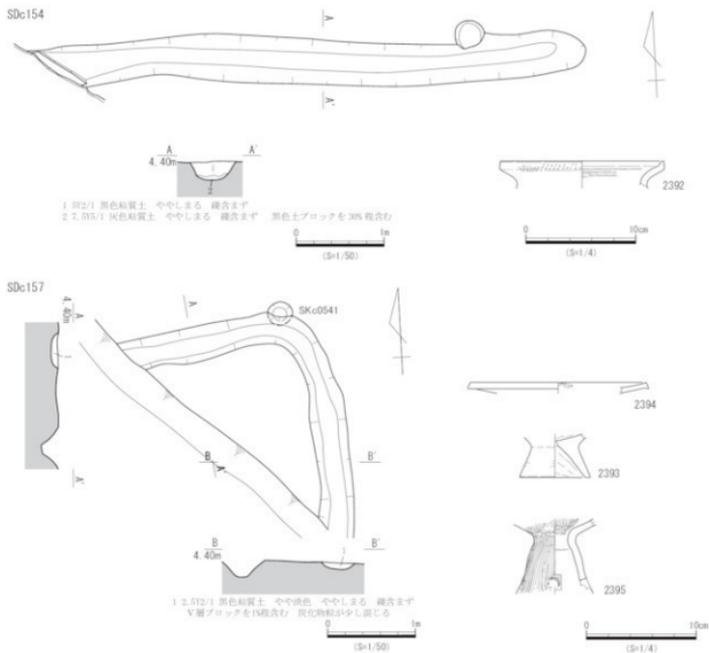


図409 SDC154・SDC157

5 まとめ

この地点は、荒尾南遺跡の最南端にあたり、これより南は遺跡範囲外となる。

IV層上面の遺構は確認できず、V層上面の遺構では竪穴住居跡、柱穴、方形周溝墓、土坑、溝を検出したが、時期が特定できるものは、V～VI期のものである。V～VI期の方形周溝墓は北西を流れるNRc1の西岸から南にかけて広がっており、この発掘区で検出した方形周溝墓SZc42は、この時期の方形周溝墓群の最南端に位置するものとなる。このため、SZc42の南に位置するSDc148は、V～VI期における方形周溝墓群の南端を区切る区画溝の可能性が考えられる。また竪穴住居跡SBc03を検出しているが、NRc1の西側で検出した唯一の竪穴住居跡であり、NRc1西岸周辺では住居はあまり密集せず、点在している可能性が考えられる。

包含層からは北東に位置する07_1地点・08_13地点・09_15地点と同様に畜串状木製品が出土した。古代においてこの地点の南側に洪水をおこした河川があり、水に関連する祭祀が行われていたことが想定できる。

第12節 09_10地点

C地区南西部、遺跡最西端に位置する調査地点で、調査面積は321㎡である。既設水路の付け替え予定地が位置するが、東側には平成6年度発掘区の南端があり、南東には大垣環状線を挟んで07_1地点・08_13地点・09_14地点が位置する。

1 層序

09_10地点北壁土層を図示した(図410)。基本層序のI層からV層を確認したが、ほぼ水平堆積である。IV層については、黒色粘質土のIV a層とオリーブ黒色粘質土のIV b層に分層できる。IV b層は発掘区西部では確認できず、発掘区中央から東部にかけて堆積を確認した。遺構検出面はIV a・b層上面とV層上面となる。

2 包含層出土遺物(図411~図413)

この地点で出土した遺物は、44,387点であるが、その大半が弥生土器・土師器類である。このうちIII層は6,329点、IV層は26,576点で、遺構出土遺物は11,482点である。包含層から出土した遺物は、石製品7点、木製品1点、金属製品1点のほかは土器類で、須恵器8点、陶器の11点を除くと、弥生土器や土師器であった。(表24)。

包含層出土遺物として図示したのは、III層・IV層から出土した弥生土器60点と銅鏝1点である。2396はIII層から出土したVI期の甕の脚台の破片で、底部に穿孔がある。2397~2414はIV a層から出土したものである。2397はVII期の壺A1b類で、口縁端部に擬回線、内面に羽状文を施す。2398はVI期の壺B1類で口縁端部に面を持つ。内面に加飾はない。2399はVI~VII期の壺F2類で、頸部以下に直線文と刺突文を施す。2400はVI期の壺I1類の中型の壺で無文である。2401・2402はVI期の甕A3類で、口縁部

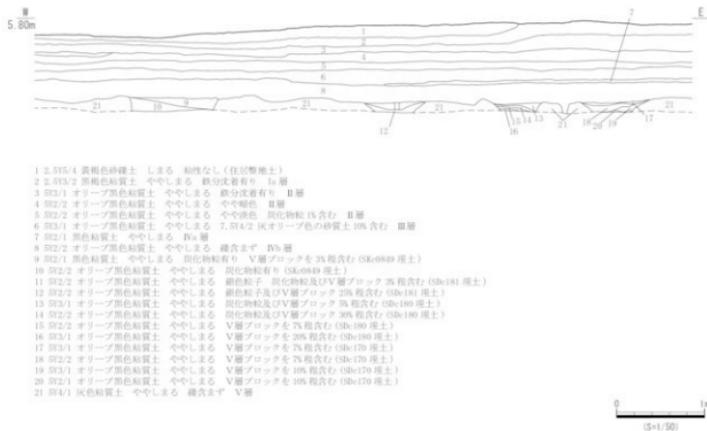


図410 09_10地点北壁土層図

表24 09_10地点出土遺物数量

場所	種別	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
III層		0	6,309	7	0	9	2	1	0	1	6,329
IV層		0	26,564	1	0	2	2	6	1	0	26,576
IV上遺構		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V上遺構		0	11,475	0	0	0	0	5	0	2	11,482
合計		0	44,348	8	0	11	4	12	1	3	44,387

に刺突文、頸部以下に刺突文、直線文を施す。2401の器面は摩耗している。2403・2404はVI期の甕A4類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文と刺突文を施す。2405・2406はVI期の甕B3類で、共に文様はない。2406は胴部の最大径が中央より下がり、やや下膨れ気味である。2407・2408はV期の鉢A1類である。2407は摩耗のためか、頸部に直線文がわずかに見える程度で、文様は希薄である。2409はVI期の鉢A2類で、頸部以下に直線文、波状文がある。2410はVI期の鉢B類で、底部に穿孔がある。2411はVI期の高坏B3a類の口縁部の破片である。2412はVI～VII期の高坏H1類である。2413はV期の高坏H1類の口縁部である。2414はV～VI期の無文高坏で、透孔は下寄りにある。2415はVI期の器台B1c類で、口縁端部に擬凹線を施す。2416～2456はIV b層から出土したものである。2416～2418は壺A1b類である。2416・2417はVI期のもので、2416は口縁端部に擬凹線、内面に刺突文を施す。2417は口縁端部、内面に波状文、頸部以下に直線文がある。表面はやや摩滅している。2418はV期のもので、口縁端部に擬凹線、内面に擬凹線と羽状文を施す。内面、外面の文様以外の部分に赤彩が施されている。2419・2420はVI期の壺B1類で、口縁端部に面を持つ。2421はVI期の壺B2a類で、口縁部が短く外反する。2422はVI期の壺C類で、口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がる。2423はV～VI期の中型の壺、2424はV～VII期の小型の壺である。2425はV～VII期の壺の胴部片で、線刻があり、爪状のものが4つ確認できる。2426はVI期の甕A2b類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文、直線文を施す。

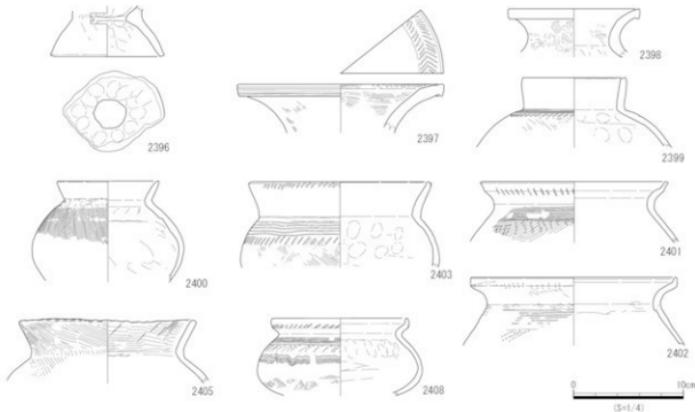


図411 09_10地点包含層出土遺物(1)

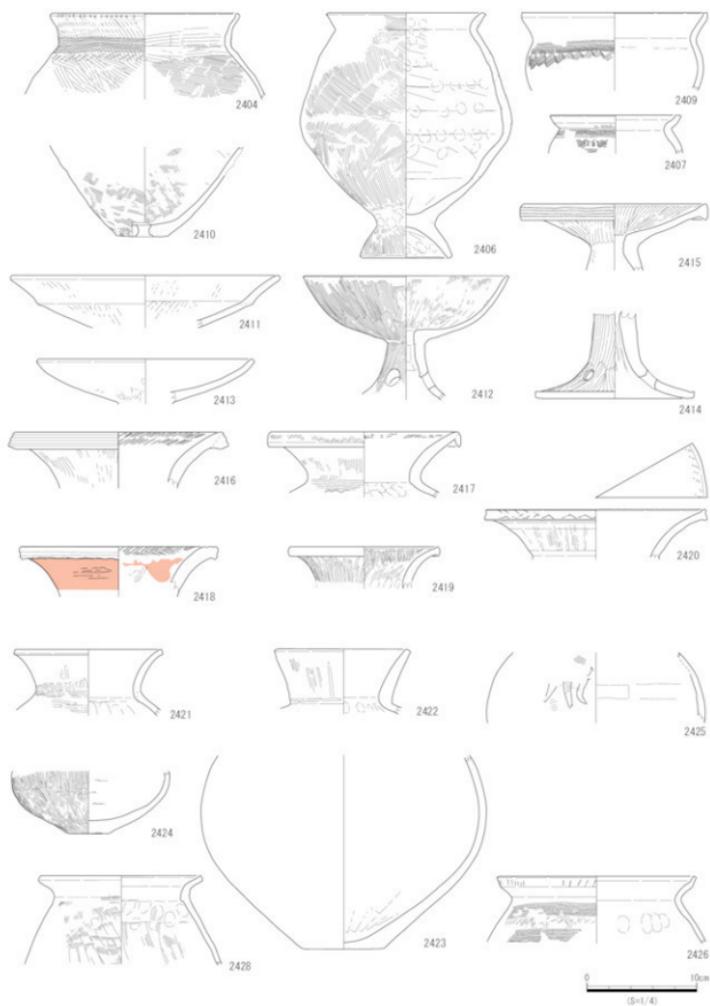


図412 09_10地点包含層出土遺物(2)

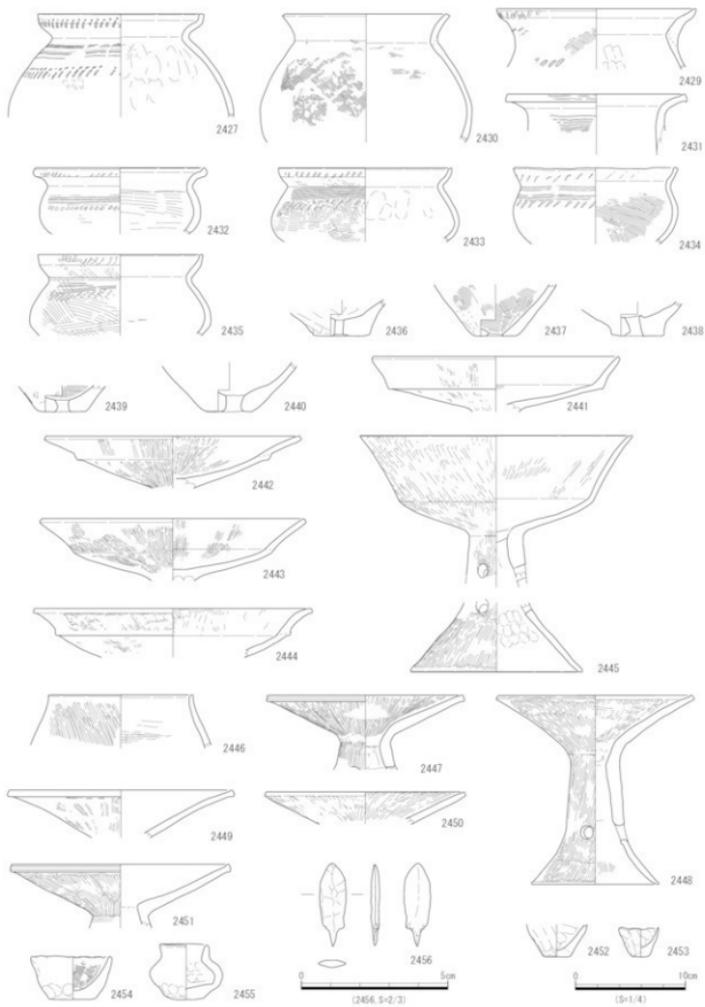


圖413 09_10地点包含層出土遺物(3)

2427はVI期の甕A3類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2428・2429はVI期の甕A4類で、2428には文様はないが、2429には口縁部と頸部以下に刺突文がある。2430はV期の甕B1a類で、頸部の屈曲は弱い。2431はVI期の甕B2類で、口縁端部が平坦となり、頸部以下に直線文がある。2432はV～VI期の鉢A1類で、口縁端部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文がある。2433・2434はVI期の鉢A2類で、2433は頸部以下に直線文、波状文があり、2434は口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文がある。2435はVI期の鉢A3a類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施すが、摩耗が激しい。調整痕が顕著である。2436～2440はVI期の鉢B類で、有孔鉢である。いずれも口縁部を欠く。2441はV期の高坏B2a類、2442～2444はVI期の高坏B3a類、2445はVI期の高坏B4類であるが、いずれも文様はない。2446はV期の高坏I2類、ワイングラス形高坏の口縁部である。2447はVI期の器台B1a類で、口縁部から柱状部の一部が残存する。2448はVI期の器台B1b類で、脚部は長く、透孔位置は下寄りである。2449・2450はVI期の器台B1類の口縁部。2451はVI期の器台B2類で、口縁端部に擬凹線を施す。2452・2453はV～VII期の手捏ねB類で、2453は全体に黒い。2454はV～VII期の手捏ねC類のほぼ完形のもので、内面に調整がある。2455はVI～VII期の手捏ねD類で、口縁部が短く垂直に立ち上がる壺F2類を模して作られたものであると考えられる。2456は銅甌である。

3 IV層上面の遺構と遺物（図414）

IV a・b層のそれぞれ上面で遺構検出をおこなったが、遺構は検出できなかった。

4 V層上面の遺構と遺物

V層上面では、柱穴9基、方形周溝墓4基、土坑155基、溝状遺構36条を検出した。発掘区中央から東部にかけては方形周溝墓が、発掘区中央から西部にかけては小穴や溝状遺構がそれぞれ多く検出され、発掘区東部と西部では異なる様相が見られる。このうち、柱穴、方形周溝墓、土坑、溝状遺構を図示した。

SPc153（図415）

検出状況 V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。検出時に平面形の中央に白色の粘土が確認できた。形状は南部分が発掘区外となるが、不整形形になると思われ、中央が凹み、その周

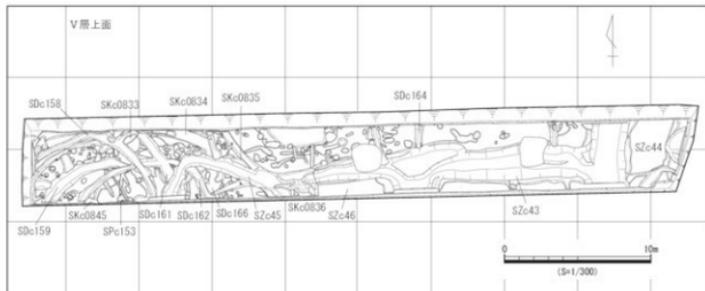


図414 09_10地点V層上面平面図

SPc153



図415 SPc153

りは皿状に浅くなる。埋土は4層に分層したが、1・2層が柱部分になると考えられ、1層には粘土が固まりで埋め込まれていた。周辺に組み合う柱穴は確認できなかったため、単独の柱穴とする。

遺物出土状況 埋土中からは小さい土器片が2点出土しただけで、図示可能なものはなかった。柱根は残存していなかった。

時期 他の遺構との先後関係などから、V期～VI期頃と思われる。

SZc43 (図416～図418)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。検出した溝の両端が南に向かって屈曲し、方形の区画を作り出していると思われることから、方形周溝墓であると判断した。

方台部 大半が発掘区外となり、北辺部のみを確認した。隅部も部分的な検出であるが、やや丸みがあることから、方台部の形状は隅丸の方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 北溝を検出した。東西方向にほぼ直線的であり、東端及び西端が南へ向けて屈曲することから、方形の区画を作り出していると思われる。幅は3m程となり幅広いが、深さも60cm程となる。底面はほぼ平坦である。壁面は、部分的に傾斜は異なるがやや開き、外側の肩部にはテラス状の平坦面がつく。埋土は最大14層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。埋土下部の一部にはV層ブロックが含まれることから、壁面及び墳丘からの崩落土の可能性が考えられる。なお、SZc44の西溝に重なるようにSZc43の北溝の東端が南へ屈曲していくことから、SZc43の東溝とSZc44の西溝は溝を共有するものであった可能性がある。

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が2,710点、石器1点、木製品2点が出土した。遺物は埋土上層に非常に多く、特に検出面から10cm以内の深さに多量に出土した。また検出面上にもまとまった土器の出土があった。埋土中位から下位になると、遺物の出土は少なくなり、図示できるような遺物の出土はなかった。また、供獻土器と考えられる土器の出土状況も見られなかった。

出土遺物 2457～2461は検出面上から出土した土器である。2457はV～VI期の甕A2b型で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2458はVI期の鉢B1類で、底面に孔が開く。2459・2460はVI期の高杯B4類、2461はVI期の器台B1a類で、無文である。2462～2470は、埋土中から出土した土器である。2462はV期の壺A1a類で、口縁端部に擬凹線、内面に羽状文を施す。2463はVI期の壺B1類で、口縁端部下垂した部分に刺突文を施す。2464はVI期の壺F2類、2465はVI期の壺H1a類で、文様はない。2466はVI期の壺J類で、球形の胴部である。2467はV～VII期の壺で、無文である。2468はIV期の壺H類で、口縁部には格子文と刺突文を施す。頸部はやや立ち、直線文を施す。2469はIV期の壺で、胴部の上部に直線文と波状文を施す。2470はV～VI期の甕A2a類で、口縁部に刺突文、頸部に直線文を施す。

す。2471はV期の甕A2b類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2472はV～VI期の甕A3類で、小型のものである。口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2473はV期の甕B1b類で、口縁端部に刺突文がある。2474はV～VII期の甕の胴部下部から脚台であるが、台は矮小である。2475はVI期の甕A2類で、口縁端部に刺突文を施す。2476はVI期の鉢A2類で頸部以下に直線文、刺突文を施す。2477はVI期の鉢B類で、有孔鉢である。2478はVI期の鉢G類で、小型のものである。半

Sz43

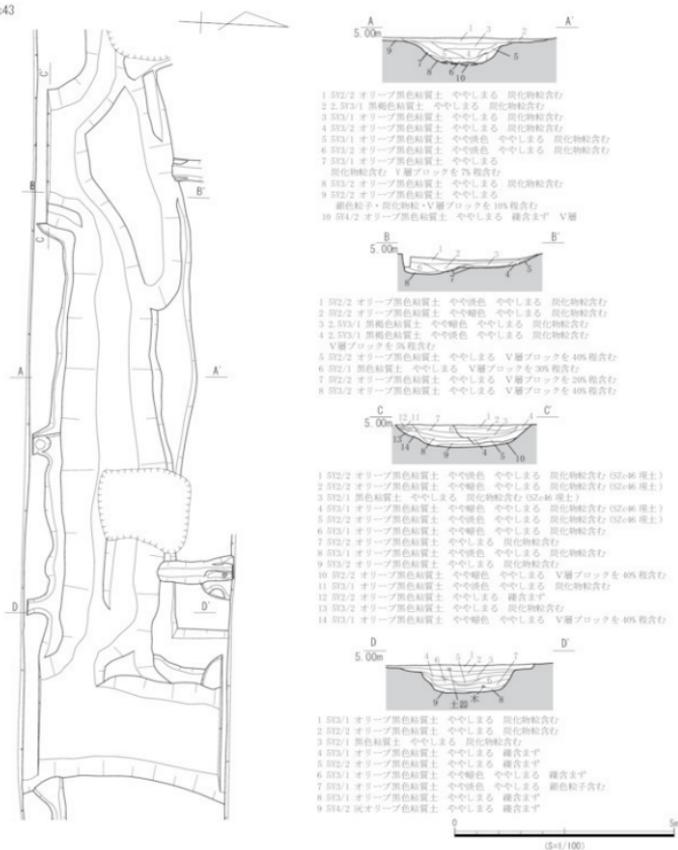


図416 Sz43

球形の胴部に外傾する口縁部をもつ。2479は小さい穿孔があることから台付鉢の脚台部と思われる。時期はIV期であろう。2480はV期の高坏B2b類、2481はVI～VII期の高坏C類と思われる口縁部である。2482はVI期の高坏F類で、口縁部は直線的に外傾する。2483はV期の高坏I2類で、ワイングラス形高坏である。2484はV～VI期の高坏の脚部で、裾部が外反し、平坦面をもつ。2485はV期の器台A1b類で、口縁部と裾部の屈曲部分が残っており、脚部が短くなる。柱状部に直線文がはさんで、鋸歯文を施す。2486はVI期の器台B類で、口縁部は外反気味で、基部径が小さい。2487はV～VI期の手捏ねA類、2488はV～VI期の手捏ねD類で、共に一部口縁が残り、わずかに外側へつまみ出しがあり、内外面に調整が確認できる。2489はV～VII期で手捏ねの底部片である。2490は器種不明の土器で、筒状の底部を持ち、底面は不定形の孔が開く。孔は焼成前のものと思われる。筒状の上部は花びらのように開く。それより先は欠損しており不明である。2491は砥石で、表裏砥面があり、端部に敲打痕が認められる。

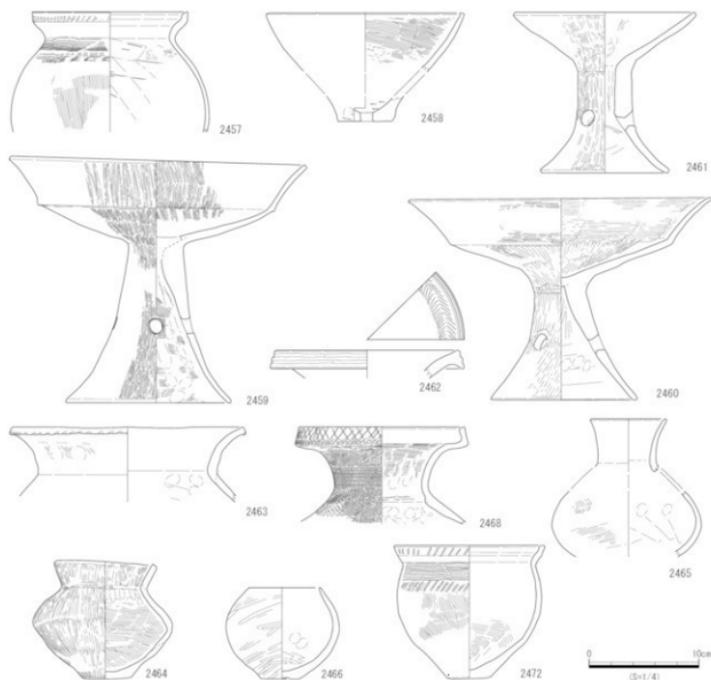


図417 Szc43出土遺物(1)

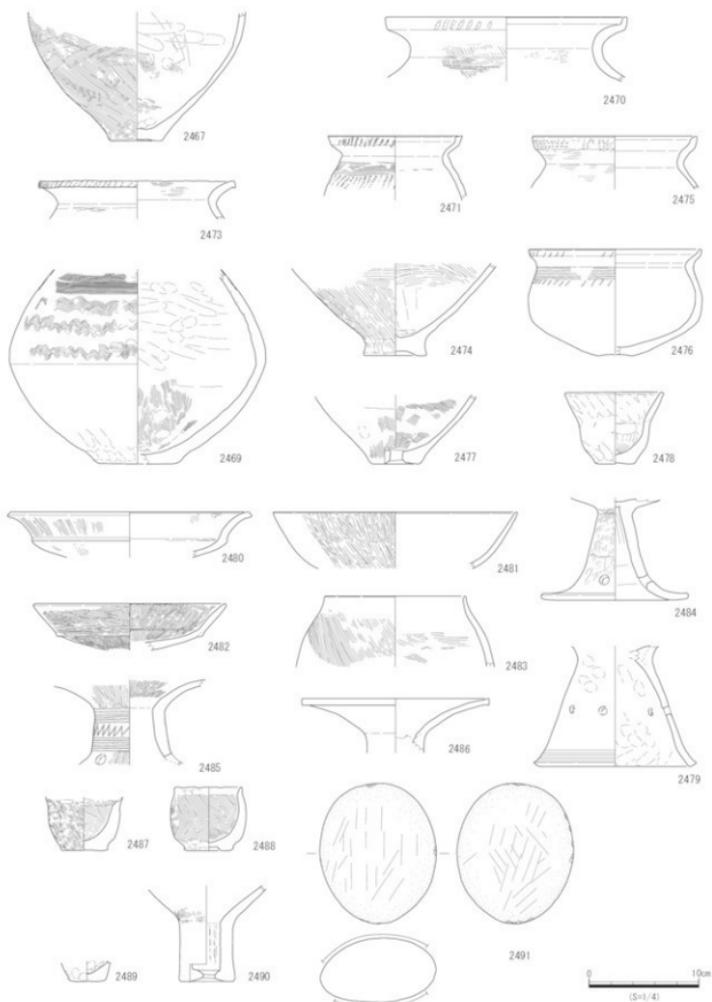


図418 SZc43出土遺物 (2)

時期 図示した遺物は埋土上部からのものであり、時期決定できる遺物の出土はなかった。しかし、4基の方形周溝墓（SZc43～SZc46）が群集しており、SZc44とは溝を一部共有すると考えられる。SZc44・SZc45はIV期と考えられるため、この遺構の時期もIV期と思われる。

SZc44（図419～図421）

検出状況 V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。西溝の一部しか検出しておらず、方形の区画を作り出すものかは不明であるが、溝の形状や遺物の出土状況、またわずかながら区画の内部の盛土を確認できたことから、方形周溝墓であると判断した。

方台部 大半が発掘区外となり、西辺部の一部のみを確認した。隅部を検出していないが、検出した西辺部は緩やかに湾曲する。方台部の形状は不明である。墳丘盛土は5～7cmほど確認できたが、V層ブロックを含む、暗灰黄色土であった。主体部は盛土を除去したV層上面で検出した土坑が主体部1と考えた。主体部1は東部が発掘区外となるため、全体形状は不明であるが、不整形楕円形でやや深く、底面は南側に段をもつが、ほぼ平坦である。壁面はやや立ち上がる。埋土は5層に分層したが、中央が凹む堆積であり、堆積状況は不明である。

周溝 西溝の一部を検出した。溝はほぼ南北方向を向いており、端部は検出していない。溝の外側はほぼ直線的であるが、内側は緩やかに湾曲する。幅は3.5m程となり幅広く、深さは60cm程である。底面はほぼ平坦である。壁面は、外側の肩部にはテラス状の平坦面がつく。埋土は最大17層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。なお、SZc44の西溝に重なるようにSZc43の北溝の東端が南へ屈曲していくことから、SZc44の西溝とSZc43の東溝は溝を共有するものであった可能性がある。

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が926点、主体部1から土器片が23点が出土した。土器は周溝埋土上層に非常に多い。埋土中位から下位になると、遺物の出土は少なくなっていく。ほぼ方形で、底面やや上から逆位で出土した2492が、出土状況から供献土器と考えられる。主体部1からは壺の胴部2506が出土しており、供献土器とした2492と同時期のため、埋葬時に意図的に入れられたものであると考えられる。なお、墳丘盛土からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 2492～2505は、埋土中から出土した土器である。2492はIV～3期の壺B1類で、完形品である。形状からB1類に分類するが、胴部の加飾は存在せず、壺A1類の胴部の様相がある。2493・2494はVI期の壺C類で、2493には、絵にはならないが線刻がある。2495はVI期の壺F2類で、口縁部の立ち上がりは短めである。2496はV～VII期の壺K類で、小型のものである。口縁部が外反し、端部は平坦面を持つ。胴部は丸く、矮小な底部をもつ。2497はV～VII期の壺の底部である。2498はV～VI期の甕A2a類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2499はVI期の甕A4類である。2500・2501はV～VI期の鉢A1類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2502はV～VI期の高杯B2a類で、口縁部がやや短く杯部からの立ち上がりに直立傾向が見られることなどB2a類としたが、加飾がほぼないこと、脚部の長さが短いことからB3a類的な傾向も見られる。口縁端部にわずかに擬凹線らしきものが確認できる。2503はV期の高杯B3a類で、無文である。2504はVI～VII期の高杯で、脚部は短く、裾部は強く外反する。2505はVI期の器台B類で、直線的でやや外反することや基部径が小さくなりそうなどからB類に分類する。2506は主体部1から出土したIV期の壺で、やや小型である。形状と文様がないことからA1類と思われる。

SZc44

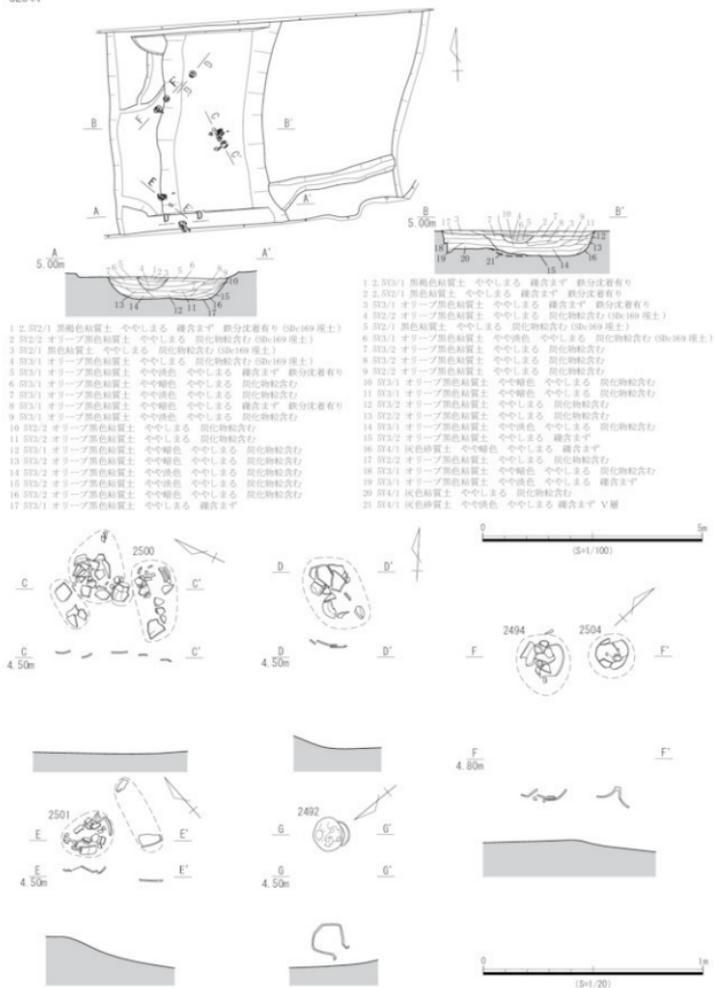
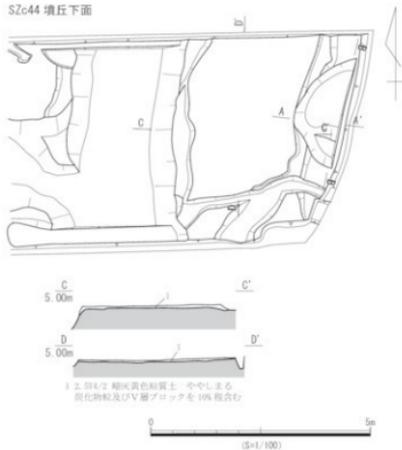


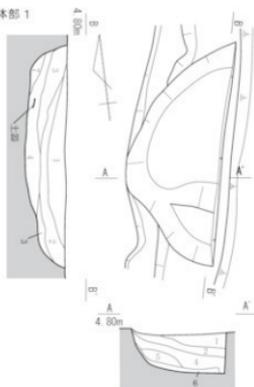
図419 SZc44

SZc44 墳丘下面



1 2. S14.2 暗褐色粘質土、ややしまる
 瓦化物較及びV種ブロックを10%程度含む

主体部 1



1 S12/1 黒色粘質土、ややしまる、白色粘土及び石灰質粘土混じる
 2 S13/1 オリーブ黒色粘質土、やや硬色、ややしまる、雑合まず
 3 S13/2 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑合まず
 4 S13/3 オリーブ黒色粘質土、やや硬色、ややしまる、雑合まず
 5 S12/2 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑合まず
 6 7. S13/1 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑合まず
 7 S12/2 オリーブ黒色粘質土、ややしまる、雑合まず

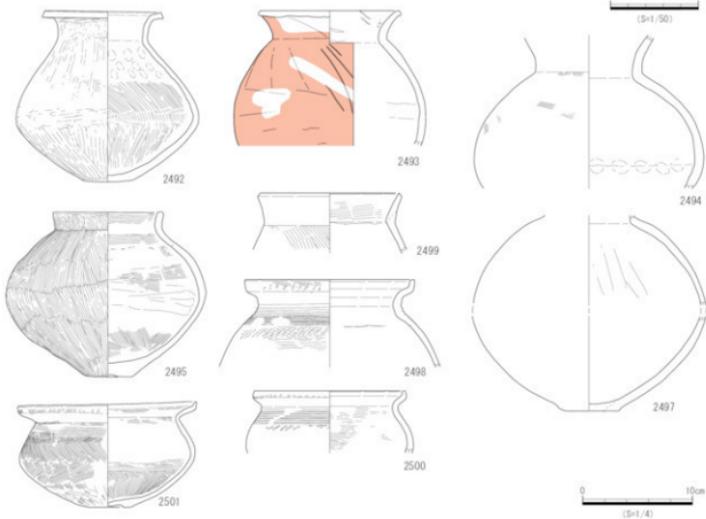


図420 SZc44墳丘下面・SZc44出土遺物(1)

時期 周溝埋土から出土した2492が方形周溝墓の供献土器と考えられ、構築時期を示すものである。また、主体部1から出土した2506もIV期になることから、この遺構の時期はIV期と考えられる。

SZc45 (図422)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形はやや不明瞭であった。この発掘区で検出した方形周溝墓は軸が北を向いているが、このSZc45だけは、軸が東に傾き北北東を向く。また、溝幅が狭く、規模が小さい。

方台部 大半が発掘区外となり、北辺部及び西辺部の一部を確認した。北辺部と西辺部は検出した範囲では直線的であり、隅部は直角であることから、方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 北溝及び西溝の一部を検出した。北溝は東西方向にほぼ直線的であり、東端及び西端が南へ向けて屈曲することから、方形の区画を作り出していると思われる。幅は1m程で、深さも20～30cm程となる。底面はほぼ平坦である。壁面は、部分的に傾斜は異なるがやや開く。埋土は最大5層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。埋土下部にはV層ブロックが含まれることから、壁面及び墳丘からの崩落土の可能性が考えられる。

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が293点が出土した。遺物は埋土上層に多く出土した。埋土中位から下位になると、遺物の出土は少なくなっていく。北西隅部に供献土器と考えられる土器がまとめて出土した。

出土遺物 2507～2509はIV期の壺A1類である。2507・2508は口縁部に2条の凹線がある。2509は頸部に沈線を施す。2510はIV期の壺A2類で、口縁部を欠くが、頸部以下の形状から壺A2類に分類した。頸部以下胴部中央部までに直線文と波状文が交互に配置される。最大径は胴部下寄りになる。2511・2512はIV期の壺の胴部片で、2511は文様はないが、2512は直線文がある。2513はVI期の高坏B3a類である。

時期 まとめて出土した壺2509・2510が出土状況から供献土器と考えられ、この遺構の時期はIV期と思われる。2510がIV期でも古い段階の様相であることや、方形周溝墓の軸が他の周溝墓とやや異なることから、この発掘区に群集するIV期の周溝墓の中では古いものになると思われる。

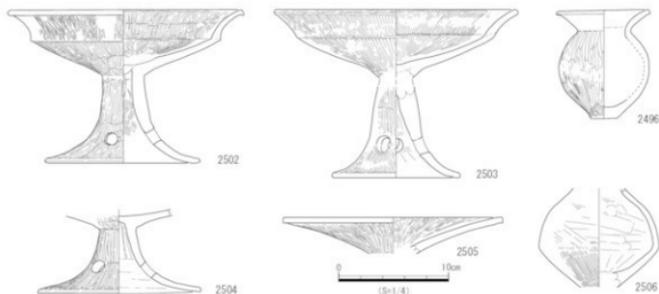


図421 SZc44出土遺物(2)

SZc45

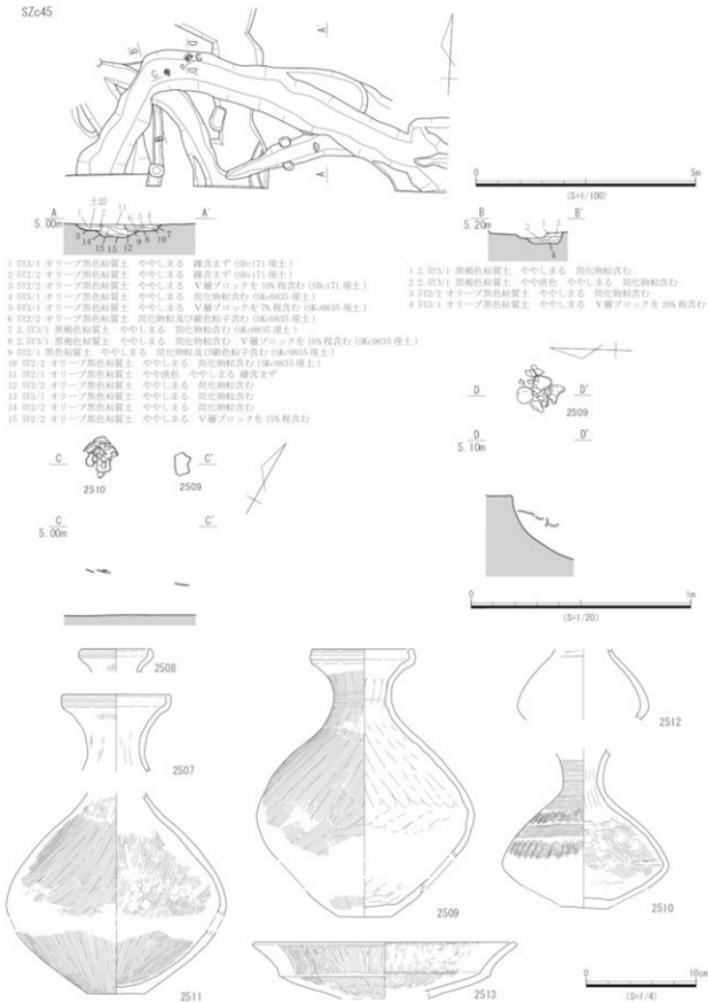


図422 SZc45

SZc46 (図423~図425)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的低瞭であった。調査時には、2条の別々の溝として調査しているが、平面形がほぼ重なることから、同一の方形周溝墓の溝と判断し、報告する。

方台部 大半が発掘区外となり、北辺部及び東辺部にかけての隅部を確認した。北辺部は直線的であり、隅部は直角であることから、方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 北溝及び東溝の一部を検出した。北溝は東西方向にほぼ直線的であり、東端が南へ向けて屈曲することから、方形の区画を作り出していると思われる。北溝の西端はSK-0836の底面につながっており、収束することから、北西隅部は切れると思われる。幅は1.8m程で、深さは30~40cm程となる。底面はほぼ平坦である。壁面はやや開き、外側にはテラス状に段がつく。埋土は最大10層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。埋土下部にはV層ブロックが含まれることから、壁面及び墳丘からの崩落土の可能性が考えられる。なお、調査時に別遺構として検出したことや土層堆積状況から、溝がある程度埋没した後に、再掘削が行われた可能性も考えられる。

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が699点が出土した。遺物は埋土上層に多く出土した。特に検出面上にはまとまった土器の出土があり、溝の凹みに土器が廃棄されたと思われる。埋土中位から下位になると、遺物の出土は少なくなっていく。供献土器と考えられる土器の出土はなかった。

出土遺物 2514~2526は検出面上からまとまって出土した土器である。2514はVI期の壺C類で、直口壺である。2515・2516はVI期の壺で、2515は口縁部に欠けが、算盤玉状の胴部である。2516はやや突出する底部である。2517はV~VI期の甕A3類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。

SZc46

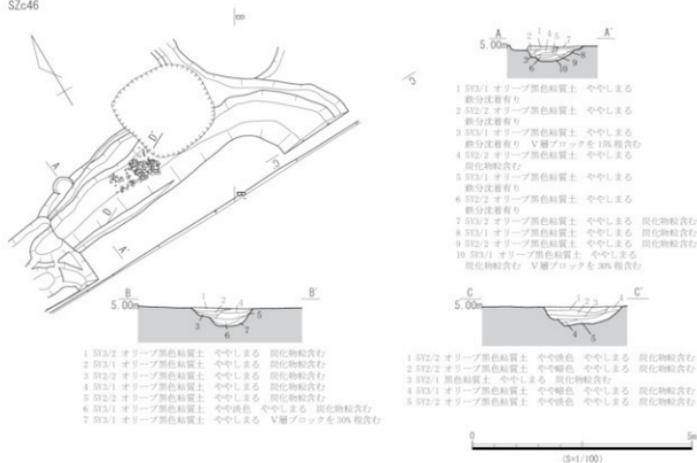
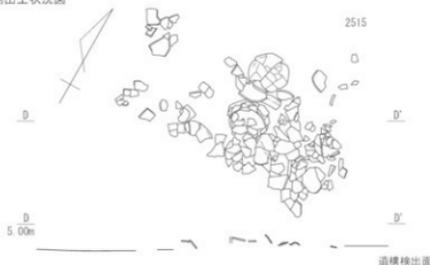


図423 SZc46

口縁部はかなり摩滅している。2518はV～VI期の鉢A1類で、頸部以下に直線文と刺突文がある。口縁の屈曲はやや形骸化しているが、胴部の形状も含めて鉢A1類とした。2519はVI期の鉢A2類で、口縁部に刺突文、頸部に直線文を施す。2520はVI期の鉢A3a類で、頸部以下に直線文と刺突文がある。2521はVI期の鉢B1類で、有孔鉢。口縁部が緩やかに立ち上がる。2522・2523はVI期の高坏F類で、口縁部がやや外傾しながら長く立ち上がる。2523の口縁部はわずかに外反する。2524はVI期の器台B1a類、2525はVI期の器台B1類で、口縁部が直線的でわずかに外反し、基部径が小さくなる。2526は円盤状の土製品で、直線文、波状文を施す。転用品の可能性があり、V～VII期のもと思われる。2527～2534は埋土中から出土した土器である。2527はVI期の壺F2類で、口縁部は直線的に開くが内面でやや外反傾向が見られる。2528はV～VII期の小型の壺で、扁平で算段玉状と思われる胴部である。小さい穿孔が一つある。2529はV期の甕A3類で、器面は摩滅しており、刺突文がわずかに確認できる。2530はV～VI期の鉢A1類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。口縁部の屈曲はやや開き気味である。2531はVI期の鉢A2類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文があるが、摩滅気味である。

上部遺物出土状況図



下部遺物出土状況図

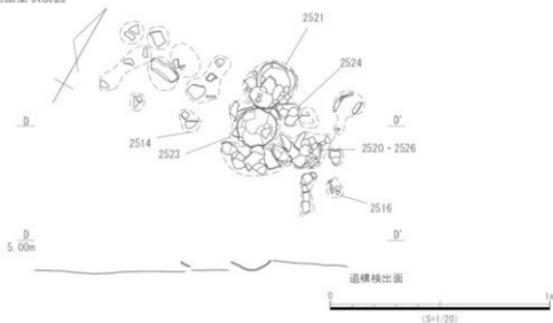


図424 SZc46遺物出土状況

2532はV期の高坏B2b類で、口縁端部がやや尖り気味に丸い。2533はIV期の高坏C類で、口縁部に凹線がある。2534はV期の器台A1b類で、柱状部に直線文を施す。

時期 図示した遺物は埋土上部からのものがほとんどであり、供献土器など時期決定できる遺物の出土はなかった。しかし、SZc43とは軸もほぼ同じになり、発掘区に方形周溝墓SZc43～SZc46が群集すると思われる。群集する方形周溝墓のうち、SZc44・SZc45はIV期のものと考えられるため、この遺構の時期もIV期と思われる。



図425 SZc46出土遺物

SKc0833 (図426)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。北側が発掘区外となるため全体の形状は不明であるが、検出した範囲では不整長楕円形となる。底面は東側と西側にそれぞれ平坦面があり、そこから一段下がつて、最底面がある。埋土は3層に分層したが、水平堆積で、2・3層にはオリブ黒色砂質土ブロックが混じることから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中からは土器片97点が出土したが、特に埋土上部に多い。

出土遺物 2535はV期の高杯82b類で、口縁部はやや外反する。加飾はない。

時期 図示した遺物のほか、V期の土器が出土していることから、V期のものであると思われる。

SKc0834 (図427)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は明瞭であった。北部の大半が発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、検出した範囲では、ほぼ直線の辺が直角に交わるため、方形又は長方形の可能性がある。底面はほぼ平坦である。埋土は4層に分層したが、2～4層は1層の下に垂直方向に分層できるため、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中からは土器片535点と多くの遺物が出土した。特に埋土上部にはやや大きめの土器片が点在して出土した。

出土遺物 2536はVI期の壺B1類で、端部に擬凹線、内面に羽状文を施す。2537はV～VII期の壺で、底部に孔のような凹みがある。2538・2539はVI期の甕A3類で、2538は口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文があり、2539には口縁部に刺突文がある。2540はVI期の甕B1b類で、口縁部に刺突文、頸部以

SKc0833

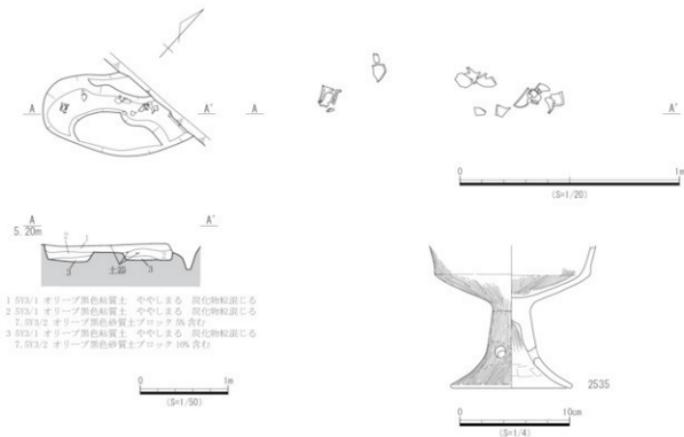


図426 SKc0833

下に刺突文を施し、B2類との折衷的な要素があると思われるが、口縁部の長さと同様でB1b類とした。2541はVI期の高坏B3a類で、加飾はない。

時期 図示した遺物から、VI期の遺構であると思われる。

SKc0835 (図428)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。全体の形状は東西方向に長い不整長楕円形である。埋土は7層に分層したが、部分的にV層ブロックが混じり、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中からは土器片234点の遺物が出土したが、特に遺構の東部に多く遺物が出土した。

出土遺物 2542はIV期の壺で、胴部に加飾はない。2543はVI期の鉢A2類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2544はV期の高坏B2a類で、口縁部端に擬凹線を施す。2545はVI期の高坏B3b類で、加飾はない。2546はVI期の器台B1a類で、口縁部が欠損するが、柱状部から脚部裾部までの形状と加飾がないことから、B1a類とした。

時期 V～VI期の土器が中心に出土しているが、もっとも新しいものはVI期であることから、この遺構の時期はVI期と考えられる。図示した2542は下の遺構にあたるSZc45からの混入した可能性がある。

SKc0834

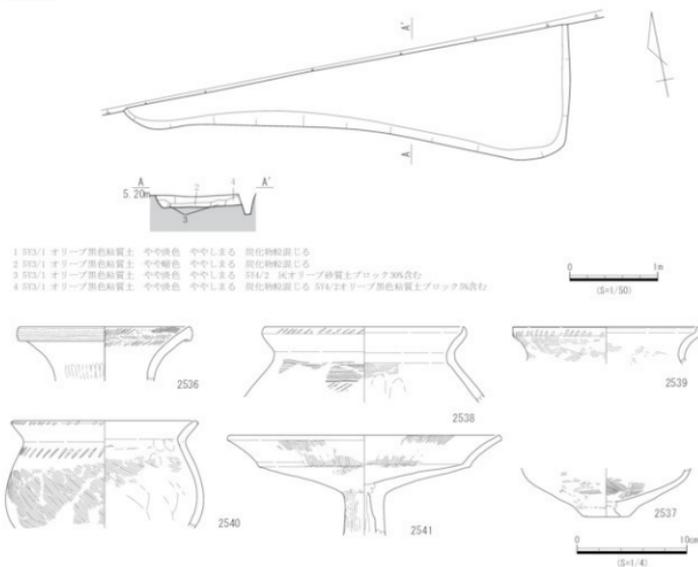


図427 SKc0834

SKc0836 (図429)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南部分が発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、検出した範囲では、方形若しくは長方形になると推測される。底面は凹凸があるが、これは切っている別の複数の遺構埋土を掘り下げていると思われ、埋土1層下端が本遺構の底面であった可能性がある。埋土は5層に分層したが、埋土下部は下の別遺構埋土の可能性がある。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土中からは土器片347点の遺物が出土したが、埋土上部からの出土が多い。

出土遺物 2547はV期の甕A2a類で、口縁部に刺突文、頸部に直線文を施す。2548はV期の鉢A1類で、口縁部に刺突文を施す。2549はV期の高坏B3a類で、坏底部から強く外反し、内面では段差が見られない。加飾はない。2550はVI期の高坏F類で、小型のものである。2551はVI期の器台B1a類で、柱状

SKc0835

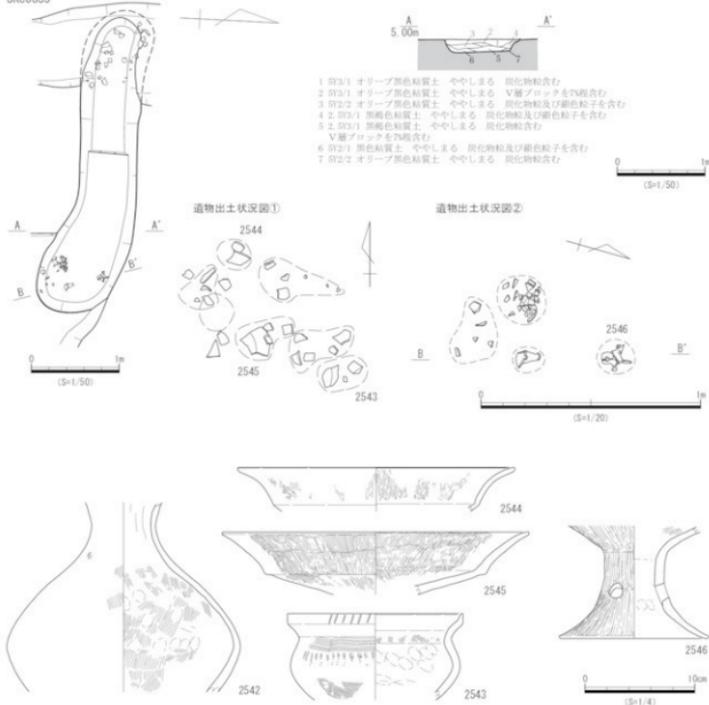


図428 SKc0835

部から裾部までの形状と加飾がないことから、B1a類とした。

時期 IV期の方形周溝墓を切り、VI期までの遺物が混じることから、この遺構の時期はVI期と思われる。

SKc0845 (図429)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は明瞭であった。検出面に炭化物や焼土のブロックが混じり、それが広がる部分を平面形とした。南部分が発掘区外となるため、全体の形状は不明である。埋土は単層で、炭化物や焼土のブロックを含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 周辺の遺構の時期から、V～VII期と思われる。

SDc158 (図430・431)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的名瞭であった。しかし、他の遺構との重複が多く、切り合い関係の把握は困難であった。南部や西端が発掘区外へ伸びていくため、全体の形状は不明であるが、半弧状になる溝状遺構で、検出した西半分については、底面が2条の溝に分かれている。底面はほぼ平坦で、壁面は開く。埋土は最大6層に分層したが、ほぼ水平堆積で、下部にV層ブロックが混じるが、これらは壁面の崩落であると考えられ、自然堆積であると思われる。しかし、埋土上部にも一部V層ブロックが混じる部分があるため、一部は人為堆積の可能性がある。また、底面が2条の溝に分かれていく西側については、埋土上部に2条の溝を覆う共通する層が堆積する(A断面及びB断面1層)ため、同一の溝であると考えられる。

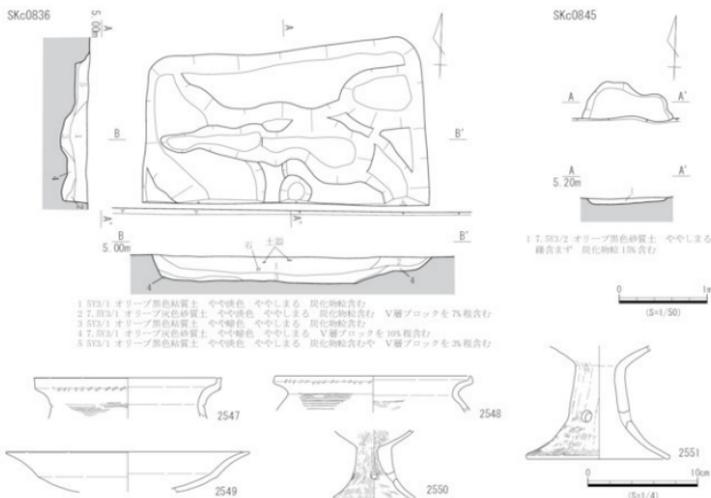


図429 SKc0836・SKc0845

SDc158

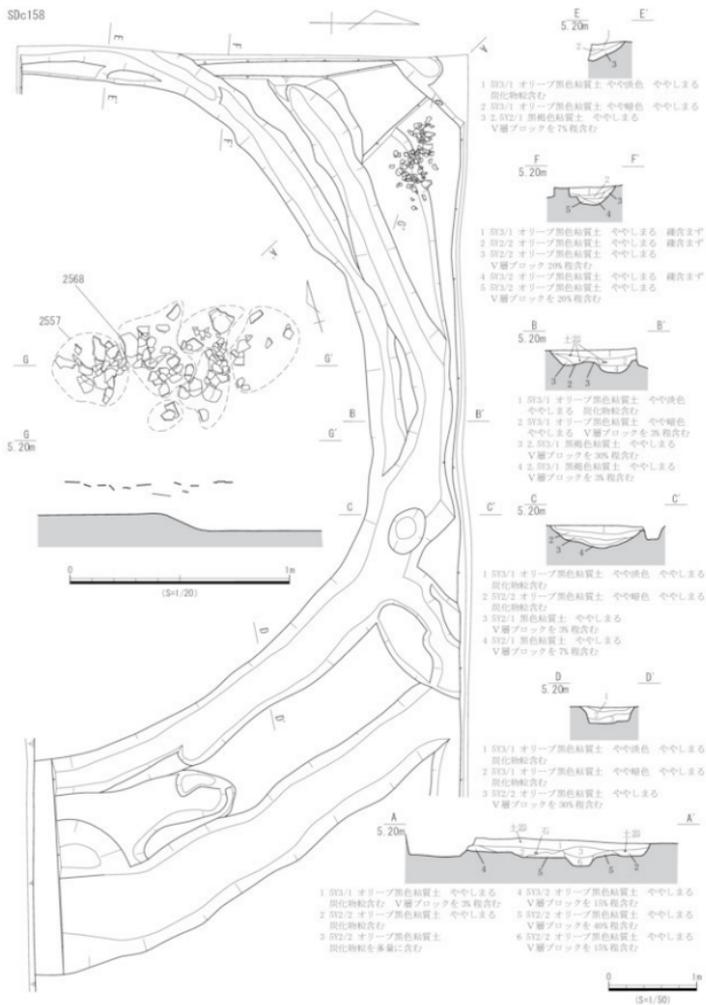


図430 SDc158

遺物出土状況 埋土中からは上部を中心に土器1,599点と多量の遺物が出土したが、破片ばかりで、散在していた。また、埋土下部から1点砥石が出土した。

出土遺物 2552はVI～VII期の壺B2b類で、胴部には刺突文がある。部分的に残る頸部が直立気味となるためB2b類に分類した。2553はVI～VII期の壺I2類で、文様はない。2554はVI期の甕A2b類で、台付きの甕である。口縁端部は幅狭で断面が三角形を呈す。2555はVI期の甕A3類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。口縁端部はやや丸い。2556はVI期の甕A4類で、口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施すが、線は細く、部分的に消失している部分もある。2557はV～VI期の無文高坏で、透孔は下寄りにある。2558はV期の器台B4類で、口縁端部に擬凹線と赤彩を施す。内面には羽状文と刺突文を施す。脚部付根に焼成後の穿孔が3箇所あることから、器台と判断した。2559は砥石で砥面のほかに、複数のV字状の溝や敲打痕が見られる。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が中心として出土し、明らかにVII期といえる遺物は出土しなかったことから、VI期の遺構であると思われる。

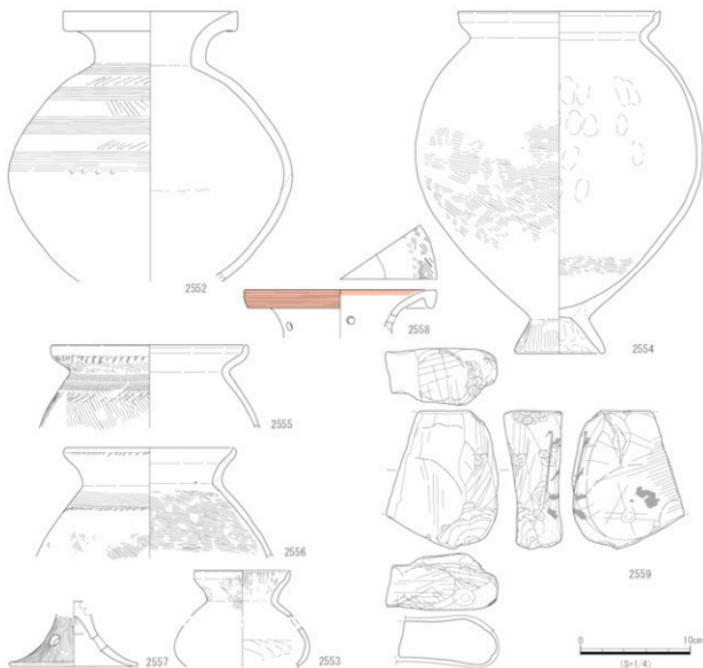


図431 SDc158出土遺物

SDc159 (図432・433)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南部は発掘区外へ伸びていくため、全体の形状は不明であるが、検出した部分では弧状に湾曲していく溝状遺構で、東へ行くほど幅が狭くなり、東端は収まる。底面はほぼ平坦で、壁面は開く。埋土は最大5層に分層したが、水平堆積で自然堆積であると思われる。

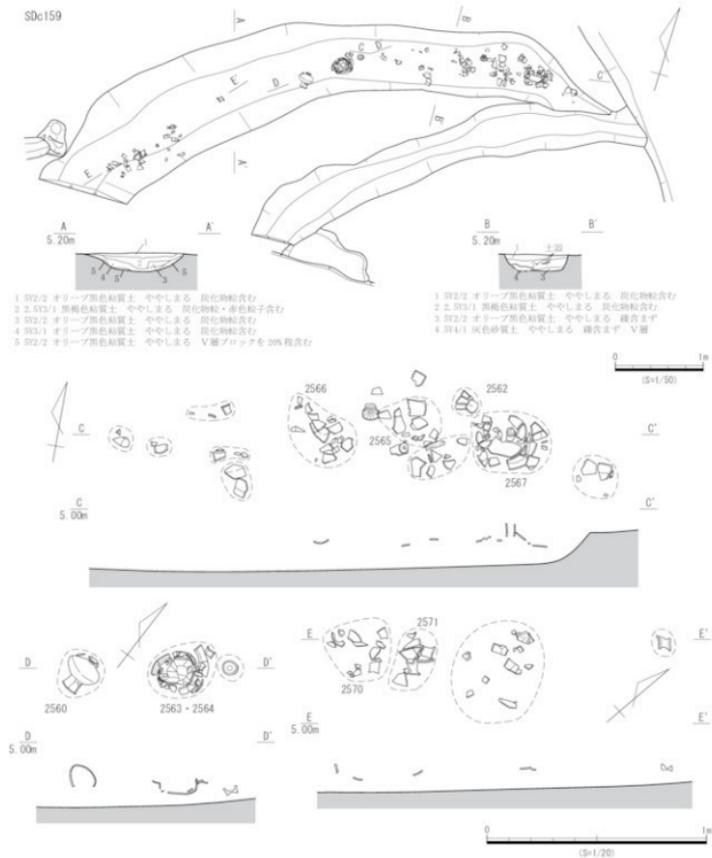


図432 SDc159

遺物出土状況 埋土中からは土器900点と多量の土器片が出土したが、6箇所ほどの土器のまとまりがあった。ほぼ完形の状態で壺が1点出土した。砥石も1点出土した。

出土遺物 2560はVI期の壺H1a類で、長頸壺の完形のものである。2561はVI期、2562はV期の甕A3類で、2561は頸部にわずかに刺突文が確認でき、2562は口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2563・2564はVI期の鉢A3a類で、2563は完形のものである。口縁部に刺突文、頸部以下に直線文、刺突文を施す。2564は口縁部で文様はない。2565はVI期の鉢B類で、有孔鉢。2566はVI期の鉢で、口縁部からB類と推測される。2567はV期の高坏B3a類で、加飾はない。2568はVI期の高坏C類、2569はV期の高坏I2類で、坏部である。2570はV～VI期の無文高坏で、透孔はやや下寄りにある。2571・2572はVI期の器台B1a類と思われ、加飾がない。2573は砥石で敲打痕が確認できる。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が中心に出土したことから、VI期の遺構と思われる。

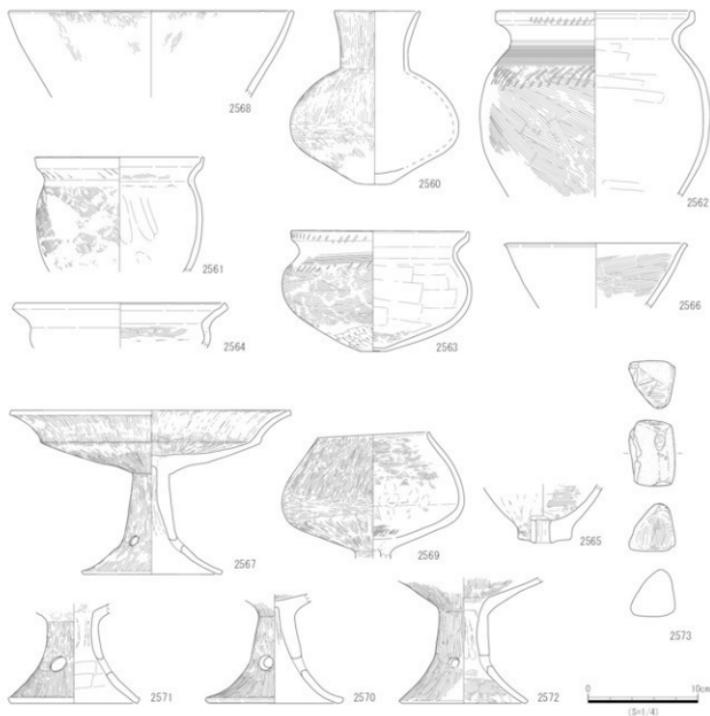


図433 SDc159出土遺物

SDc161 (図434)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。発掘区を横切り、南北端は発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、検出した部分では北西から南東方向へ伸びる溝状遺構で、南端でやや南に向けて屈曲する。底面はほぼ平坦で、壁面は開く。埋土は3層に分層したが、水平堆積で自然堆積であると思われる。

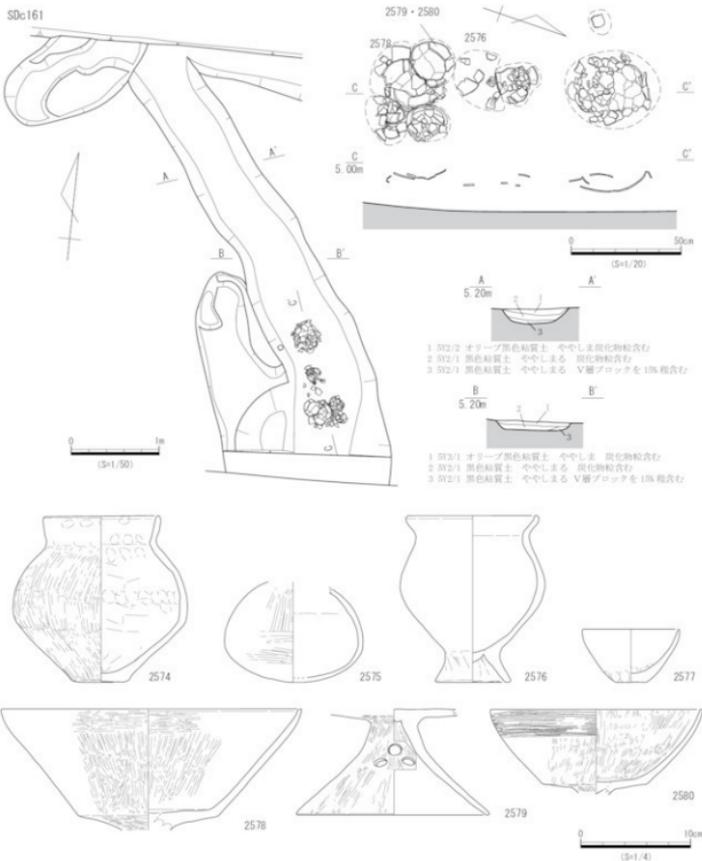


図434 SDc161

遺物出土状況 埋土中からは土器708点と多量の土器片が出土したが、遺構の南部に3箇所、土器がまとまって出土した。

出土遺物 2574はVI期の壺F2類でほぼ完形。2575はVI期の壺H類で、小型でやや丸い胴部である。2576はVI期の甕A4類で、文様はない。2577はV～VI期の鉢E類で、小型であるが、調整があるため、手握ねではなく、鉢E類とする。2578はVI期の高坏C2b類で、口縁部内面に段がある。2579はVI期の高坏C3b類で、対称に3つの透孔がある。2580はVI期の高坏G3b類で、口縁部外面に直線文を施す。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が中心に出土したことから、VI期の遺構と思われる。

SDc162 (図435)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。溝の両端が南の発掘区外へ伸びていくため、全体の形状は不明であるが、検出した範囲では半弧状になる溝状遺構である。深さは、西部から東部にかけてやや深さを増すが、比較的浅い。底面はほぼ平坦で、壁面は開く。埋土は最大7層に分層したが、ほぼ水平堆積で、下部にV層ブロックが混じるが、これらは壁面の崩落と考えられ、自然堆積と思われる。

遺物出土状況 埋土中からは499点の土器片が散在して出土した。

出土遺物 2581はVI期の壺I2類で、受口状の口縁部である。2582はVI期の高坏B4類で、破片資料であるが、裾部があまり外反せず、透孔がやや高いことからB4類とする。2583はVI期の高坏F類で、小型で、口縁部は外傾して立ち上がり、外反するが顕著でない。2584はVI期の器台B類で、口縁部が外反気味で基部径が小さくなりそうなことからB類とする。

時期 図示した遺物をはじめVI期の遺物が中心に出土したことから、VI期の遺構と思われる。

SDc164 (図436)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。溝の北端が発掘区外へ伸び、南端はSZc43と重複するため、全体の形状は不明であるが、検出した範囲では南北方向の溝状遺構である。なお、調査時にはSZc43に切られると判断していたが、遺物からSDc164が新しいと考えられる。底面はやや丸みがあり、壁面は開くが、南部では溝の両側の壁にテラス状に段が付く。埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、V層ブロックが混じるため、人為堆積であると思われる。

遺物出土状況 埋土中からは110点の土器片が散在して出土した。埋土上に遺物は多く、2586はほぼ完形の状況で正位で出土した。

出土遺物 2585はVI期の甕A4類で、受口状口縁部は形骸化している。2586はV期の高坏B3a類で、口縁がやや立ち気味に立ち上がるが、脚部の形状と合わせB3a類とした。

時期 図示した2586がこの遺構の時期を示すと考えられるため、V期の遺構と思われる。

SDc166 (図436)

検出状況 V層上面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。溝の南端が発掘区外へ伸び、北端はSKc0834に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した範囲では南北方向の溝状遺構である。底面はほぼ平坦で、壁面は開く。埋土は最大3層に分層したが、V層ブロックが混じるため、人為堆積の可能性はある。

遺物出土状況 埋土中からは409点の土器片が散在して出土した。特に中央から南部にかけて、やや大きめの土器片が目立って出土した。

出土遺物 2587はVI期の鉢B1類で、有孔鉢。2588もVI期の有孔鉢で、底部のみで鉢B類である。2589はVI期の器台B1類で、加飾はない。

時期 図示した遺物を含め、VI期の遺物だけが出土していることから、この遺構の時期はVI期と思われる。

SDc162

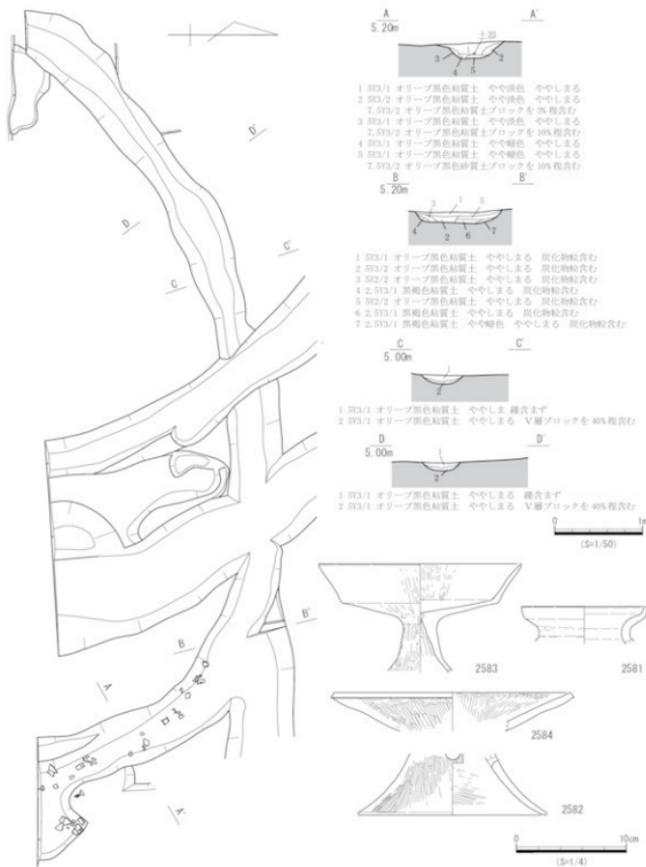
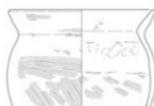
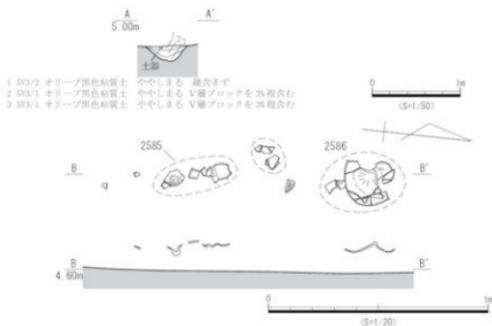
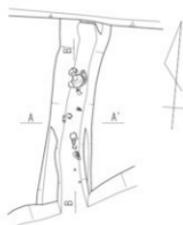


図435 SDc162

SDc164



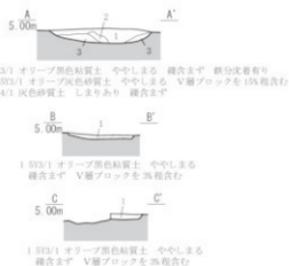
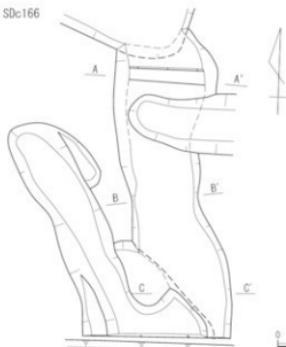
2585



2586



SDc166



2588



2589

図436 SDc164・SDc166

SDc169 (図437)

検出状況 SZe44埋土中に検出したが、SZe44の西溝がほぼ埋没した段階で掘削されたものと考えられる。平面形はやや明瞭であった。全体の形状は不明であるが、幅20cmほどの溝状遺構で、SZe44の西溝のほぼ中央を、SZe44の方台部のラインに沿うようにわずかに湾曲しており、南北端は発掘区外へ伸びている。このため、SZe44西溝の埋没途中の凹地を利用した溝であると考えられる。底面はやや丸みがあり、壁面はやや開く。埋土は最大5層に分層したが、ほぼ水平堆積で、自然堆積であると思われる。

遺物出土状況 埋土中からは107点の土器片が散在して出土した。

出土遺物 2590はV～VI期莚A2a類で、口縁部、胴部に刺突文を施す。

時期 SZe44の埋土上部から出土した遺物の中で、時期が決定できるものはVI期のものになる。SZe44の埋土上部を掘削していることから、この遺構の時期はVI期と思われる。

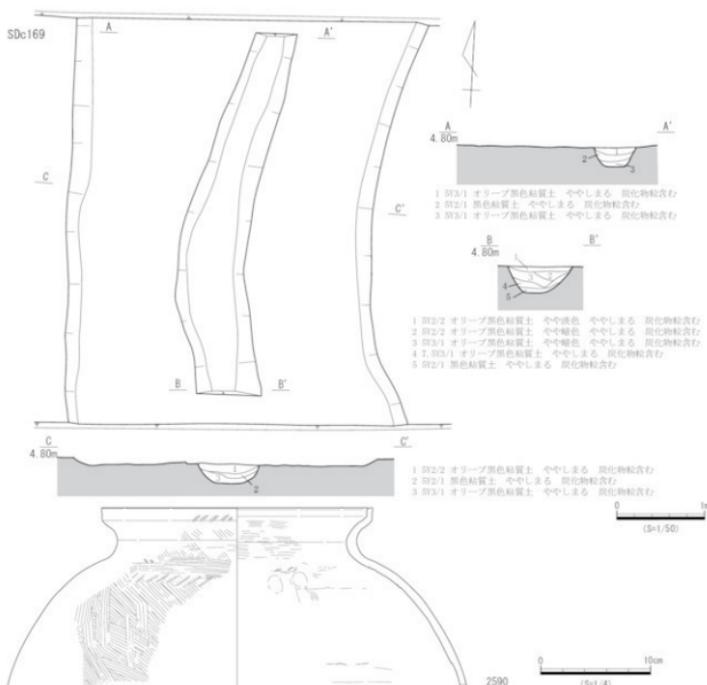


図437 SDc169

5 まとめ

この地点は、荒尾南遺跡C地区では最西端にあたる。IV層上面の遺構は確認できず、V層上面の遺構では柱穴、方形周溝墓、土坑、溝を検出した。

方形周溝墓は発掘区中央部から東部にかけて、弥生時代中期（IV期）のものを検出した。NRc1の西岸においては、平成6年度調査では弥生時代後期の方形周溝墓群を検出しており、08_13地点・09_15地点や08_14地点・09_16地点においても同時期の方形周溝墓を検出したが、07_1地点においては、弥生時代中期の方形周溝墓を検出している。このことから、NRc1西岸においては、弥生時代中期と弥生時代後期それぞれの時期において、方形周溝墓群が形成されたと考えられる。ただ、その分布については、調査範囲が限定されており、明確なことは言えない。

発掘区中央部から西部にかけては、V～VI期の遺構を中心に検出したが、特徴的なのは弧状に巡る溝状遺構を重複して検出したことである。これらの溝状遺構には大きな時期差は認められず、弧状に区画した内側では、粘土を意図的に詰めたと考えられる柱穴SPe155や炭化物や焼土のブロックが混じる土坑Skc0845を検出していることから、祭祀儀礼が短期間の間に、繰り返し行われていた可能性も考えられる。

土器は比較的多く出土したが、遺物包含層を含めてS字状口縁台付甕は全く出土していない。また、時期が特定できる土器は方形周溝墓から出土したIV期のものを除くと、V～VI期ものが圧倒的多数を占める。このことから、IV期の方形周溝墓群の埋没後、V期からS字状口縁台付甕が出現するVI期初頭までの比較的短期間に、NRc1の西側において様々な活動が行われていたと考えられる。

第13節 11_9地点

C地区西部、09_10地点北側に位置する調査地点で、調査面積は280㎡である。大垣環状線拡幅部分にあたり、東側の大垣環状線部分は、平成6年度発掘区にあたる。

1 層序

北壁土層を図示した(図438)。基本層序のI層及びIV層に対応すると考えられる植物遺体を多く含む黒褐色土層を確認したが、ほぼ水平堆積である。I層の下の堆積については、近代以降の水田耕作に伴う堆積であると考えられる。発掘区全面が自然流路であり、IV層に対応すると考えられる植物遺体を多く含む黒褐色土層以下については、流路埋土となる。発掘区が狭小であったため、流路底面までの掘削は行うことができず、11層の砂礫層上層までで掘削を終了したため、流路下の堆積状況は不明である。遺構検出面はV層上面となるが、全面自然流路のためV層は存在せず、自然流路最上層の黒色泥炭層上面を検出面とした。

2 包含層出土遺物(図439)

この地点で出土した遺物は、867点であるが、その大半が弥生土器・土器器類である。このうちI層は25点、IV層は10点で、遺構出土遺物は832点である。包含層から出土した遺物は、木製品3点のほかは土器類で、山茶碗の4点を除くと、弥生土器や土器器であった(表25)。

包含層出土遺物として実測したのは、IV層から出土した山茶碗1点とI層から出土した木製品1点である。2591は自然流路最上層黒色泥炭層直上のIV層に対応する層から出土した山茶碗で、藤澤編年6型式である。2592はI層から出土した木製品で、曲物の底板と思われる。側面には木釘が2つ確認でき、片面に黒漆が塗布されている。

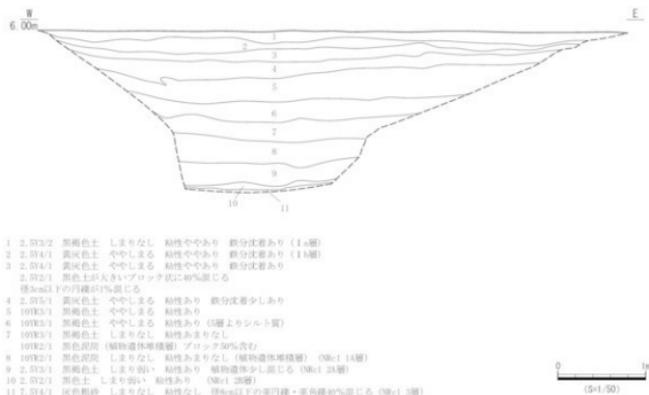


図438 11_9地点北壁土層図

表25 11_9地点出土遺物数量

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層	0	23	0	0	1	0	0	0	1	25
III層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
IV層	0	5	0	0	3		0	0	2	10
IV上遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V上遺構	0	770	0	0	0	1	0	0	61	832
合計	0	798	0	0	4	1	0	0	64	867

3 V層上面の遺構と遺物 (図440)

V層上面では、溝状遺構3条と自然流路1条を検出した。溝状遺構は、いずれも部分的に検出できたものであるが、いずれも東西方向のものであり、溝列として図示した。また、自然流路は位置や土層堆積状況から07_2地点・09_11地点・09_13地点を流れるNRc1と同一のものと考えられる。

溝列 (図440)

検出状況 NRc1最上層の黒色泥炭層上面で検出したSDe194～196を溝列として報告する。平面形はいずれも明瞭であった。発掘区外に延びるため全容は不明であるが、いずれもおおまかには東西方向の溝状遺構であり、水田耕作に伴う遺構の可能性がある。SDe194は南側にテラス状の平坦面をもち、北側が一段深くなる。検出面を下げすぎた関係で上端を掘削したことにより、本来の幅よりも狭くなってしまったが、西壁で確認すると、3.3mほどの幅があったと考えられる。埋土は3層に分層したが、やや中央が凹むほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。C断面4層は掘りすぎたNRc1埋土である。SDe195は南側に平坦面をもち、北側が一段深くなる。幅は1m程で、西端では溝幅が南へ広がる可能性が考えられる。埋土は3層に分層したが、一段深くなる部分に堆積する1層にはラミナ状に砂が混入することから、流水があったと思われる。SDe196は中央から東側が一段深くなる。埋土は2層に分層したが、いずれもラミナ状に砂が混入することから、流水があったと思われる。

遺物出土状況 いずれの遺構からも遺物の出土はなかった。

時期 遺物の出土がなく、はっきりとした時期は不明であるが、検出面としたNRc1最上層の黒色泥炭層上面直上で中世の山茶碗が出土していることから、中世以降の遺構と思われる。

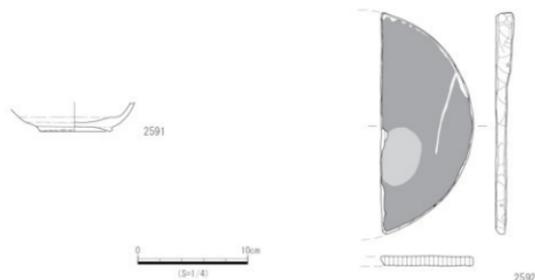


図439 11_9地点包含層出土遺物

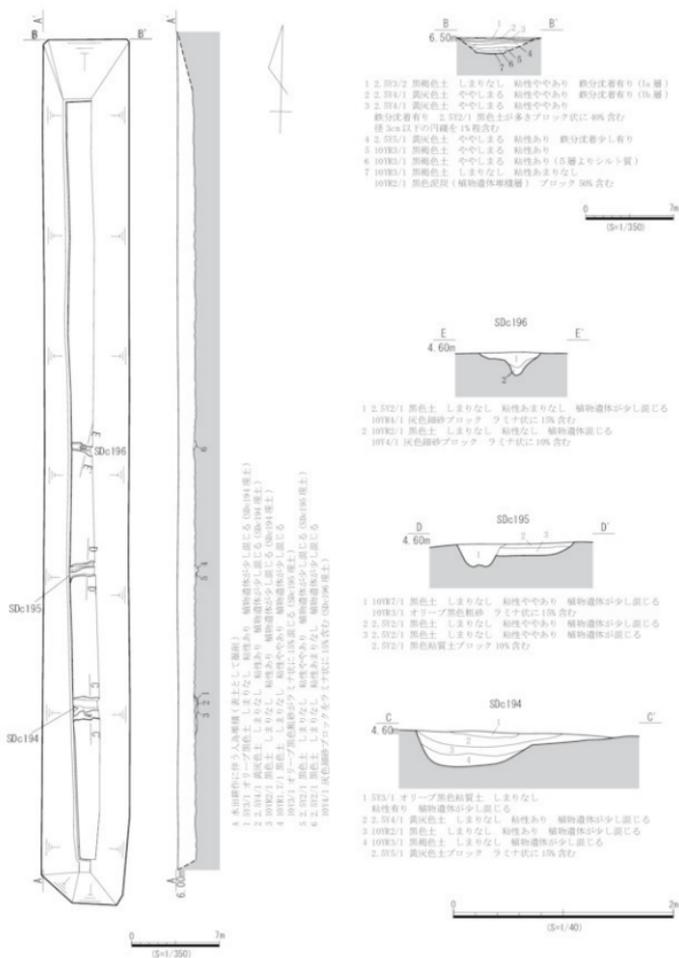


図440 溝列 (SDc194~SDc196)

NRc1 (図441～図443)

検出状況 NRc1はC地区西部、地形がもっとも低くなる場所を流れる自然流路であり、11_9地点発掘区全面がその範囲となった。C地区全体で見ると、位置関係や堆積状況、遺物出土状況から、平成6年度発掘区北部及び07_2地点・09_11・13地点で検出している自然流路と同一のものであり、大きくは遺跡の西部を北西から南東方向に流れていると考えられる。発掘区内に層がないため、形状は不明であるが、隣接する平成6年度発掘区北部も自然流路であり、これと合わせると、川幅は30m以上となる。深さは発掘区が狭小のため底面まで掘削しておらず不明であるが、平成6年度発掘区北部では最大で2.5m程の深さとなっている。ほぼ埋没した埋土上部で遺物が非常に少ないことから、陸地から遠い自然流路の中央部分にあたるのではないかと考えられる。

埋土は発掘区北壁・西壁で分層を行ったが、堆積した土の状況から、大きくは三分でき、出土遺物においても時期差を認めることができる。1つめは、下部の砂礫層を中心とした堆積(流路下部砂礫層)である。北壁土層図11層、西壁土層図44層に対応し、遺物取り上げ時の区分は3層である。この発掘区においては、人力での掘り下げは困難であったため、この層の上面までで人力掘削での調査は終えている。機械によって部分的に掘り下げを行っているが、底面までは確認できなかった。なお、砂礫層上面の高さは発掘区北端で標高4mあたり、南端で3.5mあたりと約50cmほどの差がある。2つめは、埋土中部の黒褐色粘質土が幾重にもなっている堆積(流路中部粘質土層)で、この層は北壁土層図8・9層、西壁土層図15～43層で、遺物取り上げ時の区分は2層に対応する。部分的に砂礫によるラミナが確認できるため、水流があった時期があることが分かる。3つめは、埋土上部の植物遺体を大量に含む黒色泥炭層(流路上部黒色泥炭層)で、この層は北壁土層図7層、西壁土層図7～14層で、遺物取り上げ時の区分は1層に対応する。

遺物出土状況 埋土中から832点の遺物が出土した。流路下部砂礫層からは268点の土器が出土した。弥生時代前期～中期の土器が主に出土したが、機械掘削時に取り上げた遺物の中には、他の層位からの混入があり、一部に弥生時代後期の土器も混じる。流路中部粘質土層からは、501点の土器と61点の木製品が出土した。土器は弥生時代後期～古墳時代初頭のものが中心である。木製品については、この発掘区は自然流路の中央付近であると考えられるため、木製品の多くは洪水時などに上流から流れてきたものと考えられる。流路上部黒色泥炭層からは土器2点のみが出土した。植物遺体を多量に含む層であることから、自然流路がほぼ埋没し、湿地化して植物が繁茂していた状況であり、かつ自然流路の中央部分で陸地から遠いことが考えられ、人間の活動が及ばなかったものと考えられる。

出土遺物 2593～2600は流路下部の砂礫層から出土した土器である。2593はV期の壺A2類で、口縁部は強く外反し、端部はわずかに上方に拡張する。2594・2595はI期の壺で、2594は直線文と波状文を施す。I期後半と思われる。2595はやや突出する底部で肉厚である。2596はIV期の甕A2類で、口縁端部にキザミがある。2597・2598はI期の甕である。2597は口縁部はやや外反し、頸部に沈線をもつ。2598は口縁端部にキザミがある。2599は蓋の一部であると思われ、端部に沈線が2条走る。時期はI期と思われる。2600は半球状の土製品で、割れたというよりも剥離したように見える面がある。2601～2617は流路中部の粘質土層から出土した遺物である。2601はV期の壺A1b類で、口縁端部に擬凹線を施す。端部を下方にわずかに拡張する。2602はVI期の壺A3類で、口縁端部に擬凹線をもつ。2603はVII期の壺A5類で、口縁部が短く外反し、上方に拡張する。2604はVI～VII期の壺と思われ、文様はなく、

やや肉厚である。口縁端部がやや受口状となるため、壺D3b類と判断した。2605はⅥ期の壺H類で、扁平な胴部をもち、最大径は胴部中央より下がった位置にある。胴部中央に焼成後の内面からの穿孔が1つある。2606は甕A4類で、Ⅵ期のもと思われる、口縁端部に刺突文があるが、胴部は無文である。2607はⅥ期の甕B1a類で、口縁端部は平坦に整形され、下端に粘土がややはみ出る。2608はⅥ～Ⅶ期の甕D類で、S字状口縁台付甕の台部である。2609はⅧ期の甕で、いわゆるS字状口縁台付甕C類である。2610はⅤ～Ⅵ期の鉢G類で、底部がやや突出し、胴部中央で屈曲して、口縁部に至る。2611はⅤ期の高坏B2c類で、口縁端部には平坦面を持つ。加飾はない。2612はⅥ期の高坏C類で、口縁端部は尖り気味に丸く収める。2613はⅤ～Ⅵ期の高坏J類で、透孔が1つ確認できる。裾部には段をもち、擬凹線を巡らせる。北陸系と思われる。2614はⅤ期の高坏で、脚部上部、坏部との間に沈線を施す。2615はⅤ期の器台A1b類で、口縁部は欠損するが、柱状部から脚裾部の形状からA1b類に分類した。施文はない。2616は台の脚と思われる。2617は板材で1箇所磨き確認できる。

時期 流路下部の砂礫層から出土した遺物は、弥生時代前期～中期のものが中心であり、この時期には水流があったものと思われる。しかし弥生時代後期以降になると水流が弱くなり、次第に湿地化していく。ほぼ埋没するのは古墳時代前期頃と思われる。

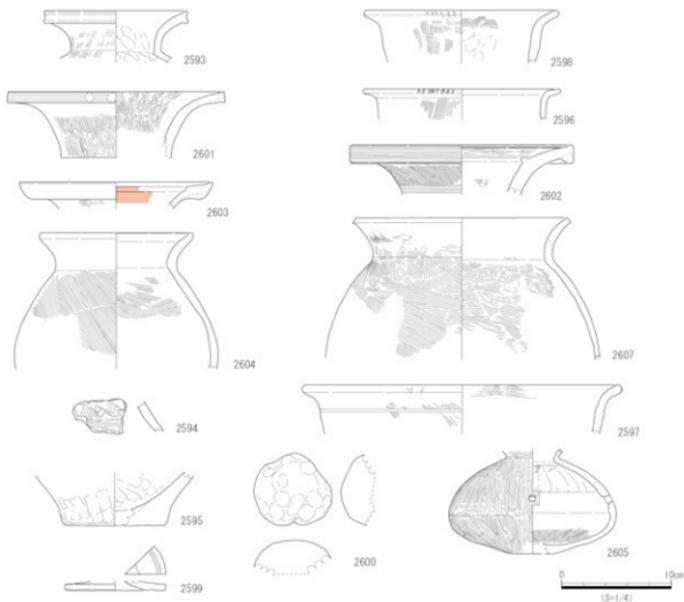


図442 NRc1出土遺物 (19)

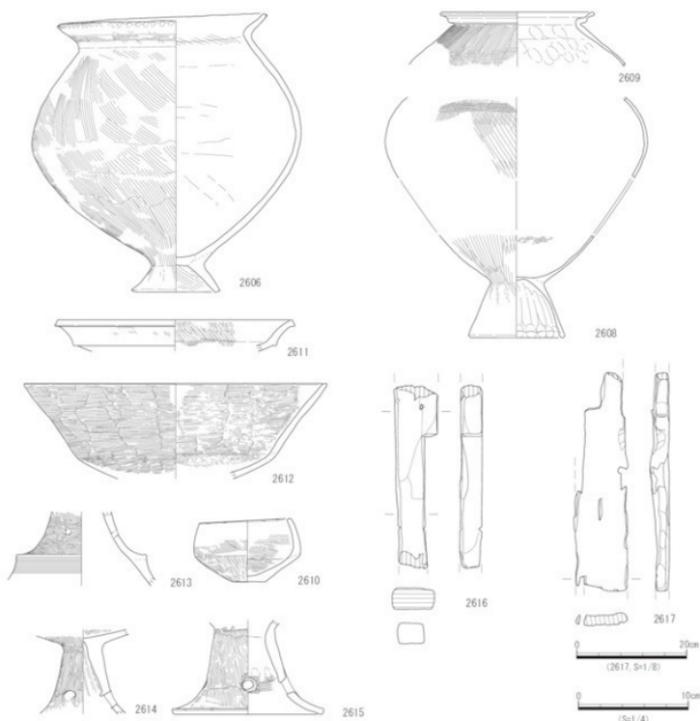


図443 NRc1出土遺物 (20)

4 まとめ

この地点は全面が自然流路となるが、肩部は検出できず、また狭小であるため底面までの調査を行うことができなかった。そのため全容は不明であるが、堆積状況や遺物出土状況から、平成6年度発掘区北部の自然流路や07_2地点・09_11地点・09_13地点を流れるNRc1と同一のものであると推測できる。このことから、NRc1は大きくは遺跡の南西部を北西から南東方向に流れていると考えられる。このNRc1の兩岸では、09_13地点や平成6年度調査で方形周溝墓群が検出されており、弥生時代中期から後期までは主に墓域として土地利用されていたことが分かる。弥生時代後期以降、NRc1の埋没が進むと次第に湿地化し、古墳時代前期に至って完全に埋没すると思われるが、09_12・13地点における水田に関係すると思われる溝列や遺物の出土、本地点で検出した溝列の存在から、古代から中世にかけては、この周辺での土地利用は水田耕作に変化していったと思われる。

第14節 11_8地点

C地区北部、静里排水路を挟んで、07_6~8地点の北西に位置する調査地点で、調査面積は282.7㎡である。国道21号拡幅部分にあたり、国道を挟んで北側はB地区となる。

1 層序

北壁土層を図示した(図444)。基本層序のI層及びIV層を確認したが、ほぼ水平堆積である。I層の堆積については、I a層の水田耕作土、I b層の床土、I c層の土地改良によると思われる盛土が確認できるが、I b層については、発掘区中央部から西部にかけて確認した。IV層は発掘区東部に薄く残存するのみで、中央部から西部にかけては確認できなかったが、SDc202の埋土上部がIV層に対応する層になると考えられる。遺構検出面はIV層上面(I層基底面)とV層上面となる。

2 包含層出土遺物(図444)

この地点で出土した遺物は、7,223点であるが、その大半が弥生土器・土師器類である。このうちI層は219点、IV層は48点で、遺構出土遺物は6,956点である。包含層から出土した遺物は、木製品1点のほかは土器類で、須恵器・灰釉陶器各1点、山茶碗22点を除くと、弥生土器や土師器であった(表26)。

包含層出土遺物として実測したのは、IV層から出土した山茶碗2点である。2618と2619は共に尾張型の山茶碗で、藤澤福年の第6型式である。

3 IV層上面の遺構と遺物(図445)

IV層上面では、土坑3基と溝状遺構3条を検出した。発掘区東部については、IV層の堆積が非常に薄く、検出作業の段階でV層が露出する部分もあったが、その場合は埋土の土色などでV層上面の遺構との区別を行っている。また発掘区中央部から西部にかけては、SDc202埋土上部を掘り込む遺構をIV層上面の遺構として扱った。木製品が出土した土坑1基と西北西から東南東方向の直線的な溝1条を図示した。

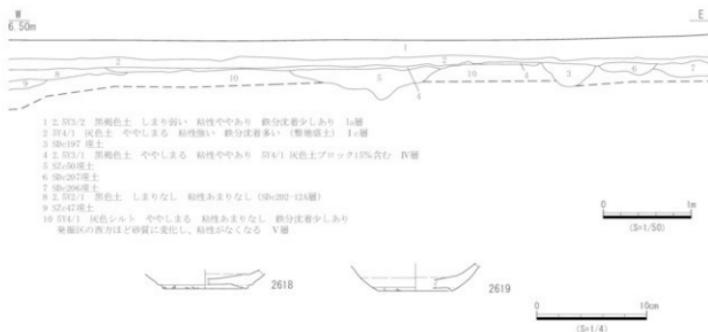


図444 11_8地点北壁土層図・11_8地点包含層出土遺物

表26 11.8地点出土遺物数量

場所	種別	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	金属 製品	木製品	合計
I～II層		0	200	1	1	16	0	0	0	1	219
III層		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
IV層		0	42	0	0	6	0	0	0	0	48
IV上遺構		0	242	1	0	10	0	0	0	2	255
V上遺構		1	6,615	1	1	30	0	12	0	41	6,701
合計		1	7,099	3	2	62	0	12	0	44	7,223

SKc0988 (図446)

検出状況 IV層上面で検出したが、平面形は明瞭であった。ほとんどが発掘区外となるため、全体の形状は不明であるが、柱材が埋められていたことから、南東方向に伸びていくものであると推測できる。埋土は2層に分層したが、黄灰色土に、黒褐色土やV層がブロック状に混じる堆積であり、柱材が置かれていた状況と合わせて、人為堆積であると考えられる。

遺物出土状況 柱材と思われる木製品が、平面形東側に置かれており、発掘区外へ伸びている。

出土遺物 2620は樹皮が残るが、芯持ちの柱材と思われる。

時期 時期決定できる遺物の出土がなく、はっきりとした時期は不明であるが、IV層上面の遺構であり古代以降のものであると思われる。

SDc199 (図446)

検出状況 IV層上面に対応すると考えられるSDc202埋土上面で検出したが、平面形は明瞭であった。西北西から東南東に向かってほぼ直線的に伸びる溝状遺構で、両端は発掘区外となるため、全体の形状は不明である。底面は丸みがあり、壁面は開くが、西側には部分的にテラス状の段がつく。埋土は4層に分層したが、ほぼ水平堆積で、埋土下部には砂が混じり、水流があったことが考えられる。

遺物出土状況 土器が散在して241点出土した。ほとんどは弥生土器・土師器であるが、埋土下部の

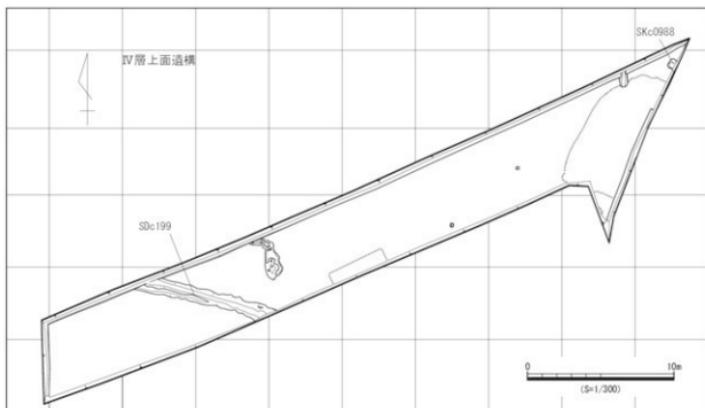


図445 11.8地点IV層上面平面図

砂が混じる層からは、須恵器や中近世陶器が出土した。木片も2点出土している。

出土遺物 2621は尾張型の小皿で、藤澤編年第6型式以降のものである。

時期 図示した遺物から、中世以降のものであると思われる。この時期における周辺の土地利用のあり方から、本遺構は水田耕作に関連するものであることが考えられる。

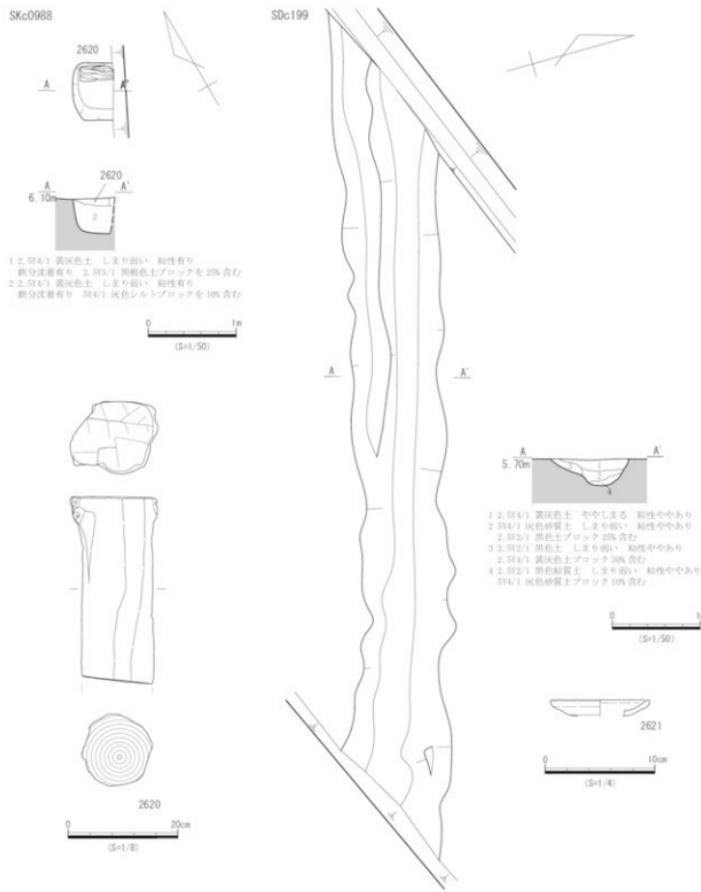


図446 SKc0988・SDc199

4 V層上面の遺構と遺物 (図447)

V層上面では、竪穴住居跡1棟、方形周溝墓4基、土坑6基、溝状遺構12条を検出した。発掘区の大部は入り江状の溝SDc202が占めており、発掘区中部から東部にかけては、SDc202の肩部が、広くなだらかなテラス状の平坦面を作り出しており、その部分と東部の陸地部分には方形周溝墓、土坑、溝状遺構を検出した。また、発掘区東端に竪穴住居跡の一部を検出した。竪穴住居跡、方形周溝墓、土坑、入り江状の溝状遺構、礫が多量に出土した溝状遺構を図示した。

SBc04 (図448)

検出状況 IV層を除去したV層上面で検出したが、大半が発掘区外に広がり、確認できたのは北西隅部である。SDc205、SDc206に切られており、肩部は不明であったが、床面で検出したL字形の溝が、A地区やB地区で検出した掘形が幅広の溝状に巡る住居と同じような、この住居の掘形であると考えられるため、竪穴住居跡と判断した。

形状 大半が発掘区外であるが、北西隅部のL字形に屈曲する溝状の掘形の形状から、方形若しくは長方形の平面形と思われる。

埋土 埋土は3層に分層したが、ほぼ水平堆積である。堆積状況は不明である。掘形とした溝状の部分は2層に分層したが、水平堆積であり、掘形を埋め戻して平坦な床面を作ったと考えられるので、人為堆積であると思われる。

床面 床面はほぼ平坦で水平である。貼床や炉跡は認められなかった。床面で小穴を1基(P1)検出したが、このP1が位置関係から柱穴と思われる。また、床面において、幅0.4~0.7mのL字形の溝状の掘り込みを検出した。この住居の掘形であると考えられ、一旦周囲を溝状に掘り窪めた後に埋め戻し、平坦な床面を形成したと考えられる。

遺物出土状況 埋土から7点、掘形から1点の土器が出土したが、小片のみで図示可能なものはなかっ

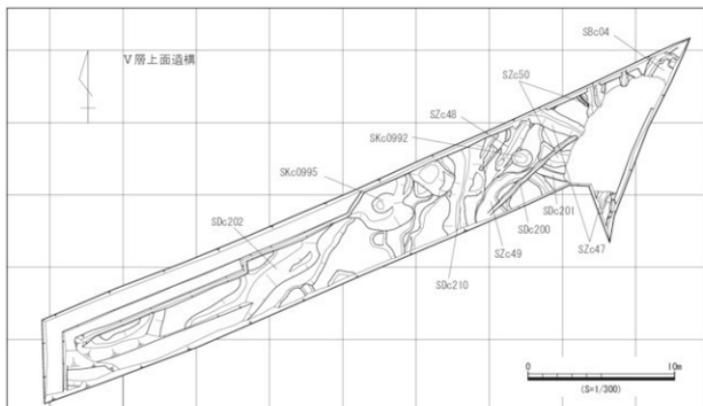


図447 11.8地点V層上面平面図

た。また柱穴からの遺物の出土はなかった。

時期 出土した土器で時期を特定できるものはないが、B地区南部に同様の掘形をもつ竪穴住居跡が点在しており、一連の住居群と考えられるため、Ⅶ～Ⅷ期のものであると考えられる。

SZc47 (図449)

検出状況 V層上面で北東溝及び南東溝の一部を検出したが、平面形は明瞭であった。南東溝部分は検出面を下げすぎており、上端を掘削してしまった。北西溝と南西溝は検出できておらず、北東溝と南東溝の間も攪乱を挟むが、北東溝と南東溝でL字形となり、方形の区画を作り出すと考えられることから、方形周溝墓と判断した。

方台部 大半が発掘区外となり、北東辺部及び南東辺部の一部を確認した。北東辺部と南東辺部は検出した範囲では直線的であり、隅部は直角になることが推測されるため、方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 北東溝及び南東溝の一部を検出した。この2つの溝は攪乱により分断されているが、位置関係から方形の区画を作り出していると思われる。幅は0.7～1.3m程で、深さは0.5m程となる。底面は北東溝はやや狭くなりほぼ平坦で、南東溝は丸みがある。壁面は、部分的に傾斜は異なるがやや開く。埋土は最大5層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。埋土下部や肩部にはV層ブロックが含まれることから、壁面及び墳丘からの崩落土の可能性が考えられる。なお、北西溝部分はSDc210によって掘削されているものと思われる。

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が149点が出土したが、埋土上層にやや多く出土した。

出土遺物 2622はIV期の甕の底部片。平底である。

時期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺に弥生時代中期と考えられる方形周溝墓群が広がることや、IV期と思われるSZc48を切ることから、IV期と考えられる。

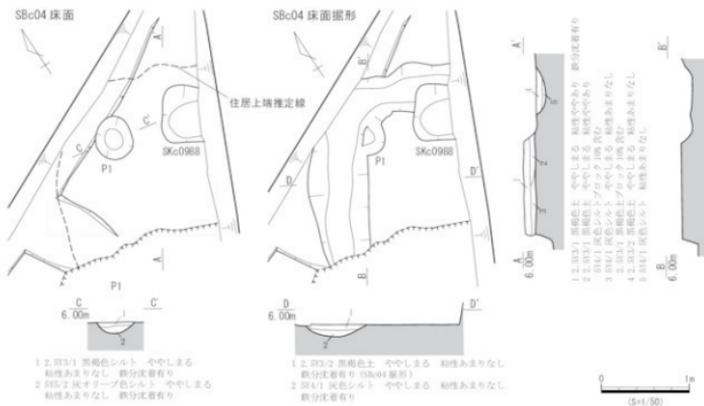


図448 SBc04

SZc48 (図450)

検出状況 SDe202埋土12層を除去した広いテラス状の平坦面に検出したが、平面形は比較的明瞭であった。南東溝と南西溝の一部を検出したが、SDe210によって隅部周辺が破壊されており、隅部は接続するの不明であったため、当初別々の遺構として調査を行ったが、L字形に組み合い、方形の区画を作り出すことから、最終的に方形周溝墓と判断した。

方台部 大半が発掘区外となり、南東辺部と南西辺部の一部を確認した。南東辺部と南西辺部は検出した範囲では直線的で、隅部はSDe210に切られるため不明であるが、直角に交わるものと思われる。また、南東辺部の北東端はわずかであるが屈曲しており、隅部になるとと思われる。以上から方台部の形状は方形又は長方形になるとと思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 南東溝と南西溝の一部を検出した。この2つの溝はSDe210により分断されているため、接続関係ははっきりしないが、隅部にかけて浅くなるものの、掘形からはつながっていた可能性が高いと考えられる。幅は1.1~2.3m程で、南東溝は幅狭で、南西溝は幅広となる。深さは0.5m程となるが、両溝とも隅部に向かって浅くなっていく。底面は南東溝は狭くやや丸くなるが、南西溝は広く平坦である。壁面は、部分的に傾斜は異なるがやや開く。埋土は最大5層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。埋土下部や肩部にはV層ブロックが含まれることから、壁面及び墳丘からの崩落土の可能性が考えられる。

SZc47

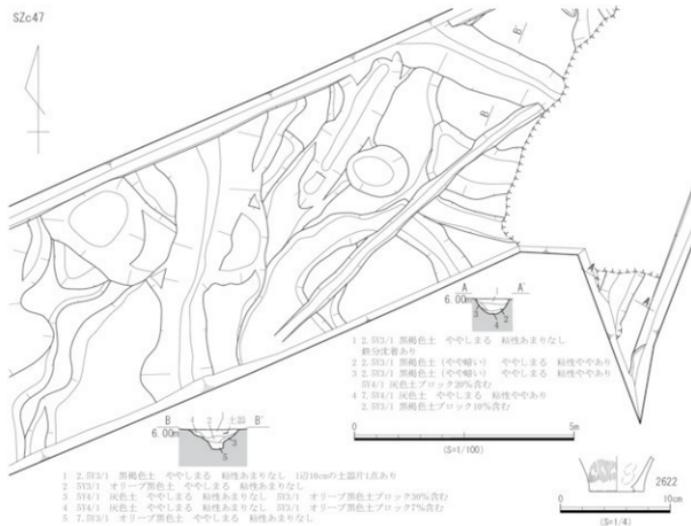


図449 SZc47

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が135点が出土した。遺物は埋土上層から中層にかけて出土した。南西溝の土層観察ベルト2層に供献土器と思われる甕が横位で出土した。

出土遺物 2623はIV期の甕E類で、口縁部は短く外反するが、頸部の屈折は弱く、端部は丸く収める。作りは雑である。

時期 南西溝から出土した甕2623が供献土器と考えられ、IV期と考えられる。

SZc49 (図451)

検出状況 V層上面からSDe202埋土13層を除去した広いテラス状の平坦面にかけて検出したが、東溝部分の平面形は明瞭であったが、西溝部分の平面形は不明瞭であった。北溝と東溝及び西溝の一部を検出したが、やや小型になるものの、溝が巡って区画を作り出すことから、方形周溝墓と判断した。方台部 南半分が発掘区外となり、北辺部と東辺部及び西辺部の一部を確認した。いずれもやや湾曲しており、方台部の形状は不整形又は不整形円形になると思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 北溝と南東溝及び西溝の一部を検出した。東溝から北溝にかけての溝幅は1m弱であるが、西溝は確認した最大幅で2.2m程になる。深さは0.15~0.2m程で浅い。底面は東溝から北溝にかけてはやや丸くなるが、西溝は広く平坦である。壁面は開く。埋土は最大3層に分層したが、ほぼ水平堆積で、自然堆積であると思われる。

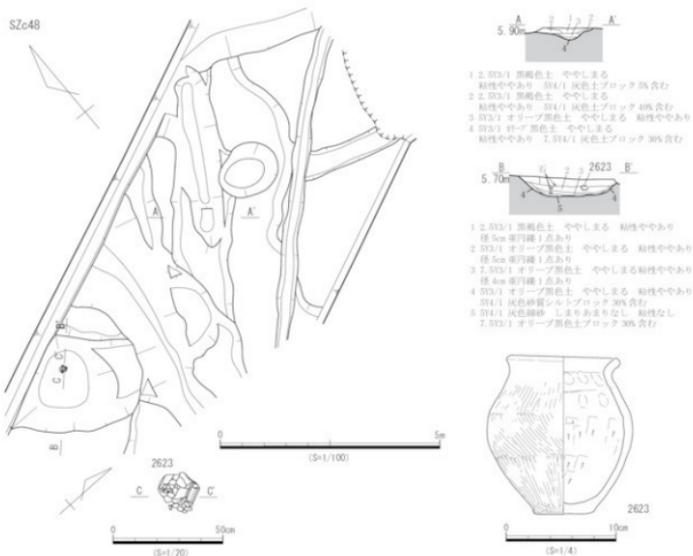


図450 SZc48

遺物出土状況 周溝埋土から7点と少量の土器片が出土したが、小片ばかりで、図示可能なものはないかった。

時期 時期が特定できる遺物の出土はないが、周辺に弥生時代中期と考えられる方形周溝墓群が広がることから、弥生時代中期と思われる。

SZc50 (図452)

検出状況 SDc202の広いテラス状の平坦面東側で検出したが、平面形は明瞭であった。北西部は発掘区外となり、南溝及び東溝の一部を検出した。攪乱により南東部分が消失しているが、2つの溝は延長するとL字形に組み合い、方形の区画を作り出すことから、方形周溝墓と判断した。なお、西溝はSZc47若しくはSZc48に切られていると考えられ、北溝は発掘区外となる。

方台部 大半が発掘区外となり、南辺部及び東辺部の一部を確認した。南辺部はやや湾曲し、東辺部は直線的である。南東隅部は攪乱に切られるため不明である。方台部の形状は方形又は長方形になると思われる。墳丘盛土は確認できなかった。主体部も確認することができなかった。

周溝 南溝及び東溝の一部を検出した。この2つの溝は攪乱によって切られるために接続関係は不明である。南溝の西端はSDc202埋土13層によって切られる。幅は1.3m程で、南溝は浅く、壁面は開く。東溝は中央部分が0.5m程になり、壁面は段をもって開く。埋土は最大6層に分層したが、ほぼ水平堆積であり、自然堆積であると思われる。埋土下部や肩部にはV層ブロックが含まれることから、壁面及び墳丘からの崩落土の可能性が考えられる。

遺物出土状況 周溝埋土から土器片が132点出土したが、埋土上層から中層を中心に出土した。縄文時代晩期から弥生時代前期の土器片が数点出土した。

出土遺物 2624はI期の壺の胴部片で、小さい孔が確認できる。2625はI期の壺の底部片で、底面は欠損する。やや突出する底部である。

時期 時期を特定できる遺物の出土はなかったが、IV期と考えられるSZc48に西溝が切られていると考えられることから、IV期以前と思われる。

SZc49

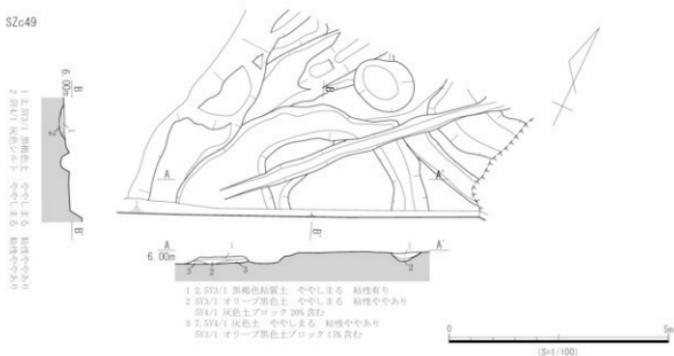


図451 SZc49

SKc0992 (図453)

検出状況 SDe202埋土12層を除去した広いテラス状の平坦面で検出したが、平面形は比較的明瞭であった。平面形はやや大きい楕円形で、平面はほぼ平坦である。壁面はやや開く。埋土は4層に分層したが、ほぼ水平堆積であるが、肩部には崩落したと考えられるV層ブロックが混じる堆積があり、自然堆積であると考えられる。

遺物出土状況 上層から土器が15点出土した。下層からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 2626はI期の壺の口縁部である。外反し、頸部に2本の沈線を施し、その間に刺突を施す。

時期 時期決定できる遺物の出土がなく、はっきりとした時期は不明であるが、SDe202埋土12層の堆積よりも古いものであること、SDe210を切ることから、V～VI期と考えられる。

SKc0995 (図453)

検出状況 SDe202埋土17・18層を除去した広いテラス状の平坦面の溝への落ち込み際で検出したが、輪郭は不明瞭であったが、平面形中央は比較的明瞭であった。平面形は不定形であるが、底面中央は楕円形となり、一段深くなる。壁面は開く。埋土は3層に分層したが、1層が大半を占め、2・3層は肩部から底面にかけて薄く堆積し、V層ブロックが混じる部分があることから、壁面の崩落土であると考えられる。1層は礫を伴う土器片を含み、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土中から土器が139点出土した。中央付近を中心にやや大きめの土器片が礫を伴って出土した。土器は時期が判別できるものは、I期・IV期のものである。

出土遺物 2627はIV期の壺E類と思われる。口縁部がく字状に短く外反するが、頸部の屈折は弱い。端部は丸く収める。2628はI期の甕の底部片で、平底である。

SZc50

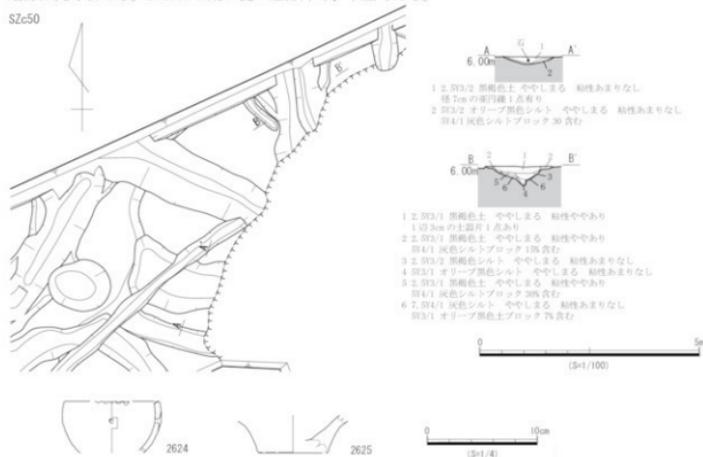
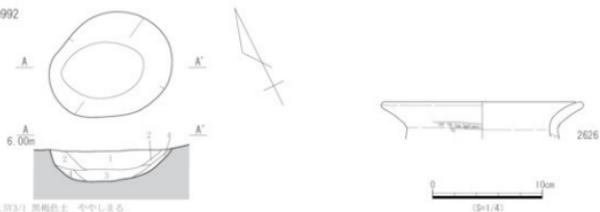


図452 SZc50

時期 本遺構直上のSDc202埋土17層から出土したIV期の甕2680と接合する破片が、底面近くから出土した。2680は周辺にミニチュア土器や礫を伴って出土しており、出土状況から原位置性が高いと考えられる。SDc202の岸部近くからは遺存状態のよいIV期の土器が多く出土しており、本遺構はこの時期に祭祀的な行為に伴って使用されたものであると考えられるため、IV期と思われる。

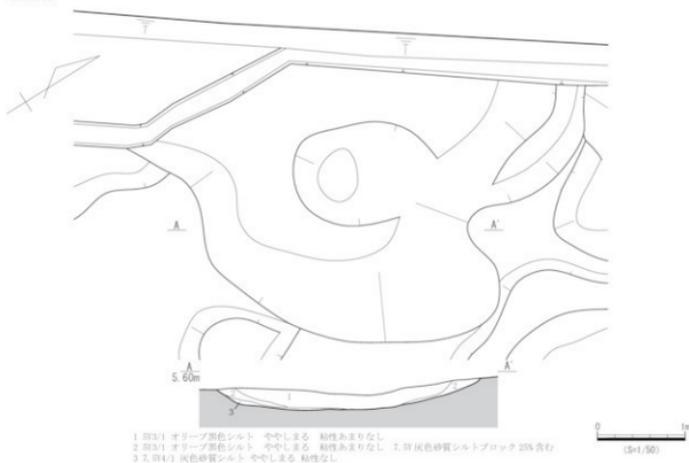
SKc0992



- 1 2. 013/1 黒褐色土 ややしまる
粘性ややあり 鉄分沈着有り
- 2 013/1 オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり
鉄分沈着有り 014/1 灰色土ブロックを7%含む
- 3 013/1 オリーブ褐色砂質シルト ややしまる 粘性あまりなし
鉄分沈着有り 014/1 灰色砂質シルトブロックを20%含む
- 4 7. 014/1 灰色シルト ややしまる 粘性あまりなし
鉄分沈着有り 013/1 オリーブ褐色砂質シルトブロック20%含む



SKc0995



- 1 013/1 オリーブ褐色シルト ややしまる 粘性あまりなし
- 2 013/1 オリーブ褐色シルト ややしまる 粘性あまりなし 7. 017 灰色砂質シルトブロック20%含む
- 3 7. 014/1 灰色砂質シルト ややしまる 粘性なし



図453 SKc0992・SKc0995

SDc200・SDc201 (図454)

検出状況 薄く堆積するIV層を除去したV層上面で検出したが、共に平面形は明瞭であった。SDc200 > SDc201の切り合い関係を見ているが、埋土の状況が似ており、関連する一連の遺構であると判断したため、まとめて報告する。SDc200は北東から南西に向かってほぼ直線的に伸びる溝状遺構で、北東端は攪乱に切られ、南西端は発掘区外となるため、全体の形状は不明である。南西端は南に向かって曲がる様相がある。幅は0.2m程で、SDc201よりも狭い。底面は丸くなり、壁面はやや開く。埋土は最大2層に分層したが、オリープ黒色土やV層ブロックを含むため、人為堆積の可能性がある。SDc201は西北西から東南東に向かってほぼ直線的に伸びる溝状遺構で、西北西端はSDc200に切られ、東南東端は攪乱で切られるため、全体の形状は不明である。幅は0.5~0.6m程で、SDc200よりも広いが、深さは0.05mと浅い。底面はほぼ平坦で、壁面は開く。埋土は単層で、V層ブロックを含むため、人為堆積の可能性がある。SDc200はSDc202東部のテラス平坦面の埋土12層の外側ラインに約2mの幅を開けながら、ほぼ平行に掘られており、その時期にSDc202を意識しながら、SDc202と陸地とを区画するための溝であった可能性があると考えられる。

SDc200・SDc201

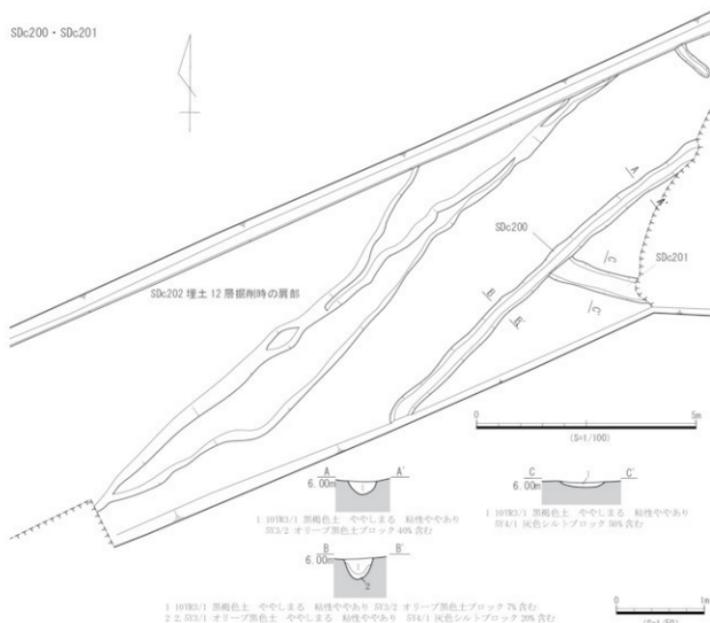


図454 SDc200・SDc201

遺物出土状況 SDe200からは38点、SDe201からは1点の土器が出土した。小破片が多く、図示できるものはなかったが、V～VI期と思われる甕の底部片が1点出土した。

時期 時期を特定できる遺物の出土はなかったが、IV期と考えられる方形周溝墓を切り、V～VI期と思われる土器片が出土したことや、同時期に機能したと考えられるSDe202埋土12層の堆積がV～VII期と思われるため、V～VII期の遺構と考えられる。

SDe202 (図455)

検出状況 V層上面の検出としたが、IV層に対応する層は、本遺構の埋土上層になると考えられ、東端の陸地との境以外は、IV層上面検出時から凹地状に埋土が堆積しているのが確認できた。東端の陸地との境はIV層を除去したV層上面で検出した。SDe202の範囲は11.8地点発掘区の西端から東部に及び、肩部は東部と南西隅部にその一部を検出した。11.8地点から東側には自然流路が検出されていないこと、南側に肩部があることから、西部を流れるNRe01から東に向かって入り江状に張り出しを作り出している可能性が高いと判断し、自然流路ではなく、人工的に掘られた溝とした。西部から中央部までは溝の落ち込み部分にあたり、深さは2m程になる。中央部から東部にかけては、テラス状の平坦面となり水流がオーバーフローした際に、削られた部分であると思われる。埋土は大きく23層に分層し、遺物取り上げ層位とも対応している。平面のみで確認した層もあるため、土層断面図に示されない層位もある。さらに最終的に各層を細分し36層に分層した。発掘区北壁土層断面で見ると東西方向は基本的に水平堆積であるが、南北方向では南側に肩部があると考えられ、堆積も南から北に向かって傾斜するように堆積している。そのため、遺物の取り上げ層位は正確でない部分もある。埋土は大きくは4つに区分でき、出土遺物においても時期差を認めることができる。1つめは埋土下部の砂礫が混じる層で、出土遺物からIV期以前の堆積と考えられる。この層の一部には、ラミナ状の堆積やマール状に砂が入り込む層があり、流水があったと思われる。北壁土層45～57層に対応し、遺物取り上げ層位は20～23層である。2つめは、その上の埋土中部下層で、オリブ黒色から灰色にみえる粘質土が主な埋土で、出土遺物からIV期の堆積であると考えられる。北壁土層31～44層に対応し、遺物取り上げ層位は14～19層である。3つめは、さらにその上の埋土中部上層で、植物遺体を含む泥炭層となり、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代の堆積であると考えられる。中央部から東部にかけてのテラス状の平坦面にかけての黒色～黒褐色土の堆積も、この時期の堆積であると思われる。北壁土層23～30層に対応し、遺物取り上げ層位は6～13層である。4つめは埋土上部の相対的に黄灰色からオリブ黒色粘質土層で、出土遺物から古代から中世にかけての堆積であると考えられる。古墳時代以降も凹地状になっていたと考えられ、そこに堆積したものと思われる。北壁土層16～22層に対応し、遺物取り上げ層位は1～5層である。なお、溝の底面はラミナ状に一部細砂が混じる灰色シルト層である。

遺物出土状況 埋土中からは5,859点の土器が出土し、そのうち山茶碗が30点、須恵器が1点、灰釉陶器が1点、土師器皿が13点、縄文土器が1点で、その他は弥生土器・土師器である。石器類は7点、石製品で小玉が1点出土した。木製品は40点出土した。埋土下部の砂礫が混じる土層からは、弥生時代前期の土器が主に出土したが、土器片が散在しており、量は少ない。その上の埋土中部下層である、オリブ黒色から灰色にみえる粘質土の堆積からは多くの土器片が出土した。特に目立つのがIV期の土器であり、中央部の岸部近くの落ち込みからは、元の位置をとどめていると思われる壺と甕が出土



图456 SDC202遺物出土狀況圖

した。同時期の壺2672が、テラス状の岸辺から縄や手捏ね土器を伴って出土したこと合わせて、この時期にSde202の岸辺付近で祭祀的行為が行われていた可能性を窺わせる。また、この時期のものでは近畿地方からの搬入品と思われる、壺2658、鉢2698・2699、有孔土器2704・2705が出土した。石器・石製品では砥石や小玉が、木製品では農具や板材などが出土した。埋土中部上層の植物遺体を含む泥炭層からは、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器片が多いが、散在して出土しており、特徴的な出土状況は認められなかった。木製品では農具や柱材などが出土した。埋土上部の黄灰色からオリーブ黒色の粘質土層からは弥生土器のほかに、中世の山茶碗や土師器皿が出土した。木製品では円形の板材などが出土した。

出土遺物 2629～2631は埋土下部から出土した土器である。2629はI期の壺で、口縁部が外反する。頸部に削り出しの突帯を施す。2630はI期の小型の壺で、口縁部は外反し、胴部上部に沈線を1本回す。底部は突出する。I期前半のものと思われる。2631は縄文時代晩期初頭、八日市新保2式に相当する深鉢と思われる。口縁部の破片で、内湾する。三叉文や連結三叉文、刺突を組み合わせた文様を施す。橋状把手が付き、その部分に沈線を施す。器面は摩耗している。2632～2710は埋土中部下層から出土した土器である。2632はV～VI期の壺F類で、口縁部は外反する。2633はV期の大型の壺の胴部片で、直線文、波状文、扇状文を施す。2634・2635は壺の底部片で平底である。2634はVI～VII期、2635はV～VI期のものと思われる。2636はS字状口縁台付甕C類の脚台で、VIII期と思われる。2637はVI～VII期の鉢C類で、器高8cmほどの小型のものである。口縁部がやや内湾する。2638はVII期の高坏Cd類で、口縁内面に多条沈線、山形文、対向山形文を施す。2639はVI期の高坏C類で、口縁内面に多条沈線を施す。2640はV～VI期の高坏I2類で、ワイングラス形高坏の口縁部であると思われる。2641はV～VI期の高坏J類で、坏部。有段口縁を有する形式のもので、近畿からの搬入品か。口縁端部は平坦であり、加飾は見られない。2642はV期の高坏J類で、脚部から裾部の破片。小型品で、裾部は外反する。柱状部は中実である。2643はV期の器台A1b類で、脚裾部の外反がやや弱く、柱状部が縮小して短脚である。施文はない。2644～2706はIV期のものである。2644～2647は壺A1類で、口縁部が屈曲して直立し、2～3条の凹線文を施す。2648・2649は壺B2類。2648は大型のもので、頸部下から刻み、刺突文、直線文、波状文を施す。2649は口縁部片で、凹線を2条施す。2650は壺C類で、口縁部は大きく外反し、口縁端部を下に拡張する。2651は壺F類の無頸壺で、口縁部は外反する。胴部は算盤玉状となり、無文である。2652は壺H類で、口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張する。口縁端部に円形浮文を施す。2653は壺の胴部下部から底部で、平底である。2648と同一個体と思われる。2654は壺の底部片で、平底の底部には穿孔があると思われる。2655は壺の底部で、やや突出する。2656は壺の胴部中央から底部片。胴部は算盤玉状になる。2657は壺の底部片。平底である。2658は脚台付の壺と思われる。脚台の裾部は緩やかに外反する。透孔が3つ確認できる。鉢とした2698と同一個体の可能性がある。2659～2666は壺A1類で、いずれも口縁部がく字状に屈曲し、外面はタキのちハケ調整を行っている。2659～2663は口縁端部は平坦である。2664は口縁端部は調整のために擬凹線状になる。2665の口縁端部には凹線を施す。搬入品の可能性がある。2666の口縁端部はやや丸い。2667～2678は壺A2類で、く字状に屈曲した口縁端部はタキ調整され、その後刻みを施すものもある。2667は完形で、胴部やや上部に最大径があり、外面にはタキの後にハケ調整が見られる。底部底面には穿孔がある。2671の口縁端部は二方向からタキ調整されており、羽状に見える。2674・2675の口縁端部には刻み

を施す。2676は胴部に刺突文を施す。2677は口縁端部はタタキ調整であるが、わずかに受口状に上方に拡張する。胴部上部に刺突文を施す。2678は頸部屈曲部分に突帯を巡らせた後、刺突による文様を施している。口縁端部は二方向からタタキ調整されており、羽状に見える。2679は底部片で口縁部を欠くが、台付甕であることから甕A5類に分類した。ただし、蓋の可能性もある。2680～2684は甕B2類で受口状の口縁をもつ。2680は完形で、口縁部に刺突文、胴部上部は直線文と刺突文を組み合わせる。底部底面には穿孔がある。2681は口縁部に刺突文、頸部から胴部にかけて、刺突文、直線文を組み合わせる。2682～2684は口縁部や頸部下に刺突文を施す。2685は口縁部は大きく外反し、端部は欠損するが上方に屈曲すると思われることから、甕B類とした。頸部から直線文、刺突文、斜格子文を交互に施している。2686は甕E類で、口縁部は短く外反し、やや厚い。端部は丸く収める。2687は受口状口縁の甕であるが、口縁部の屈曲はやや短く、口縁部は無文である。2688～2696は甕の底部片で、いずれも平底である。2688の底部底面には穿孔がある。2697は甕蓋と思われる。口縁部で屈曲し外傾する。端部には面をもつが、整形が甘い。2698・2699は鉢D類。2698は鉢としたが、2658の脚台部と同一個体である可能性がある。口縁部は直立に立ち上がり、口縁端部を折り返し帯状にした後、3本1対の棒状浮文を施す。そして底部を下から上方向へ削った後、磨いている。これらの特徴からIV期初期に相当するものであると考えられる。2699にも同様の棒状浮文があり、この個体の破片の可能性が高い。2700は高坏脚部で、外傾する脚端部には強い平坦面をもつ。2701～2703はミニチュア土器である。2701は壺A2類の台付壺をモチーフにしたと考えられるミニチュアの壺である。口縁部に凹線が見られ、台がつく。部分的にハケ調整が確認できる。2702は甕A5類の台付甕をモチーフにしたと考えられるミニチュアの甕である。器高は9cmほどであり、やや大きい。外面はタタキ、ハケ調整が見られる。口縁部はく字状に弱く屈曲し、端部の作りも甘い。2703は手捏ねで作られており、平底で、口縁部が外傾する。2704・2705は有孔土器で、同様の作りをしている。2704は口縁部で、口縁端部の3cmほど下から、3～4mmの穴を多数空けている。2705は胴部から底部にかけての破片。胴部、底部に3～4mmの穴を外面から中に向かって多数空けている。2706は円盤状土製品で、片面にハケ、ケズリ調整が確認できる。2707はI期の壺の口縁部片で、やや外反する。2708はI期と思われる壺の底部片。平底である。2709はI期の甕口縁部片で、やや外反する。端部には刻みを施し、頸部には削り出しの段がある。2710は不明土製品。I期～IV期の可能性がある。2711～2716は埋土中部上層及びテラス状の平坦面の埋土から出土した土器である。2711はV期の壺の胴部片で、器面は摩滅しているが、波状文が確認できる。2つの穿孔がある。2712はI期の壺で、底部はやや突出する。2713はI期の壺で、口縁部は外反し、頸部に1本の沈線を回す。2714はS字状口縁台付甕D類の口縁部片で、IX期のものである。2715はIV期の甕の底部片。底部底面に穿孔がある。2716はVII期の高坏D類で、口縁内面に多条沈線をもつ。2717～2719は埋土上層から出土した土器である。2717は土師器皿で、藤澤編年第6型式以降の山茶碗に伴うものである。2718・2719は尾張型の山茶碗で、2718は藤澤編年第6型式以降、2719は藤澤編年第5～8型式にあたるものと思われる。2720～2722は埋土中部下層から出土した石器・石製品である。2720はチャート製のMF。2721は砥石で、2722は滑石製の小玉である。2723は埋土中部上層から出土した打製石斧の完形品である。2724～2726は埋土中部下層から出土した木製品で、2724は軸に分類したが、薄いことから掘削用途ではなく、土さらいといった用途に使ったものであろう。1998年刊行『荒尾南遺跡』の掲載遺物556がこの種類の農具に付く柄の部分であり、方形の孔に差し込み、

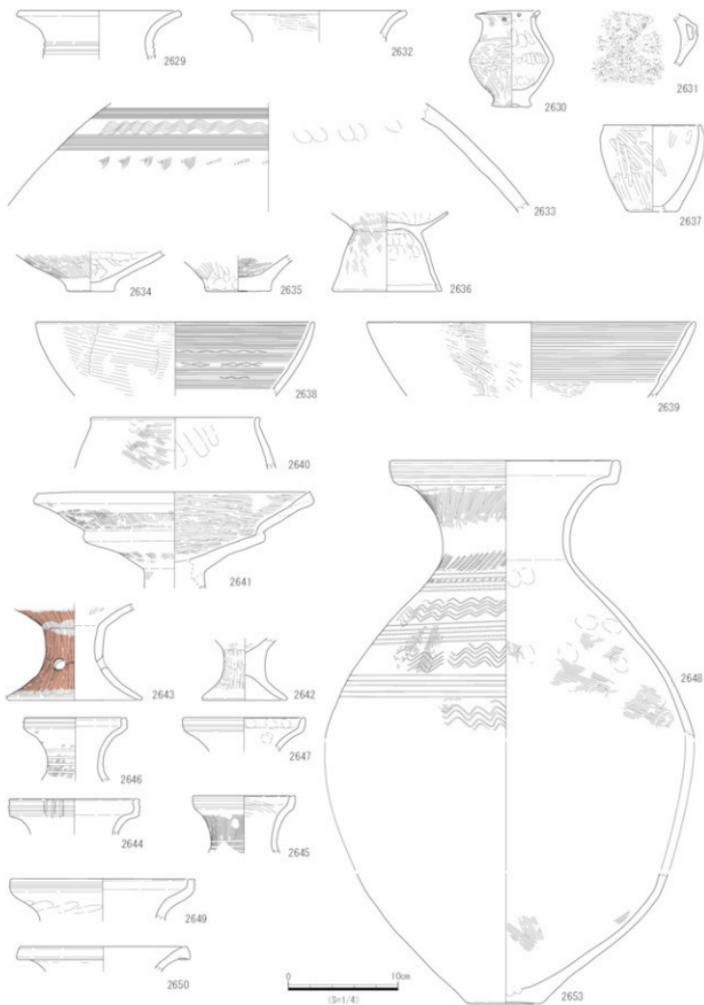


図457 SDc202出土遺物（1）

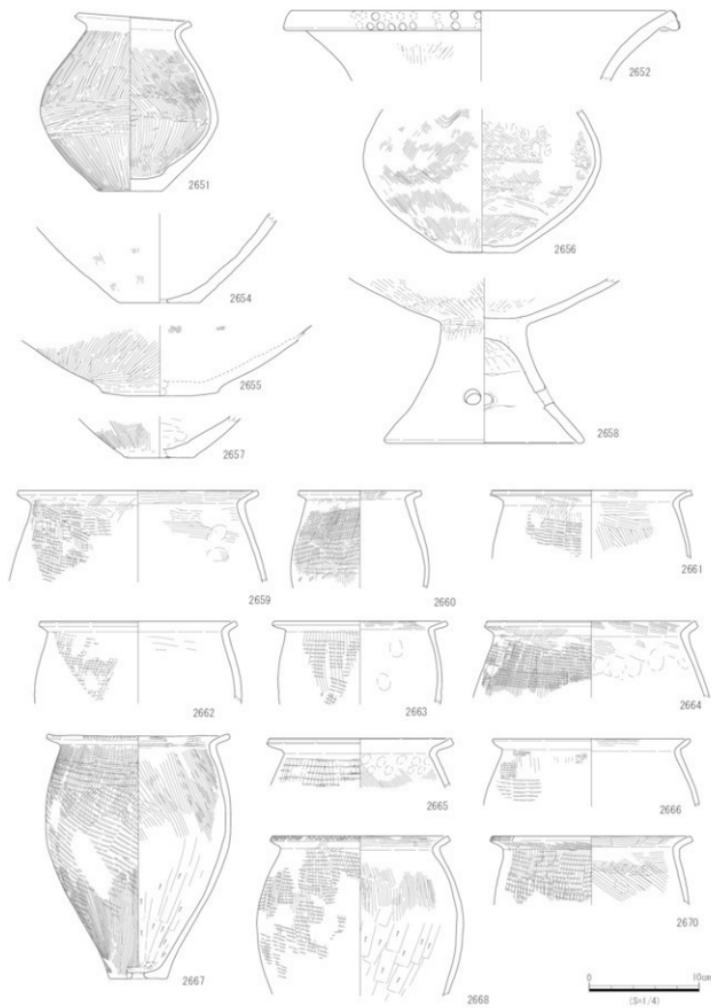


圖458 S0c202出土遺物(2)

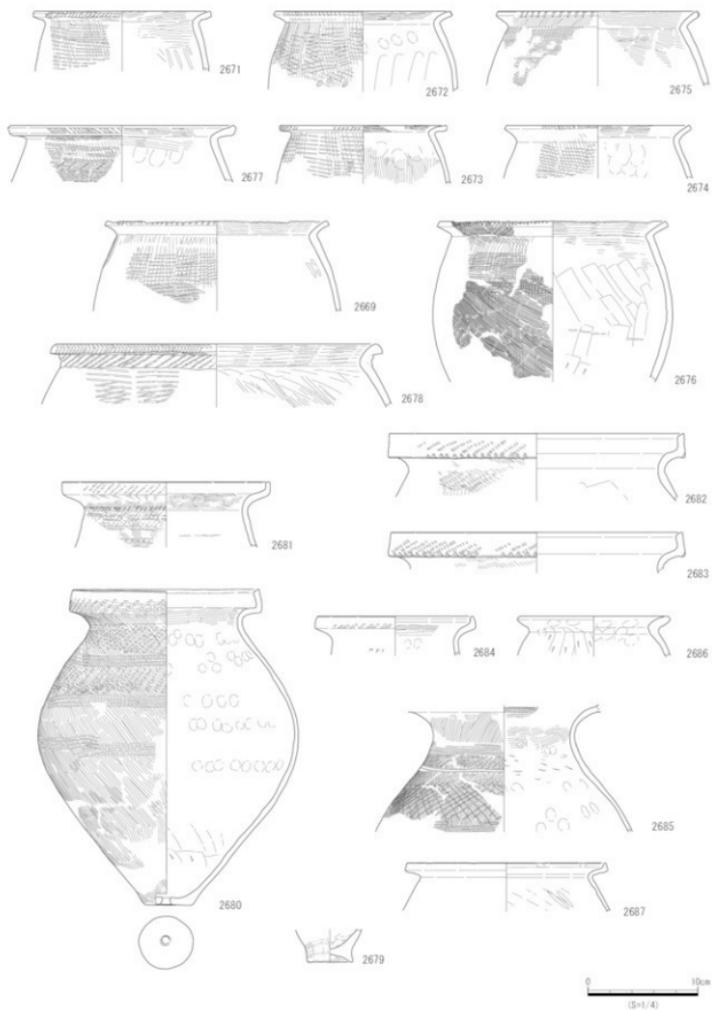


図459 SDc202出土遺物（3）

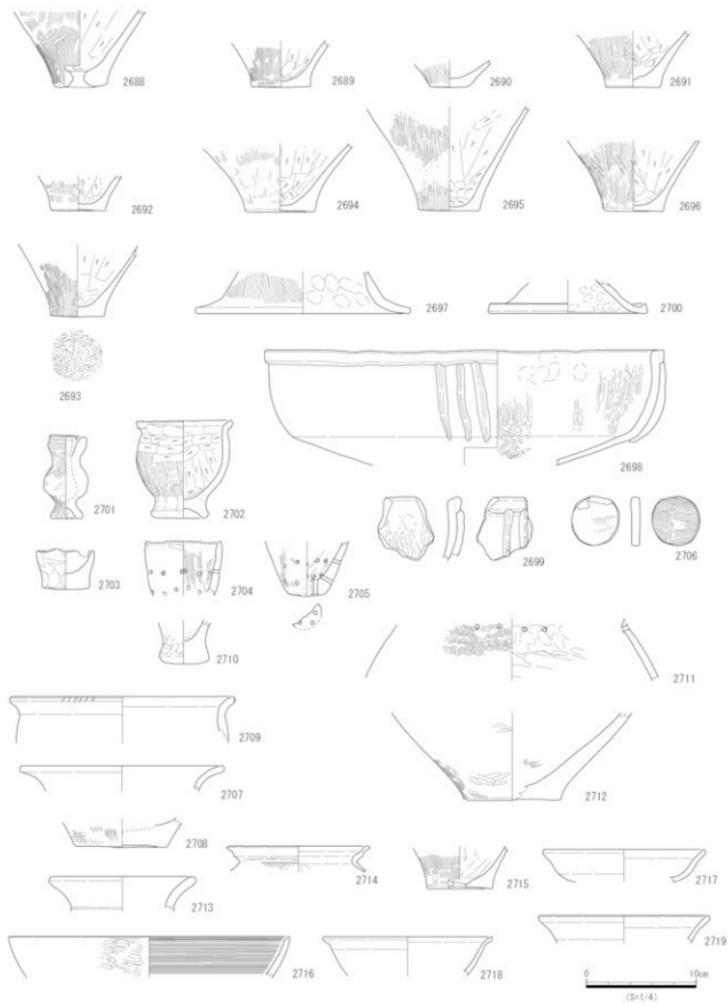


圖460 SDc202出土遺物 (4)

縛り付けて固定したものと思われる。在地のものである。2725は穿孔板材で、方形孔が5箇所ある。2726は板材としたが、鎌の一部かもしれない。2727・2728は埋土中部上層からの出土で、2727は又鎌の真ん中の刃。2728は掘立柱建物の柱材と思われる。2729・2730は埋土上部からの出土で、2729は側面に木釘の孔があることから、筒状容器の蓋である。中央に方形孔があり、当初把手がついていたと思われる。把手がなくなった後、その代わりとして細い棒をつけるために、板皮で固定したものであろう。中世のものである。2730は棒材で、先端に加工痕がある。

時期 埋土中部下層からIV期の土器がまとまって出土したことから、この層の堆積はIV期であると考えられる。このことから、埋土下部の堆積はそれ以前ということになるが、掘削時期がどこまで遡るかははっきりしない。埋土下部からはI期の土器が出土するものの、陸地部分にはI期の遺構は確認できず、I期に掘削されたとする理由としては弱い。このため掘削時期については、IV期以前の掘削と判断するにとどめる。IV期には、埋没が進み、陸地と溝底面との標高差は0.7～1m程になる。この時期にはテラス状の部分には方形周溝墓が構築され、溝の岸辺から落ち込みにかけては土器がまとまって出土したことから、祭祀的な行為が行われていたと思われる。弥生時代後期以降は、自然流路NRc1が止水し湿地化したのと同様に、埋没がさらに進み、止水したことで、植物が繁茂するようになった。古代から中世にかけても土地は凹んだ状況であり、埋没が進んでいったと考えられる。

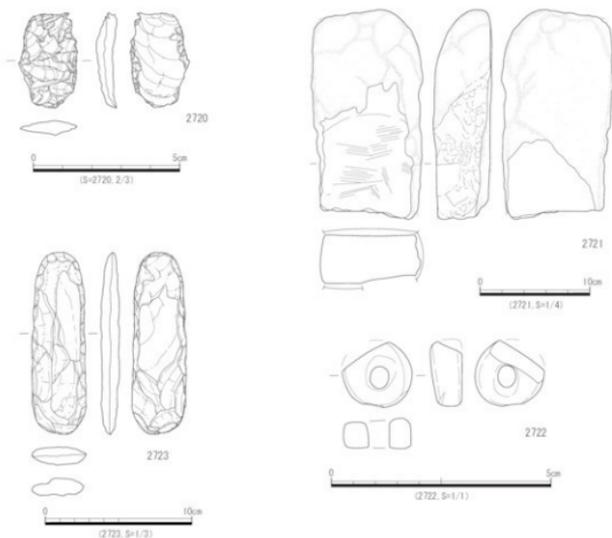


図461 SDc202出土遺物（5）

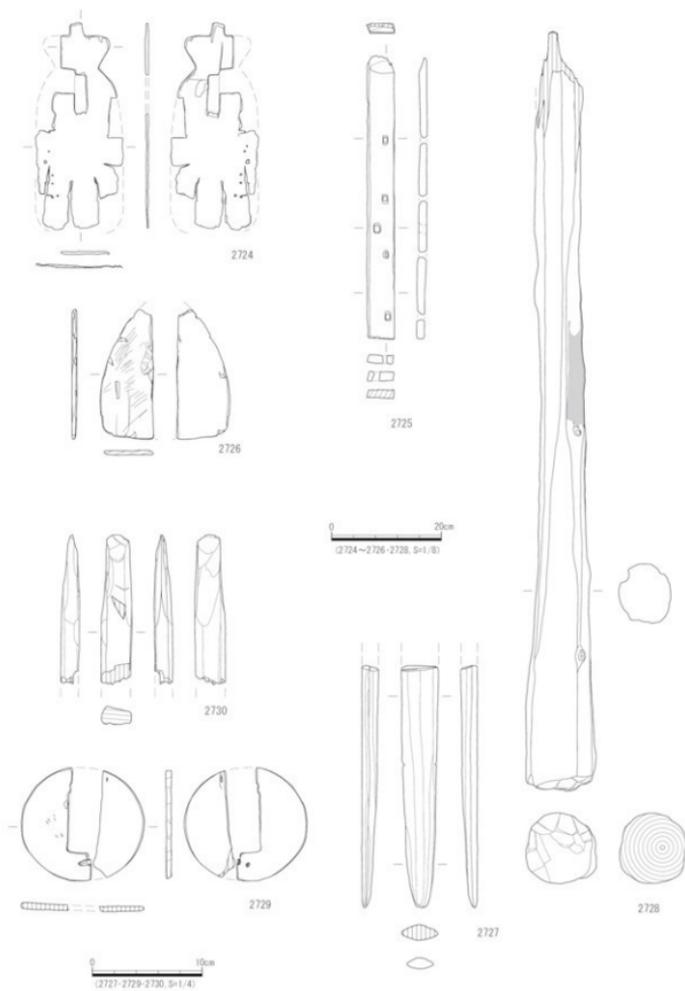


圖462 SDc202出土遺物 (6)

SDc210 (図463)

検出状況 SDc202埋土10層・12層・13層を除去した広いテラス状の平坦面で検出した。平面形は比較的明瞭であったが、SZe48との切り合い関係は不明瞭であった。南北方向に伸びる溝状遺構で、南北端は発掘区外となるため、全体の形状は不明である。底面は中央部が狭くなり、壁面はやや開く。幅は中央のセクションポイント付近は3m程であるが、中央から南北にかけてはそれぞれは肩部にテラス状の段をもち、4～5mと幅広となる。溝中央の深くなる部分には、下部から上部にかけて、拳

SDc210

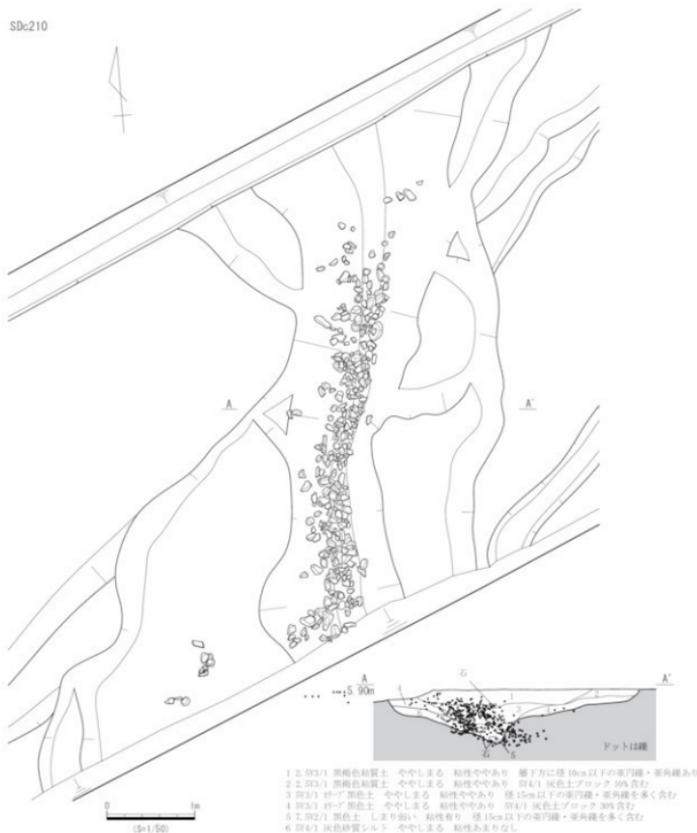


図463 SDc210

大の礫が多量に出土した。埋土は6層に分層したが、埋土中央の下部から上部にかけて拳大の礫が多量に含まれる部分は再掘削された可能性がある。礫が埋められた状況から、人為堆積と思われる。SDc202のテラス状の平坦面に掘られており、SDc202と何らかの関連がある遺構であると推測される。

遺物出土状況 埋土中から土器が散在して49点出土した。意図的な出土状況はなく、ほとんど小破片であった。時期を判別できるものは1期とV～VII期と思われるものであった。溝の南端から北部にかけて、溝の中央部の深くなる部分に下部から上部にかけて拳大ほどの礫が449点と多量に出土した。ほとんどは自然石で、石器は叩石と砥石が各2点ずつであった。

出土遺物 2731は1期の条痕文系の壺の口縁部。口縁部に押圧による突帯を施す。貝殻による条痕調整である。2732・2733は砥石で、2733には砥面に敲打痕が確認できる。

時期 時期を特定できる遺物の出土はなかったが、埋土中から出土した土器で新しいものはV～VII期のもので、この溝の上部には弥生時代後期から古墳時代前期の堆積と考えられるSDc202埋土10・12・13層が堆積していることから、この遺構の時期はV～VI期と思われる。

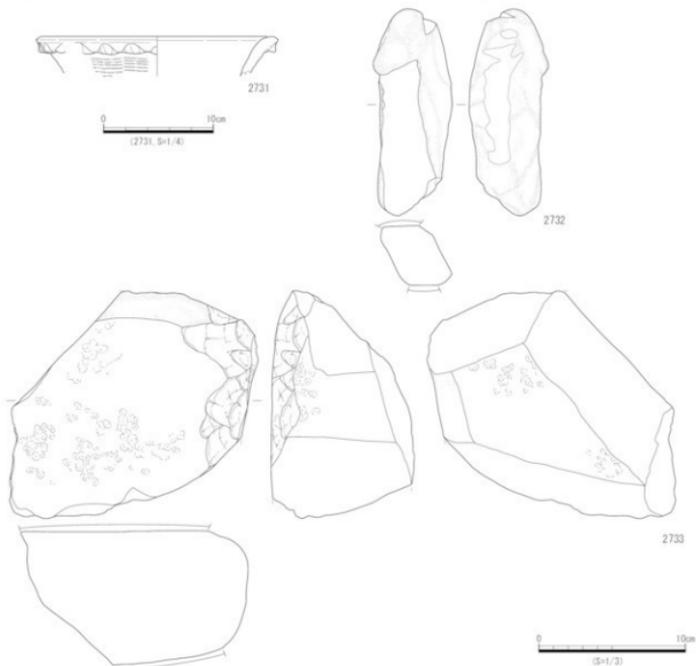


図464 SDc210出土遺物

5 まとめ

この地点は、C地区では最北端にあたり、国道21号を挟んでB地区と一番近い発掘区である。IV層上の遺構は土坑と溝、V層上面の遺構では竪穴住居跡、方形周溝墓、土坑、溝状遺構を検出した。

方形周溝墓は発掘区東部に、弥生時代中期のものを検出した。B地区南部においてもIV期の方形周溝墓群を確認しており、それらと一連のものである可能性がある。また、発掘区東端に竪穴住居跡SBc04を検出しており、これもB地区南部に竪穴住居群が検出されていることから、その一群である可能性がある。

本発掘区で特筆すべきは、発掘区中央部から西端にかけて検出した自然流路から入り江状に張り出すように掘削されたと推測されるSDe202の存在である。掘削時期は弥生時代中期以前と考えられるが、その時期にこの溝と関連するような遺構や遺物の存在は検出することはできなかった。しかし、弥生時代中期になると、溝の岸辺には方形周溝墓が構築されるようになり、IV期には溝の岸辺から落ち込みにかけて、手捏ね土器や縄を伴う土器の廃棄があり、この周辺で祭祀的な行為があったと思われる。SDe202からは遺物は多く出土したが、特にIV期の遺物が多く、この時期の土器を含む層が埋土中部下層に存在する。NRe1やB地区南部の自然流路では、IV期の土器がまとめて出土する層は確認できず、この溝の特徴と言える。さらに、溝の埋没がさらに進んだ弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、SDe200・SDe201のようにSDe202と土地を区画するような溝が存在したり、SDe210のように縄を多量に埋めた溝が掘られたりするなど、SDe202を意識した土地利用が継続していく。このように、本発掘区の検出範囲だけでは、SDe202が当初どのような目的で掘られたのかははっきりしないが、時間を経て埋没が進んだ後も、凹地となったこの溝の存在を意識した土地利用がなされていたと考えられる。

また、IV層上面ではSDe199のように水田耕作に関連するような遺構が検出されており、他地点の調査状況と合わせて、古代から中世にかけては、この周辺での土地利用は水田耕作に変化していったと思われる。

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第129集

荒尾南遺跡C地区

(第2分冊)

2014年2月10日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 新日本法規出版株式会社